
仙人事録

三神ざき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仙人事録

【Nコード】

N8638B

【作者名】

三神ざき

【あらすじ】

仙人、道士が住まう仙人界、蓬萊島。そこに、一人の一風変わった、若い仙人がいた。だらだらしながら日々を過ごし、宴会が大好きで、師匠の言いつけも守らず、自分の好き勝手に生き、唯我独尊、おおよそ、仙人らしくない仙人であった。だが、その実際は……。ぐーたら愚鈍仙人とその仲間達が繰り広げるとはばた(?)ラブコメ！第二部スタート！

プロローグ／公望、家を持つ（前書き）

皆さん封神演技という作品をご存知でしょうか？この作品は、その漫画（原作は知りません）が大好きで、現代のしかも一風変わった仙人だったらと想像しその続きを私が勝手に書こうと思い作り上げているものです。ですからこれから読んで言っていただければ、何かと封神演技とかぶる部分は有るかと思います。封神演技を知っている方もそうでない方も、この作品を読んで封神演技という素晴らしい作品があったということを思い出して興味を持っていただければ良いなと思います。

プロローグ 公望、家を持つ

「こらー！公望こうぼう！！」

目を瞑り岩の上であぐらをかいていた男に、突然大声が飛び込んできた。

「ん、んーん。なんじゃ、白桜童子はくおうどうじではないか」

公望と呼ばれた男は、のんびりと目を開けると背伸びをして返事をした。

「そなた、なにを師匠の様な怒鳴り方をして。どうした？わしに何か用かの？」

「いえ、大老君様たいろうくんから、その様に伝えよとの事でしたので。公望様、大老君様が御呼びです」

「うむ、そうか。風麒麟ふうきりん。蓬莱山に向かうぞ」

「はっ！」

公望は、風麒麟にまたがると蓬莱山に飛んでいった。しばらくして、蓬莱山頂上に聳え立つドーム型の建物が目に入る。そしてそのまま最上階の広場に降り立ち、中へ入っていった。広い通路を真っ直ぐのんびりと歩き広い部屋を抜け、奥の扉の前に着いた。ゆつくりと扉を開けると、目の前に顎に白く長い髭をたらし額にビー玉のような丸い玉が付いている老人が立っていた。

「師匠、御呼びにより、公望、参りました」

「うむ」

師匠と呼ばれるその老人は、長い髭をなでながら、公望をにらみつけていた。

「またそんな怖い顔をして。なにか、御用ですか？」

「御用ですかではない！おぬし、仙人になってから修行もせず、瞑想と称して寝てばかりおるではないか。いったい何を考えておる！曲がりなりにもわしの弟子であり、聖眼も受け継いでもう立派な仙人であろう。わざわざおぬしのために、仙人界でもっとも速く気位の高い霊獣も与えたというのに、仕事らしい仕事もせず、弟子も取ろうともしないではないか！」

公望の間の抜けた返事に、その老人、公望の師匠でありこの仙人界最高責任者である大老君は、激怒して怒鳴り散らしてきた。

「まーた、その話ですか？ですから、何度も申し上げているでしょう。私は私なりに考えがあって、仙人界や人間界の事を思い、いろいろ頭を働かしていたら寝てしまっているんですよ。弟子の件は、私は自分が気に入った可愛い女の道士が見つかるまで絶対取らないと申し上げたはずですよ」

やれやれと、公望は面倒くさそうに話す。それを見た大老君は、はあーとため息をついた。

「おぬし、そうは言うが、正直なところやる気ないであろう？」

「あ、わかります？」

公望は、てへっと笑いながら頭を掻いた。大老君は遠い目をして物思いにふけるように、言葉を発した。

「ほんに、道士の頃は、それはまじめに修行に明け暮れておったというのに。なんじゃ、この変わり具合は」

大老君は怒るのも馬鹿らしいと思ったようで、すでに呆れ果てている。その姿を見ながら、公望はいつもと変わらないなあ等と思っていた。

「師匠お、愚痴を言うために呼んだのであれば、私、帰りますよ？」

公望の言葉を聞いて、大老君は本題に入った。

「いや、待て。今回は愚痴ではない。実は、そろそろ仙人界を束ねる十二仙を決めようかと思つての。そろそろ仙人界も世代交代に入つてきておるし、なにより片付けねばならぬ仕事が増えてきたからの。その一人におぬしを入れようと思つて呼んだのじゃ」

「はあ？ 嫌ですよ、私」

大老君が言い終わるが否や、即答して公望は言った。しかし大老君は、その返事を見越していたように強く言い放った。

「嫌だろうがなんだろうが、わしが決めた事じゃ！。これは師匠からの命令。近いうち、十二仙の集会が開かれるので参加するように！」

「つたく！この、くそじじいめ！」

公望は、ちっ！と舌打ちすると小さな声で自分の師匠を罵った。

「ん？なにか、申したか？」

「いえ、なにも。用件はそれだけですか？」

知らん顔しながら公望は話を進める。

「うむ」

「それでは、詳しく決まったら、また呼んでください。では」

さっさと帰ろうとした公望に、大老君は声をかけた。

「あ、後それとじゃ。おぬしも仙人になり十二仙の地位に立つのなら、自分の邸宅ぐらい持つのじゃぞ。いつまでもふらふらしておるのではない。良いな？」

「わかりましたよ。それでは、失礼しますよ」

大老君に背を向け振り向きもせずには手を振りながら、公望はその場を後にした。入り口の前には風麒麟が静かに待っていた。

「待たせたの、風麒麟。さてと、面倒くさくなってきたのお。とりあえず、家を持てとの事じゃったが、のんびりとその辺散策でもして良い場所でも探すか。風麒麟、すまぬが散歩がてら飛んでくれるか？」

「はっ！」

風麒麟は凜として答えると、公望を背中に乗せた。ゆっくりと飛び立つ。辺りは気持ちの良い風が吹き、天気は快晴。山々が連なり、空には島がいたるところ点在して浮いている。

そう、ここは仙人、道士が住まう仙人界、蓬莱島。人間界の上に存在し、人間界とは別の時間、空気が流れる世界。ここには、大老君をトップに様々な仙人が存在し、その下に弟子として道士が存在する。公望は、そのトップの大老君の直の弟子であり、仙人になってまだ5年程。齢35歳の若い仙人である。基本的に仙人は不老不死である。病気、あるいは外傷的な怪我で死ぬ以外、死ぬ事はない。実際、大老君はもう何千年と生きているベテラン中のベテランな仙人である。

しかし、誰でも簡単に仙人になれるわけではない。まず仙人になるには条件がある。まず、腰とお尻の間ぐらいに、仙骨と呼ばれる特別な骨を持つ人間を仙人が人間界に降り立ちスカウトする。そして、その者の弟子になると、まず、道士として修行を積む。そして、何十年とたった後、試験を受けそれに合格したものが晴れて仙人となれるのだ。しかし、この仙骨を持つ人間はとてつもなく少ない。さらに、仙骨を持っていたとしてもスカウトされることなく人間として一生を終える者もいる。つまり、道士になれる者というのは人間の中でもエリート中のエリート的な存在なのだ。

公望も、たまたま仙骨を持っていて大老君にある日スカウトされ弟子となり、道士として修行を積み仙人になったのである。

さて、この公望の師匠であり仙人界蓬莱島を束ねる大老君は、他の仙人とは一風変わっている。それがトップに立つ所以でもある。何かと言えば、遙か昔、仙人は己の体内に流れる氣を用い仙術とい

うとても強力な術を使っていた。しかし、長い年月が経つにつれ、何時の間にかその仙術は失われ現在では宝貝ばおべいという道具が用いられている。この宝貝は、氣をエネルギーとして奇跡的な力を発揮する道具であり種類は多種多様。だが、大老君は宝貝を用いない。何故なら、今だ古代の仙術を引き継ぎ仙人界で唯一使えることのできるのが、大老君なのである。さらに、額にある聖眼と呼ばれる印を大老君は持っていた。聖眼には千里眼の役目を持ち、さらに代々伝わる仙術の他、一種類の属性ではあるが自分オリジナルの術を開発することができる。そのため、大老君は蓬莱島のトップに位置しているのだ。

その弟子である公望も、もちろん仙術を学び、さらに仙人になると同時に聖眼も受け継いだ。公望の聖眼は大老君と違い、本物の眼の印だった。公望はそれを嫌って、普段は鉢巻をして隠している。聖眼を引き継いだため、当然のことながら公望もオリジナルの術を開発している。

「ほんに、平和なのんびりとした日じゃのー」

風麒麟に乗りながら公望は、ぼーっと蓬莱山を飛んでいた。

「こういう日は、大乙たいいつや、妖仁ようじんと宴会でもするのが良いんじゃないが。そういえば、ここしばらくあやつらと話しておらぬな」

「お二方も、お忙しいのでしょうか」

風麒麟は丁寧に答えていた。大乙と妖仁とは、公望が道士になっただばかりの頃、時を同じくして道士になった公望の数少ない友人である。年齢も近かったことから、三人は道士の時からよく修行をさぼっては遊んでいたものだった。大乙は宝貝作りの名手の下に弟子

入りし、その才能を開花させていたし、妖仁は仙人界でも稀に見る、変化の術を用い、三人の中でも最年少で仙人になった天才仙人と呼ばれている。なんにせよ、この二人には公望は心から信頼を置いていたし、お互いの性格はすべて把握していた。

しばし散策すること、東に10キロ程。小さな島が浮いているのが見えた。何の変哲もない平らな島で、少し大きめの岩がポツリとあった。

「ふむ、ここでよかろう。風麒麟、この島に下ろしてくれ」

公望は島に降り立つと岩の前に立った。そして、目に見えない速さで手で印を組むと岩に手をかざした。すると岩の表面が歪み穴が開いた。そのまま中に入っていく。暗い通路を歩くとまた印を組む。目の前が、ぱっと明るくなりとても広い空間が広がった。

「さてと、どんな家にするかの？」

広い空間を見つめながら、頭の中でイメージを膨らめます。最初に、滝と流れる川、そして、池が浮かんだ。するとどうだろう。イメージ通り、空間に、滝、川、池ができた。さらに、イメージを膨らめます。今度は入り口近くに小さめの一軒家が建ち、向かって右側に簡易な長屋が建った。公望はうんうんと頷くと外に出て公望の家と岩に刻んだ。そして、また中に入っていく。

「風麒麟、そなたはその一軒家で休むがよい。不自由を感じたら何時でもわしに申せよ」

「ありがとうございます」

「うむ。まあ今日はこれですることもないし、わしは師匠から連絡があるまで瞑想にふけるゆえ、そなたは休んでおれ」

「わかりました」

風麒麟は言われたとおり一軒家に入っていった。公望は、いそいそと庭を歩いて滝近くにある岩山に上るとあぐらを組み瞑想にふけることにした。

公望、十二仙になる(上)

岩の上で目を瞑り、瞑想にふけっていたが、しばらくして、頭の中を駆け巡り答えを探していた、いくつもの思考回路がとぎれ、ふと、公望は目を開けた。

「うーむ、どう考えても、うまい答えというものは出ぬな。あれを考えれば、次が出てくるし、その問いに対してまた、答えを求めようと思いが動くでの。はて？ もともとは、何を考えておったか？」

一人岩の上で、ぶつぶつと独り言を言ってみたりする。しかし、流れ落ちる滝の音で声はかき消される。公望は、オリジナルの術を作り、ある程度仙人としての実力が付いてからというものの、こうやって、ひたすら瞑想にふけり、思考をフル回転させる毎日を送っていた。まあ、大概は答えも出ず、気が付いたら寝てしまっていることのほうが多いのだが。だから、師匠にも度々怒られていた。

「しょうがないの。今日はさっさと寝て、師匠から連絡があるまで寝貯めしておくかの」

そう言って公望は、岩の上から飛び降りると、ゆったりと歩きながら、作ったばかりの家の自室に入っていく。部屋の中は、机とベッドがあるだけの、簡素な部屋だった。

ごろんとベッドに横たわると、すーっと眠りに付いた。しかし、実は公望、寝るといってもただ眠りに付いているわけではなかった。たまには、ゆっくりと本当に寝てしまうこともあったが、普段は、夢の中でも活動している。というのは、公望の作ったオリジナルの術のひとつで、人の夢の中を覗き見たり、夢そのものも操るようなことをしているのだ。何故、そんなことをしているかといえば、人

は寝れば必ず夢を見る。夢というのは、非現実的な出来事が起こるものだが、中には、その人の強く望んでいることや、悩んでいることなども反映されることもあるため、その者が深層心理で何を思っているのか、新しい術の役に立つものはないかと、いろいろ考案しているのだ。最近では、別段変わったこともなく、眠った時間が他の者たちと違っていたため、ざーっと夢の中を覗き見ると、本当の睡眠に入ることになった。

さて、ゆっくり寝ること丸3日。また、白桜童子の声で目が覚めた。

「探しましたよ公望様。起きてください。大老君様が、十二仙の任命を行いますので、至急蓬萊山に向かってください。他の皆様はもういらっしゃってますよ」

「んー……。わしは、眠い。行くのがだるいで、師匠に休むと言っておいてくれ」

枕に顔をうずめながら、うめき声をあげた。

「そうはいきません。今回初の顔合わせの日なのですから、全員出席していただかないと困ります。このまま帰っては、私が怒られます」

白桜童子は、困ったように公望に言った。

「……しょうがないの。よっこらせっと」

無理やり体を起こすと、身支度をして、風麒麟を呼んだ。

「風麒麟、すまぬが、蓬萊山まで行ってくれ」

「わかりました」

公望は、風麒麟の背に乗ると、白桜童子と共に蓬萊山に向かった。半分寝た状態だったので、途中、背中から落ちそうになっていたが、なんとか、無事蓬萊山頂上に辿り着く。そして、いつもの通路を通り、広間に出た。そこには、楕円形をしたおおきい長机と椅子が並び、一番奥に大老君を始め、11人の仙人が座っていた。

「ようやく、来たか。ほれさつさここに座らぬか」

大老君が促した席にどさっと倒れこむように座ると、そのまま、机に腕を乗せ、腕を枕代わりに眠りだそうとした時。

「ひさしぶりだね、望ちゃん」

隣に座っていた妖仁が、声をかけてきた。

「んー？妖仁か、ひさしいの。相変わらず、天才っぷりを出しておるようじゃの。噂は聞いておるぞ。あれから、そなた、腕を上げたであろう」

顔をうずめながら、妖仁の方に顔を向け、のんびりと返事をする。

「いや、僕なんてまだまだだよ。望ちゃんのほうは、相変わらずみただね」

「まあ、マイペースにやっておるよ。しかし、そなたでまだまだだったら、わしはどうなるのじゃ？」

お互いにここにこと笑いながら、会話をした。そこに、大老君が横槍をいれる。

「これ、全員集まったのじゃから、任命兼説明を始めるぞ。話は、終わってからにするのじゃ」

「はい」

「では、とりあえずこの集まった者12人、普賢、貴信、泰然、奇勝、有頂、養老主、葉智全、高樓人、花月喜、妖仁、大乙、公望を十二仙とする。十二仙は、わし、大老君の直属の組織とし、その役割は、わしの補佐を主とし、治安維持、治世、仙人界のまとめ役である。皆も知っての通り、仙人はスカウト以外で、人間界に参与してはならない。無論行き来も禁止しておる。その他にもいくつか法度がある故、それを他の仙人達にも徹底させるように。また、先に話していた事として、公望はおらんかったが、全員一致で普賢を十二仙の総まとめ役とし、補佐兼摂政を貴信に任す。それでよいな」

「大老君様がそうおっしゃって、皆も納得しているのなら、私はかまいませんが、ひとつだけ気になることがあります」

普賢が口を挟んだ。

「なんじゃ、普賢？」

「妖仁、大乙が、十二仙に選ばれたというのは、まだ納得がいきません。妖仁は、仙人界でも有名な天才仙人。大乙も宝貝作りにおいて、右に出るものはいません。二人ともまだ若いとはいえ、十分な能力、資格を持っていると思います、何故に公望が入っているのですか？いくら、大老君様の弟子とはいえ、聞いた噂によれば、仙人にな

ってから、ろくに修行もせず、弟子を取るわけでもなく、好き勝手に生きて、寝てばかり。仙人になってからもまだ日が浅い若輩者。何を考えているのかわからない、仙人界一の問題児というか、変わり者と聞いておりますが。現に今も、大切な会議の途中だというのは、寝ているではありませんか。私には、仙人として実力、態度、資格共に十二仙にはふさわしくないと思います」

「うーむ、まあ、そうなんじゃが」

「十二仙といえば、仙人の中でも大老君様の次に最高位に立つ存在。責任も重大です。もっと他の適任者を探した方がいいのではありませんか？」

「ま、まあ、そういうでない。これは、わしとて悩んだことなのじや。しかし、わしの弟子としてももう少し自覚を持ってもらいたいと思っただけ。一応形式上任命するだけじゃ。十二仙ともなれば、こやつも少しは、仙人として自覚をもつであろう。普賢、いや、皆のもの。不満はあるかと思うが、わしに免じて、公望を入れてやってくれ」

「……。わかりました。そういうことにしておきましょう」

「すまぬな」

こんなやり取りが行われてるとは露知らず、公望は、寝息をたてていた。妖仁、大乙は笑っている。

「とりあえず、以上をもって、十二仙任命会議を終了する。皆のもの、それぞれ、慣れぬこともあるじやろうが、各自自覚を持ち、責務を全うしてくれ」

「はい」

「では、そなた方には、連絡用宝貝を渡しておく。何かあったら宝貝を使ってくれ。受け取り次第解散じゃ」

皆は立ち上がると、各自連絡用宝貝を手に持って出て行く。公望は、まだ寝ていた。大乙が起こしにかかった。

「おい！公望！起きろ！！」

「ん？んー、終わったか？」

「終わったぞ。ほら、連絡用宝貝」

「なんじゃこれは？」

「相変わらずだなー、話ぐらい聞いてなよ。これで、いろいろ連絡し合うんだ。他のみんなは、もうこれ持って帰って行ったぞ」

「そうか、じゃ、わしも帰るかの。お、そうじゃ、せっかく久しぶりに三人集まったんだから、宴会でもせぬか？」

「望ちゃん、本当宴会好きだね」

「そうしたいのは、山々だけど、僕はやらなきゃならないことがあるからさ。また今度にしよう」

「うーむ、そうか。残念じゃの。妖仁も空いておらぬのか？」

「うん、僕もまだ変化の術の修行中だから、今日は無理かな」

「なんじゃ、そなたもか。つまらぬの」

公望は、心底がっかりした。二人は、まあ、また今度と言って、帰っていった。しょうがなく公望も帰ることにした。その時入り口で、一人の仙人が待ち構えていた。普賢である。

「おい、公望！」

「ん？そなたは、確か・・・普賢じゃったか？」

「そうだ。今回十二仙の総まとめ役を仰せつかった」

「おお、そりゃ大変じゃの。がんばるのじゃぞ」

「お前に言われるまでもない。それより、俺は、どうも腑に落ちん」

「なにがじゃ？」

公望はきょとした顔で聞き返した。

「何故お前のようなやつが、十二仙に選ばれている？お前のような奴がいては、十二仙の威厳が損なわれてしまう。俺としても、総まとめ役として、お前を認めることはできん」

「なら、わしのことは放っておけ」

そんなことどうでもいい様に、返事をする。普賢は、少し機嫌を害したようだ。

「そうもいかないだろ！形式上とはいえ、十二仙に選ばれているのだから、それなりのことはしてもらわなければ。なんにせよ、俺は噂でしか、お前の事は聞いていない。だから、俺が認めるためにも、お前が、本当に大老君様を選んだとおり、十二仙にふさわしいかどうか、テストさせてもらう」

「テスト？具体的に何をしろというのじゃ？」

「俺と模擬試合をしろ」

「そなたと？」

「そうだ。それで、お前の实力を見て、十二仙にふさわしいか、俺が直に確かめてやる」

普賢は、齢500歳をゆうに超え、七大宝貝のひとつ、禁鞭を用いる凄腕の仙人だ。模擬試合とはいえ、そんな仙人とやりあえば、ただではすまない。それになにより公望は面倒くさいと思い、断ったが、普賢は半ば強制的に、模擬試合場まで、連れて行った。

「やれやれ」

公望はため息をついた。

公望、十二仙になる(下)

「ギャー！死ぬー！！」

公望は、迫りくる禁鞭の猛威から必死に逃げ惑いながら、叫びまくっていた。

「どうした、公望？逃げてばかりでは、つまらんぞ」

普賢は、鞭を振るいながら余裕綽々な態度で公望に話しかけていた。

「だアホー！！そんな、四方八方から鞭が飛んできたら、どうしろというんじゃ！大体、超宝貝^{スーパ}相手に土台敵う訳なからう！」

「それを、どう対処して俺を倒そうとするかを見るために、こうやって模擬試合をしているのだろう？」

普賢は、振るっていた鞭を止め、一息ついた。公望は、はーはーと荒い息遣いをしながら、膝に手をつけて立ち止まった。

「あのな、普賢。そなたは、模擬試合をするとか言って無理やりわしを試合場に連れて来たが、言っておくが、わしは鼻から戦う気などさらさないわ。わしは、完全平和主義者での。暴力には反対なんじゃ」

「何を軟弱な事を言ってるやがる。どんな形であれ、戦いの場所に立ったのであれば、全力を持って相手を倒さなくてどうする。しかも、十二仙ともなれば、なにかと治安維持の関係上力を振るわねばならない時もあるだろ。求められるのは、力と知力だ」

「そんな事知らぬ。わしは、どんな場合であれ、話し合いで解決できるものなら穏便に済ましたい派なんじゃ。第一、そなたも模擬試合なら少しは手加減せぬか！超寶貝何ぞ食らったら、一発であの世行きじゃ」

公望は、ぶーぶーと文句をたれている。普賢はあきれながらもものを言ってきた。

「おい、公望。おまえも仙人なら、禁鞭の威力を知らないわけじゃないだろ？俺はかなり、手加減しているぞ。一応模擬試合なんだから、お前を殺すつもりもない。あくまでこれはテストなんだから。この程度の力でへこたれていては、普通の寶貝にも対応できないぞ。とにかく、テストなんだから、なにか攻撃のひとつでもしてこいよ」

「ふむ、そんな事言っつもの。そもそも、わしはそなたに攻撃を与える手段がない」

公望は、腕を組みながら、んーっと唸った。それを聞いて普賢は不思議そうに尋ねてくる。

「ああ？おまえ、仙人になった時、大老君様から祝いとして寶貝のひとつはもらっているだろ？」

「いや、わしは今まで一度たりとも、寶貝というものを扱ったことがない。師匠も寶貝をくれは、せなんだぞ」

「はー？おまえ、それで一人前の仙人になったのか？あきれたー。大老君様も何を考えてらっしゃるのやら。仙人、道志が寶貝を扱えなくてどうする。何故お前のようなやつを十二仙に選んだか、ます

ますもってわからんな」

普賢はため息をついた。

「そんな事、わしだって知らぬわ。師匠に強制的に決められたんじやから。そもそも、この命令だっていくら師匠とはいえ、人権侵害じゃ。もっと自由意志というものを尊重してもらいたいものじゃの。わしは、面倒くさい事はしたくないというのに」

何もかもが面倒臭い様に、公望は、普賢に言いのけた。実際公望にとっては、十二仙など面倒臭かった。だからこのように言っておけば、普賢もあきらめて、さっさと模擬試合を止めて十二仙と認めず、大老君様に進言するだろうと思ったのだが、普賢はしばし考えると、公望の気持ちと裏腹な答えを返してきた。

「宝貝を持ってないようでは、話にならんな。これでは、お前の実力もわからん。しょうがない、俺のもうひとつの宝貝を貸してやろう」

そう言うと、普賢は懷から、二つ一セットの赤い「く」の形をした宝貝を取り出した。そして、公望に渡す。

「なんじゃ、これは？」

「舞赤根ふせきこんと言う宝貝だ。この間、大乙からもらったものでな。なにやら、簡易的な火を操れるものらしいんだが、俺も使った事がないので詳しい事は知らん」

「で、この、そなたもよく知らん様なものをわしに渡してどうしろというのじゃ？」

「もちろん、模擬試合を続けるに決まってるだろ。お前の实力を見たいしな。大体仙人が、宝貝を扱えんなんて、前代未聞だ。それでおまえも、少しは練習しろ」

「なんじゃ、結局まだ試合はやるのか……。というか、そなた、実は結構面倒みたがりじゃろ？ 普通、わしの様な者は、放置して置かぬか？」

「当たり前だ。お前の様な者を放っておけるか。俺が、十二仙として、立派にやっていけるように指導してやる」

普賢は俄然やる気を出したようだ。

「なにやら、当初の目的から少しずれてきておるの。わしはわしのスタイルでやるというのに。やれやれ」

ぶつぶつ言いながら、公望は、始めて触る宝貝をまじまじと見つめると、突然、舞赤根の片方を明後日の方向に思いっきり投げた。

「あ！ おまえ、せっかく貸してやったのに何をする！」

その行動に普賢は戸惑った。

「馬鹿者！ こんな、そなたも能力を知らん宝貝をもらって、超宝貝とやりあえるか！ 二つあっては、邪魔なだけじゃし、ひとつで良いわ。さて、では、試合の続きをやるとするかの」

公望が身構えた。それを見て、普賢は戸惑いながらも、まあいいといった感じで、改めて禁鞭を振るいだした。

「さてと、舞赤根の能力みせてもらうかの」

先程と同じ様に、鞭から逃げながら、宝貝を扱ってみる。あっちは超宝貝。こちらは、普通の宝貝。どう考えても真っ向勝負では、こちらが負ける。禁鞭は、リーチは長いが打撃系の宝貝なら、距離をとって舞赤根の能力を使いながら、遠距離戦にした方がよさそうじゃない・・・などなど考えながら、舞赤根を地面に突き刺した。

「赤主^{せきしゅ}っ！」

公望の掛け声と共に、舞赤根から炎がほとぼしり、地面を駆け一直線に普賢に向かっていった。しかし、普賢は、地面を鞭で挟み取り炎をかき消した。

「ふーむ、さすが禁鞭。隙がないの。下からなら届くかと思ったのじゃが」

「甘いな。その程度の攻撃、なんなく防げるぞ。確かに、禁鞭の若干弱点とも言える足元から攻めてきた手段については、いい考えだったが、俺には通用せんぞ」

「んー、困ったのー」

一見困った様な表情をしてみせる。そして、チラッと空を見た。

「ふむ。とにかく、そなたに逸し報いねばならんのだな。やれやれ、骨の折れる事じゃ。とりあえず、力では勝てぬなら、数で攻めるかの。では、行くぞ！」

舞赤根を前にかざすと、うおりゃー！という掛け声をかけながら、がむしゃらに火の玉を普賢に向かって放ちまくった。初めて触れてみて、寶貝というものはどうやら、大技ではなく小技で、小さい力を引き出せば氣も大して使うことなく、かなり早い連射が可能であるということに、公望はすぐに気づいた。超寶貝である禁鞭と簡易な作りの舞赤根では力では勝てない。もちろん、数で攻めたからといって勝てる代物でも、相手でもないのだが、そんな事は公望は百も承知だった。公望の狙いは別にあったのだ。

「そんなちやちな寶貝で、ただ連射してるだけでは、俺に傷ひとつつけられないぞ」

普賢は、禁鞭を振るい火の玉を弾いていく。さらに、かなりの量の火の玉を弾きながらも鞭を公望にしならせる。この辺りは、さすが年季が違うのとか思いながら、公望はその襲い掛かる鞭を避けつつ、ただひたすらに火の玉を打ち続けた。

5分程経過、普賢はもういいと言う様に、首を振った。

「おまえの戦略も、戦い方も、能力も、所詮その程度か。大老君様の直弟子で、十二仙に選ばれるほどだから、多少はできるやつかもと期待はしたのだが、やはり、噂どおりの落ちこぼれ仙人だったようだ。お前にはがっかりさせられた。最後に俺が本気を出して、一度灸をすえてやろう。おまえが、まじめな仙人になるようにな」

そう普賢が言うと、鞭のスピード、向かってくる数、打撃力が一挙に上がった。

「おわっ！こんな喰らっては、命がいくらあっても足りんわ」

公望が攻撃の手を休め、逃げるのに専念する。

「おい！ちょこまか避けるな！愛の鞭だと思って、ありがたく受け取れ！」

中々当たらない公望に普賢が怒鳴った。それを聞いて公望は、ぴたりと止まった。

「ようやく観念したか」

禁鞭が襲い掛かる。向かってくる鞭の前に公望は一言言った。

「そうじゃの、わしは噂通りの落ちこぼれ仙人。そなたの言うとおり一度痛い目にあわなければ、この性格は変わらんかもしれん。そなたに、攻撃を与えようとしてもかすり傷ひとつつけられぬしな。せいぜいわしができる事と言ったら、そなたの頭にこの宝貝をぶつけることぐらいじゃしの」

「ん？宝貝をぶつける？」

不思議そうに普賢は、聞き返す。その時・・・

ガッーン！！っと硬いものが普賢の後頭部にぶち当たった。

「な！？」

そのまま、普賢は倒れ、意識を失った。かすれ行く意識の中、公望のうっひゃひゃひゃひゃ！という高笑いが聞こえていた。

しばらくして・・・

「痛ってー!!」

意識を取り戻した普賢が後頭部をさすりながら、起き上がった。

「ふおふおふお、かなりの衝撃で当たったじゃろ？」

「あ？ ああ。何が当たったんだ？」

「見てみよ。ほれ、舞赤根じゃ」

二人の傍らに舞赤根のひとつが落ちている。もう片っ方を公望が握っている。

「何で舞赤根が、俺の後頭部に当たったんだ？ これは、さっきお前がどっかに投げたやつじゃ？」

訳がわからないと言う感じに普賢が尋ねる。

「うむ、説明しよう。まず、そなたの能力、そして、扱っている禁鞭の能力を最初に分析した。まず、普通のやり方では、真っ向から立ち向かってそなたに傷をつける事などできぬ。渡された舞赤根では、特に土台ががんばっても無理じゃな。若干隙のある下からの攻撃も試したが無理じゃったし、そうになると、唯一の弱点である後ろに着目し、そこでこの宝貝の形状に注目した」

「形状？」

「そうじゃ、これは、曲がった形をしておるじゃろ。この重さと形状をから見ると、これは投げ方次第で、空中で円を描くように回転

して戻ってくる。まあ、ブーメランみたいなものじゃな。そこに注目して、後は、風の流れ、投げる方向、力加減を考えて投げれば、自分の思ったところに再び戻ってくるからの。後は、そなたに、この策を気づかれぬように振舞って、注意をわしの方だけに向けていればよい。さらに、付け加えるなら、そなたが動いてしまったのは、当たるものも当たらぬからの。そなたの最初に立っていた位置をずらさぬように、配慮しながら動けばいいだけじゃ」

「つまり、おまえは、宝貝をもらってから、最初からこれを狙ってたって事か？」

「そうじゃ」

「じゃあ、全部策を気づかせないようにするための、演技だったのか？」

「当然じゃ、気づかれてしまっっては、この策は成り立たぬからな。まあ、万が一失敗しても、そなたを倒す策はいくつか考えてあったがの。このやり方が一番穏便で、簡単じゃったからな」

「・・・・・・・・」

「ん？なんじゃ？」

突然、普賢は笑い出した。

「はっはっはっ！いやー、驚いた。やりあったとしても、傷ひとつ程度とっていたが、まさか本当に俺を倒しちまうとはな！ははは、いやいや、気に入った！うん！気に入ったぞ！！初めて触れた宝貝の順応力といい、策の練り方といい、おもしろい！！さすが、大老

君様の直弟子だ。おまえが、その若さで仙人になって、十二仙に選ばれた理由がわかった」

「そうかのー？ わしは、未だに選ばれた理由がわからぬが？」

「いやいや、おまえは、実は対した奴だよ。策を瞬時に思いつき実行に移しながら、さらに、俺の禁鞭をすべて避けたんだからな。本気を出した俺の禁鞭もなんのканのと避けて、おまえは傷ひとつ負ってないんだから。それだけでも、賞賛に値するぞ」

「ほほほ、褒められたものでもないわい。わしは、わしのやり方でやっておるだけじゃ。このスタイルを変えるつもりはないからの。自分が痛い思いをするのも嫌じゃし、自分が嫌な事は、相手にさせるのも嫌なんじゃ。今回は、無理やり戦わされたからしかたなく、傷つける事をしたが、わしとしては本意ではないのじゃぞ」

「くくく、本当、噂通りの変わり者だな。つかみ所のない奴だ。どこまでが本当でどこまでが演技かわからねーよ」

普賢は、腹を抱えて笑っている。

「笑い事ではないぞ。本来ならわしの美学に反しておるのじゃからな、今回の事は。で、結局わしは、十二仙のテストには合格したのか？」

「あ？ ああ、ああ、もちろんだ。俺は文句がないぞ。これから、十二仙としてがんばってくれ」

「嫌じゃ」

公望の即答に、がくつと普賢は肩を傾けた。

「な、なんだそりゃ」

「何度も言うが、わしは、面倒臭いのが大嫌いなんじや。だから、がんばるつもりはない。わしはわしのスタイル、ペースでやらせてもらう。まあ、一応任に就いたのだから、仕事はするが、期待はするな。よいな？」

「まったく、本当にわかんねー奴だな。まあいい。でも、いざつてときは、やる事はきちんとしてくれよ」

「うむ」

二人は握手をし、別れ際、普賢が、家にたまに遊びに来いと言ったので、公望はそれに返事をする、早々にそれぞれ各家に帰っていた。こうして、公望は、晴れて十二仙になることになったのである。まあ、公望としては、望んでなかったものでもなく、位置づけも一番下っ端ということにしてもらっておいたので、深く考えない事にし、またいつものように瞑想に浸っていた。

公望、のんびりした毎日

遙か古来より仙人は存在し、実は仙人の歴史は長い。かつて、様々な神が人間界を統治し、人間から崇め奉られていたとき、神界より何人かの使者が、人間界に送られた。その使者の役目は、まだ文明をうまく築けぬ人間に、文明を教え、より進化させる事、また、争いをなくし平和の世の中にするのであった。それが、仙人の元となった存在である。当初、神術（仙術）を用いていた彼らは、人間の中に、自分らと等しい力を持つ人間が、世の中に存在することに気が付いた。そういった者達を、放っておけば、人間界の秩序、バランスは失われる。そこで、その者達を隔離する世界を新たに築き上げ、その自分らと等しい者達をすべて、その世界に引き入れた。それが、今の仙人界である。つまり、仙人とは、神と人間との間的存在に位置するのである。

現在の仙人は、すべて人間から成り上がった者で、かつての仙人の祖達は皆、役目を終え神界に戻っていつている。仙人は、強制的ではないが、いずれ神界へと行くことになっている。

また、現在の仙人界に至るまで、二回時代の変動があった。ひとつは、その仙人の祖達が築き上げた時代、そしてもうひとつは、仙人界における戦の時代である。仙人は、三種に分かれる。人間より成り上がった仙人、動物や植物が、氣を持ち本来持つべき寿命より長く生き妖力をもって仙人になった妖怪仙人、そして、かつての祖達より生まれた純潔の仙人である。そして、戦の時代とは、妖怪仙人と仙人との間で、大規模かつ仙人界そのものの崩壊をもたらしかねない戦が起こった時代をさす。その後、新たな指導者の下、仙人代表、妖怪仙人代表の三人により、仙人界は統治されるが、ほとんどの者達は、神界へと移住していった。そして、残った現統治者である、大老君により新たな仙人界の統治が始まり、現在に至る。

もちろんの事、現在にも妖怪仙人は、存在しそちらも新たな統治

者の下、統治されている。とりあえず、和平は結んではあるが、両者の仲は、芳しくなく、小さな争いは絶えない。また、純潔の仙人としてたったひとり、竜吉りゅうきつという名の仙人も現在の仙人界に留まっている……。

仙人の歴史という長々と書いてある本を読みながら、公望は、ほーっとため息をついた。十二仙になってから、大老君様より、仙人の歴史ぐらい知っておけとの命令により、この本を渡され、任された仕事である仙人界の見回りをしながら、読んでいたのだ。

「一見平和な仙人界も、いろいろな歴史を辿ってきたのじゃの。まあ、歴史なんてものはその様なものかもしれん。神はともかく、仙人も人間も愚かな生き物じゃからな。なまじ、感情や、知性を持つておるから余計たちが悪い。進化を遂げたといっても、わし思うにはむしろ退化したように思えるがの。動物は、本能で動いている分、生きること、種を残すことに重点を置くが、知的生命体なんぞ、無駄なことばかり考え行動する。だから、下らんことで争いが起こったり、悲しんだり、憎んだりするのじゃ。そう考えれば、動物達の方がよほど美しいではないか。それを、人は尊ぶこともなく、むしろ己たちが生命の頂点であるが如く、生命を弄び、環境を破壊しておる。そして、自分達が自ら起こした事を、起こった後に事の重大さに気づき、修復しようとするが、現在の生活に慣れ、挙句、さらに楽な生活を求めるが故、積極性に欠け、一向に修復は進まぬ。己やその子孫達に害が及ぶとわかっておりながら、何とかしようとする努力の反面、今より便利な生活をしたいと欲する。人の欲望なぞ、きりが無い。まさしく、矛盾の生物といってよいな。さらに学習能力を備わっておりながら、それを生かそうともせん。つまりプライドで、行動に支障きたす。考えれば考えるほど、真、まこと人とは愚かな生物よ。それは、仙人とて変わらぬな。そうは思わぬか？風麒麟」

「左様でございますね。私には、難しい話ではありますが、公望様の考えには、賛同できます」

「ふむ。さすが風麒麟。霊獣の中でも最も気位が高く、知性の溢れる霊獣じゃ。特にそなたの様な者には、さらに、人など、愚かに見えるのではないか？」

「いえ、その様には思いません」

「なぜじゃ？」

「人には、人の行き方というものがあります。人もまた本能で動きますが、獣には持たない理性というものを持ち合わせております。また、公望様は、学習能力がないとおっしゃいましたが、皆が皆そうではありません。今の世の中を何とかしたいと願い、行動する者も多数おります。また、相手を思いやる気持ちというものも発想力というものも持ち合わせているではありませんか。それは、すばらしいものであると思います」

「そうか。確かに人には、人しか持ち得ない感情というものもあるな。相手を思い、大切にするというのは、すばらしいことじゃ。発想力は、文化に繋がり、歴史を作る。確かにそなたの言うとおり、全員が愚かな者ではない。いや、そもそも、愚かという一線はどこで引くものかも正直わからぬものかもしれん。この考えは、わしという一個人が、考える思考であって、別のものからすれば、また違った思考もあるであろう。それに、社会が形成されている以上、抑止力も働く故、行動したくてもできない状態にある者も多数おるであろう。後、己の生活も考えねばならんな。その事は、人も本能であるといえる。生活、結婚、出産。やはり、生き物の本質はそこ

にある。ま、世の中には動物であれ、人であれ、わしの様に、女性から一度たりとも好かれることもなくむしろ、嫌われ一度も恋愛というものを経験したことがなく、むしろ興味もたぬ者もおるがの」

ほっほっほと公望は、笑った。今日も平和な一日だ。もうかれこれ、半年以上、十二仙になってから、見回りをしているが、問題らしい問題はなにひとつなかった。まあ、不老不死である仙人からしてみれば、半年なぞ、人間で言うほんの一秒にも満たない時間ではあったが、なんにせよ、平和な日々には公望は、満足していた。しかし、それは、あくまで、仙人界に限ったこと。実際は、人間界の状況が気になってしょうがなかった。しかし、仙人は、人間界に関与してはならないのが、掟。まあ、そんな法度なんか守る公望ではなかったが、今は取り急ぎ関与することもなかったため、ただ見守り、人間達の手で解決されることを願っていた。

「さてと、今日の見回りはこの辺にしておくか。どれ、報告しに師匠の下に参ろうか」

「はっ」

風麒麟は、蓬萊山に向かった。いつもの様に入り口で静かに待っている。

「師匠。今日も一日平和でした。何の問題ありません。それと、借りていたこの本お返しします」

「うむ」

大老君の部屋には、妖仁、大乙も丁度報告しに来ていた。それを見てください話しかける。

「そなたらの仕事は、順調か？なにやら、下っ端のわしより、いろいろ仰せつかっておる様じゃが」

「うん、僕達の方は大丈夫」

「全部とどこおりなく、進んでいるよ」

「それならよいが。あまり無理をするでないぞ。師匠は人使いが荒いでな」

「ははは」

ほんわかと、場がなごんだ。この様に、たまに報告しに来た時、他の十二仙と顔を合わせる事がある。その度に、公望は、話しかけ暇を潰していたり、交流を深めているのだ。十二仙が、全員顔を合わせることは、定期的な集会のときしかない。しかし、その集会の場ではいつも、公望は、寝ていたため、なかなか他の十二仙達と交流がもてなかったのだ。それに、仮に話ができたとしても、曲がりなりにもお堅い正式な集会の場で世間話なんかはできるものでもなかった。

「それにしても、二人と一緒に報告に来るのはめずらしいの？」

「えっ？うん、ちょっと大老君様から呼び出されて」

妖仁が、ほのぼのと答えた。

「ん？師匠からか？」

「ああ。今丁度、その話をしていたところだよ」

「何の話じゃ？」

「公望の事だよ」

「わしの？」

大乙が説明を始めた。

「そう。実はね、弟子を取らないかという話なんだ。僕達も仙人になったし、十二仙という任にもついているんだから、弟子を取らないと面目がたたないんじゃないかって、大老君様が仰ってね。妖仁は、既に弟子を見つけたみたいなんだ。で、僕も弟子候補が、今いるんだ。そこで、後は公望だけなんだけど、公望にはどんな弟子が良いかって話してたんだよ。候補もあげてみてるんだけど」

「こら、わし意思を無視して勝手に話を進める出ない。おぬし達も、師匠も知っているであろう？ わしは、自分が気に入った純真な可愛い女の子の道士しか、弟子にとらぬと」

「その件なんじゃが、ひとつおぬしに聞きたい事がある」

大老君が割って入った。

「なんででしょう？」

「おぬし、今二人から聞いたが、そう言っておりながら、最初から弟子を取る気なぞ、さらさらないのであろう？ おぬしの条件は、はっきり言って、ほとんどありえない条件じゃ。そもそも、仙骨をも

つ人間は、昔に比べ遙かに減った。今じゃ、見つけるのも至難の技じゃ。それなのに、あげく純真な可愛い女の子ときておる。明らかに、その様な人材は見つからん。おぬし、それをわかった上で言っているそうじゃないか」

「ええ、そうですよ」

公望は、さらりと言つてのけた。

「やはりな。そんな気はしておったんじゃが。とりあえず、誰でも良いから弟子を取る気はないのか？他の十二仙達は、皆弟子をもつておるし、大乙も弟子候補を見つけておる。おぬしだけ、弟子を取らぬというのは、いささか、わしとしても困るのじゃが」

「嫌です。私は、まだ、人に教えられる様な器を持ち合わせていないし、おこがましい事です。それに私、人間不信入っているのです、あまり、人間とは深い関わりを持ちたくありません」

「わがままをいうでない」

「わがままではありません。私の意志を尊重してくださいと言っているだけです。別に弟子そのものを取るを、断つてはいないではないですか。ただ、条件だけを申し上げているだけです。だから、嫌ではありませんが、私の条件に当てはまる人材がいるのなら、その者を弟子といたしましょうと言っているのです。これは、私としても百歩譲った事なんですよ」

「んー。あいわかった。おぬしも頑固なところがあるからの。では、もしその条件に当てはまる者がおったら、必ず弟子にするのじゃぞ？」

「ええ、約束は守ります」

「うむ。なら、わしは全力を持って探すとするか。どうせおぬし自ら探す事はせんだろうからな」

「無論です」

「では、弟子の件は、わしに一任させてもらう。わしからは以上じや」

そう言って大老君は、妖仁達の持ってきた報告書に目を通し始めた。

「さてと、では三人揃ったのじゃし、これからどうじゃ？飲まぬか？」

「うん。今日は良いよ」

「僕も」

二人は快く返事した。この回答に公望は、喜んだ。

「そうかそうか。よし！それなら、普賢の家に押しかけて、普賢も合わせて四人で飲むぞ！！」

公望は、勇んで部屋を後にした。二人も後ろから着いて来る。こうして、三人は普賢の家に飲みに行ったのだった。もちろん、突然押しかけてきた公望に普賢は、連絡ぐらいしろとぼやいたが、なんにせよ、四人は和氣藹々と宴会を始めた。

今日も時間はのんびりと過ぎていく。普賢邸から、楽しげな笑い

声だけがあたりに響いていた。

公望、弟子を取る!!

人間界の、とある山奥に遊牧をしながら生活をしていた、二人のそれは美しい双子の姉妹が住んでいた。二人はまだ若く、早くに両親をなくし身よりもなかったため、二人は手に手を取り合って暮らしていた。お世辞にも裕福とは言えず、とても貧しく質素な生活をしていたが、羊相手に楽しく毎日を暮らし、二人はお互いがいればそれだけで幸せだった。

そんなある日、普段なら人など訪れることのめったにない地に、一人の若い男性が訪れた。丁度、姉がひとりで羊達の世話をしている時だった。その男の話では、なにやら自分は仙人と呼ばれる存在で、弟子を探している。そして、姉に仙人になれる仙骨というものを持つていて、よかったら自分の弟子にならないか?と言う。面倒はすべてその男が見るという話だったし、その男は仙人とはこういう存在なんだということを説明した。姉は仙人の事など知りもしなかったが、男の話を聞いている限りだと悪い話ではない。男も必死にお願いをしてきたため、その男の弟子になってみようと思った。しかし、気になったのは、最愛の妹の事である。もし自分が仙人になるため、人間界を離れては、妹は一人っきりになってしまう。人一倍さびしがりで、まだ、精神的に幼い妹を放っておく事はできない。しかし、優しい妹の事だから、自分の幸せを願い、きつと無理をしてでも自分は大丈夫と男の下に行かせるだろう。ただでさえ、不憫な妹をこれ以上可愛そうな思いをさせたくはなかった。

姉は、その事を男に話した。なんとか、妹も連れて行くことはできないかと頼んでみた。しかし、男が言うには、仙人が弟子を取れるのは一人だけであり、さらに妹が仙骨を持っていない事には連れて行くこともできないと言う。それを聞いて姉は、妹を想い、妹を連れて行けないならその話は断ると、頑として言い張った。

男は非常に困った様で、とりあえず妹に会わせてくれと、二人し

て妹の元に向かった。男は妹に事情を説明すると、案の定、妹は姉が幸せになれるならと、私は一人でも大丈夫と言って仙人になる様に進めた。でも姉は、やはり妹の事を放っては置けなかった。両親をなくしてからたった一人の大切な家族。今まで辛い時も二人して何とか乗り切ってきたのだ。なにより、自分以上に、性格上不憚な生活をしてきた妹に、これ以上無理も辛い思いもさせたくない。

姉と男は悩んだ。その時、ふと男は、妹にも仙骨らしいものがある事に気が付いた。姉ほどはっきりした状態ではなかったが、仙骨が生えかかっていたのだ。二人同時に仙骨を持っているなど珍しい事ではあったが、それに気づいた男は、どうしても弟子を必要としていたため、妹の弟子の件はなんとかするから、二人を仙人界に連れて行くことにした。姉も妹も共に行けるなら、どこでも良いと言い、喜んでその男の後に着いて行った。

仙人界は今日も、平和だった。公望は、のんびりとちょっとした山の上で風麒麟と共に寝そべっていた。見回りも一通り終わり、時間が余ったためサボっていたのだ。ボーっと空を見上げながら、心が自然と無になっていく。

「平和じゃの」

「そうですね」

「報告に行くのが面倒じゃの」

「そうですか」

「今日ぐらい行かなくてもよい気がするわい。毎日言う事なぞ、一緒じゃからな」

「はあ」

「このまま、のんびりここで寝てしまうか？」

「おまかせします」

その時、ピーピーと連絡用宝貝がなった。

「なんじゃ？うるさいの」

「出なくてよろしいんですか？」

「うーん。個人的には出たくない。なにか面倒くさい事のような気がする」

「しかし、やはり出た方がよろしいのでは？」

「やれやれ、しょうがないの」

公望は、おもむろに袂から連絡用宝貝を取り出して、ボタンをぽちっと押した。

「はい、公望じゃ」

だるそうに答える。相手は大老君様からだった。

「なんです、師匠？報告なら後日しますよ。いえ、この場で言いましょう。今日も至って何事もなく平和な一日でした。以上。でわ」

「こ、これ！切るのではない！今日連絡したのは、別に報告の事で

はないのじゃ」

切りにかかった公望に必死に大老君は待ったをかけた。

「じゃあ、なんですか？」

「うむ、至急大乙の所に向かってくれ。用件はすべて大乙に伝えてある故、大乙から直に詳しく聞いてくれ。ちなみ、その用件に対して、お主は拒否が認められておらぬからそのつもりでな」

「なんですか、それ？」

「とにかく、わしは今忙しいので話している暇がない。良いから直ぐに大乙の所に行け。大乙の言葉がそのまま、わしの命令だと思え。良いな？」

「はいはい、わかりました。それでは」

ぽちっと連絡を切る。しばらくぼーっとすると、むくつと起き上がって風麒麟に大乙の家まで行ってくれと頼んだ。風麒麟は快く承諾すると、公望を背に乘せすごい速さで飛び立っていった。

そして、大乙の家……

「おーい！大乙！わしじゃ、公望が来たぞ！」

家の門の前で大声で話しかけた。すると門が開かれ、大乙が現れた。

「ああ、待ってたよ。さあ、中に入って」

大乙は、公望を家の中に招き入れた。通路を通りながら、家の中をちらりちらりと見ていく。

「相も変わらず、ごちゃごちゃした家じゃな。至る所に宝貝の失敗作やら、設計図やら放置しておいて。もう少し片付けたらどうじゃ？」

「え？ うん。もうすぐ作業場を作るつもりだから、全部そっちに移動させるよ。前々から作業場は欲しかったし、丁度弟子が来たから作業場も必要だしね」

「うん？ もう弟子を取ったのか？ と言う事は、候補者の方がうまく返事を出したという事か」

「うーん、実はその事で公望を呼んだんだ」

大乙は、ちょっと悩みながら受け答えをしている。

「その事というのは、どういうことじゃ？ そなたが、弟子を取って、その弟子候補者も了承したなら何の問題もないはずであろう？ 何故わしが出てくる？？」

「詳しい事は、その弟子に実際会ってからの方がいいと思う。さあ、この部屋に入って」

公望は疑問に抱きながら、促された部屋に入った。すると応接室の様な部屋で、机と椅子が並べられていた。そこに、二人の美しい女の子が座っていた。こちらを見て直ぐ二人は会釈をする。

年の頃は、人間で言う15〜16歳辺りか。二人似た顔をしてお

るという事は、双子か何か？片方は知的な感じで落ち着いた感じの綺麗な女の子で、若干背が高い。もう片方は、まだあどけなさが残る綺麗というよりも可愛いといった感じの子じゃな。大きく真っ直ぐな澄んだ瞳をしておるのが印象的じゃな。どちらにせよ、俗世間では一級品の美女の類に入る逸材か。まあ、それはどうでもよいことじゃが。

公望は二人をパッと見て、そういう感想が浮かんた。

「で？大乙よ。この二人がそなたの弟子か？ん？しかし、確か仙人は一人につき一人の弟子しか取れないのが決まりではなかったかの」

「いや、だからその事で君を呼んだんだよ」

それを聞いて公望はピンときた。

「そなた、まさか・・・この二人のうち、どちらか一人をわしの弟子にして任せようとか考えておるのではあるまいな」

「さすが、公望！話が早い。そのまさかだよ」

にこにこと、大乙は返してきたが、公望はそれを聞いて頭を抱えた。

「そなた・・・何故に掟を知っておりながら、二人連れてきたのじゃ。わしの性格を知っているそなたなら、連れて来て、ハイ良いですよとわしがすんなり許可を出す訳がない事ぐらい知っておろう。条件だって言っているはずじゃし」

「それはわかった上でだよ。実は二人連れて来なきゃならない事情があったんだ」

「事情？」

「うん。とりあえず、二人を紹介しておくね。こちらが花憐かれん、こちらが花鈴かりん。見てわかると思うけど、双子の姉妹なんだ。で、二人とも。この人がさっき話した公望だよ」

二人は立ち上がると改めて自己紹介した。

「初めまして、お会いできて光栄です、公望様。姉の花憐です。そしてこちらが、妹の花鈴」

公望が知的だと感じた方の女の子、花憐と言うそうだが、その子が挨拶をしてぺこりとお辞儀をすると、姉に紹介された花鈴と言う子も同じ様にお辞儀をした。

「うむ。こちらこそ、初めまして。仙人界にようこそ来られたの」

公望も挨拶をする。そして直ぐに、大乙に向き直った。

「で、事情と言うのはなんじゃ？」

「うん、実はね。最初、花憐を僕の弟子にするつもりだったんだ。で、スカウトしに人間界に降り立ったんだけどね。実際話してみると、花憐も物作り、まあ創作だよ。が好きでさ。仙人の存在は知らなかったんだけど、ちゃんと説明したら僕の弟子になることは全然抵抗がないんだって。でも、ひとつだけ弟子になるのに条件があつてさ。妹を一人にはしておけないから、妹も一緒に仙人界に連れて行けって言うんだ。二人は早くに両親をなくしてね。親族もない、二人きりの家族だから、妹を放っては置けないって。その条件が飲めないなら、断るって言うんだよ。僕は、他に候補者がい

なかったし、話をしてみても花憐は、僕の弟子の適任者だと思ったし。十二仙として弟子は絶対取らなきゃだめだって、大老君様からも言われてるし、困ってたんだ。そこでとりあえず、花鈴に会ったらさ。僕も驚いたんだけど、花鈴もまだちゃんとした仙骨じゃないけど、生えてきてる事に気が付いたんだ。だから、それだったら、二人とも連れて来ようと思った訳。やっぱり、二人を引き離すのは可哀想じゃない。後の流れは、公望だったら理解できるでしょ？」

「で、わしも条件を言っただけのもの、立場上絶対弟子を取らなければならぬ。二人を引き離せず、自分の弟子の適任者が他にいないし、丁度わしも、弟子がいらないから二人連れて来れば、花鈴の方をわしに無理やり預けちゃえと言う事か。どうせ、そなた、連れて来てしまえば、わしとてなんとでもなると思ったのであろうな」

「そう言う事」

「まあ、そなたは行き当たりばったりの行動をしおって」

はうと公望はため息をついた。大乙は、計算高く知的な仙人であるが、たまに計算外の事が起こると、対処に困って、結局何も考えず何とかなるさ的な行動を取る事があるのだ。それで、過去何度か悩まされた事が公望にはあった。

「でも、あながち無理やりって訳じゃないよ。今回はちゃんと僕なりに考えたつもりさ。ほら見てごらんよ。見ての通り、花鈴も可愛い子じゃない？この子だったら、公望も気に入ると思うてさ。だから連れて来たんだよ」

「あのな、わしが言っておる条件は、ただ可愛ければ良いと言う問題ではないのだぞ？むしろ内面的な面を重視しておるのじゃから。」

つまりじゃ、可愛い上に中身も良い子ではないと、わしは嫌だと言っておるのじゃ。何度もそなたには言ったであらう？」

「知ってるけど、それは、あくまで公望が弟子を取る気が全くないから、あえて理想を高くする事で、現実的なことを非現実的にしているだけでしょ？でもさ、現にこうして可愛い子が現れたし、僕が話した限りでは、性格も良い子だと思うけど」

「それは、そなたの見解じゃろ。人それぞれ美的感覚も価値観も違うのだぞ」

「じゃあ公望は、花鈴の事、可愛いって思わないの？」

「そりゃ、可愛いとは思うがの。確かにこれほどの逸材はめったにおらぬ。外見は申し分ないと思うが、問題は中身じゃ。実際わし自身が話をしてみん事には、わからん。第一、花鈴の意思はどうなのじゃ？そもそも、仙人の弟子になる事には抵抗はないのか？二人とも仙人、道士というものを何も知らぬのだろうか？」

「それは、問題ないよ。さっき、二人には仙人、道士って言う存在についてみっちり説明したから。それを聞いて、花鈴も弟子になれるならなりたいて言ってたよ。ね？花鈴」

急に話を振られて、花鈴はびっくりしたが、真っ直ぐな瞳で元氣よく返事をした。

「はい！お姉様も弟子になるのなら、私もなりたと思いますし、道士になるということがどんなにすごいことなのか、大乙様から教えられましたので、自分にそんなチャンスがあるのなら、ますます弟子入りしたいと思いました！そして、ゆくゆくは立派な仙人にな

りたいです!!」

「ほらね」

「んんんんー」

公望は唸った。

「公望。こんなチャンス滅多にないよ？公望が十二仙である以上、弟子は取らなきゃならないんだし、特に公望の条件に合った女の道士なんてまず見つからないよ。公望にとっても悪い話じゃないと思うけど。このままいったら、大老君様から無理やり変な人を弟子にさせられるかもしれないんだよ？それこそ、公望の条件なんて無視しかねないんじゃない？あの方は」

「くうー、そうじゃのー。あのくそじじいの事じゃからな」

「それだったら、花鈴を弟子にした方がいいと思うけどね」

公望は、少し考えた。花鈴を見て思う事が、ひとつだけあったのだ。自分の見立てでいったのなら、あの澄んだ真っ直ぐな瞳からいっておそらく、純粹で良い子なのだろうと予測はしてみた。推測だが、あながち外れてはいないだろう。自分とも気が合いそうだ。だがしかし、やはり話をしてみない事には始まらない。なにより、今、花鈴が発言していた言葉で気にかかる事もある。公望は、唸るのを止めて言葉を発した。

「花鈴。そなたに聞きたい事がある」

「なんでしょう？」

「一つ、弟子になると言う事は、たった一人の家族である姉と離れることになるのだぞ？ 同じ仙人界におるとはいえ、弟子になれば修行で忙しく、なかなか自由に会う暇もなくなる。それでもよいのか？」

「はい！お姉様が幸せに暮らしているなら、私は大丈夫です。離れていても我慢できます。元々、道士になる話が来た時点で、私一人人間界に残る事は覚悟してましたから。」

「二つ、そなた、大乙から誰の弟子になるか聞いておるか？」

「もちろんです！公望様の弟子になると聞いています」

「では三つ、大乙からわしがどの様な仙人か聞いておるか？」

「はい！」

元気の良い答えに、ふーっとまた、ため息をついた。やはり、この子はわかっていない様だった。もしわかっていたら、先ほどの様な発言は出てくるはずがない。

「結論じゃ。そなたやはり、わしの弟子にはできぬ」

「何故だい、公望？」

不思議そうに大乙が聞いてきた。

「大乙。そなた、花鈴にどの様な説明をしたのじゃ。わしの弟子になって、立派な仙人になれるはずないことぐらいわかっておろう？」

わしは、仙人界一のぐーたら仙人。立派な仙人になりたいという、この子の望みは叶えてやれぬ。他を当たった方が良い」

「ははははは、それなら大丈夫だよ。公望の性格は、散々僕の知る限りの事を花鈴には伝えてあるし。それを聞いてなお、花鈴は、公望の弟子になるって言ったんだよ。しかも、どんな仙人の弟子になろうとも、自分さえしっかりしてて、本質的な信念を貫きさえすれば、何の問題もないって、それは自分の想い次第だって、きちんとしたまともな返事を返してきてるから」

「そうなのか？花鈴？」

「はい！」

「大乙がどの様にわしの事を言ったか知らぬが、こやつが言ったこと以上にわしは、だめ仙人じゃぞ？それでもよいのか？」

「もちろんです！私は私なりにがんばるだけですから！」

「ふーむ」

「公望、ここまで言ってるんだから、良いじゃない？花鈴の好きにさせてあげなよ。公望、自由意志尊重するんでしょ？」

「そうじゃが……。わしの自由意志も尊重してもらわねば困るでの」

「ほら、いつまでも悩んでないで、気持ちに応えてあげなよ」

大乙が急かして来た。公望も腹をくくる。

「あー、もう！しょうがないの。師匠からも大乙の言う事聞けと言われておるしな。あいわかった！わしも、覚悟を決めよう」

「それじゃあ、弟子にしていただけのですか！？」

「いや、あくまで形式上という形を取らせてもらう。二人で今後、話をして、さらにテストを受けてもらい、それに合格したら正式に弟子にするというのにしよう。テストに合格及びその間、わしに嫌気がさしたら、いつでも弟子の件は白紙にする。それでよければ、わしの元に来るが良い。大乙もそれでよいな？文句は言わせぬぞ！」

ここは、公望も譲れなかった。強い口調で二人に言い放つ。しかし、大乙も花鈴も気にも留めず返事を返してきた。

「良いよ。公望の性格と花鈴の想いなら何の問題もなく、師弟関係になるはずだしね。花鈴は良いよね？」

「はい！」

その言葉を聞いて納得した公望は、のんびりとあくびをすると花鈴と大乙に言った。

「ではとりあえず、わしの家に向かうか。じゃあ、大乙、花鈴は預かるぞ。他の弟子にできる仙人の候補でも上げておいてくれ。さあ、花鈴。姉と離れる事になるのじゃ。わしは外で待っておる故、心行くまで名残惜しむが良い」

「はい！ありがとうございます！」

「花鈴、しっかりがんばるのよ」

「うん！お姉様も修行がんばってね！」

「じゃあ、公望。またね」

大乙に別れを告げ、離れるのを名残惜しんでいる花鈴達を外で待つ事にして、公望は一人出て行く。

「はあ、やはり面倒なことになったの・・・」

外でポツリと呟くと、入り口の草むらにごろんと横になった。外で待っていた風麒麟は、公望の態度が少し違う事に気が付くと、近づいてきて尋ねてきた。

「どうかなされたのですか？」

「いやなに、大乙に頼まれてな。今回弟子を取る事になりそうじゃ。その事で考え事をしておった」

「左様ですか。公望様も弟子を取られると言う事は、大変良い事だと思います。それに、公望様に認められた人であるなら、さぞかしすばらしい方なのでしょう」

「これ待たぬか風麒麟。わしはまだ、弟子を取る事になりそうといっただけであって、実際取ると決めたわけでもないし、その者、花鈴というんじやが、わしが認めたわけでもない。と言うか、話もろくにしておらぬで、花鈴がどういった人であるかは、現段階で判断はできん」

「しかし、公望様は大乙殿に返事をなされたのでしょうか？面倒見が良く、人の良いあなた様なら、ほぼ間違いない話とお見受けしましたが。大乙殿も公望様に見合った人を選んできたと思いますが、違うのですか？」

「んー、まあ、まだわからぬとだけ言っておこう。とりあえず、花鈴をしばらく引き取る故、そなたもそのつもりでおってくれ」

「わかりました」

なんやかんやと公望と風麒麟が話をしている間に、時間は過ぎていき、大乙の家の門が開いて、花鈴が出てきた。

「公望様、お待たせしました」

「ん？もう良いのか？もっとゆっくり話をしても良かったのじやぞ」

「いえ、大丈夫です。お気遣いありがとうございます。さあ、参りましょう」

「うむ。では、まずその前に紹介しておこう。ここにおるのが、わしのパートナーである風麒麟じゃ。今後一応共に暮らすのだから、お互い仲良くするように」

「初めまして、風麒麟さん。花鈴と言います。よろしく願ひします」

「はい、花鈴殿」

「それでは、花鈴。風麒麟の背の後ろに乗れ」

公望が促すと、花鈴はひょいっと風麒麟の背に乗った。公望も前に乗る。

「風麒麟。二人相手では重いかもしれぬが、我慢して家までやってくれ」

「お任せください」

風麒麟は、二人を背に乗せたまま宙に浮くと、公望の家へと向かった。帰り際、花鈴が公望に、姉からの手紙ですと言って手渡した。なんじゃなんじゃと公望は手紙を読んでみる。手紙の内容は、おおまか花鈴の性格の事が書かれており、そういう妹だからよろしくお願いしますという事だった。最後に、公望様とて妹に辛い思いさせたら許しません！と書かれているのが目に写り、本当に仲の良い姉妹なのじゃなと思ったと同時に、そんな事言われたら余計神経使って、どう教えていいかわからぬであろうと複雑な気持ちになった。大体まだ、弟子にすると決まったわけでもないと言うのにと、一人ぶつぶつと唸っている。

「どうかしましたか？公望様？」

ぶつぶつ言っている公望に後ろから花鈴が声をかけてきた。公望は、いやなんでもないと返事をする、手紙を袂にしまい、今後どうするかについて思考をめぐらした。テストを受けさせると言ったが、正直どういったテストにするか決めていなかったのだ。後、自分の中で矛盾的な葛藤が生じていた。

実は公望、普段面倒くさがりで何にもしないタイプのようなだが、その本質は風麒麟の言ったように、馬鹿見たくお人よしで、人の面

倒を見るのが好きだったりするのだ。だから、弟子を持つというのにも本当は、結構懂れていたりもするし、いろいろ教えてあげたいと言う想いがあった。しかし、それと同時に、その性格がたたって、昔人間だった頃、何度も精神的にも肉体的にもかなり痛い目であつていたために、人間不信に入り、本能的にその本質を出す事ができない状態なのだ。面倒みたいけど、裏切られたら嫌だな、また疲れる事は避けたいなど頭の中で思考がぶつかる。こういう状況になる事が目に見えていたから、懂れてはいたものの弟子を取らないでおこうと、普段から何もしなければ、辛い事も大変な事も何も起こらないから、一人前の仙人になって独立したら、ぐーたらすることにしたのである。

とにもかくにも、こういう状況に追い込まれてしまったのなら、なんとかせねばと公望はひたすら考え続けていた。一方花鈴は、後ろでちょこんと座りながら、始めて見る仙人界の風景を楽しんでいる。そうこうしている内に、公望の家に着。二人と一匹は中に入ると、風麒麟は静かに自分の部屋に戻り、公望は、花鈴を自室に招きいれ椅子に座らせると、二人で話をする事にした。

「そなたの性格については、そなたの姉の手紙に事細かに書いてあったので大方把握したが、やはり、實際話をし合うのが一番良からう。まず、そなたの人間界での生活等を教えてくれ」

花鈴は、人間界での生活、両親を早くになくし、ずっと姉と二人で手に手を取り合って暮らしてきた事、羊の世話をしながら大変で貧しかったけど幸せだった事、自分の事等を真剣に公望に話をした。そして話を聞き終わった公望は、自分の中で世話好き心が強く突き動かされるのを感じた。

「そなた、相当苦勞してきたのじゃな……」

「いえでも、お姉様もいましたし、私は幸せでした。本当にお姉様には、迷惑をかけてばかりで」

「そうかそうか、うむうむ」

「あの、公望様。お聞きしたいんですけど、大乙様は良い方なので
すか？」

「うむ、あやつは良い仙人じゃぞ。性格も穏やかだし、わしが認める数少ない親友のひとりじゃ」

「それを聞いて安心しました。私、お姉様には今まで苦勞をかけた分、幸せになって欲しくて」

「それなら大丈夫じゃ。あやつはちゃんと花憐の事をしっかり面倒見るぞ。まず、不幸になることはあるまい。わしが保障する」

「よかったー」

花鈴は、心底安心したようにため息を付いて、可愛い笑顔向けた。

「さて、そなたも疲れておると言うのに、無理に話をさせて悪かったの。今日はもうゆっくり休むが良い。部屋は・・・そうじゃな、隣でもどこでも好きな所を使え。いくつも空いておる故」

「良いんですか？」

「うむ。そなたはまだ、慣れない土地に来て疲れておるはずじゃし、人間界では、もう寝る時間じゃろ？しばらくは、こちらの生活に慣

れるまで、ここを自分の家だと思いゆっくりするがよい」

「え、でも、テストの事は？」

「それは、まだ考え中じゃ。近いうちに決める故、とにかくそなたは、もう休め。今は平気かもしれぬが、気づかぬうちに疲労は溜まっていくものじゃ。無理をするものではない。明日からは、しばらくのんびりし、この家を好きに使う事。曲がりなりにもわしの弟子になるつもりなら、わしの言う通りにしてくれぬか」

「あ、はい！わかりました。では、お言葉に甘えて先に休ませていただきます。ありがとうございました」

花鈴は、元気よく返事をする、ぺこりとお辞儀をして部屋を出て行った。どうやら、隣の部屋を使う事にしたようで、隣の部屋の襖の開く音がした。公望もベッドに横になる。テストの件をどうしようかと悩んでいたが、天井を見上げていてふと良い案が浮かんだ。これなら、花鈴に無理をかける事なく弟子にするかどうか決める事ができる。そう思うと公望も休む事にした。もしかすると、弟子にするかどうかは、このテストの内容を決めた時点で決まっていたのかもしれない。

次の日、公望はいつものように惰眠をむさぼった後、ゆっくりと体を起こした。半分寝ぼけた状態で、部屋を出て行く。そして、縁側に座り空を見上げた。洞穴の天井部は広く開いており空が見えるのだ。ぼーっと今日と言う一日のありがたさを感じ取る。と同時にいつもと変わらない生活にふと物悲しさも感じる。袂からキセルを取り出すと、火をつけ口にくわえた。ぼーっと一息つく。空は何も語らず、雲だけが流れる。本当にいつもと変わらない朝だ。正確には昼だったが。その時・・・。

「公望様、おはようございます!」

庭の右手、滝のある方から元気な声が聞こえた。びっくりして、そちらに顔を向ける。そこには、満面の笑顔を向けて走りよってくる花鈴の姿が見て取れた。

「そうじゃった。昨日から花鈴を引き取ったのじゃった」

いつもと違う朝に戸惑いいつも公望は、花鈴に挨拶をした。

「どうじゃ? よく休めたか?」

「はい! ぐっすり眠れました!」

「それはなによりじゃ」

「公望様は、朝遅いのですね」

「うん? 特にすることがないからの。早くに起きる必要がない」

「あの、それで、弟子のテストの件はどうなりましたか!」

花鈴は、早く弟子になりたい様子で、公望を急かした。

「うーん? 昨日言ったであろう。まずは、仙人界の生活に慣れることじゃ。テストはそれからじゃな。内容は昨日、決めたで故」

「それなら、直ぐにでもテストを受けさしてください!」

「じゃーから、そなたはまず、生活リズムと言うものをじゃな・・・」

「いえ！私なら大丈夫です！！早く、正式な弟子になりたいんです！」

「ふーむ」

公望は、目を輝かせて訴えてくる花鈴の言葉に少したじろいた。基本的に、自由意志を尊重する公望としては、そこまで言うなら、受けさせようかとも考える。実際、生活リズムを慣らしながら、受ける事はできる内容にはしてあるから大丈夫か？
ちらりと、花鈴の方を見る。あいも変わらず綺麗な目をこちらに向けている。その視線に公望は耐えられなかった。

「しょうがないの。では、今日より弟子選考テストを開始する」

「はい！おねがいします！！」

「ただし、条件がある」

「条件？」

花鈴はきよんとした。

「うむ。テストを受ける代わりに、決して無理はしない事。休む時は休む。これをしっかり守れ。よいな？」

「わかりました！それで、テスト内容は？」

「ん？至極簡単じゃ。わしに会いにくる事。ただそれだけ」

「公望様に会いに行く？」

「そうじゃ」

「では、公望様は、どちらかに行かれるのですか？」

「いや、わしはいつも通り生活し、ここにおる」

「???」

花鈴は訳がわからないといった感じで、首をかしげた。

「会いに行くっておっしゃられても、今現に会ってるじゃないですか？」

「いや、わしの言っておるのは、違う次元のことじゃ。まあ、そなたにいきなりそれをしろと言っても、術の使えぬそなたには土台無理な話。そこでじゃ」

公望はそう言うと、花鈴の額をトンと突いた。

「今、そなたに一つ術を授けた。それを用いてわしに会いに来い」

「術ですか？それは、どういったものなんです？」

「それは、自分で導き出すが良い。既にテストは始まっておる。とにかく、わしの授けた術を用いて、今いるわしではないわしに、会いに来ること。ただそれだけじゃ」

「は、はあ」

「さてと、では、仕事にでも行くかの。そなたも仙人界の事を知っておかねばならぬから、わしと共に来るが良い」

「え！十二仙たる公望様のお仕事に、私がですか！？」

「そうじゃ。仕事と言っても、ただの見回りじゃから、仙人界を見て回るにはうってつけじゃろ。じゃから、そなたは、これから共に見回りしつつ、テストの答えを導き出すのじゃ」

「あ、はい！わかりました！」

「では、参るぞ」

二人は、風麒麟の元に行き、風麒麟に頼むと背に乘せてもらって、家を後にした。

さてそれから、公望は、見回りと称して仙人界のいろいろな所に行き、仙人、道士に会わせて行った。花鈴は仙人界に感激したり、会う人会う人に丁寧に挨拶しながら、公望に着いていく。しかし、公望から与えられたテストの答えについては、全くわからないままだった。公望は何も言わない。普段話す事と言っても、世間話ぐら이었다。そんな状態が続く事、一ヶ月過ぎた辺りだっただろうか、見回りが終わり、一人庭にある池の前に座りながら、テストの事を考えていた時、風麒麟が近寄ってきた。公望はもう寝ている。

「いかなされた？花鈴殿？」

「え？あ、風麒麟さん」

「なにやら後姿から、いかにも悩んでいますという雰囲気が出ていましたが？」

「はい……。公望様に言われたテストの答えがわからなくて……。あれから、一ヶ月も経つのには、何一つ進歩がないんです。術授けてもらっても、その使い方もわからないし。やはり、私は公望様の弟子には向いてないんでしょうか？」

自然と花鈴は風麒麟に相談してしまっていた。風麒麟はやさしく受け答える。

「そんな事はないと思いますよ。少なくとも私には、公望様が、あなたの事を気に入っているように思いますが」

「そうなんですか？」

「ええ。あなたが来てから、公望様は何かと機嫌がよろしくなっている様に感じますので。公望様もあなたに期待しているのではないのですかね」

「それなら尚の事、公望様の期待に応えるためにもテストに合格したいんですけど……。どんなに考えてもわからないんです。公望様に聞く訳にもいかないし」

「一体どんな内容のテストのですか？」

「公望様がいうには、与えられた術を用いて公望様に会いに行くと
いうものなんですけど」

「それはそれは。やはり公望様はお優しい方ですね。そんな簡単な問題にするとは。私はてつきり、そんなに悩んでいるから、もっと無理難題を吹っかけられたのかと思いましたよ」

風麒麟はテストの内容を聞いて笑った。

「え？ やっぱり簡単なものなのですか？」

「ええ、至極簡単な問題ですよ。とても、十二仙たる公望様の弟子になるための試験ではない内容ですね」

「じゃあ、風麒麟さんは、もう答えをわかってるんですか？」

「はい」

「そうなんですか・・・」

それを聞いて花鈴は落ち込んだ。自分が一ヶ月もかかってすら何一つわからないものを、風麒麟は、たった今聞いた所で、答えがわかってしまったのだ。やっぱり、お姉様みたく、最初から弟子になるために選ばれた人ではない自分には、弟子になるための資格、センスがないのだろうかと気持ちが暗くなった。

その姿を見ていた風麒麟は、しょうがないと言った感じで、ヒントを与える事にした。それぐらいなら、公望様もお許しになるだろう。

「いいですか、花鈴殿。あなたは既に術授かっている。悩んだときは、何も考えずに自然体になってみなさい。何にもとらわれることなく。そして、公望様に会いたいと、ごく自然に思うことです。そ

うすれば、自ずと答えは導かれますよ。いいですか？基本は自然体になることです」

「自然体？」

「左様。後は、頃合だけです。特に今はその答えを見つけるのにうってつけですね。私が言えるのはここまでです。後は、ご自分で」

そう言うとき風麒麟は、部屋に戻っていった。花鈴は、風麒麟から言われた自然体と言う言葉を繰り返し口にする。そして、しばし考えた後、その場に寝そべった。

「自然体。公望様に会いたい」

ゆっくりと目を閉じ、体中の力を抜いた。頭の中も無にする。想いは公望に会うことのみ。花鈴はそのまま、眠りに付いた。

夢の中、だだっ広い草原に花鈴は佇んでいた。

「ここは？」

辺りを見渡す。すると小さな岩の上に、一人の男が後ろを向いて座っているのが見えた。花鈴にはその姿に見覚えがあった。一直線に向かっていく。

「公望様！」

花鈴は後ろから、その男に声をかけた。するとその男はゆっくり顔を向けると、にこっと笑った。

「合格〜!」

公望は、花鈴の頭をなでてやる。花鈴はくすぐったそうにしながら満面の笑顔を向けた。

「やっと会えました!!」

「うむ。思ったよりも早くここに来たな」

「はい! 風麒麟さんから自然体になれって言われまして、そしたらここに辿り着きました」

「そうかそうか」

公望は相変わらずにこにこしている。花鈴は疑問に思ったことを口にした。

「公望様、ここは一体どこなんですか? まるで、夢の中のようですが」

「まさしく、夢の中じゃ」

「そうなんですか?」

「そうじゃ。わしが授けた術は、人の夢の中に入り込める術でな。わしが開発したオリジナルの術じゃ。本来オリジナルの術は人に授けることはできないのじゃが、そなたは、まだ真っ白な状態じゃし、この術自体も属性が関係ない故、授ける事ができるのじゃ。まあ、オリジナルの術の事は、おいおい話をしてやろう。まあなんにしても、これで晴れてそなたは、正式なわしの弟子じゃ。それでよいか

「？」

「はい！もちろんです！！」

「わしの弟子になる以上、様々な事をこれから教えてゆく。術然り、勉強然り。今までとは対応も違ってくるが、ちゃんと付いて来れる自信はあるか？」

「当たり前です！その自信がなければ、弟子になろうなんて思いません！」

「そうか。良い返事じゃ。なんにせよ、そなたの人権を侵害するような事は決してせぬから、そこまで、気負うこともないのじゃがな。とりあえず、これからよろしく頼むぞ。師弟関係を結ぶと言う事は、家族になるようなものじゃからな。そなたもそのつもりでおってくれ。下手に遠慮なぞするでないぞ。わしの教え方に付いて来ればいいだけで、後は自由じゃからな。とにかく仲良くやっていこう」

「わかりました！不束者ですけど、よろしく願います！」

「うむ。あ、後、わしからの頼みじゃが、これからはわしの事を公望様なぞと呼ぶでない」

「では、なんと呼びましょう？」

「んー？好きに呼べばよからう。先にも言ったが、師弟というものは家族でもあり、友でもあり、特別な関係じゃ。そなたの好きに呼べ」

「じゃあ！公望ちゃん！とかでもいいんですか！？」

それを聞いて公望はがくんと肩を落とした。苦笑しながら言う。

「あ、あのなー、そなた。一応わしは、そなたの師匠になるんだし、年も上なんだからそれはどうかと思うぞ。まあ、そなたがそう呼びたいならそれでもよいがな。好きにせい」

「いえ、冗談ですよ、冗談」

花鈴は笑った。その内、辺りが暗くなってくる。

「おや？そろそろ、わしもノンレム睡眠に入ってきたの。では、また明日現実世界で会おう。明日から、直ぐに教育を始めるからそのつもりでな」

「わかりました。あ、それとノンレム睡眠ってなんですか？」

「それも明日おし・・・え・・・る・・・」

声が遠くなり、辺りは完全に暗闇に包まれた。同時に花鈴は目を覚ます。そして、自分が弟子になれたことに大いに喜んだ。

「やったー!!」

花鈴の大きな声を聞き、部屋にいた風麒麟もよかったよかったと感慨にふけて、眠りに付いた。

こうして、公望はどうとう弟子を取る事になったのである。花鈴も楽しみにしていたし、公望も内心うれしかった。今日も今日とて平和な仙人界。ここにまた一人、仙人界をしょって立つ人物が現れたのである。

花鈴、仙術を覚える

花鈴が弟子選考試験に合格した次の日から、公望は花鈴に道士としての修行をさせ始めた。と言っても、直ぐに仙術を教えるわけではなく、まずは勉強から教え始めた。なぜなら、正式に弟子になった次の日……。

「ふあゝつと、やれやれ」

いつも通り朝はゆっくりと起きてくる公望。それに対し既に、花鈴はとっく起きている。花鈴は部屋から出てくる公望を見つけると、すぐさま飛んできて、元気よく挨拶をした。

「お師様！おはようございます！！」

「うむ。おはよう。なんじゃ、結局わしの事は、そう呼ぶように決めたのか？」

「はい！やっぱり、私の師匠なんだから、そう呼ぼうって思ったんです。いけませんでしたか？」

「いやゝ、良いのではないか？」

師匠と呼ばれる事に少し照れながら、公望は頭を掻いた。

「で、お師様！早速修行に入るんですよね！？」

花鈴は修行をしたくてうずうずしているようである。

「これ、焦るでない。確かに今日から修行には入るが、いささか確かめたい事がある」

「なんですか？」

「そなた、ちょっと後ろを向け」

花鈴は言われるがまま、後ろを向いた。公望は花鈴の腰の辺りをまじまじ見つめる。

「うーん。やはりの」

「どうしたんです？お師様？？」

「ん？ほれ、大乙が言っておったが、そなた仙骨がまだ完全に生えきっておらぬなと思ってな」

「それが、何か問題あるのですか？」

「大いにある。仙骨は、仙人にとってしてみたら力の象徴。仙骨があつて初めて、仙人たることができるのじゃ。ちとそなたに、いろいろ説明せねばならんな」

「お願いします」

「うむ。まず、仙人になるためには仙骨が必要というのは、当たり前前の事じゃな。で、その仙骨じゃが、仙人は、寶貝という道具を基本的に用いる。まあ、わしや師匠である大老君様は、仙術と呼ばれる術を用いるのじゃが、なんにせよ、仙人が術なり寶貝なりを使うには、身の内に流れる氣と言うものを扱い、それによって奇跡的な

力を引き出す。ここまでは、大乙から聞いておるか？」

「はい」

「では、続けるぞ。で、その氣と言うものは本来、誰にでも備わっておる。いわば生命の源のようなものじゃからな。氣は、陽氣、陰氣に大きく分かれ、さらに外氣功、内氣功に分類される。陽氣、陰氣に関しては別段事細かに知っておる必要がないが、外氣功、内氣功は知る必要があるの。まあ、簡単に言うんじゃ。内氣功は、身の内に作用し、外氣功は、身の外に作用する。最初は、内に秘めたる内氣を操り、それを集約して外氣に応用させるのじゃ。寶貝は、その外に向ける作用の応用を簡易的にし、内氣を直ぐに外に出させる代物である。何故この様な事を言うかと言うんじゃ、わしは、寶貝を用いず先に言った通り仙術というものを扱う。それに、その氣の応用が必要じゃからじゃ。詰まる所、そなたは、その氣の扱いを覚え仙術を使えるようにならねばならん。それがわしがそなたに教える事であり、修行の内容じゃからな」

「それと仙骨と何が関係するのですか？」

「あるのじゃ。内氣を引き出す際、その源となるのが仙骨なのじゃ。仙人は膨大な氣を扱う。人間にも氣は備わっておるが、それは、微々たるものであり、生命を維持するためにのみ使用され、普段は、誰も気づく事なく垂れ流し状態で生活を営む。さらに、氣は年を重ねる事に減っていく。稀に、その氣を操れる者も人間には存在するが、それは仙人の比ではない。仙人は人間と違い、逆に年を重ねるごとに、氣が増えていく場合が多い。それも修行次第じゃが、まず、自然に減ると言う事はない。つまり、仙骨がしっかり生えておらなければ、寶貝もさらに難しい仙術も扱えぬのじゃ」

「そうなんですか!？」

「うむ」

「それでは、私はすぐく中途半端な道士ということなんです。修行しても、術は使えないんですか・・・」

花鈴は、少し落ち込んだ。それを見て直ぐに公望はフォローする。

「いや、そうではない。仙骨と言うものは、先天的、後天的に備わるもの。生まれたときから持っておるものもおれば、成長と同時に生えてくるものもおる。そなたは、既に生えてきておるし、花憐がちゃんとした仙骨を持っていたということは、双子のそなたもおそらく先天的に持っていたものであろう。ただ、その成長が姉より遅いだけじゃ。で、仙骨とはな、知識や経験といった自己の努力次第で、ちゃんとしたものになるのじゃ」

「つまり？」

「つまり、今は術の修行をしても、仙骨による氣が足りぬから扱えぬが、知識、用は専門的な勉強じゃな、それを頭に入れることで仙骨は直ぐに成長する。それもそなたの努力次第じゃがな。じゃから、修行の順番としては、まず勉強に励む事じゃな。そして、その後、術の修行に入る。どちらにせよ、そなたには術的なことより、学問的なことを教えるつもりじゃったし、それがよかろう。そなたは、知識レベルが足りぬようじゃしな」

「勉強ですか？」

「そうじゃ。嫌か？」

「え？嫌ではないですけど・・・」

花鈴は、大乙の話でてっきり宝貝とかを扱ってすごい事ができるようになるものだと思っていたので少し残念そうだった。

「勉強と言っても、社会的常識を身につけるだけじゃ。人間世界で言うところの学校で教える、特に役も意味もない勉強ではない。言っておくが、わしは自分のことを棚に上げておいてなんじゃが、阿呆な人は嫌いじゃからな。その様な輩をわしは相手にする気はない」

それを聞いて、花鈴は焦った。せっかく弟子になれたのに、なった早々嫌われたくない。すぐさま表情を変えた。

「いえ！私、勉強でもなんでも頑張ります！！だから、その、嫌いとかにはならないで下さい」

「うむ。まあ、そなたとしても、いろいろ期待があったんじやろうが、状況が状況だけに応えてやりたくてもやれんのじゃ。こちらもすまんの。とりあえず、わしの弟子になったのだから、わしの方針に従ってはくれぬかな？」

「はい！お任せします！私頑張って付いていきます！！！」

「すまん」

公望は、申し訳なさそうに謝った。花鈴はいえいえと手を振った。そんなこんなと言う事があり、まずは勉学の修行から始まったのである。

花鈴は、頭を切り替えると勉学に励む事にした。最初に聞いた事

は、昨日夢で公望が言っていたノンレム睡眠の事だった。

「お師様。昨日言ってたノンレム睡眠ってなんですか？」

「おお、そうじゃったそうじゃった。ノンレム睡眠とはの、深い眠りに陥る状態の事じゃ。脳波が低調になり、体力の回復、ストレスの発散などの効果がある。人は寝ると、レム睡眠とノンレム睡眠を繰り返す。レム睡眠とは、浅い眠りで夢を見たりしている状況じゃな。このときに、記憶の構築、出来事の暗記などが行われるのじゃ。そして、わしがそなたに授けた術は、そのレム睡眠時の夢の中を自由に行き来できる術なのじゃ。じゃから、夢の見ないノンレム睡眠時には扱えぬ」

「なるほど」

「そなたも術を使えるようになったのじゃったら、覚えておいて損はなからう」

「はい」

そういった感じに、公望は、花鈴に教えていった。公望が教える事は、主に、人間学、社会学、精神分析学、心理学、哲学、倫理学、論理学、宗教学など人の存在や思考、心理的内容がもつぱらだった。特に花鈴に口癖のように言い聞かせていた事は、相手を思いやる事、信頼を大切にし裏切らない事、約束は守る事だった。しかし、別にこの事は教えるまでもなく、花鈴は、最初から性格上持ち合わせていたものであり、時々、公望も驚かされるほどにその点はしっかりしていた。

一見、公望の教えている内容は、肩が懲りそうな堅い内容に思われるかもしれないが、公望は、教えると言うよりも世間話的に話、

冗談を交えながら教えていたので、花鈴も楽しみながら聞く事ができた。花鈴の積極的な性格もあったせいかもしれないが、その内自分から、公望に話を聞かせてとねだるようになっていた。公望も、素直に話しについてくる花鈴に喜んで教えた。

本当公望は、花鈴を溺愛していた。もう弟子にしたその日から、ものすごくかまいまくり、ほとんど甘やかしていたようなものである。もう、目に入れても痛くないような状態だった。もちろん、師匠として厳しいときは厳しくしていたが、そんな怒鳴り散らすと言わわけではなく、やさしく諭すと言った感じだった。なんといっても弟子になった初日に一度はやってみたかった事を、花鈴にいきなりしたのだ。さすがの花鈴もこれには驚いた。何をしたかといえば・・。

「花鈴」

「はい」

「一度やってみたいことがあるのじゃが、よいか？」

「なんですか？お師様？」

「いや、そなたは嫌がるかもしれぬのじゃが・・・」

「大丈夫ですよ。私、特にやられて嫌な事はありませんから」

「そうか？では」

そう言うと、公望はいきなり花鈴に抱きついた。そしてぶんぶんと抱きながら花鈴を振り回す。

「うーん！そなたは可愛いのー！！」

そんなことを抱きつきながら言う。花鈴は最初、え？って感じできょとんとしていたが、可愛いと言われてちよつと照れていた反面、うれしくもあった。なにより、公望の温もりが暖かった。そういえば、この様に抱きついてもらった事など、花鈴にはない。いや、両親が生きていたときはあったのかもしれないが、少なくとも記憶の中では存在しなかった。ただ、そのぬくもりが、少し懐かしく、とても気持ちのいいものであることだけは、認識した。

さて、この最初の出来事で、花鈴は別に嫌な思いをしていないと感じた公望は、それに拍車がかかり、頻繁に抱きつくようになったのであった。実は、公望。元々人間だったとき、抱きつき魔だったりする。

そうやって、マイペースにのんびりと二人は楽しく毎日を過ごしていた。そんなある日、十二仙の定時集会の日がやってきた。始まる時間帯は、昼ちよつと前ぐらいからなのだが、そんな時間に起きるはずのない公望。いつものように、惰眠を貪っていた。案の定、白桜童子がやってくる。

「公望様はいらっしゃいますか？花鈴さん」

「はい。でも、まだお師様は眠ってらっしゃいますけど」

「やっぱり・・・」

白桜童子は、ため息を付いた。そして、花鈴に事情を説明し、起こしてくるよう頼む。花鈴は快く承諾すると、公望の自室に向かった。トントんと襖を叩くと、失礼しますと言って入っていく。

「お師様！起きてください！白桜童子さんが呼びに着ましたよ」

「んゝ、むにゃむにゃ」

「お師様！！」

花鈴は、必死に公望の体を揺り動かす。しかし、一向に公望は起きる気配がない。

「しょうがないなゝ」

花鈴は腰に手を当て、ふーっと一息つくど、いきなり公望の頬に口づけをした。その感触で、公望はがばっ！！と起き上がり、目を覚ました。

「な！なんじゃなんじゃ！？」

「お師様。おはようございます。今日は十二仙様の集会の日なんですよ？白桜童子さんが迎えに来てますよ」

「ん？んん？そうか、そうじゃった」

「本当お師様は、朝起きてくださらないんだから」

「その事じゃが。そなた、わしに何かしたか？なにやら頬に感触があるのじゃが」

公望は、生まれて始めて味わう感触のある頬を触った。

「え？お師様の頬に口付けしただけですけど」

花鈴は何気なく答えた。その回答に公望は焦った。

「く！口付けじゃと！？そ、そなた、何を考えておるのじゃ！？」

「それがどうかしたんですか？私、まだ小さくて両親が生きていたとき、私がなかなか起きない時は、よく父が、そうして起こしてくれてましたけど。私、何か変なことしましたか？」

花鈴は、焦っている公望が逆に不思議といわんばかりに、平然と言ったのけた。

「そ、そうなのか？」

「はい。え？起こす時ってそうするものじゃないんですか？」

「いや、普通はそういうことはせぬとおもうのじゃが・・・」

公望はしどろもどろに戸惑いながら返事をする。それもそのはず、公望、生まれてこの方、女性との交流はほとんどない。人間だったとき、彼女どころか、嫌われてばかりだったので、まともに女性と話した事すらない。もちろんの事、女性から頬とはいえ、キスをされる事など生涯一度たりともありえないことであつた。おそらく、この先も絶対ないことだと思っていたのだ。そんな公望の気持ちと裏腹に花鈴は、さらに予想外の話を持ちかけた。

「朝、起きる事の絶対ないお師様も、やっぱり、このやり方だと起きてくださるのですね。じゃあ、これから毎日、お師様を起こすときは口付けして起こしますね。私はできれば、朝から修行をしたいですし」

「い、いやぁ・・・それは・・・」

「だめなんですか？」

「あ、いや、だめじゃないが・・・」

「じゃあ、そうしますね。あっ！ほら、お師様！白桜童子さんお待ちかねですよ」

「う、うむ。わかった。直ぐ支度する」

花鈴はにこにこしながら、部屋を出て行った。一方の公望はまだ、思わぬサプライズに心が落ち着かなかった。

「こんな感覚、遠の昔に捨ててしまっていたと思っていたが、いかんいかん！この程度で動揺しておってどうする！しっかりしろ、わし！！！」

自分に言い聞かせると、さっさと着替えて外に出た。腹黒いくせして、案外純心だな、公望（笑）等と、どこからともなく幻聴が聞こえた気がした。

外に出ると、白桜童子と風麒麟が待っている。

「さあ、公望様。早く行って下さい。例の如く、皆さん既に集まっていますよ。全く、連れて来る私の身にもなって下さい」

「すまんすまん。朝は弱くてな」

「ほら、行きますよ」

「いや、ちょっと待て」

急いで出て行こうとする、白桜童子に待ったをかけると、花鈴に声をかけた。

「花鈴。そなたも付いて参れ」

「ええ！？私がですか？」

「いかにも」

「だって、十二仙様方の会議でしょ？私のような者が参加するのは場違いだと思いますが」

「良い良い。所詮わしが行っても寝ておるだけじゃ。じゃから、わしの変わりに話の内容を聞いておいて欲しいのじゃ」

「お師様」

「な？頼む」

「んー……。お師様がそう仰るなら、私には、反論の余地はありませんけど」

「では、共に行くぞ。さて、参るか」

二人は風麒麟に乗るとすごい速さで、蓬萊山に飛んで行った。そして、例の集会場。やはり、公望は最後だった。しかし、さして気にもせず、自分の椅子に座る。隣で、花鈴が緊張した面持ちで立っ

ていた。

「望ちゃん、相変わらず遅いね」

「公望、もう少し早く来いよ」

「まあ、公望らしいんじゃないか」

妖仁や普賢、その他の十二仙が半分あきれ、笑いながら迎えた。その場には、大老君を始め、十二仙全員が揃っていたが、今日は一人新しい仙人も参加していた。純血仙人竜吉である。会議を始める前に、大老君が公望に話を振った。

「これ、公望。何故に花鈴を連れてきておる？」

周りもそれが気になっていたようだ。そう言われてさらに花鈴は緊張した。しかし、公望は、さらりと返す。

「私の変わりに話を聞いてもらうためです。そうすれば、私はゆっくり寝てられますので。じゃっ、そういう事で、話は花鈴に伝えておいてください。私は寝ます」

公望は、ぐてーっと机にもたれかかると、あっという間に寝入ってしまった。その場にいた全員が、やれやれとあきれ果てたが、公望に今更何を言っても無駄と皆承知していたので、そのまま会議はスタートした。

会議は、なんやかんやと進められ、なにやら熱い話だったり、深刻な話みたいな事を皆話し合っていた。ぴりぴりした雰囲気の中、花鈴は、とても話の中に入る事はできなかったが、せめて一言漏らさず覚えておこうと思い、必死に聞いていた。程なくして会議も終

わり、皆てんでに帰っていく。その場に残ったのは、寝ている公望と花鈴、そして何故か竜吉だけだった。

「お師様、終わりましたよ」

寝ている公望を花鈴は起こした。公望はふあーっと背伸びをする
と、じゃあ帰るかと言って出て行こうとする。それを、竜吉が止めた。

「公よ」

「んん？ おお！ 竜吉か！ 久しいの」

「うむ、久しぶりだの」

「そなたが、会議に同席していたと言う事は、なにやら重大な事でも話をしていたのか？」

「そう。なのに、そちと来たら、相変わらずで。まあ、そちらしいが」

竜吉は、手で口元を押さえクスクス笑った。

「まあ、良いわい。後で花鈴から話を聞くからの」

「ふむ。こちらが、そちの弟子の花鈴か？」

「そうじゃ」

「ふむふむ。確かに噂通り、可愛い女子おなこじゃな」

「そうじゃろ？まあ、仙人界一の美女であるそなたには敵わぬかもしれぬがな」

「あ、あの、お師様。もしかして、この方があの・・・」

「ああ。そうじゃ。以前話した、唯一の純血仙人の竜吉じゃ。紹介が遅れたの」

「初めまして、花鈴」

竜吉は、にこやかに挨拶をしたが、明らかに、周りの仙人達と雰囲気が違う。凜とした姿勢で、かもし出しているオーラというかなんというか、一言一言に重みがある。けれど、すごい重圧を感じるのに、どこか優しく、柔らかく包み込むようなそんな感じの女性だった。そして、なによりすごい美人である。竜吉は、歴史の本に載っているぐらいの昔から存在する仙人。位としても大老君とほぼ同等に位置している。そんな相手を目の前にして、道士なりたての花鈴は物凄く緊張した。

「あ！はい！！初めまして、竜吉様！！！」

花鈴は完全に声が上ずっている。それを見て竜吉も公望も笑った。

「何を緊張しておる」

「だ、だってお師様。あの竜吉様でしょ？話では聞いてましたけど、まさかこんな凄い仙人だったなんて」

「ほう、そなた竜吉の凄さがわかるのか？」

「そりゃ、わかりますよ！仙人、道士じゃなくても唯の人間だって、竜吉様を前にしたら、恐れ多くて緊張しますって！」

「だそうじゃぞ。竜吉？」

「ふむ。まあ、対外の者達は皆、そんな反応するからな。もうわらは慣れておる。むしろ、公。そなたの方がわらわとしては驚きじゃ」

「そうか？ 竜吉相手に何をそんな緊張する事があるのやら」

「お師様！ 竜吉様相手に、呼び捨てはよくないですよ！」

さつきから、気軽に呼び捨てている公望の発言に花鈴は、失礼ですよとたしなめた。それもそうだろう。方や何千年と生き、もっとも神属に近く大老君と同等の地位に立つ仙人と、方や、仙人になってまだ何十年と経っていない仙人の卵。さらに、仙人界一のだめ仙人と言われている公望が、そんな相手にため口でしゃべりかけているのだ。普通に考えたらおかしいだろう。

「良いのじゃ。花鈴よ。わらわはそんな事気にはせぬ」

「ほれ、竜吉もそう言っておるし、わしだって敬意ぐらいは払っておるのじゃぞ。わしのこのしゃべり方だって、竜吉や師匠を真似てしゃべっておるのじゃから。一応それなりに尊敬はしておる」

「お師様。それなりじゃなくて、盛大に尊敬してくださいよ。大老君様は直の師匠だから、緊張とかしないのはわかりますけど、竜吉様とかは違うでしょ？ 大乙様の話では、竜吉様は、仙人界でも大老

君様よりも慕われ、まさに尊敬の的で皆懂れているって言ってますよ。まさに仙人界の才色兼備、宝だって」

「ほう、大乙はその様な事を言っておったか。わらわも中々有名じやな。聞いたか、公よ？宝だそうじゃ」

「わしもそう思っておるぞ？」

「またまた、そんな思ってもいないことを言いおって」

「いや、本当じゃって」

二人はまるで、友達のように仲良く笑っていた。花鈴の方は気が気じゃない感じだった。いくら、何者にも囚われないお師様だって、相手は選んでくださいよと心で泣いていた。

「で、公よ。そなた、弟子は取らぬと言ってなかったか。それなのに、よりにもよってこんな女子の可愛い弟子を取って」

「ふむ。まあ、奇跡的にわしの好みの弟子が見つかったから取ったまでじゃ」

「む？そなた、こういう女子が好みなのか？」

公望の言葉に何故か竜吉は食いついてきた。

「んー？女子の好みとしては、そうかのー？自分でもよくはわからんが、少なくとも一番気に入ってはおる」

「わらわよりもか？なにやら、噂ではかなり花鈴の事を溺愛してお

るとか」

「そうじゃな。その二つの問いに対しては、そういうことになるか」

その言葉を聞いて、竜吉は少しむっとした。

「もう何年と知り合っておる、わらわとそなたの仲と、たかだか何ヶ月も経たない花鈴との仲では、花鈴の方が優位じゃというのか？」

「ん〜？そういう問題ではないと思うが。やはり、可愛い初めて受け持った直の愛弟子だし、共に暮らしておるからな。極々たまにしか会わないそなたとでは、やはり比べる価値観と言うものが違う気がするが」

公望は、ん〜っと悩んだ。それを見ていた竜吉は、ますますむっとした表情になってきた。

「そもそも、弟子というのが卑怯じゃな。師弟関係なんて家族も同然。共に暮らしておれば、自ずと愛着も湧くというもの。ずるいぞ」

「なにがじゃ？」

なにやら、怒っているらしい雰囲気をかもしだしている竜吉に、訳がわからないと言った感じで、公望は返した。竜吉は、しばし沈黙のうち、ある言葉を発した。

「そちは、既に弟子を取ったと言う事は、もう修行はさせておるのであろう？」

「うむ。まだ勉強だけで、術の方はまだじゃが。そういえば、そろ

そろ、仙骨も形になってきたし、術を教えても良い頃かの」

「ならば、丁度良い。わらわもそなたの家に行き、共に花鈴の修行を手伝ってやろう」

「はあゝ？何を言っておる。仙人が弟子を取れるのは一人だけ。その間、師匠になった仙人そのものの修行も兼ねておるから、誰一人手助けしてはならないのが決まりじゃろ？」

「むゝ、そうじゃが」

「それに、別にそなたに力を借りぬともわしはわしのやり方で、ちゃんとした仙人にはするぞ？少なくとも、わしの様なだめ仙人にはせぬつもりじゃが」

「でも、やっぱり、四六時中二人きりと言うのは……。しかも、女子の弟子だなんて。溺愛してるって言うし、何かの拍子に間違ってもあったら……」

竜吉は、納得しないと言う感じで、うんうん唸っている。当の公望はさっぱり竜吉の考えがわからなかった。どうも、女性の考えている事というのはよくわからない。

「そなた、何が言いたいのか？」

「あ、あのお師様」

そこで、二人のやり取りを黙って聞いていた花鈴が口を挟んだ。

「どうした？花鈴」

「もしかして、竜吉様は、お師様の家に遊びに来たいのではないですか？」

花鈴としては、まずありえない事だと思っていたが、なんとなく、竜吉の雰囲気ですう感じ取ったのだ。聞いている限りでは、竜吉と公望は知り合いのようだし、竜吉様も実は自分と同じで寂しがり屋なのではないかと直感的に受け取ったのだ。

「そうなのか？ 竜吉？」

「花鈴！ 良い事言ったぞ！！ そうじゃ。そなた、依然と違い、風来坊ではなく家も持ったと聞いておるし、行きたいと思っておったのじゃ。なのにそなた誘ってくれぬし」

竜吉の表情がパツと明るくなった。

「なんじゃそうだったのか？ それはすまなんだな。いやなに、そなたも立場がある故、わしの様な小物の家に来るのも分不相応じゃと思つて、誘わなかったただけなんじゃが。なんじゃなんじゃ。それなら、何時でも遊びに来ればよからう」

「そういつでも、わらわは、そちの家を知らぬ」

「それもそうじゃな。なら、今から共に家に来るか？」

「うむうむ！ 行くぞ！」

「では、参るか」

そう言つて三人は部屋を後にした。その間、公望と竜吉は、冗談を言い合ったりして仲むつまじく笑いあっている。その姿を後ろについてきながら見ていた花鈴は、あの竜吉と直に話せた事に驚きつつ、何故か、心の中がもやもやするのを感じていた。しかし、そのもやもやの原因がなんなのかは、当の本人にはさっぱり見当もつかなかった。

さて、公望の家についた三人は、公望の自室に入った。各々椅子に腰掛ける。竜吉が家を見ながら、感想を述べた。

「えらく、風情のある家にしたの」

「うむ。やはり趣がなければなと思つてな」

「うんうん。良い家じゃ」

「ところでさっきの話じゃが、花鈴」

「はい」

「そろそろ、そなたの仙骨も形になってきたと言つたであらう？ よつて、今日より術の修行に入る」

「本当ですか！」

「うむ」

「やったー！！」

花鈴は心から喜んだ。

「本来なら、こんな速さで仙骨は成長はせんのだが、やはり、わし特製のマル秘料理が効いたのかの。まあ、花鈴の努力の賜物でもあるが」

そう、本来不老不死である仙人は、食事を取る必要がない。ただ、人間のときのなごりとして、習慣的に食べてしまっただけなのだが、公望は花鈴を弟子にしてから、食事を作ってあげていたのだ。その話に、また竜吉がうらやましそうに言ってきた。

「なんじゃ、花鈴は、公望の手料理を毎日食べておるのか？」

「はい！お師様の料理すごくおいしいんですよ！！」

「はあ、良いな・・・」

「何を言っておる、竜吉。そなた、食習慣というものが無いにせよ、食べるときは師匠ともっと豪華でおいしい料理を食べておるであろう？」

「それとこれとは話が違う。わらわは、そちの料理が食べたいのじや」

「ふーん。ならいたし方あるまい。客人をもてなすのはわしの流儀。どれ、今食事を作ってきてやろう」

「本当か！？」

「うむ」

「うれしいのー！」

「え！？お師様、修行の方は？」

「あーそうじゃった。ふむ、どうしようかの。そう言えば、竜吉。そなた、なにやら手伝ってくれるとか言っておったな？」

「うむ。しかし、法度に反するぞ」

「そんなもの、わしが守らない事ぐらいそなた知っておろう？」

「確かに」

竜吉は、またクスクスと笑った。

「では、すまぬが、料理をしている間、花鈴の面倒を見てくれぬか？まず、氣の扱い方から知らねばならぬから」

「任せておるがよい」

「ええ！？竜吉様自ら、本当に私なんかに教えていただけるのですか？」

「構わぬぞ。わらわから言い出したことじゃ」

「花鈴。しっかり教えてもらえ」

「はい！！！」

公望は、部屋を出て調理場へと向かった。公望の部屋には二人だ

けが残される。竜吉は花鈴をまじまじと見た。花鈴は、竜吉から直に教えてもらえる事にわくわくしていた。

「そちが、公の条件に合った弟子。うむ、公はこの様な女子が好みなのか。まだ、全然子供ではないか。一体どこが気に入ったのかの？」

竜吉は、花鈴の気持ちとは裏腹に、ぶつぶつと花鈴を観察しては呟いていた。

「あの、竜吉様？どうなされたのですか？」

「あ、いやなんでもない。修行の件じゃったな。ではまず、氣の練り方から教えて授けよう」

「お願いします！」

こうして、公望が料理をしている間、花鈴は、竜吉から氣の基本的なことを学んでいた。実の所、公望の扱っている術と、竜吉の扱っている術は原理原則が違っている。公望は、純正なる仙術だが、竜吉は、若干寶貝に頼っている所がある。しかし、氣の練り方はどちらとも本質は一緒なので、問題はないのだ。ただし、それは、基本的な部分だけで、内氣を外氣に応用する仕方は、竜吉には教えられない。

とりあえず、体内に宿る氣をつかみ、体内で感じ取る練習から始めた。そうは言うものの、やはり、寶貝を扱うのと違い、自ら氣を感じねばならない事は相当難しい。寶貝は、自然と氣を引き出してくれるが、仙術は自分でなんとかしなければならぬのだ。これには、花鈴も相当苦勞を強いられる。

ほどなくして、調理場からいい匂いが漂ってきた。

「おつまたっせさん！」

そう言って、公望が料理を運んできた。仙人は、基本的に殺生は禁じられているで、人間界で言う所の精進料理。いわば野菜を使った料理になる。まあ、公望曰く、植物だって生きているのだから、殺生に値する、食べる以上、残さずありがたみを持って食べよと常々言っている。

「おお！おいしそうじゃな！」

「そうか？口の肥えたそなたには、少々もの足りんかもしれんが、少なくともわしの愛情はたっぷり入っておるぞ。なんってったって、わしのマル秘料理じゃからな」

「では、早速。いただくとしよう！」

「召し上がれ」

竜吉は、一口食べると、凄くおいしいと言ってどんどん箸を伸ばした。それでも、がつつのではなく、あくまで楚々として食べている辺りが、竜吉らしい。

「うむ、今まで食べたどんな料理にも勝る味じゃ」

「そうか？そう言ってくれると、お世辞でもうれしいの」

「いや、お世辞ではないぞ。それに、今まで見た事のない料理ばかりじゃ」

「わしの生まれた土地の料理じゃからな。ずっと仙人界におけるそなたが知らぬのは当然かもな」

「あーあ、本当に羨ましいぞ。花鈴は、こんな料理を毎日食べておるのか」

竜吉の問いに答えることなく、花鈴は、必死になって教えられた氣の扱い方に挑戦していた。変わりに公望が答える。

「氣に入ったのなら、そなたも、毎日食べに来ればよからう？」

公望は、正直冗談のつもりだったが、竜吉は本気にしたようだった。

「そういえば、今日の会議の話はなんじゃったんじゃ？」

「うん？ いやなに、簡単に言えば、最近やたら妖怪仙人とのいざこざが絶えなくなってきた。さらに、妖怪仙人側に不穏な動きが見られるといったことで、注意を怠るなと言う事ぐらいじゃな」

「ふーん、いざこざね。もっと平和にお互い生きられんのかの。結局、人間社会も仙人社会もさして変わらんと言う事か」

公望は、のんびり答えながら茶をすすった。

それからしばし月日が経ち、氣が付けば竜吉は、公望家に居座っていた。竜吉曰く、花鈴の面倒を見るといった以上、自分に責任はある。花鈴が一人前に術を使えるようになるまで、わらわは戻らんと言いつつ切った。公望も、部屋は余っていたし、まあ、好きにしろと言つて別段氣にも留めなかった。ただ、普段のように、花鈴に抱き

つき溺愛すると竜吉の視線が痛かった。そして、逆に、竜吉と仲良く話をしていると、今度は花鈴の視線が痛いのだ。一体なんなんだと、頭をひねってばかり。でも、気にしていたからどうなるものでもないという割り切ると、自分のスタイルを変えることなく、今まで通り二人には接していた。

花鈴の方は、二人の協力もあってか、かなり早い段階で内氣の扱いをマスターした。その頃合を見計らい、公望は、外氣に応用する仙術の教えに入る。これには、竜吉は関与する事ができず、ただ二人の修行のやり取りを見守っていた。

「そうではない。焦ってはいかん。まず、内氣を片手に溜めるじゃろ？そして、こうやってゆっくり、氣を外に放出させて、そこであったん固定させるんじゃ。でさらに外で氣を膨らませて、一挙に放出する」

「はい！！」

「ほれ、まーた、暴発しておるではないか。固定させるのじゃよ。氣というものはイメージじゃ。イメージをもっと豊かに持て」

「ううっ！！」

今にも手の平から破裂しそうな氣を花鈴は必死になって押さえ込む。内氣をマスターした時点で、外氣に応用させる事まではすんなりできたのだが、術の発動がどうしても、うまくできないのだ。何度も印を組み、術の発動を試みるが、放出するときに、氣が四散してしまう。それでも、花鈴は一生懸命やっていた。毎日くたくたになるまで、術の練習をした。公望としては、あまり無理をさせたくなかったのだが、一日でも早く術をマスターしたがっている花鈴の

気持ち痛いほど強く感じられたので、ぎりぎりまでは、許可を出していた。

そして、5年も経とうかとした時、ようやく花鈴は仙術最後の術を発動させようとしていた。頭の中でイメージを膨らめます。そして、すばやく印を組んだ。そして、大きな声で叫ぶ。

「靈化鳳凰翔擊掌！！」

手の平から氣が大きく膨らむと頭上に飛び上がり、鳳凰の形を作る。そして、一直線に鳳凰は、滝に向かって飛んでいった。滝にぶつかり、滝は裂け、裏の岩をえぐった。それを見ていた公望は、拍手を送る。

「うむ！合格じゃ」

「ありがとうございます！」

「結構、時間がかかったの」

もう公望家の一員化している竜吉は、そんな感想をもらしたが、ようやく一人前に術を発動させれるようになった花鈴を喜んでいた。

「威力はまだまだじゃが、まあ、後は己の努力次第じゃな。これからも、自分におごることなく、修行に励めよ」

「はい！！」

この5年ほどの間に、花鈴が覚えた仙術は30近く。昔はもっと多かったらしいのだが、現存している仙術はその程度と公望は大老君から教わっていた。

「言っておくが、これで終わったわけではないぞ。そなたには、今度はもう一つ授け、しなければならぬ事がある」

「なんですか？」

「オリジナルの術の開発じゃ。それができて初めて、免許皆伝となる」

「オリジナルの術？」

「そうじゃ。今から、とりあえず、合格の印しをそなたに与えよう」

そう言うのと、公望は印を組み、そっと指を花鈴の額に押し付けた。すると、花鈴の額に逆三角形の刺青みたいな模様が浮かび上がった。

「これで、そなたは自分だけのオリジナルの術を開発できる。後は、自分でイメージして考えよ」

「どうすればいいのですか？」

「簡単じゃ。自分が一番イメージしやすい属性をイメージすればよい」

「属性ってなんですか？」

「例えば、ここにおける竜吉は水を操る。この世には元素として、水、火、風、土、雷、木と言った属性が存在するのじゃ。これだけではないぞ。まだ光とか闇とか、空気とかいろいろある。つまり、万物に存在するものすべてをさす。それを属性という。それを何でも良

いから操れるようにすれば良い。ちなみに、大老君様は重力の属性を操る。ただし、一つ注意点がある。それは一度決めてしまった属性は、後で変えることはできないということじゃ。従って、安易に決めると、後々自分と合わなかったり、使いものにならなかったりするので、気をつけること。自分がイメージしやすく、且つ今後発展、応用が利くものにするのじゃぞ。わしの言える事はここまでじゃ。後はそなた次第。がんばれよ」

「わかりました」

「まあ、今日はゆっくり休め。追々イメージを膨らませるのも良いし、己の直感に従うのも良い。とにかく、焦る事のないようにな」

「はい！」

「さて、とりあえず、花鈴も一応仙術はマスターした事だし、祝いに宴でもするぞ！！」

公望は立派になった花鈴がうれしくてしょうがないらしく、直ぐに宴の準備に取り掛かった。すこぶる機嫌が良い。鼻歌交じりにせつせと支度する。竜吉も花鈴も手伝った。その時、二人は気になっていたことを同時に口にした。

「そういえば、お師様。お師様のオリジナルの術はなんなんですか？」

「うむ、公の術は、わらわも知らぬぞ？」

「ん〜？そんな事どうでも良いではないか。今は宴を楽しまなければ！」

「えー！お師様！教えてくださいよ」

「公、教えて」

「その内な、その内」

公望は、二人の願いをさらりと受け流すと、宴の支度が整った時点で直ぐに、酒を飲み始めた。風麒麟も交え、酒を酌み交わす。その日は遅くまで、公望の笑い声が絶えなかった。

しかし、この幸せな時間の間も多々なる問題の亀裂は大きくなっていったのである。その事を、公望は気づいていたのかもしれないが、あえて放置していた。公望はただ、花鈴が幸せに暮らし、花鈴自身が思い描く立派な仙人になる事だけを願っていた。

公望、ゲット作戦開始!!

昨日、夜遅くまで飲んだくれていた公望は、朝から二日酔いで苦しんでいた。花鈴と竜吉は、先に寝てしまい風麒麟と二人っきりで飲み明かしていたのだが、風麒麟は酒に酔う事がないので、公望は調子に乗って飲みまくっていたのだ。

「ううう、頭が痛い・・・」

枕に顔をうずめながら、うめき声をあげる。ここまでひどい二日酔いになったのも久しぶりじゃと思いつながら、とても起き上がる事もできず、ベッドに横たわっていたが、なにやら急に寒くなってきたと思ひ、跳ね除けていた布団の中にもぐりこむ。しかしその内、布団の中にもかかわらず、震えるほど寒くなってきた。最初、風邪でも引いたかと思つたが、悪寒ではない。外気温が急激に低くなっているのだ。仙人界に四季らしい四季はない。まして、この冬のような気温になることはありえない。というか、もう既に冬の気温ではなかった。まさに極寒。さすがのこの異常に、布団を体に巻きながら、痛い頭を無理やり起こして、外に出た。すると、庭が一面、氷の世界になっている。流れ落ちていた滝も固まって止まり、池は分厚い氷で埋め尽くされ、庭のあちこちには、空気上の水分が凍結して氷の結晶や霜が張り付いている。外に出た公望は、その光景に唾然とした。布団から出ている顔の皮膚が、寒いのを通り越して、痛く感じられる。大気温はまだぐんぐん下がっているようだ。そのままでしたら、あつという間に凍死するか、身体そのものが凍り付いてしまう。

「こりゃ、いかん」

公望は慌てて、印を組み術を発動させた。身体の回りに、防壁の結果を張ったのだ。ただ、手が既にかじかんでいた為、複雑な印は組む事ができず、簡易的結果に終わり、多少寒さに耐えられるかどうかぐらいである。布団には相変わらず包まったままだ。息が白い。変わり果てた庭を見ながら、公望は、池のほとりで正座をしている花鈴の姿に気がついた。この寒さの中、花鈴は震える事もなく、静かに座っている。公望は、すぐに何が起きたのか理解した。

「なるほど、花鈴は氷の属性に決めたのか。なかなか、良い属性じゃない。しかしあやつ、どこまで気温を下げる気じゃ？まさか、絶対零下まで下げるんじゃないかな。わしは、北国は好きじゃが、寒いのは苦手なんじゃぞ。頼むぞ、本当に」

身震いしながら、通路を歩く。花鈴に声をかけ、術を解かせようと思ったが、術の開発中に回りが関与するのは邪魔なだけじゃとあって、そのままそっとしておいた。そして、昨日風麒麟と話、気になっていた事を確認するため、竜吉の部屋に向かう。襖を叩いた。中から、どうぞと声が聞こえる。公望は部屋の中に入っていった。

「おー、寒い」

「うむ、どうやら花鈴は氷を操る事にしようじゃの」

「そうみたいじゃな。というか、そなたは平気なのか？」

「わらわは、水の結果に護られておるからこれぐらい問題はない」

「とは言っても、さすがにこれ以上気温が下がっては、その水も凍ってしまうのではないか？」

「大丈夫じゃ、今の花鈴の術力でわらわの水を凍らせれるほどの力はない」

「それもそうか」

「で、公。わらわに何か用か？ さっきそなたの部屋の前を通ったときは、なにやら頭が痛いと言っておって、とても起きてくる感じではなかったが」

「うむ。この寒さで頭痛も吹き飛んでな。ちとそなたに、気になっていた事を聞きに来たのじゃ」

「なんじゃ？」

「いやなに、昨日風麒麟と飲み交わしながら話しておったのじゃが、そなた、何時までわしの家におるつもりじゃ？」

「と、いうと？」

「じゃから、わしも風麒麟に指摘されるまで忘れかけておったのじゃが、確かそなた、花鈴が一人前に仙術を扱えるようになるまでは、この家に滞在して、花鈴の成長を見守ると言っておったの。で、昨日をもって、花鈴は一応正式に仙術は会得した。もうそなたがおる必要はないであろう？」

「えっ・・・それは・・・」

「それに、そなた自分の仕事はどうしておるのじゃ？ 五年も放置しておればかなり溜まっておるであろう？ 後、この修行に付き合っていたせいで、歌会の方も行わなかったな。あれは、特に娯楽のない

仙人、道士皆が楽しみにしておる唯一の癒しの場。仙人界に住まうすべての者が、仙人界一の美女且つ歌姫であるそなたの歌声を聴く事と、普段人前に現れる事のないそなたを一目でも見ようと、楽しみにしておるのじゃぞ？それを、わしらなんぞに付き合っ、開かないとは。こんな事知れば、わしは仙人界全体を敵に回してしまうではないか」

「・・・・・・・・」

「修行に手伝ってくれた事は、わしとて感謝しておるが、さすがにもういる必要がないのだから、そなたはもう邸宅に帰るが良い。そもそも、わしらみたいな小物仙人に付き合う道理はないのじゃ。わしは、自由意志を尊重するのが主義じゃから、あえて何も言わなかったが、やはり、そなたがこれ以上、わしらに関与してくるのは分不相応であろう？わしとて、仙人界そのものを敵に回すのは嫌じゃ。いや、わしは良くとも、花鈴が可愛そうではないか。この先、立派な仙人になろうとがんばっておるのに、そなたが関与しすぎては、仙人になった矢先、回りから白い目で見られるやもしれん。そもそも、花鈴はそなたの弟子でもなんでもないのだから。法度を破つてまで特別扱いされては良くなかろう。花鈴の立場もある」

「で、でも・・・」

「でもない。とにかくそなたはもう帰れ。手伝ってくれてありがとう」

「どうしても、帰らないとだめ？」

竜吉は急にしおらしくなって、訴えかけるような目で公望を見た。しかし、そんな態度で揺り動かされる公望ではない。きっぱりとだ

めと言った。その答えに、竜吉はとても悲しそうだった。

「だって、今まで共に暮らしてきたっていつでも、公はほとんど花鈴の修行に付ききりだったし、まともに、わらわの相手をしてくれたことなど、ほんの何回しかないではないか。やっと、花鈴も仙術をすべて覚えて、独り立ちできるところまで来て、手がかからなくなってきたのだから、今度はわらわの相手だってしてくれても・・・」

「いや、じゃから、それでは話の元がずれておるであろう？そもそも、そなたは花鈴の面倒を見て、一人前になるのを見届けるまで居るといのが約束。相手をするならするで、それは別問題じゃ。とりあえず、今は帰って、また今度遊びにこれば良いではないか」

「ん、ん。そう言っても、わらわも帰ってしまったては、そちの言う通り、仕事や歌会、立場もあって、そうそう遊びには来れん。大老君には、ある程度事情を説明して、そちの家に居候する許可はとってあるが、一度帰っては、大老君もわらわの自由にはしてくれぬのじゃ」

「その許可とやらも、本来こんな長くなる予定ではなかったのじゃろ？わしは、あえて何もそなたに言わなかったが、何度かそなたを帰せと、師匠から苦情の連絡が来ておったのじゃぞ？ただ、そなたも、立場上長い年月、様々なしがらみによって自由が迫害されておるのではない、たまには好きにさせてやってくださいと必死に師匠に頼んだんじゃ。しかし、そろそろ限界だと思う」

「むうう」

「むううではない。わしばかり怒られてしまうではないか。良い

から帰るのじゃ。そして、そなたのやるべき事をせい」

竜吉は力なく肩を落とし、凄く残念そうだったが、これ以上公望を困らせるのもいけないと思い、しかたなく帰ることにした。公望は、竜吉を見送る。その姿に、どうやら花鈴も気づいたようだ。術を中断し、こちらに歩み寄ってくる。

「あれ？ 竜吉様、どこかに行かれるのですか？」

「うむ、竜吉はやることがあるので。帰らせることにしたのじゃ」

「そうなんですか」

「それではな、竜吉。暇ができたら、また何時でも遊びに来い」

「う、うむ」

「残念ですが、竜吉様。またいつかお会いしましょうね。修行に付き合ってくださいありがとうございます！」

花鈴の元気の良い挨拶を聞きながら、竜吉は、後ろ髪を引かれる思いでその場を後にした。花鈴は、心から竜吉に感謝をしてお礼を言い、名残惜しいと思っていたつもりだったのだが、何故か心の何処かで、竜吉がいなくなってもっとした安堵感を持っていた。おそらく今まで、修行に専念していた事と、竜吉の手前、以前のよう公望に甘える事ができなかったのだが、その両方が解決して、これようやく心置きなく公望に甘える事ができると思ったからだろう。しかし、自然と心が晴れ晴れとうきうきしてくる花鈴に対し、その心とは裏腹の言葉を後々公望は投げかけるのだった。

「花鈴。そなた氷の術を開発する事にしたのか？」

「はい！いろいろ考えた結果、それが一番私にあっていう属性だと思いましたが！」

「そうかそうか。まあ、良い属性を選んだな。氷は、使い勝手が幅広い。水の発展系でもあるし。宝貝でも、氷を扱う類は一つ二つと聞く。後は、そなたのイメージ次第じゃな。がんばるのじゃぞ」

「もちろんです！！これから、立派な仙人になるために一層努力したいと思います！」

「うむ。その事なのじゃが」

「なんですか？」

「いや、そなた。わしはこうして仙術もすべて教えたし、勉強もあらかた教えた。即ち、もう仙人試験を受けても良いのではと思っとな。わしの時もそうじゃったし」

「仙人試験？」

「そうじゃ。仙人になるためにはちゃんとした試験が存在する。二人の仙人が審査をして、それに認められれば、晴れて一人前の仙人となれるのじゃ」

「どんな内容です？」

「ん？龍を絶対に殺めることなく、自らの力と知識を持って捕らえる事。方法は自分で決める。ただ、殺める事さえしなければ、どん

な手段でも構わぬ。とにかく捕らえればよいのじゃ」

「そうしたら、仙人になれるのですか!？」

「うむ。どうする？」

「お師様が、許可を出してくださるのなら、是非受けたいです!」

花鈴は迷うことなく即答した。

「そう言うと思ったわい。では、早速審査する仙人を選出するか」

「お願いします!!」

花鈴の心はもう、居ても経ってもいられないぐらい高揚していた。とうとう、夢に描いた仙人になれるチャンスが訪れたのだ。今から張り切ってしょうがない。公望は、まだ寒い庭に布団に包まりながら立ち、誰が良いかとぶつぶつ独り言を言っている。その中で、ひとつ花鈴は気になる事を、耳にしたのだ。

「うーん。普賢辺りに頼んでみるか?でも、あやつ厳しいと聞いておるし、でも厳しい方が花鈴のためか。いや、なんにせよ。師としてうれしいものじゃな。こうして愛弟子が仙人になって独立するというのは。まあ、まだわからぬが、花鈴なら確実じゃろ」

「え?お師様?今、なんて仰いました???」

「ん?なにが?」

「いえ、ですから、今なんて仰いましたかと聞いているんです」

「今？今は、花鈴なら確実に仙人になれるじやろと・・・」

「そうじゃなくて、そのちょっと前です」

「前？前といえば、仙人になって独立すると言ったか？」

「ええええ！！どういふことですか！？」

「どうもこうも、仙人になるのだから、独立するのは当然じやろ？
師弟関係も形式上になって、一個人の仙人として、一人で生きていくのじゃ」

この事を聞いて、花鈴はびっくりした。てっきり仙人になった後も、公望の元、共に暮らしていけると思っていたからだ。

「つ、つまり、私は仙人になったら、お師様と離れ離れになるので
すか？」

「そりゃそうじゃ。なにを今更当たり前のことを言っておる。わし
だって、師匠の下から独立しておるじやろが」

花鈴は、生まれて初めての衝撃を受けた。

「そ、そんな・・・」

急に、花鈴の表情が暗くなった。それを見ていた公望は、誰でも
一人で生きていくとなったら、不安や緊張もあるだろうと思い、特
段気にもとめず、話を続ける。

「とりあえず、審査員は早急に決めてやるから待っておれ。それより、ちと思うところがある。これより出かけるので、付いて参れ」

「あ、はい・・・」

花鈴の態度の違いを尻目に公望は、花鈴を連れて大乙の家に向かった。

「あれ？ここは、大乙様の家ですよね？」

「そうじゃ。何、そなたも久しぶりに最愛の姉にゆっくり会いたいじゃろうと思ったし、ちょっと、わしからの祝いの品として、宝貝をやりうと思つてな。わしも前々から欲しかったしの」

「は、はあゝ」

「なんじゃ？せっかく久しぶりに姉に会えるというのに、うれしくないのか？」

「い、いえ、そういうわけじゃ・・・」

「立派に成長したそなたの姿を見せてやりうではないか。おーい！大乙ー！！公望じゃが入ってもいいかあ？」

「あ、公望！こっちこっち！」

門の横の建物からひよこつと大乙が顔を出した。呼ばれた方に二人は向かう。どうやらそこは、作業場のようだった。そこた中に宝貝が置いてある。

「お久しぶりです。公望様」

公望の姿を見た花憐が相変わらずのおしとやかさで挨拶をしてきた。

「おお！花憐！ひさしいの。どうじゃ？楽しく暮らしておるか？」

「はい。お優しい大乙様の元、楽しく宝貝造りを学んでおります」

「それは、なにより。ほれ、花鈴も何しておる。こっちに来んか」

花鈴は呼ばれて、うつむきながら傍に来た。

「まあ、花鈴。久しぶりね」

「うん・・・、お姉様、久しぶり」

「ところで大乙。この度、花鈴の修行も一段落ついた故、祝いに宝貝をやるうと思うのじゃが、良いのはないか？ついでに、わしも欲しいのじゃが？」

「それだったら、公望。これなんてどう？」

そう言って、大乙は二つの宝貝を出してきた。一つは刀の形をした宝貝。もう一つは、手に握れるほどの筒状の棒の宝貝だった。

「これは？」

「うん。両方とも花憐が造ったものなんだけどね。かなり良いので、だから、どうかと思って」

「ほう、花憐がか？」

「そうだよ。花憐。どういった寶貝か、二人に説明してあげて」

「はい。まず、こちらの刀の形をした寶貝は、見ての通り刀です。しかし、唯の刀ではありません。音速の速さで斬る事ができます。さらに、見かけよりリーチは遥かに長く、名を飛燕と言います」

「ほほう、形状は、日本刀みたいな感じじゃな。これなら、居合い
ができそうじゃ」

「にほんとう？ いあい？ なんですか、それは？」

その場に居た三人が首をかしげた。公望は説明する。

「日本刀とは、わしの生まれ故郷の刀の名称じゃ。居合いとはその
刀を使った技の一つじゃよ。まあ、見ておれ」

そう言って公望は、飛燕を受け取ると、左手に持ち腰の辺りに構えた。右手をそっと柄に当て、握る。公望は全く動かない。しかし数秒後、キーンという甲高い音が聞こえた。三人は、何が起こったのかさっぱりわからなかった。公望は、目の前にあった寶貝の失敗作に近づいていくと、そっと触る。すると寶貝は、パカッと真っ二つに分かれた。そう、公望が斬ったのだ。

「まあ！！公望様がお使いになると、飛燕は音速を超えて、光速になるのですね。私には、斬撃すら見えませんでした」

「僕もだよ」

「元々、居合いは、目にも留まらぬ速さで刀を抜く技じゃからな。唯でさえ音速で斬れるなら、居合いを使えばもっと速くなるのは道理じゃ。気に入ったぞ。これはわしがもらう」

「では、もうひとつの宝貝。これは、私が花鈴のために造った宝貝です」

「私のため？」

「そうよ、花鈴。あなた、最初大乙様から話を聞いたとき、竜吉様に憧れてたでしょ？だから、それを考えて、竜吉様と同じ水を操る宝貝にしたの。持ってみて」

花憐は花鈴に渡す。花鈴がその筒状の棒を握ると、棒の先に水が集まり、水の柱ができた。

「これは、あなたの意思に合わせて、水を自由自在に操れるわ。残念な事に、私の力じゃ、竜吉様ほどの能力は引き出す宝貝は造れなかったけど、私の中で最高傑作の宝貝よ」

「うん、ありがとう。お姉様。私、絶対大切にするね」

「そう、お二人とも気に入ってくれて何よりです。ところで、公望様。私、花鈴とふたりっきりで話がしたいんですけど、大乙様もいいですよね？」

「うん、いいよ」

「おお、そうじゃそうじゃ。わしの用は、そなたら二人をゆっくり

合わせてやることも兼ねておったからな。久しぶりに、二人つきりで話をしてくるが良い。わしは、大乙と話でもしておる」

「ありがとうございます。さ、花鈴行きましょ」

姉に促され、二人は作業場を後にした。公望は、飛燕をまじまじと見つめる。

「なかなか、良い弟子を持ったな。もう、そなたの実力を抜いているのではないか？」

「はは、そうかもね。寶貝造りだけじゃなく、扱いもずば抜けてるから」

「なににせよ、花鈴といい花憐といい、見た目もさることながら、中身も凄いな。二人とも後々仙人界最強の姉妹になるのではないか？」

「というと、花鈴もかなりの実力をつけたのかい？」

「うむ。とてもわしの弟子とは思えぬわ」

公望は、コロコロと笑った。一方、花鈴達は、一室でお茶を飲みながら、話をし始めた。話を振ったのは、花憐の方である。

「元気そうね。と言いたい所だけど、何があったの？」

「え？」

「あのいつも元気なあなたが、全然元気ないじゃない。せっかく久

しぶりに会えたっていうのに対して喜んでもないみたいだし」

「そ、そんなことないよ！私、お姉様と会えてすごくうれしいもん！」

「嘘おっしやい。私に隠し事しても無駄よ。一体どうしたって言うの？話して御覧なさい」

「う、うん。実はね。私、今度仙人試験を受ける事になったの。で、お師様の話だと、まず間違いない仙人にはなれるっていつてくださってるんだけど」

「あら！良かったじゃない。あなたの望みが叶うのよ。それを何故そんな落ち込んでるの？」

「それがね。仙人になったら、お師様と離れ離れに暮らさなきゃならないんだって。仙人は一人で生きていくものだからって」

「それが、どうかしたの？」

「うん。なんかね、私変なの。なんかね、ずっとお師様の事考えてて、お師様が私の傍にいるのが当たり前で。離れるって思ったら、なんかこう、胸の辺りが締め付けられる感じがして……。ううん、それだけじゃない。お師様が他の女の方と仲良く話している姿をみていると、すぐくもやもやした気分になって。どうしようもなく辛くて辛くて、泣きたくなるの。でも、お師様が、ちよつとでも私の事、気にしてくれたり、かまってくれたりすると、その気持ちが直ぐに消えて、今度は凄く幸せな気持ちになってね、気分が高揚してくるの。なんか、お師様は暖かくて、優しくて……。それを失いたくない。だから、せつかく仙人になるためにがんばってきたの

に、いざ、仙人になろうって思って、お師様と離れるって話を聞いたら、今度は逆に仙人なんかになりたくないって思う。私、こんな気持ち初めてで、一体どうしちゃったんだろうって悩んでたんだ」

「あら、そう！」

それを聞いて、花憐は何故かうれしそうだった。

「お姉様、私、なにか仙人界に来て変になっちゃったのかな？」

「いいえ、それは違うわ。むしろ、正常な女の子の証よ」

「どういうこと？」

「つまり、あなたは、公望様の事を好きになったのよ」

「好き？」

「そう」

「でも、私、お姉様も好きだし、風麒麟さんも好きだし、人間界に居たときの羊さんたちも好きだし、会う人会う人皆好きだよ？」

「その好きとは違うわよ。あなたは、公望さまを恋愛の対象として意識してるの」

「恋愛？」

「そうよ。人ってね。友達とか親の事を想う好きっていう一般的好きって感情と、ある特定の男性を異性として特別に好きって想う感

情があるの。そして、その後者の想いがあって、人は付き合ったり、結婚したりするのよ。お父さんもお母さんも二人とも、お互い好き合って結婚したんだから」

「そうなの？」

「ええ。だから、あなたの感情は、全然変なものじゃなくて、むしろすばらしいものよ。特にあなたは、一途で純粹だから、そこまで強く感情が出てしまうのかもね」

「そうなんだ。私、てっきり何か変になったのかと思った」

ほーっと花鈴は安堵のため息をつく。花憐はニコニコと笑った。

「それにしても、お姉様。その恋愛っていうのに、詳しいね。なん
で？」

「だって、私も好きな人が居て、現に今付き合ってるもの」

「そうなの！？だ、誰！？」

「普賢様よ」

「へー、普賢様と！」

「ええ、私の場合はね。もう直感的だったわ。最初、大乙様に普賢様を紹介されたとき、一目見て、あっ！私この方の事好きだわって思ったのよ。要は一目ぼれね。でも話をする中身もすばらしい方だね。ますます好きになって。すぐに話を持ちかけたわ。普賢様は、当初は全然私なんて相手にもしてくれなかったけど、私あきらめき

れずに、猛烈に押しかけてね。それで、普賢様もとうとう折れて下さって。一年半程前だったかしら、正式にお付き合いすることになったの。私の場合、お母さんから、恋愛の事とか聞いてたし、実際異性を好きになるって言うのを自分で実感してよく考えたから、恋愛について詳しいのよ」

「そうだったんだ」

「じゃあ、話は戻すけど、あなたは公望様の事が好きなのね？」

「たぶん」

「いえ、たぶんじゃなくて、聞いてる限りだと間違いないわね。で、公望様と離れたくないわけだ」

「うん」

そこで、花憐は二つの選択肢を与えた。

「あなた、仙人になるという想いと、公望様を想う気持ち、今どっちが強い？」

「え、そ、それは・・・」

花鈴は迷った。どう答えればいいのか。そこですかさず花憐が言う。

「自分に素直になりなさい。あなたは悩む性格じゃないわ」

そう言われて、花鈴は、直ぐに答えが出た。はっきりと花憐に言

う。

「お師様と一緒にいたい」

「なら、話は早いわ。仙人試験は見送りなさい。はっきりと公望様に、私は仙人にはまだなりません！と仰いなさいな」

「で、でも、そしたら、仙人になる事をあきらめろって事？」

「違うわ。今回は見送ると言う事。いずれ、頃合を見て試験を受ければいいでしょ？今はまず、公望様の気持ちを物にするのが、大切だと私は思うわ」

「そっかあ」

「でも、よりにもよって、公望様を好きになるなんてね。あなた大変よ」

花憐は真剣な面持ちで言ってきた。花鈴はきよんとして返す。

「どうして？」

「大乙様や、普賢様から聞いたんだけど、公望様。恋愛のれの字も知らないすごい奥手な方なんだって。しかも、何か人間だったとき女性関係でひどい目にあったらしくて、女性不信なんだそうよ。だから、公望様とて、こと恋愛に関するとやたら愚鈍になるんだって聞いたわ。お二方の話じゃ、公望様は、生涯において自分のことを好いてくれる女性は天地がひっくり返る可能性よりも低い程、絶対にありえないことだから、考えるだけ無駄、そんな感情とつくに捨てたわーとか仰ってたとか・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

「だから、公望様を振り向かせるのは、仙人界統治者になるより遥かに難しいと私は思うわね」

「わ、私、どうしたらいいのかな。お姉様」

「まあ、長期戦ね。今すぐ公望様に、好きです！って気持ち伝えても、公望様は信じないと思うし、今後も一緒に暮らして、公望様自身に恋愛の感情というものを持たせて、あちらから、あなたの事少しでも気にかけてもらえるようにしたらいいと思う」

「具体的に言うത്？」

「さあ、そこまではわからないわ。公望様の好みの女性がわからないし、それは、あなたが自分で見つける事よ。まあ、がんばりなさい。とりあえず、試験は見送ってもらいなさいな」

「うん！わかった！私、がんばる！！」

「でも、あなたも一人前に誰かを好きになるのね。少し幼いところを持っているから心配してたけど、少しは大人になったのね。私は姉としてうれしいわ」

「ねえ、ねえ、お姉様。その、お師様を振り向かせる方法なんだけど、ちよつとお姉様が普賢様に言い寄った手段を教えてよ。参考にしたいから」

「ええ、いいわよ」

そう言って二人は和やかに話を進めた。こうして、公望ゲット作戦が公望の知らない所で秘かに進められていくのである。このときの公望は、これで悩まされる事になるとは、このときはまだ知りもしなかった。

公望の女性に対する想い

大乙の部屋からは、何時しか楽しい笑い声が聞こえてきた。作業場の方で、大乙と世間話をしていた公望は、その笑い声を聞いて満足そうにうんうんと頷いた。

「どうしたの、公望？」

「なに、花鈴がな、なにやら元気がなさそうだったので心配していたの。寶貝もやりたかったし、姉に会わせれば少しは元気になるかと思って、そなたの家に連れてきたのじゃよ。今楽しそうな笑い声を聞いて安心した」

「ふーん。過保護なのは変わらないね。でも、めずらしいんじゃない？」

「なにが？」

「だって、公望。女の人って嫌いでしょ？昔から、女は何を考えているかわからん！あんな、別次元の生き物のことなんて知った事か！って散々文句言ってたじゃない。それなのにいくら世話好きの公望でも、女の人を相手にこんなに思いやるなんて弟子とはいえ正直予想してなかったよ」

「ん？そうか？わしは、これと言って意識はしておらぬが。そなたや妖仁の事を思いやるように思いやっておるつもりじゃが。でも確かに、弟子とはいえ女。しかも、人間で言えば一番難しい年頃じゃろ。わしとて、別に完全に心を許しておるわけではない。ただ、わしが師匠として自分が思い描いていた通りに行動しておるだけ。自

分で弟子に対してそうしてみたいと昔から思っていただけじゃ。父親的な気持ちかも知れんな。わしは、人間だった頃、もし仮に結婚したら絶対女の子が欲しくて、望み通り、子が女の子だったら溺愛して親馬鹿になろうと決めておったから。そのなごりじゃないか？」

「へー、父親ね」

「いや、父じゃなくとも兄でも良いんじゃないが。とにかく、妹か娘が欲しかったからな」

「女性嫌いなのに？」

「それとこれとは、違うぞ。やはり家族と他人では、想いの価値が違っているのじゃ。わしが気に入らんのは、他人の女性じゃ。血が繋がっておれば話は別じゃよ」

「でもさ、実際こうして見ず知らずの他人の女の子を弟子にしてみてさ。少しは女の人に対する見識が変わって来たんじゃないの？」

「そんなことはない。わしは相も変わらず、見識に変化はない。花鈴とて共に暮らしておっても、何を考えておるかなぞ、今だわからんし、師弟関係といっても、わしのような者を本当に師として認め、尊敬しておるとは思っておらん。むしろ、花鈴も心の中ではうざいだの、こんな腐った師匠から早く離れて独立したいだのと思っておるのではないか？だから、花鈴も頑張って仙人に早くなろうと努力してたりするのだと思う。あやつも、何気に優しいからな。心の内を表面に出さないようにしているのじゃろ」

「僕は、そうは思わないけどなあ。最初花鈴に会ったときの印象は、本当に良い子だと思ったけど。だから、公望の弟子に勧めたんだし。

じゃあ、今でも公望は女性嫌いは変わってないんだ？」

「まあな。やはり人間だった時、特に一番人格が形成される時に女性に対する認識が、決定付けられてしまったからの。そう易々と変わらんよ」

キセルをふかしながら、公望は正直な気持ちを言った。今の所、心から信頼できて、安心して何でも話ができるのは、この大乙と妖仁、後は最近になって普賢ぐらいだった。

「ふーん。僕は、人間だった時、女の人を好きになるのは人の本能で、それが当たり前の感情だと思ってるから、僕にはとても公望の気持ちは理解できないな」

「わしとて、最初はそうじゃったぞ？でも、生きている上で本能を覆すぐらいに痛い目をくらい、トラウマになっておるだけじゃ」

「そのトラウマ。治ると良いね」

「別に、どうしても良くないか？」

話はよく聞いていても、本当に女性に興味を示す事のない公望を、大乙は昔から不思議がっていたが、そういう人も広い世の中にはいるのだろうと思ったし、その公望のトラウマにあえて触れるのも可哀想と考え、深くは突っ込まなかった。そうこうしている内に、花鈴と花憐が戻ってくる。

「帰りましょ。お師様」

「もう話は良いのか？」

「はい。ゆっくり話ができましたし、お姉様もまだ作業の途中だっ
て言ってますから、これ以上お邪魔していたら、逆に迷惑がかかっ
てしまいます」

「そうか？そなたが良いなら、わしも良いが。では、帰るとするか。
邪魔したの、大乙、花憐」

「いいよ、何時でも来てね」

「公望様、今度は私もゆっくり話をしてくださいませ」

「うむ」

「じゃあ、お姉様。今日は本当にありがとう！またね！！」

「ええ、花鈴。例の件、私があげた本をしっかり読んで勉強してお
きなさいね。あなたは、まだ、あの事に対する根本的知識がなさ
ざるから。その本は、きつと攻略のためになると思うわ。頑張るの
よ」

「うん！！」

「では、花鈴。参るぞ」

二人は風麒麟に乗り、大乙家を後にした。今日は大気が穏やかで、
すこぶる気持ちが良い。散歩がてら、風麒麟に回り道をしながらゆ
っくり飛ぶように頼むと、公望はぽけーっとした。それとは対照的
に、後ろに乗っている花鈴は必死になって、本を眺めている。そこ
で、花鈴は重大な事に気が付いた。

「お師様。お願いがあるんですけど」

「なんじゃ？」

「私に、文字を教えてください」

「文字？」

「はい。私、お姉様から本をもらったんですけど、考えてみれば私、文字が読めなければ書く事もできないんです。せっかくの本が役にたちません」

そう、生まれてこの方、花鈴は人間世界の勉強と言うものをしたことがない。山奥の辺境の地で育ったため、そんな環境になかったし、必要なかった。だから、当然文字も読めないし書けない。姉の花憐は、宝貝造りのため大乙から一般教養を受けていたが、花鈴は公望からその類の教育は受けてこなかったのだ。

「なんじゃ？そなた、文字を知らんのか？わしは、てっきりそれぐらしいの教育は受けておると思っておったが。そうか・・・、意外じゃな。しかし、文字といっても種類はたくさんあるぞ？どの文字を教えてもらいたいのじゃ？」

「あ、お姉様からもらった本さえ読めればいいんですけど」

「どれ、その本貸してみよ」

「え！？そ、それは、できません」

本を覗き込んできた公望に、花鈴は、慌てて本を自分の後ろに隠した。花憐から、公望に絶対見せるなど言われていたからだ。

「見せてもらわなければ、どの文字を教えてよいかわからぬであろう？」

「あの、たぶん、大乙様の所に有った本なので、仙人界で使われている文字だと思うんですけど」

「ふーん。なら話は早い。そなたも仙人になる以上、文字も扱えんとは話にならないからな。良い機会じゃ、仙人界の文字を近いうちにも教えてやろうかの」

「い、いえ。近いうちにはなく、直ぐ教えてください。私、今日にでもこの本を読みたいんです」

「ほう、そんなに興味のある本をもらったのか？どんなのじゃ？」

公望もさすがに気になったらしい。見せろと言い寄った。しかし、いつも素直に言う事を聞く花鈴が、珍しく頑として断った。公望はさらに気になる。

「わしに見せれんようなものなのか？はて、大乙の家に花鈴がそんな意固地になるような本があつたかの。まあ、あやつの家は、膨大な本を持っておるからな。わしもすべてを把握しておるわけではないが。確かに変な本も多々あるが、花鈴がそこまで断る本とは一体……？？？」

「と、とにかく、お師様。文字を教えてください！」

「ふーむ。まあ良いか。なんにせよ本に興味を持つというのは良い事じゃ。では、教えてやろう。なーに、仙人界の文字などさして難しいものではない。阿呆なわしでも、直ぐに覚えれたんじゃ。優秀な花鈴なら、あっという間じゃろ」

興味を持つのをいったん置いて、文字を教える事にした。袂から紙と筆を取り出す。そして、一文字一文字丁寧に教えていった。花鈴は真剣になって覚えていく。元々頭の回転の速く、賢い花鈴は、本当にあっという間に全部覚えてしまった。ちなみに、何故花鈴が賢く、頭の回転が速いとわかるかと言えば、最初公望が学問を教えていたときに、その飲み込みの速さで、この子は賢いと公望自身気づいたのだ。

「ありがとうございます！」

「うむ。おや？気が付けば、家のすぐ傍まで来ておるではないか。では、もう一つ花鈴には教えたい事もあるので、風麒麟すまんが、家まで行ってくれ」

「仰るまでもなく、わかっておりますよ」

風麒麟は、最初から公望の行動を予測していたかのように、さつさと家に向かっていた。程なくして、家に着く。

「さて、そなたに教えたい事なのじゃが・・・」

「あっ！すみません、お師様！私、直ぐに本を読みたいので、その教えたい事というのは、明日にしてもらえませんか？」

「んん？別に構わぬが」

「本当、すみません！あ、それと私、仙人試験はまだ受けない事にしたので」

「そうなのか？だって、そなたあんなになりたがっていたではないか」

「いえ！考えを改めたんです。私の様な未熟者が仙人になるなんてとてもとても。もっとお師様の下、修行に励みたいと思います！」

これは、花憐に教えられた言葉である。

「そ、そうか？別にもう仙人として教える事はないんじゃないか。十分そなたは仙人になってもよいと思うんじゃないか。早くになって、さっさと独立した方が修行になると思うぞ？」

「いいんです、いいんです！それでは、そういう事なんで、私、自室に戻ってますね」

花鈴は大事そうに本を抱えながら、さっさと部屋に戻っていった。一人取り残された公望は、全く訳がわからないと言う感じで、呆然と立ち尽くした。

「やはり、女の考える事はわからん」

はーっとため息をつきながら、今だ凍りついている庭見て、印を組んだ。すると空間が歪み、氷はすべて消え、滝は流れ落ち、元の暖かな風景に戻った。そして、おもむろに風麒麟の部屋に向かう。風麒麟は大事そうに、卵らしき青く丸い物体を抱えている。

「どうじゃ、風麒麟。そろそろ、孵りそうか？」

「はい。丁度良い頃合に、生まれてきそうです。おそらく明日の朝には、花鈴殿ぐらいの背丈の人なら乗せる大きさには成長するかと」

「そうかそうか、それは良いタイミングじゃ。それより、花鈴を主^{あるじ}としても良いのか？」

「もちろんです。公望様の弟子なら、問題ないかと」

「ふむ。まったく、仙人になる条件はすべて整え、全力を持って手助けしてやったというのに、いきなりころっと意見を変えおって。どうして、わしはいつもいつも、相手を思いその者の望みのためにしてやった事が台無しになるのかの。しかも、対外限って、その相手と言うのが女ときておる。じゃから、女の言う事は信用できんのじゃ。女はいつも、わしの事を振り回しおる」

「まあまあ、花鈴殿はまだお若いのですから、良いではありませんか。それに、公望様にとってしてみたら家族の様な存在でございましょう？」

「まあ。じゃから、許しておる所はある。これが、赤の他人だったら、とつくに縁を切っておるわ。そもそも、その様な輩は、最初から世話なぞやかんし、相手にもせぬが」

「しかし、花鈴殿があれ程までに興味を持つ本とはなんなんでしょう？」

「さあ？ わしにもわからん」

話をしている間に、風麒麟の抱きかかえていた物体が動き始めた。そして、殻が割れる。中から、小さな風麒麟と同じ姿をした霊獣が誕生した。

「おお、生まれたか！」

その小さな風麒麟は、よたよたとその場を転がる。しかしすぐに、宙に浮き始めた。そう、風麒麟の子供である。風麒麟は、雌雄同体。別に子を持つ必要はないのだが、花鈴のために子を産んでくれたのだ。

「なんと、名をつけましょうか？」

「そなたの好きな名にすればよいであろう」

「いえ、公望様に名付け親になってもらいたいのです」

「良いのか？」

「はい」

「では、安直じゃが、仙人界には珍しい横文字を使わせてもらうか。風麒麟の子なのだから、そのまま、ジュニアと名づけよう」

「じゅにあですか？ どういう意味です？」

「人間界で子供と言う意味を持つ異国の言葉じゃ。変に難しい名を付けたがるのは、仙人の悪い癖じゃからな。たまには、こういう簡単な名でも良からうと思うが。だめか？」

「いえ。私も生まれてこの方、その様な名は聞いた事ありません。何より公望様がお決めたのなら、私に異存はありません」

「では、そなたは、今日よりジュニアじゃ。良いな」

「ジュ・・ニア・・」

生まれたての子は、細々とした声で自分の名を発した。風麒麟は優しく寄り添うと、撫でてやる。ジュニアはうれしそうだった。

「どれ、祝いにそなたらに、これをやろう」

またまた袂から、今度は団子をとりだすと風麒麟達に手渡した。

公望が渡したのは、仙丹である。霊獣の好物であり、また生き物の氣に作用し、成長効果、体力氣力の回復、滋養強壮などに効果がある。付け加えれば、さらに仙丹よりずっと作用効果、効力の強い仙魂丹という物も存在する。しかし、公望の袂の中には、一体どれだけの物が入っているのだろうか？

それはさて置き、二匹は喜んで食べた。それを満足げに見つめる。

一方、花鈴は、真剣になって姉からもらった本を熟読していた。

それこそ、寝る事も忘れ、必死に何度も何度も読み返す。公望は寝る際、まだ明かりが点いていた花鈴の部屋を見て、まだ起きておるのかと、そっと部屋の中を覗いたが、花鈴は全く気づく気配すらない。それほどまでに夢中になって本を読んでいたのだ。公望は、やれやれと音も立てず部屋に戻りさっさと寝た。

次の日の朝。珍しく公望が先に起きた。公望がこんなに早く自力で起きる事は奇跡に近い。自分でも驚きつつ、背伸びをしながら部屋を出た。辺りを見渡す。花鈴の姿が見えない。いつもならこの時間には既に起きて、自分を起こしにきているはず。はて？と首をか

しげ、隣の花鈴の部屋に行った。そして、声をかける。しかし、返事はない。襖を開け中を見ると、花鈴は、机にもたれかかったまま寝ていた。どうやら、本を読みながら寝てしまったようである。

「困った子じゃな。興味を持つ事は良いが、無理はするなとあれば言うっておったのに」

公望は、花鈴に近寄り優しく抱きかかえると、ベッドに寝かせ布団を掛けてやった。花鈴はすやすやと寝ている。

「しかし、勉強か何か知らぬが、なーにをそんなに興味をもって読んでおったのじゃ？ わしにも見せてくれなかったし、そんな面白い本か？」

公望は、ちらっと机に広げておいてある本を見た。さすがに興味が湧く。そのまま、本の方に歩み寄り、本を手を持つ。本をひっくり返し題名を見ると、優しく学ぶ恋愛白書と書いてある。それを見て、一挙に興味は失せた。

「なんじゃ、よっぽど面白い本なのかと期待してみれば、ただの一般的な恋愛書ではないか。花鈴はこんなものを真剣に読んでおったのか。くだらんなあ」

呆れながら本を元の状態に戻しておく。

「この様な本、読んだ所で何の役にたつのじゃ？ 人の感情なんて奥深いもの。誰にも、いや、自分ですら理解が難しいと言うのに。人にはそれぞれに違った感情があって一つとして同じ感情なんてない。こんな表面的な一般論を述べた、しかもこれ、かなり古い昔の本で、理解なんぞできるとは思わんがな。まあ、基礎知識には良いかもしれ

れぬが」

まじまじと腕組しながら、本を見つめ、独り言を言った。

「しかし、てつきり何かの仙人に関する専門書とか小説とか、場合によっては、あれだけ見せるのを嫌がっていたから腐女子的なBL系関連物かとも思ったわ。それが、はあくん。唯の純恋愛書か。花鈴もそういうのに興味を抱くようになったとはの。やはり、年頃の女の子と言う事か」

ふおふおと笑う。そういえば、自分にはそんな時期があったかな、いや、なかったな。思えば、人間時代、恋愛に興味なんて持たず、恋心と言うものすら持ったことがなかった気がする。有ったのは、女性に対する憎しみだけだったと、遠い目をして若かりし頃を思い出していた。

物思いにふけっている公望の横で、花鈴がようやく目を覚ました。まだ、半分寝ぼけている状態で眠そうである。公望が声をかけた。

「おはよう、花鈴。今日は珍しく寝坊したな。あれだけ、無理したり夜更かしはいけないと言っておったのに」

「あれ、お師様？なんでここにいますか？えっ？ここ、私の部屋ですよ。えーっと、私、本読んでて、それから・・・寝ちゃったんだっけ？」

「この本のどこがおもしろいのじゃ？とても、夜更かしするほどの物でもないと思うがの」

公望は、トントンと本と指で突いた。それを見て、花鈴は慌てて

飛び起き、バツと本を後ろに隠した。

「お！お師様！！読んだんですか！？」

花鈴は慌てた。

しまったー！お師様、昨日凄く興味持ってたみたいだから、絶対見られないように隠しておくつもりだったのに、よりにもよって今日に限って私より先に起きてくるなんて、迂闊だった！

心の中で叱咤する。

「ん？いや、題名を見て、興味が失せた。今更恋愛書など読む気などおこらんわい。でも、そんな隠す代物ではなからう？」

花鈴はほーっとため息をついた。昨日読んでいて、計画の参考にしようと思っていたことなどが載っていたので、公望に知られては計画がばれて、意味がなくなってしまうからだ。

「しかし、そなた。恋愛に興味を持つようになったか。うむうむ。健全な女の子じゃな。良い傾向じゃ。人間界では出会いがなかったかもしれないが、仙人界ではあるかもしれんし。なにより、仙人界には男で美形の仙人が多々おって、女性仙人、道士の割合が少ない故、女性は貴重な存在じゃ。さらに、そなたは可愛いときておる。自ずとあちらから出会いがやってくる可能性がかなり高い。恋愛の知識を入れておくのもそなたの幸せの役にはなるじやろ。思えば、そなたのような年頃の女の子が、興味を抱くのも当然かもな」

公望は、恋愛そのものには無関心で下らんと思いつつも、花鈴が人として正常に順調に成長していることを素直に喜んだ。正直な話、花鈴には自分の様な欠陥人になってほしくなかった。昔から、相当苦労して生きてきた愛弟子には、少しでもこれからは幸せに生きて

欲しいと、極々普通の女の子の様に誰かに恋をして、付き合つて、いつかは幸せな家庭を築いて欲しいと切に願っているのだ。男の自分と違い、女の幸せは恋愛、結婚が一番であると公望は思っている。

「しかし、わからんな」

「何がですか？」

「いや、そなたの年頃で、恋愛に興味を持つのは自然な事じゃが、興味を持ったきっかけがわからんと思つての。わしは、そなたに恋愛についてなぞ教えた事ないし、そなたはそなたで、立派な仙人になろうと修行に明け暮れておつたからな。普通、そういう興味を持つのは、周りに異性が多々存在する中で生活するという環境におかれて、自然と意識が芽生えるのじゃ。全然そんな環境から遠く離れた生活をしていたそなたが、何故じゃ？」

「い、いえ、それは・・・」

花鈴は返答に困つた。しどろもどろに言葉を出す。さらに、公望は追い討ちをかけた。

「そなたの話を以前聞いたときは、人間であつたときも異性どころか、他人に会う機会すらほとんどなかったと申しておつたであろう？ 仙人界に来て、ようやくまともに他人と接する機会が増えたが、それでも、一回ずつぐらいしか会つてない。後は、ずっとわしと二人きりでの生活。しかも、そなた仙人になる事以外、頭のない様じやつたし。恋愛という言葉すら耳にした事なぞないはずじゃが？ どうして、知りえた？ その辺が腑に落ちん」

突っかかってくる公望に、花鈴は苦し紛れに姉のことを話した。

「じ、実はお師様。昨日お姉様と話をしたじゃないですか。その時私聞いたんですけど、どうやら、お姉様、普賢様と付き合ってるそうなんです。それで、お姉様から恋愛の事を教えてもらって。私もそれまで恋愛って言うものは全然知らなかったんですけど、恋愛の事をもっと知りたいなあなんて」

それを聞いて公望は仙人になって以来ぐらいにとてつもなく驚いた。

「はあー！？普賢が花憐と付き合ってるだあー！？それは、初耳だぞ！あの普賢が？？？いや、誰かと付き合うのは全然不思議じゃないが、花憐と何歳離れておると思ってるのだ。そりゃ、仙人は不老不死だから、年齢差なんて関係ないかもしれないが、見た目は花憐だってまだ子供だろ？あいつロリコンだったのか・・・」

はあーんつと、驚きのあまりしゃべり方が、元に戻ってしまっている公望である。

「ろりこんってなんですか？」

「いや、そなたは知らんでも良い事じゃが、それは、問題がある気がするぞ。確か、普賢は、仙人界に来たのは、30ぐらい。方や花憐は14。仙人界の時間の流れ上、それから、見た目に変化はないとして、人間界で換算したら、年の差は16。んんん・・・。一応許容範囲か？待て待て、それはせめてどちらかが18以上になっての場合。普通に考えて、30のおっさんが14の中学生の年の子供と交際するのは、犯罪的行為じゃろ。倫理的にも社会的にも問題があるのでは？しかし、それはあくまで、わしの故郷の常識。あやつの国、時代では普通だったのか？確かに平安時代辺りでは、そうい

うのもあったと習ったが。どちらにせよ、仙人界の常識では、関係ないか。姿が若くとも、何百歳となっている仙人もおるし。でも、花憐は見た目どりの年で……じゃから……」

公望は、頭がこんがらがり、自分でも何を言っているかわからなくなってきた。公望の恋愛に対する倫理観が、今回の事を聞き完全に崩壊する。普賢と花憐がデートしている姿を想像してみたが、どう考えても援助交際には見えない。そりゃ、花憐は年の割りに、大人びているし、普賢だって見た目は、若く見える。でも、公望には二人が付き合うなんて理解できなかった。

「お師様、お師様。お姉様と普賢様が付き合ってるって言うのは、変な事なんですか？」

「変と言うか、わしが人間だったときには、大いに社会的問題があったと思う」

「じゃあ、二人が付き合っていると言うのはだめな事なんですか？」

「うーむ。だめではなからう。仙人界に来ている以上、仙人界の常識があるし、仙人界の社会というものがある。それだけを考えて、別に問題はないが」

「では、良いじゃないですか。それに、お互い好きあっていて愛さえあれば、どんな障害だって関係ないですよ！」

「そういうものなのか？」

「そういうものです！」

意外にも公望は花鈴に諭されてしまった。公望は、弟子に教えられるなぞまだまだじゃと反省し、頭を直ぐに切り替える。

「そうじゃな。互いが満足していて、周りに迷惑かけているわけではないなら関係ないか。わしがとやかく言うことではないの。では、そうか。それでそなたも興味を持ったわけだ」

「はい！」

「ふーん。納得納得」

疑問が一つ解決して、公望は満足した。そして冷静にしばし考える。

「ところで、そなた」

「なんです？」

「確か、花憐とは双子じゃよな？ しかも、一卵性双生児の」

「お母さんの話ではそうだって聞きましたけど、それがなにか？」

「ということは、もしかして・・・、そなたも既に恋愛感情を持っていて、好きな男でもおるであろう？」

「えっ!？」

公望の鋭い突っ込みに、またまた花鈴は焦った。一緒に生活していてわかるのだが、普段まぬけっぽくしていても、その実、凄い鋭い感を持っていたりする。まるで、心を見透かしたような発言が多

々あるのだ。

「な、何故そう思うのですか!？」

「何、一卵性双生児の双子は、姿だけでなく、中身も似ていると聞く。片方が考えている事や、発言と全く同じ事を、もう片方も全く同時に行う事もある例は、世界中多数見受けられているからな。姉の花憐に恋愛感情が既に芽生え、現に付き合っているなら、少なくともそなたも同じ感情を持っていたとしても不思議はないと思うのじゃよ。というか、そんな恋愛書を読み始めている時点で、恋愛感情はもうあるはずじゃ。しかも、そんな寝る間も惜しんでまで読みふけると言う事は、早々に知識をつけて、何とかしたいと思う相手がおると予測できる。少なくとも気になっている男はおるとな」

「わわわわ、私には、そんな男の方なんていません!!」

「なーにを動揺しておる。先にも言った通り、好きな相手ができると言うのは健全な事で良い事じゃ。で、誰じゃ?そなたの交流関係から言ったら、わしが知っている男であろう。正直に申せ」

「い、言えませんか!」

「それはいかん。わしは、そなたの師匠じゃ。まあ、そなたが誰を好きになろうとも、それは自由じゃから文句は言わんが、可愛い愛弟子を不幸にするような男とはつき合わせざるわけにはな。見定める義務がある。それに、わしとしてそなたの恋に協力したい。わしらの仲ではないか。恥ずかしがらずに申してみよ」

「だめです!お師様のお気持ちはうれしいですけど、こればかりは言えませんか!」

「しかし・・・」

「あ！それより、ほら！お師様、昨日私に教えたことがあるとか仰っていたじゃないですか！それはどうなったんですか？」

「おお、そうじゃったそうじゃった。そなたに、術の事で教えてやりたい事があったんじゃない？」

「でしたら、直ぐに教えてください。ほら、早く！」

花鈴は話をごまかし公望を急かすと、庭に連れ出した。公望も好きな相手の事はひとまず置いて、術を教える事にした。

「では花鈴。これより、そなたに術を教える。これは、かなり難しい術じゃ。さらに、そなたは既に、属性を決めておるから、使えるかどうかかわからん。しかし、もし使えば、まだ仙力の弱いそなたでも、十分に役に立つ」

「どんな術です？」

「空間転移の術じゃ」

「空間転移？」

「そう、自分の思ったところに瞬時に移動する術じゃよ。俗に瞬間移動とも言われるな。自分の行きたい所を強く願い、その場所に移動した自分をイメージするのじゃ。試しにわしが手本を見せてやろう」

そう言うと、公望は花鈴の目の前からパッと消えた。そして花鈴は、直ぐに後ろから肩を叩かれた。びくっ！っとして、振り返る。そこに消えたはずの公望が立っていた。

「これが、転移の術。わしのオリジナル術のひとつじゃ」

「すごい！」

「やれそうか？」

「やってみます！行きたい場所と移動した自分をイメージすれば良いんですよね？」

「いかにも」

「よし！」

花鈴は目を瞑り、強くイメージしてみた。場所は、自分の部屋である。そこにいる自分を想像する。すると、なにやら足元の地面の感触がなくなった。目を開けてみる。周りは見渡す限り何もない青空が広がり、下には地面の変わりに雲があった。そう、花鈴は術を失敗し、上空3千メートルに移動してしまったのだ。重力に従い真っ逆さまに落ちていく。

「キャーーーーーア！！」

花鈴は叫び声を上げた。一方、公望は消えてしまった花鈴の位置を千里眼で追跡していた。自分の遙か上空にいる事を確認すると、落ちてくる位置に移動する。幸い、庭の範囲内だった。そして、腕を前に差し出した。数十秒後、花鈴がその腕の中に落ちてきた。そ

つと受け止める。

「大丈夫か？」

「おお、お師様……。こ、怖かったあ」

涙目で花鈴は抱きついた。身体の震えが止まらない。公望は大丈夫大丈夫と撫でてやり、花鈴が落ち着いた頃、地面に下ろした。

「とりあえず、術は発動する事はわかった。ただ、やはり、そなたにはまだイメージ力が足りないようじゃな。後、やはり属性を決めてしまっているの、長距離の移動には限界があり無理っぽい。おいおい、イメージの練習して、短い距離を移動し使いこなせるようになるがよい」

「私には使いこなせません」

「最初から決め付けてどうする。術は発動する事がわかったのじゃから、後は努力次第じゃろ？そなたならできる。信じておるぞ」

「うう、頑張ります」

「さてと、術の確認もできたし、後はジュニアを紹介すればよいか。これ！風麒麟！」

公望に呼ばれ、風麒麟と、その半分ほどの大きさのあるこれまた風麒麟が部屋から出てきた。公望が紹介する。

「こちらが、風麒麟の子、ジュニアじゃ」

「じにあ？」

「違う。ジュ・ニ・アじゃ。今日よりそなたの霊獣となる。大切に
してやるが良い」

「初めまして、花鈴様。あなたが僕のご主人様ですね。不束者です
がよろしくお願いします」

「あ、初めまして。え？私の霊獣ですか？」

「そうじゃ。そなたも、一応もう独り立ちできる実力は持っておる
からな。霊獣は持たねばなるまい」

「ありがとうございます！」

「礼なら、風麒麟に言え。こやつの子なんじゃから」

「ありがとう！風麒麟さん！」

「ジュニアの事よろしくお願いしますよ。花鈴殿」

「はい！これからよろしくね、ジュニア！」

そうして仙人になるために一通りの事を花鈴にしてやった公望は、
花鈴に、オリジナルの術の開発を続けるようにと命を下すと、縁側
に座りキセルを取り出してプカーっとふかした。花鈴は、言いつけ
通り直ぐに術の開発に取り組んだ。

その夜・・・

飽きもせず、ボーっとキセルをふかして続け、月を見ながら月見酒をしていた公望に、その日の修行を止め、一旦部屋に戻って寝たと思っていた花鈴が声をかけてきた。

「どうした？」

「お師様にお問い合わせがあるんですけど・・・」

「なんじゃ？」

「あの、今日の転移の術での失敗で、怖い思いしたじゃないですか。それで、寝ようとすると思いい出しちゃって怖くて寝付けないんです」

「それで？」

「だから、その、今日お師様と一緒に寝ちゃだめですか？」

「なんじゃ、その様な事か。それぐらいなら良いぞ。では、わしも寝るかな。さ、おいで」

酒を放置し、キセルをしまうと二人は公望の部屋に入っていた。公望は、ベッドの中に横たわり枕を端に寄せると、もう一個の枕をその隣に置いた。花鈴は失礼しますと言っていそいそとベッドにもぐりこんでくる。公望は壁の方に向き、花鈴に背を向けた。背中越しに花鈴がしゃべりかけてくる。そのままの体勢で受け答えをした。

「お師様のオリジナルの術って、結局何の属性なんですか？」

「空間じゃ」

「へー、空間なんて属性あるんですね。私にはさっぱり想像できませんけど」

「わしも苦労したぞ」

「ねえ、お師様。朝の話なんですけど」

「ん？」

「お師様は好きな人とかいないんですか？」

「おらん」

「気になっている人とか、後、人間だった時は？」

「全くおらん。というか、生まれてこの方、誰かに恋愛感情を持った事がない。人間だった時、自分にはその感情が備わらずに生まれてきたのだと、ある日理解した」

「じゃ、じゃあ、せめて好みの女性はどんな方です？」

「人間だった時は、大人の女性じゃな。もし付き合うなら絶対自分より年上がいいと思っていから」

「大人で年上ですか・・・」

花鈴の声のトーンが落ちる。

「昔の話じゃよ」

「でしたら、今はどうなんです？」

「そうじゃなく、今でもそうかな？ただ、絶対である必要はなくなったな。仙人に年は関係ないので。できればという付属的気持ちじゃ。ただ、代わりに女性に求める絶対譲れない望みはある」

「なんです？」

「わしの事を何があっても一生一途に想い、絶対にわしの想いを裏切らないであってほしいという望みじゃな」

「そうですか」

「ま、その様な女性がいるとは到底思えんがの。わしは、女性に裏切られた事しかないし、その経験上、女性はそういう生き物じゃと既成概念を持っておる。それに、不老不死の仙人に一生一途に想ってもらいたいと願うのは土台無理な話じゃ。人間なら寿命があるから可能性はあったかもしれんが、人の気持ちなど、仙人であっても移ろいやすいもの。世の中に絶対は存在せん」

「それなら、もし仮にですよ。万が一、その望みが叶う女性がいたらどうします？」

「考えた事もないが、まず間違いなく、わしもその者を大切にするじゃろな。例え己を犠牲にしようとも。まずその者の事を一番に考える。いたって当たり前のこと」

「と言う事は、その女性がお師様の事を好きですって言ってきたら、付き合うつて事ですか？」

「まあ、そうなるか。問題はわしに、恋愛感情が生まれるかどうか、本気で愛せるかはわからんが。それでも良いと言うならな」

「それ以外に、女性にもっとこうあってほしいとか、こうしてほしいとかっていう望みはないんですか？」

「ない。ただ、一途にひたすらわしを想ってくれるだけで十分じゃ。その想いが自ずと行動にも現れてくるものじゃから」

「なるほど。後・・・」

「そなた、さっきから質問攻めじゃぞ。わしの好みなどどうでも良いではないか。そなたの好きな男とやらに気に入ってもらうために、いろいろ試行錯誤するのはよいが、はっきり言ってわしの好みは役に立たんぞ。なんてったって、仙人界一の変わり者のわしじゃ。普通の仙人と思考も感情も違う。もっと、ごく一般的な人の好みを知った方がよい。わしも協力はするが、大乙や妖仁、現に付き合っている普賢に聞いて回った方が、よっぽど役に立つ。後、男だけじゃなく、そなたの姉や竜吉と言った女性の意見も聞いた方がよいぞ。特に竜吉など、何千年と生きておるのじゃ。経験や知識も豊富じゃろ。そやつらに相談できるようわしを取り計らってやるから、今日はもう寝よ」

「はい」

数分も経たないうちに、花鈴はすやすやと寝入ってしまった。

「なんじゃ、寝付けないと言っておりながら、わしよりも早く寝おった。全く、何を考えておるのやら」

ため息混じりに呟いて、公望もさっさと寝た。今後花鈴は、これを機会に毎日公望と共に寝るようになる。公望は、花鈴の願いには元々弱く、なるべく願いは叶えてやりたいと思っていたし、別にさしたる問題もなかったので、許可を出したのだ。

今日も夜が静かにふけていく。

公望、人間界に降り立つ。其の一

今日も今日とて平和な仙人界。庭では花鈴が術の開発に勤しんでいる。それを縁側に座りながら見ていた公望は、平和な時間とは裏腹に心が落ち着かなかった。人間界の事がずっと気になっているのである。人間界は荒れていた。特に最近目立つのは象の国（旧中国）である。

人間界は大きく変動したのだ。公望がまだ人間で25になろうかなるまいかしていた20XX年、地球の核が揺れ動き全世界に大規模な地殻変動が起こった。ありとあらゆる断層、プレートが動き、その大地震により地は割れ分断し、建物は倒壊。さらに二次災害で大津波が各国で相次ぎ、死傷者、行方不明者の数は数え切れず、文明も崩壊しかかっていた。公望の故郷である日本など、半分以上が海中に引きずり込まれ沈没し、移動するプレートに乗って太平洋を横断。現在はアメリカ近くに位置している。その後、復興に力を入れていた各国に止めを刺す最悪の出来事が起こった。第三次世界大戦である。このありえない自然災害に社会情勢は混乱したのは言うまでもないが、その時今まで世界のトップに立っていたアメリカの力が弱まったのを良いことに某国の軍部が暴走を始め、あろうことか全世界に核弾頭を発射したのだ。それをきっかけに各国も持ちえるすべての核弾頭、近代兵器を用いて入り乱れ状態。もう人類滅亡か？という寸前で、各国の主力武器がなくなり第三次世界大戦は自然消滅したが、近代的文明はほぼ失われ、若干現存しているのは、アメリカ、ロシア、イギリスぐらいである。その他の国は文明が退化し、一から作り直すこととなった。特にこの戦争の影響を受けたのが中国だったのである。完全に荒地となり、残った者たちによりやっとやっと復興作業が続けられ、象の国が建国されたのである。ちなみに、日本は、医療分野の文明のみかろうじて残り、世界の人々を救うため医療に力を要れ発達させている。それ以外の文明、文

化は江戸時代頃に近いかもしれない。

公望は、大地震を何とか生き延びた後直ぐに大老君にスカウトされているので、戦争は経験していないのだ。

さて、そんな人間界の状態で人間達は必死に復興作業に勤しんでいると言うのに、何故か象の国がすこぶる荒れているのである。最初は新たな統治者の手腕により順調に復興していたが、何年か前から社会が崩れ始めている。公望はそれが気がかりだった。

どうしようかと考えてた時、連絡用宝貝が鳴り大老君から公望は呼び出しを受け、花鈴と共に蓬萊山へと向かう。公望は大老君に会う前に竜吉のところに行くと、竜吉に花鈴が相談したい事があるから聞いてやってくれと頼み花鈴を預け、単身大老君の部屋に入っていた。

「お呼びですか、師匠？」

「呼んだから来たのであろう？」

「で、何です用件は？」

「うむ、人間界の事じゃ。最近象と言う国が異常を起こしておる」

「そんな事はとっくに知ってます」

「なら話は早い。実はそなたに象の国に降り立ち、新たな国を建国する手助けをしてもらいたい。最初人間達で何とかするかと様子を見ておったが、もはや限界じゃ。即刻新たな統治者を設け新国家を造らねばならないとわしは判断した」

「法度は？いくら私でも、仙人がそんな大規模な関与は許されない

でしょ？」

「おぬしだから頼めるのじゃ。そなたは例の件があって人間界には詳しい。むしろおぬし以外に任せられる者はおらん。しかもじゃ、どうやらその象の異常の原因が妖怪仙人、名を猫姫と言うが、そやつが関係しているらしい。人間に仙人は倒せん。じゃから、おぬしはそやつを人間界から排除し、新しい国造りに手助けしてもらいたい」

「まあ、わたしも象についてはずっと気がかりでしたので、やれというならお引き受けしますけど、条件があります」

「なんじゃ？」

「花鈴を共に人間界に連れて行きたい。いろいろ手助けをしてもらいたいし、その任務は時間がかかります。それでは、花鈴が心配しますし、面倒も見てやらなければ。というか、嫌でも花鈴は私に付いて来ると予想できますので、許可を出してもらいたいです」

「それはならん！おぬしも知ってのとおり、仙人は人間界に關与してはならないのが掟。今回の事は先に言ったとおり、おぬしじゃから頼めるのじゃ。一般の仙人、道士を送るわけにはいかん。それに、花鈴は既に一人前に成長しておるじゃろ。教える事も教えてあるようじゃし、もうおぬしが面倒見る必要はあるまい」

「花鈴を連れて行けないならお断りします。花鈴の性格上、無断で私の後を追っかけてくるでしょう。そうなれば、師匠である私に責任がかかります。それでは、困りますので許可が出ないなら行きません」

「行け、命令じゃ」

「嫌です。許可を出してください」

「だめじゃ、単身で行け」

「では、断ります」

「いーけっ！」

「いーやっ！」

こんな押し問答が続く事かれこれ数十分、結局大老君が折れた。今回は特例と言う事と仙人界で内緒にする事にして、許可を出したのだ。それを聞いて満足した公望は部屋を後にし外に出て行った。すると部屋の外では花鈴が竜吉との話が終わったようで待っている。花鈴に事情を説明すると案の定、絶対付いて行くといい張ったものだから二人して人間界へと降り立ったのだった。

人間界上空

「わー！懐かしい！！何年ぶりだろう、人間界に来るもの。私生まれて一度も故郷から出た事なかったんで、一度外の国に行ってみたかったんですね」

花鈴は感嘆の声を出して、始めて見る異国の地を上空より眺めていた。一方公望は頭を悩ませている。

「どうしたものかの。新しい統治者を立てると言ってもそう簡単にはいくまい。まず戦は避けられんじやろうし。また争いごとがある

のか・・・」

「え？どうしてですか？話し合いで解決すればいいでしょ？」

「それが無理なんじゃな。わしもできればそうしたいんじやが」

「何故です？」

「ちと説明せねばならんの。まず象の国は独裁政権を取っておる。何故民主主義にしなかったと言え、元々そういう社会ではなかったのもあるが、象を建国する際、元中国の人々は滅んだ自分達の国と文明に途方にくれていた。もうどうして良いかわからない状態だった。周りの国からも援助は期待できん。その時、現皇帝の公譚という若者がおった。その者は才気に溢れ、人をひっぱって導いていく能力も高くカリスマ的存在じゃった。カリスマと言ってもわからんと思うが、要は皆から頼られる存在じゃったのじゃ。人々はこの人に任せておけば自分達を良い方向に導いてくれると期待した。そうしてその者を祭り上げ、公譚を皇帝とし象の国を建国した。当初は、皆の期待通り公譚は良き皇帝じゃった。民の意見を良く聞き、それはすばらしい政を行っておったものじゃ。それが、数年前からおかしくなり始めた。政を一切行わず、重税をかけ民を苦しめた。もはや、国としてなりたたん状態まで持ってしまったのじゃ。そこでわしらが借り出されたのじゃな。なにやら、妖怪仙人も絡んでおるようじゃし」

「だから、それとこれとどうして戦が起こるんです？」

「うむ。独裁政治を行っておる以上、新しく建国するには、その者が自発的に退くか力づくで倒さねばならん。しかし、公譚は退く気なぞない。そうすると革命を起こすしかない。それは戦を意味する。

革命そのものが武力行使みたいなものじゃからな。さらに基本的に象の国では革命はご法度中のご法度。考えただけでも死罪ものじゃ。じゃから、革命を起こす者は、なにがなんでも成功させねばならん。じゃが、革命は早々簡単にいくものではない。そもそも自分達で祭り上げた皇帝であるから、公譚を敬い、逆らうと言う概念すら持つてはいけない。と言うよりもその様に洗脳されておる。じゃから、どんなに腐った皇帝でも革命を起こそうとする者がおらんのじゃよ」

「じゃあ、やっぱり戦は起こらないんじゃないですか？その革命を起ここそうって人いないんでしょ？」

「いや、象の国にはおらんかもしれんがそれ以外の国におるとわしは思う。象の下にはな、小さいながらも直属の国が存在する。北に位置する北越、西に位置する西漢、東に位置する東宮、南に位置する南秦。これら四つの国がそれぞれ公譚の命により統治者を設け象の国を支えておる。わしの調べによると、以前その四人の統治者が公譚に政をしっかり行い前の皇帝に戻ってくださいと直訴したらしいのじゃが、公譚はその四人を処刑したそうじゃ。それにより、今は跡継ぎのいた北越と西漢がその後を引き継ぎ、残りの二国は摂政が代理をしている。で、北越と西漢じゃが、そのどちらかがその処刑問題に対して反感を強く持ったと思っておる。なんてったって親が意見しただけで殺されたのじゃからな。おそらく、そのどちらかが革命の意思を持っておるのではないかな。すなわち、放っておいてもいずれ戦にはなっておるじゃろ」

「そうなんですか」

「うむ。しかし、先に行ったとおり革命は簡単ではない。真っ向から立ち向かってもまず勝てん。公譚の下には10万の兵がおるが、四力国はそれぞれ2万ぐらい。あわせても6万が良いところじゃろ。

4万の戦力差はでかいぞ」

「あ、それで私たち仙人の奇跡的力を貸してその戦力差を埋めようと言う事ですね」

「いや違う。わしは、人間達の事は人間達に解決させようと思う。わしらが力を貸すのは知恵ぐらいじゃ。戦と言うものな、どんなに戦力差があっても兵法次第で覆す事もできるのじゃ。特に、公譚の兵は数が多くとも心は既に公譚から離れておるじゃろ。そこを突こうと思う。しかし、一カ国が革命を起こしても意味がない。まず、やはり戦力差に限界があるのと、革命を起こした者が新たな統治者になるのじゃから、周り四カ国すべて民から慕われ納得いく相手でないで建国しても直ぐ問題が生じる。もしかしたら、公譚以上に駄目な存在かもしれんからな」

「では、どうするのですか？」

「うむ。西漢に行こうと思う。確か西漢の跡継ぎはしっかりした者であった気がするのじゃ。で、話を振ってみようと思っておる。ただ、現状でわしらの様な怪しげな身元不明者を会わせてくれるかどうか・・・」

「とりあえず、行くだけいってみましようよ。考えていても埒があらせんよ」

「そうじゃな」

花鈴に促されて、西漢に向かった。途中象の現状を把握するため立ち寄ってみたのだが象の内情はひどいものだった。民は痩せこけ、

仕事もなく道端に座り込み、ところどころで食べ物を求める声が聞こえる。死体すら道に転がっていた。しかし誰も気にも留めない。自分の生きる事で精一杯、明日はわが身と言った感じだった。一方、城の前に差し掛かかるとそれは華やかな声が聞こえてきた。中から食べ物の良い匂いがする。それにつられ民衆は城の前に群がっていて、衛兵が民衆をど突き倒している。

「ひどいですね・・・」

花鈴が思わず声を上げた。公望もう一むと唸る。その光景を焼き付けて、いざ西漢へ。実際西漢についてみると、象とは打って変わっていた。活気の良い町並み、元気の溢れる人ごみ、様々な店が立ち並び食材が豊富に売られていて、店員の元気の良い客引きの声があるところどころから聞こえる。その場に居るだけでうきうきする様な、祭りの時の様なそんな気持ちになる国だった。

「ほおー、やはりこの国は良い治世を行っているな。前の統治者王貴の時は何一つ心配はなかったが、王貴が死んでその跡継ぎである仏貴に変わったときは心配じゃったが、これなら文句はないわい。後は焚き付けるだけか」

花鈴は生まれて始めて見る人の多さ、店に興味津々と言った感じできよろきよろ辺りを見渡しながら、迷子にならないよう公望の後について行く。城の前に来ると門の前に、衛兵が立っていた。公望は気にせず中に入ろうとすると、やはり止められる。

「何者だ！」

「この度、仏貴様にお目通りしたく思いました。参った旅の者です。重大な話を仏貴様にしたくて、はるばる遠方より参りました。ぜひ、

取り次いでいただきたい」

「ならん！身元のはっきりしない者は何人たりとも入れないのが決まり。早々に立ち去れ！」

やっぱりな〜と公望は、やれやれと困った顔をした。そこで奥の手を使う。

「そこを何とかお願いしたい。亡くなられた王貴殿の知人としてなんとしても子である仏貴様には会っておきたいのです」

「な！おまえ、王貴様の知り合いの方か！？」

「はい、王貴殿からもし自分何かあったら息子を頼むと言ずてをもらっております。これが証明書です」

袂から一枚の紙を衛兵に渡した。そこには王貴の字と証明印が書かれ確かに公望に息子を頼むと書いてある。

「よ、よし。どうやら本物のようだ。では、王貴様の遺言とお前を通してやろう。付いて来い」

「どうも」

二人は衛兵の後を付いて行く。その間花鈴がひそひそ声で聞いてきた。

「お師様、王貴って人と知り合いだったんですか？」

「んな訳あるまい。知り合いどころか話した事すらないぞ」

「じゃあなんで、手紙なんて持ってたんですか？」

「偽造じゃよ、偽造。こうでもせんと入れてくれんと思ってな。念のため作っておいたのじゃ」

「お師様、嘘は良くないですよ！」

「しょうがないじゃろ。他に方法がない。まあ、とにかくこうして中に入れたんじゃから文句を言うな」

「仏貴様！亡き王貴様の知人と言われる方をお連れしました」

「なに親父の知人？」

謁見の間に通された二人は仏貴と始めて顔を見合わせた。衛兵は挨拶し手紙を渡すと持ち場に戻っていく。手紙に目を通した仏貴は、改めて公望を見た。

「おまえが、親父の知人とかいう公望か？」

「はい」

「ふーん。で、俺に何の用だ。手紙には息子を頼むと書いてあるが、お前が何かしてくれるのか？」

「ええ、実は折り入って仏貴様にお話があってまいりました。内密の話ですので、まずお人払いを」

「わかった。皆、下がれ！俺はこいつと二人で話しをする」

仏貴の命令に従い、家臣の者達は皆その場を去っていった。残されたのは、三人のみ。

「で、内密の話とは？」

「それを踏まえ、私どもの事を話しておきましょう」

公望は、自分達が仙人と呼ばれる存在であり王貴と知人だというのは嘘だと正直に言った。それを聞いて、仏貴はさして驚いたわけでもなく平然と答える。

「だろうと思った。親父からお前の様な知り合いが居るなんて聞いた事なかったからな。で、仙人だっけ？身分を偽ってまでその仙人様が俺に会いに来たのは何だ？」

「うむ、実はそなたに革命を起し公譚を倒して新しい国を作ってもらいたくやってきた。本来仙人は人間に関与してはならないのが掟なのじゃが、最高責任者より命を受け特別に参った」

「公譚を倒すだと？ははは、今更だな。俺は元よりそのつもりだ。公譚の政治はもうだめだ。改善を求めるよう意見を言いに言った父も処刑された。その時点で俺は公譚を倒す決心はついている。今その準備中だ」

「なら、話は早い。しかし、まさかそなた西漢のみの力で公譚に立ち向かう気ではなからうな？」

「悪いか？」

「阿呆か。西漢のみで勝てる分けなからう」

当然のように言っただけのけた仏貴に公望は呆れた。

「ふん。確かに公譚は多くの兵を持っているが、使い物にならない。所詮烏合の衆。俺の兵だけで十分だ」

「あのなそなた、もう少し頭を働かせろ。そなたの兵がどれだけ強かろうとも、やはり8万の数の差は埋まらない。それに、仮に公譚を倒せたとしても、周りの国が納得するかはわかるまい。新しい国を作り、新たな統治者になるには、他の三国の了承を得、協力を要請せねば建国しても成り立たん。まさか、唯倒せば良いとか思っただけではないだろうな？」

「うっ」

仏貴は凶星だったようで言葉に詰まった。何でこの様な者が良い政を行っているか公望は不思議でならなかった。

「じ、じゃあ、俺にどうしろと？」

「まず、残りの三国に連絡を取り事情を説明せよ。そして、自分が新たな皇帝になることに同意してもらって、そこで初めて行動を起こすのじゃ。西漢だけでは、兵力は二万でも四万国集まれば6万ぐらいはいく。それだけあれば、十分象とやりあえるじゃろ。そこでじゃ、わしを参謀として向かい入れてくれぬか？」

「お前を参謀に？」

「そうじゃ、わしは仙人としてそなたに力を貸すつもりはない。あ

くまで意見を言うだけじゃ。人間の手で解決せねば、誰も納得せんからな。わしの役目は、知恵を授ける事と裏に潜む妖怪仙人を排除することじゃから」

「ん？公譚にも仙人が付いているのか？」

「そうじゃ、じゃからわしがここに来た。人間に仙人は倒せんからな」

「そうか・・・」

「で、用件は飲んでくれるのか。と言うか飲んでくれねば来た意味がない」

「わかった。あちらにも仙人が付いているのでは、こちらも分が悪い。では今日よりお前を参謀として迎えよう」

「うむ」

「で、俺はまず何をすれば良い？」

「じゃから、すぐに三国に文を送って了承及び協力を要請しろ。まずはそれからじゃ。わしは裏における妖怪仙人の事を調べる」

「よし！では、すぐに準備しよう。早馬を使えば、往復で2週間ほどで連絡が取れるはずだ」

「頼むぞ。あ、後、兵を動かす際、農業用の道具を持ち歩かせるように各国に指示してくれ」

「何故だ？」

「それはいずれわかる。では、わしはもう一度象に行つて来るから任せたぞ」

「あ、ああ」

こうして、西漢の参謀となつた公望は下調べのためまた象へと向かつたのだつた。花鈴は私は何をすれば良いですかとしきりに聞いてきたが、今は特にすることがないので観光でもしておれと公望は花鈴に命を下した。

公望、人間界に降り立つ。其の二

西漢を離れ再度象に赴いた公望は、より詳しく国の状況を把握するため国中を歩き回った。そして、周りを見ながら会う人会う人にある噂を流していく。しばらくそんな事を繰り返しているうちに、どこからともなく強烈な匂いが漂ってきた。その匂いをかいだ公望は頭の中が真っ白になって思考が止まる様な感覚に陥る。鼻を塞ぎながら頭を振る。

「な、なんじゃ？この甘ったるい匂いは……。気持ち悪う」

「あなたが公望ちゅあんかしら？」

後ろから声を掛けられ振り向いた。どうやらこの嫌な匂いはその者から発せられているらしい。

「いかにも。そなた誰じゃ？わしの名を知っておるという事は、そなたも仙人か？というかまさかそなたが・・・」

「こんにちは、猫姫まおきよん」

「あゝ、やっぱり。はいはい、そなたが諸悪の根源か」

「あらん、失礼ね。人を悪者扱いするなんて」

物凄く綺麗な容姿をし、さっきから甘い匂いを発している猫姫はクスッと笑うとちょっとすねた態度を取る。

「しかし、何故そなたわしの事を知っておる？」

「当然よん。仙人界一の変わり者のあなたを知らない仙人なんていないわん。あのくそまじめな大老君の直弟子のくせに正反對のぐーたら性格で落ちこぼれ仙人だなんてすぐに噂になるわよ。妖怪仙人にもその名は伝わってるわん」

「そりやどうも。わしも有名になったもんじゃな。それより、この匂いそなたが発しておるのじゃろ？消してくれぬか、気持ちが悪い」

「あらーん？公望ちゃんにはわらわの妖術が効かないの？変ね、わらわのテンプテーションは男全員にかかるはずなんだけど」

「テンプテーションね。それで公譚を虜にした訳か。生憎とわしは女性に興味がない。魅惑の術なぞ効きません」

公望は平然を装っていたが、別の意味で動揺していた。この猫姫という者、思った以上に強い。おそらく大老君と同等かそれ以上では？

「それは残念ねえ。せっかく公望ちゃんもこっちに引き込もうかとも思ったのに」

「諸悪の根源のそなたが会いに来たのはその理由だけか？」

「いえん。公望ちゃんがなにやら変な噂流してるみたいだし、公譚も気にしてたから様子を見に来たのよん。後、公望ちゃんが仙人界の掟を破ってまで人間界に来た理由も知りたいわん」

猫姫はずっとくねくねしながらしゃべってる。公望の嫌いなタイプだ。消してくれと言っても気にせず匂いを発している。嫌気をさ

しながら率直に用件だけを言った。

「大老君様の命によりそなたを人間界から排除しに来た。そして公譚を倒し新たな国を建国する。それがわしの役目じゃ」

それを聞いた猫姫は高笑いを発した。それと同時に匂いの質が変わる。その匂いに包まれた公望の身体からは冷や汗が流れだし、公望は苦しくなってきた。

「あははは！あの老いぼれじじい、何をしてくるかと思えばわらわを人間界から排除しようだなんて。しかも、その役目を公望ちゃんに任せるなんてわらわもなめられたものだわん。公望ちゃんには少しお痛をしないとねん」

毒の香りに包まれた状態で苦しみながら公望は質問をする。

「そ、そういうそなたの目的はなんじゃ。こんな象の国で公譚を操って何がしたい？」

「わらわは、わらわの好きに生きてるだけ。仙人ってつまらない存在よん。人生には娯楽が必要。楽しくないと生きてる価値なんてないわん」

「で、公譚を操る事と何が関係する？」

「決まってるわ。ゴージャスな生活を送るためよん。人間界のトップの一人を魅了しちゃえば、ゴージャスし放題。しかも、人間だつて好きに食べられるじゃない。いずれは人間界を支配して、次は仙人界のつもりよん。わらわはわらわの好きに生きれる世界を造るのん。その点は公望ちゃんだって理解できるんじゃない？あなたも好

き勝手に生きたいタイプでしょ。自分を縛る掟なんて知らないと思ってる。だから仲間に引き込もうかとも思ったんだけど、テンプテーションが効かないなんて本当噂どおりの変わり者ね。どう？仲間にならない？」

「わしとそなたは違う。わしはわしの美学に基づいて生きておるだけじゃ。そなたと一緒にされても困る。理解はできるが、交わろうとは絶対思わん。お断りじゃな」

「なら、今のうちにあなたの方こそ排除しちゃうわよん？どんな些細な芽もわらわの計画の邪魔になるなら摘んでおかなくちゃ」

匂いがより一層濃く強くなる。

「ぐっ!!」

がくつと身体がゆらつき公望は膝を地面についた。

「公望様!!」

その状況を上空から見ていた風麒麟は直ちに飛んでくると、公望を抱きかかえまっしぐらに西漢に避難した。

「あらん？さすが、仙人界最速の霊獣ね。わらわも追いつけないわ。いいわん。余興にはなるでしょ」

遠目に風麒麟を見ながら、猫姫はまたくねくねして城の方に歩いていった。

一方、西漢に辿り着いた風麒麟はすぐに仏貴の下に公望を運ぶと

妖怪仙人にやられたと言って部屋を準備してもらい公望を寝かせた。公望は既に意識がない。体中に毒が回って体に変色を始めている。風麒麟にはどうしようもなく、とにかく観光しているであろう花鈴を探した。しばしして、食物を売っている店でまじまじと桃を見ている花鈴を発見。花鈴は珍しく慌ててる風麒麟を見て、どうしたの？と聞いたが事情を聞いた花鈴の方がもっと慌てた。急いで城に向かう。

「お師様!!」

部屋の中に入り、横たわっている公望を見つけると叫びながら駆け寄った。何度も呼びかけるが公望からは返事がない。ただ冷や汗だけが流れ、身体中びしょびしょになっていた。花鈴はすぐさま布を用意すると濡れた身体を拭いてやる。そして、額に冷たく濡れた布を新たに乗せた。

「ど、どうしよう! 風麒麟さん!!」

もう泣きそうになりながら花鈴は風麒麟に助けを求めたが、風麒麟も困った顔をして途方にくれるしかなかった。

「お師様、死んじやったりしないよね!？」

「わかりません。公望様は毒の免疫をつけてらっしゃいますし、体内の氣の力で毒は自ずと消滅するものです。しかし、もし公望様の氣の力より毒の力が上回っていたら、さすがにどうなるかは……。私は宝貝の力を吸収する力を持っていますが、この妖術は特殊なように除去できません。花鈴殿にもなんともできないなら、後は公望様の氣の力を信じ、生命力に頼るしか術はありません」

「うう・・・お師様あ・・・」

二人は心配そうに公望を見つめるしかできなかった。

公望、人間界に降り立つ。其の三

約一週間後、祈る事しかできなかった花鈴と風麒麟に笑みがこぼれた。

「う、うーん……。してやられたのお」

「お師様！」

「公望様！」

「ん？なんじゃ二人とも、そんなうれしそうな顔をして。革命でも成功したのか？」

「違いますよ、公望様」

「？」

「お師様。お身体の方はもう大丈夫なんですか？」

「うむ。毒には耐性をつけておるからな。ちと回復に時間がかかったようじゃが、身体の方は問題ない」

「よかったあ」

花鈴は安堵のため息をつくと本当に心配したんですからね！と瞳を潤ませながら公望に抱きよった。風麒麟もご無事で何よりと声をかけてくる。

「ふたりともわしの事を心配しておったのか？それはすまんかったのお。ほれ、もう大丈夫じゃよ」

公望は手をパタパタさせて元気になったことをアピールした。

「ところで、仏貴の方はどうなった？うまく事は進んでおるのか？そろそろ三国から返事がきても良い頃じゃが」

「さあ？私はその事はわかりません。お師様の事が心配で仏貴さんの事すっかり忘れてましたから」

「これこれ、なんのためにそなたを人間界に連れてきたのじゃあ。もうちょつと手伝ってくれてもよかろう」

「だってお師様、ただ観光してろとしか仰らなかったじゃないですか？私、詳しい事何も知りませんよ？」

「ふー、しょうがない。さすがに今回はわしも予想外じゃったし、仏貴に聞きに行くか」

二人は部屋を後にし仏貴の元に向かった。仕事をしていた仏貴が公望に気がつき近寄って来る。

「うん？公望、おまえもう身体は大丈夫なのか？なにやら妖怪仙人にやられたとか」

「うむ！見事にやられたぞ！」

「いや、そんな威張って言う事ではないだろ……。おまえ、一応俺の参謀なんだしその妖怪仙人対策でここにいるんだろうが。その

お前が早速やられてどうする。頼むぞ本当に」

「すまぬすまぬ。ちと予想内に予想外の事が起こった」

「なんだそりゃ？そもそも象でなにやってた？」

「うむ。今回の革命に猫姫が出てきてもらっては大変面倒なことになるのでな。公譚の自尊心を否が応でも崩す事と、猫姫をおびき出してどういう仙人なのか確認し、あわよくば人間界から手を引いてもらおうとおったのじゃ。しかし猫姫が思った以上に強くて野心家での。おびき出す所まではうまくいったのじゃが、逆にまんまとしてやられた訳じゃ」

ほっほっほっと公望は笑った。

「お師様！笑い事じゃないですよ！！」

花鈴が公望を叱った。それもそのはず。下手したら公望は死んでいたかもしれないのだから、花鈴としては公望に無謀な事をして欲しくはなかったのだ。

「まあまあ、とりあえず仏貴よ。三国とは連絡がついたのか？」

「あ？ああ、ついたぜ。満場一致で公譚を倒す協定が結ばれた」

「新たな建国とその皇帝にそなたがなることは？」

「それも、北越の桐生きりゆうが摂政になることで了承を得た。あいつは人徳があるからな」

「うむ。結構結構。では、三国の兵は既に動き出しておるのじゃない？」

「そうだろう。お前に言われた通り三国の了承が得たら直ぐに象の国の西北西に位置する、豪防関の傍に集まるように通達してあるかな。でも何故合流地点をあそこにした？豪防関は難所中の難所、決して落とせないと謳われた象の要塞だ。いわば象の要であり戦になったらこちらが不利だろう？」

「説明するのが面倒くさい、それぐらい自分で考えるのじゃ。とにかくそなたは直ぐに兵を動かす準備をしろ。三国が既に動いておるなら、こちらでも迅速に動かねばならん」

「それなら問題ない。いつでも兵は出せるぞ」

「では、今から出発する。そなたも準備が出来次第さっさと行くぞ。もちろん農機具も忘れさせてはならんからな」

「あ、ああ。わかった。じゃあ、直ぐ支度しよう」

仏貴は走って部屋を出ると戦の準備に取り掛かり、こうして西漢軍総勢2万3000人と公望達は豪防関に赴いていった。

公望、人間界に降り立つ。其の四

象の国に程近い豪防関。象の国の最重要地点であり難攻不落と謳われた要塞まで人の足で歩く事3日、公望達軍勢は順調に辿り付く事ができた。西漢から豪防関までは、平野部が広がり一直線で繋がっているため、他の国よりも逸早く到着できるのだ。そのため、まだ他の三国は集まっていない。公望は豪防関から2キロ離れた所に陣営を張ると、直ぐに兵士全員に指示を出していた。

「皆の者、しっかり畑を耕して良い食べ物を栽培してくれーい。耕し終わった者は、わし秘伝の肥料を使って栽培の促進をさせるのじやあ」

兵士達が農耕器具を用いてせっせと農業に勤しんでいる姿を見ながら公望は満足げに声をかけ肥料を渡している。花鈴は、農業と言うものを間直で見た事がないらしく興味心身でその光景を見ていた。一方、仏貴の方は若干不安を持っているようで、公望の指示に従っているものの、納得のいかない感じで公望に話しかけてくる。

「おい、公望」

「ん？」

「なんでこんな事をしてるんだ？もっと作戦練ったり、戦いに備えた練習とかした方が効率的だろ」

「そうでもないぞ。これも立派な稽古の一つ。農作業と言うものは思った以上に足腰を使うのでな、十分稽古になるぞ。体力だつてつくしの」

「ふっーん、そんなものかね。で、これからどうすんだ？考えがあって集合場所ここにしたんだろ？おまえ、なんにも話してくれないからよ。いい加減何考えてるのか教えてくれ」

公望は腕組するとしばし上を見ると、仏貴に向き直った。

「ふむ。まず三国全部がここに到着するのはいつ頃になりそうかの？」

「まあ、遅くても2週間かかるか、かからないかくらいだろ」

「うむうむ。では、これからわしら西漢軍は先に豪防関を落とす」

「はあー！？」

「わしらだけで落とさなければならん理由があるからの」

「まっ、待ってって！あの難攻不落と言われてる豪防関を俺らだけで攻略するのか？」

「そうじゃ」

仏貴は啞然とした表情で公望を見つめる。それに反して公望はのんびりした口調で自分の考えを話し出した。

「何故わしらだけで落さなければならんかと言えば、被害を最小限に抑えるためじゃ。もし、三国全部が合流するのを待っていは象軍も準備が整ってしまい、わしらの位置もばれてしまう。なんてったって6万もの兵が集まるのじゃからな、否が応でも公譚の耳に

届くわい。そうなつては、位置的にまともにやりあつて勝てるのは不可能じゃ」

「だったら、もっと他の場所を合流地点にすればよかつただろ」

「いや。ここでなければならん理由がある。順を追つて説明しよう。まず、わしは象の国に行つていたときに国中に、既に西漢が公譚を倒し新しい国を作ろうとしているという噂を広めてある。その事は、公譚の耳にも入つておる。しかし、所詮は噂。公譚自身を動かすまでにいたらん。そこで、象の要であり目の前にある難攻不落と謳われる豪防関を落してしまえば、確実にさすがの公譚も噂は本当だと焦つて動かざる終えまい。そして、わしらだけで落さなければならぬのは、そなたの地位を確定するためじゃ。今後新たな国の皇帝となるそなたの実力を、広く民衆、象だけではないぞ？三国全体に知らしめる必要があるからの。もう一つ追加するなら、先に言つたとおり四国すべてが集まつてしまつていては、時既に遅いのじゃ。準備の整つていない今のうちに潰しておかなければならん。ここで落してしまえば、逆にわしらにとって有利じゃしな。それに、いかに難攻不落と言われていても、實際戦らしい戦は経験しておらんし、豪防関の輩も油断しておる。まともな兵力なぞ揃つてはおらんわい。現にわしらがこんな近辺に大軍を連れてきたのに何一つ行動を起こさないではないか。まあ、兵の皆をただの民の格好をさせて武器防具などは隠して持つてきておる上に、着いて早々農作業を始めたかな。案の定、西漢軍だとは思つていない。落すなら今が絶好なのじゃよ」

「うーん」

「良いか、仏貴。これは人間同士の争いじゃ。人間の手で決着をつけねばならん。絶対に公譚の後ろについておる猫姫をこの戦に関与

させてはならんのじゃ。今のままでは、猫姫は必ず関与してくる。わしがこんなまどろっこしい方法を取っておるのは、公譚自身の考えで公譚を動かすため」

「そう言ってるが、俺達の方はお前がついてるじゃないか。この時点で仙人が関与してるんじゃないのか？」

「わーしは、手を貸す気などない。あくまで知恵を出しているだけ。仙人の力を一切使わんし、やっておることは人間と変わらん。しかし、猫姫の場合は違う。直接自分の仙人の力を駆使し好き勝手に人間を操っている。その点は問題ないわい」

「詭弁にしか聞こえんが・・・」

「ひゃっひゃっひゃっ！本当の所、猫姫とまともにやりあいたくないだけじゃ！あやつは手強いからな。確実にわしらが勝てるようにせねば。わしは痛い思いをこれ以上したくないからの」

公望は笑い飛ばした。仏貴は、やっぱりって感じでため息をついた。

「ふう。それで、公望さんよ。その知恵とやらでどうやって豪防関を落すのか是非教えてもらいたいね」

「なーに、簡単じゃ。今夜忍び込んで、豪防関の最高責任者を押さえ、のつとる。指揮官さえ押さえてしまえば、こういうのは楽なんじゃよ。人数はいらん。そなた一人でも十分じゃろ。と言うかそなたに行ってもらおう」

「だーかーら！どうやって忍び込むんだよ？」

「進入の仕方はわしに任せておけ。話では、豪防関の最高指揮官は情に厚く、特に女には紳士な態度を取ると聞いておる。話も通じる相手だそうじゃからその辺はなんとかなるはず。それよりも・・・」

「それよりも？」

公望は仏貴をビシッと指差した。仏貴は指差されて自分も指を自分に向けた。

「俺がどうかしたか？」

「この任務はそなたにかかっておる。まず、新たなる国造りのため、そなたの最初の仕事をしてもらう。それが成功するかどうかで今後大きく変わっていくぞ」

「何をしろと？」

「豪防関の最高指揮官、名を齋木と言ったの、その者を説得しろ。直接話をして豪防関を無血開城させるのじゃ。そんなことができないようでは、大国の長など務まらん。もし、失敗して命を落す事になってもそれはそこまでの男ということ。そなたも曲がりなりにも西漢の統治者なら、人一人口説き落としてみよ」

「なんだ・・・結局俺がやるわけね・・・」

「言ったであろう？わしは手を貸さんと。下準備はしてやる故、後は自分でなんとかしてみい」

「はいはい。わかりましたよ、参謀さん」

仏貴は肩を落したものの、すんなりと公望の言う事を聞いた。

「まあ、とは言ってみても実際問題、そなたにここで死なれては困るのでな。命の保障ができる状態にしておいてやるから、とにかくそなたは斎木を説得させれるように夜まで考えておけ」

「りょーかい」

「では、わしは侵入のための準備に取り掛かるかの」

公望は仏貴と別れると、農作業を手伝っている花鈴の方に歩み寄って行った。

「説得ね・・・・・・・・」

一人取り残された仏貴はポツリと呟くとどうしようかと考え出した。時間は刻々と流れていく。

公望、人間界に降り立つ。其の五

さて、仏貴と別れた公望は一生懸命に畑を耕して兵達の手伝いをしている花鈴の元に行く。

「おーお、がんばっとるの。どうじゃ？楽しいものか？」

「はい！やってみると楽しいですね。こうやって自分が育てるってなんかこう、早く実ってくれないかなって待ち遠しくなっちゃいます！」

「そうかそうか。こういった経験も人生には大切じゃから、それを楽しめると言うのは良い事じゃよ」

にこにこしている公望に花鈴は作業を止めいつもの様に元氣よく返事をした。

「私、がんばっていっぱいーっばい育てて、お師様においしい食べ物食べてもらいたいと想いながらやりますから、俄然やる気ですよ！実ったら、お師様食べてくださいね！」

「うむうむ。ところで花鈴。楽しんでる所悪いんじやが、ちとわしの方も手伝ってくれぬか？」

「もちろんです！で、私何をすればいいんですか？」

「実は、そなたに重要な任務を任せたいのじゃ」

「任務？」

「そう」

「どんな任務ですか？」

「今夜、豪防関に忍び込み最高司令官を説得させ、無血開城を申し出る。そこでじゃ、そなたと仏貴二人で忍び込んでもらいたい」

「ええ！！それって重要な任務じゃないですか！？」

「いや、だから最初に言ったじゃろ」

「そ、そんな、どうやって忍び込むんです？・・・あ！ジュニアに乗って空からこっそり行けばいいのですね。あれ？でもジュニアは一人しか乗れませんけど」

「ジュニアに頼んではいかん。それだけではない。今回の任務で仙術、宝貝は用いてはならん」

「じゃあ、どうしろと・・・・・・・・」

花鈴は困った顔をした。それを見て公望も困った顔をする。

「あのなあ……。ちゃんと忍び込む方法はわしが考えてある。そなたはそれに従ってくればよい。別に自力で何とかしろとは言っていないじゃろ？なくにを先走っておる。そりゃあ、場合によっては臨機応変に対応してもらわなければならんが、まずは問題ない。そなたの役目は、仏貴を豪防関の最高司令官に会わせる事と、仏貴に危害が及ばぬように護衛してもらっただけじゃ。とにかく今から作戦を説明するからしっかり頭に入れておいてくれ」

「はあ」

そう言って公望は花鈴に忍び込む方法とその後の行動について説明した。花鈴は、なるほどと頷くと、グっ！！と拳を握った。

「それなら任せて置いてください。それぐらいなら私にもできます」

「うむ。と言うか、そなたにしかこの任務はできん。よろしく頼むぞ。ほれ、護身用の刀を渡しておく故、何かあったらそれで仏貴を護ってやってくれ。武芸に秀でたそなたならその刀一本で大丈夫じやろ？」

「はい！余裕ですよ」

花鈴は刀を受け取ると鞘からスラリと抜き空を切った。花鈴は公望の弟子になってから、武芸も教わっていたのだ。元々運動神経が良いため、現在ではかなりの腕前である。おそらく、並大抵の人間では太刀打ちできないであろう。

「しかし、なるべくならその刀使うことなく万事うまくいってほしいのじゃがな。無血開城を目的としている以上、力は用いたくない。一応その刀も逆刃刀になっているから、血が流れるという事はないと思うがの。ま、そこは仏貴の手腕を見せていただくとしてよ。そなたも滅多な事がない限り、刀を用いるでないぞ？袂に隠しておけ」

「大丈夫ですって！お師様の平和主義の理念はちゃんと受け継いでますよ。穩便に事を運ばして見せます」

「そなたの演技力にかかっておるからな。本当に頼むぞ」

「はい」

「では、わしは下準備に入る。そなたは時間まで好きにしておれ」

公望は花鈴にすべてを任せると、下準備のため一番大きい荷物運びようの台車を用意し、食物保管場所から任務に必要なだけの食料を運び出して台車に乗せた。

そうこうしている内にあつという間に夜。仏貴と花鈴はその台車を引きながら豪防関へと向かって行く。作戦開始である。

「がんばってねえ」

公望は人事のように声をかけ、ひらひらと手を振った。そんな公望を尻目に重い重い台車を二人係で引くこと1時間余り、ようやく豪防関正面門に仏貴と花鈴は到着。二人は門を大きく叩いた。すると中から痩せこけた兵士が一人現れる。

「こんな夜に何用か？」

「夜遅くにすみません。私達、西漢傍の農村に住む兄弟でございます。最近、私達の土地があまり作物の成長に適さなくなり新たな畑を作れる土地を探してこの豪防関近辺に参りました。丁度、この辺りの土地が作物には適しているようで、私達村人達は、ここに新しく勝手ながら畑を作らせていただいております。しかし、ここは豪防関の管轄の土地。やはり勝手は良くないと思い、遅ればせながら齋木様に許可をもらいに参りました」

花鈴はぺこっとお辞儀をして礼儀正しく述べた。仏貴も無言で頭

を下げる。

「そんなことなら気にしなくても良い。好きにしろ。わざわざこんな夜に来るものではない。明日でも良かっただろう」

「いえ、そうも参りません。やはり許可を頂き正式に作業を行うことが私達村の掟でございます。このまま帰っては、代表として来た私が村の長に怒られてしまいます。それに、今日実ったばかりの作物を新鮮なうちに齋木様ともども、豪防関の方々に召し上がっていただきたいと思ってこうして謙讓しに参ったと言うのに」

「何！？作物とな！！」

作物と聞いて兵士が話しに食いついてきた。花鈴と仏貴は台車を包んでいた大きな布をめくり、並々積んである食料を見せた。

「はい。こちらに積んである者は全て、私達で作った食べ物でございます。しかし、残念です。せっかく豪防関の方々に新鮮でおいしい食べ物を召し上がってもらおうとわざわざこれだけの量を運んできたのに。仕方ないですね、兄さん。帰りましょう」

「そうだな。いらないというなら持つてきても仕方なかったよ。好きにしろって言われたことだし、このくそ重い食べ物持ち帰るか」

仏貴も花鈴の話にうまく合わせると台車を反転させ帰ろうとした。そこに、兵士が慌てて待ったをかける。

「ま、待て待て！わざわざ我らのために持つてきてくれたのに、ここで帰しては齋木様に怒られてしまう。しかも、その持つてきた相手が女性だと知れば尚の事。しばし待っていてくれ。直ぐに齋木

様に報告しに言ってくる」

兵士は走って中に入っていた。仏貴はにやりと笑う。

「ほお、うまくいきそうじゃないか」

「当然です。お師様の考えた策ですよ？ 抜かりはありません。しかし、さすがお師様！ よく状況を把握してらっしゃる。象の国が貧困にあえいでいると言う事は、その管轄にある豪防関の兵士達ももちろん食料が不足して、皆おなかを減らしているはず。さらに、女性に紳士な態度を取り失礼を受けさせない齋木さんの性格を知っている部下達なら、女性の私がこんなに多くの食料を持ってやってくれば是が非でも、断るわけがない。はあ、やっぱりお師様だわあ」

花鈴はうつとりしながら手を組んで空を見上げた。その態度を見て仏貴は阿呆やのゝと的確な突込みを入れる。それで我に返った花鈴は、仏貴をキッと睨んだ。

「仏貴さん！ 後は、仏貴さん次第ですよ。ちゃんと齋木さんを説得してくださいよ？ お師様の策を失敗させたら、私が許しませんからね！」

「わーってるよ。でも、まだ齋木に会えるとは限らないだろう？ まず齋木と話し合える場を作らなきゃ」

「大丈夫です！ お師様は絶対に齋木さんが挨拶に出てくるって仰ってました。私が行けばまず100%だって。お師様が絶対と言ったら絶対なんです！ 齋木さんが現れたら後は私が場を作りますから」

「はいはい。えらく自信たっぷりなのは良いけど、公望ってそんな

に信用できるのかよ？なーんか不安なんだよね、あいつの態度は。何考えてんのやら俺にはさっぱりわからんよ。なんでおまえはそんなに公望を信じれるんだ？この作戦失敗したら、二人とも命危ないってのに……。大体、考えた当の本人がやらなくてなんで俺ら二人だけでやらなきゃならないんだよ」

「お師様だから良いんですっ！！お師様が私達を信用して送り込んでくれたんだから、それに応えなくちゃ」

「忠義だね。俺もそんな部下が欲っすい」

「私は部下じゃ有りません！弟子です！でーし！」

「変わらねえよ。あっ！来たぞ！」

門の奥からさっきの兵士と凛々しい男がやってきた。兵士がこちらの方ですと、その男に話を振った。どうやらこの男が斎木らしい。

「やあ、これはこれは可愛らしいお嬢さん。私が豪防関最高司令官の斎木だ。この度、我々豪防関の者達のために食べ物を持ってきてくれたようで、真ありがたい話。実の所我々は明日をどうしようかというぐらいに食べ物に困っていた所なのだよ」

斎木は笑顔で出迎えると、握手を求めてきた。花鈴はそれに応え握手をする。

「始めまして、斎木様。お会いできて光栄です。私は花鈴と申します。こちらは私の兄です」

「どうも、斎木様」

仏貴も握手をした。

「いやいや、せっかくこんなにたくさん食料を運んできてくれたんだ。疲れただろう？是非ともお礼をしなければ、と言いたいが生憎お礼ができる物もなくなてな。しかし、このまま女性を帰しては私の礼儀に反する。どうしたものか」

「でしたら齋木様。少々中で休ませていただけませんか？別におもてなしを受けるようなことはしてませんし、元々齋木様の正式な書類による土地の使用許可書を頂きに参っただけですので」

「そうか。では、私の部屋で茶の一杯でも出そう。その間に、許可書を作成しているのでゆっくりと休んでいくが良い。ささ、立ち話もなんだから中へどうぞ」

「失礼します」

齋木は兵士に持ってきた食料を中に入れるように指示すると、三人は齋木の部屋へと向かっていった。途中途中で、勇んで走って行く兵士達とすれ違う。すれ違い様聞こえたのはやはり食べ物 came たぞという言葉だった。

「すまないねえ。ばたついた所を見せてしまって。皆飢えていたので、せっかく持ってきてくれた客人が来たと言うのに礼の一つも言わずに行くとは。昔だったらこんな事はなかったんだがね。これも公譚様がおかしくなられてから。今、象の国自体がおかしくなってしまうている。このままではどうなってしまうのやら・・・っと、すまんすまん、つい愚痴ってしまったよ。私もおかしくなってきたのかな？」

謝りながら自室の扉に手をかけ二人を中に促した。斎木は茶の準備をしにいき、二人は椅子に座った。しばしして斎木が茶を持ってくる。

「では、ちょっと待っててくれ。今、書類を作成するから」

自分の机に座ろうとした斎木に花鈴がすかさず話を振った。

「斎木様。実はその件ですが、私達は別の話がしたくて貴方に会いに来たのです」

「ん？別の話とな？」

「はい。詳しくはこちらにいる仏貴さんが話します」

「仏貴と言うと、何処かで聞いた名だな。確か西漢の・・・」

「そうだ。俺は、前西漢統治者王貴の息子であり、現統治者である仏貴だ。斎木、お前に話があってやってきた」

「おお！君が王貴殿の息子か。立派に成長したな」

「親父を知ってるのか？」

「もちろんだ。王貴殿にはよく世話になった。まさか、その息子にもこうして食料を持ってきたらって世話になることになるとはな。いやいや、で、身分を隠してまで私に話をしに来たのは何用だ？」

「親父の事を知ってるのなら話が早い。斎木、お前は情に厚く話の

わかる相手と聞いている。そこで、お前に重要な話が合ってわざわざやってきたのだ。身分を隠してきたのは、象の国に関わる事だからだ」

象の国に関わる事と聞き、斎木が真剣な顔になる。仏貴は立ち上がる。座った斎木の目の前に行き正面から堂々と話を続けた。

「俺はまどろっこしいのは嫌いだ。だから率直に言おう。お前はさっき今の象の国、そして公譚はおかしくなっていると云っていたな。お前から見て、象の国はこのまま公譚に任せておいて、今後元の良い国に戻ると本気で思っているか？俺はそうは思わない。民もそうは思っていないはずだ。象は腐りきっている」

「確かに。今の公譚様の政は狂いすぎだ。今更修正して元に戻そうとしても、それは土台無理な事だろう。もう修正が効かないところまでできてしまっている。民の信頼はなくなり、治安は悪化の一途を辿る。毎日死人の数は増え、もうぼろぼろだ。この豪防関でも栄養失調で倒れているものが多数存在する。なんとか自主栽培を行ってはいいるが、その栽培する気力すら既がない状態だ。今更公譚様が、元の公譚様に戻ったとしても、前の象の国にするには何年掛かるかわからないのが正直な所」

「そこで、俺は見かねて決心をした」

「なんだ？」

「公譚を倒し新たな国を作る。そして俺が新しい皇帝になる」

「な！？革命を起こす気か？」

「そうだ。それで、おまえに協力してもらいたい。俺はそれを交渉しに来たのだ」

「仏貴殿、本気か？革命は即死罪だぞ」

「知っている。どの道成功しなかったら死ぬわ。これは生きるか死ぬか。俺自信の問題じゃない。民、そしてその子孫たちが平和に幸せに暮らしていけるかが掛かっている問題だ。俺は既に北越、東宮、南秦とも話をつけてある。あと2週間以内には四国の兵6万の軍勢がこの豪防関傍に集合する」

「勝てる保障はあるのか？公譚様は10万の兵を持っているのだぞ」

「そのためにお前に協力してもらいたいと言っているのだ。お前が協力するかしないかでこの戦局は大きく変わる」

「・・・具体的に何をしろと言う？」

「俺の配下に入れ。そして、この豪防関を明け渡して欲しい。親父に義理を感じているのなら力を貸してくれないか？この豪防関は象の要の要塞。こちらの手に入ればより有利になる」

「・・・・・・・・」

「頼む、力を貸してくれ。俺のためじゃない、民のため子孫のため、果ては象より良い国を直ぐに造るためなんだよ。お前にだって子はいらんだろう？その子供達が将来幸せに暮らしていける安心した国を造らなければならぬんだ。誰かがやらなきゃこの先ずっと苦しんで生きていく事になるんだぞ」

仏貴は力強く真剣に齋木に言った。齋木は無言のままである。

「返答は？」

「・・・今夜一晩考えさせてもらえないか？明日の朝、返答をする。協力するか、しないなら今回の革命話は聞かなかったことにしておく。誰にも話はしない」

「わかった。良い答えを聞かせてくれることを期待してるぞ」

「うむ。今日はもう遅い。部屋を用意するから、泊まっていくと良い」

「ああ、ありがとう。後、言っておくが俺を騙まし討ちをしようとしても無駄だからな。ここにいる花鈴は武芸の達人だ。花鈴一人でここにいる兵全員を倒す事は容易だ」

「そんな卑怯な真似はしない。それに、仏貴殿には世話になった。恩を仇では返さない。私を信じろ」

「信じてるよ。言ってみただけさ。それじゃあお言葉に甘えて泊まらせてもらうぞ」

こうして、仏貴と花鈴は豪防関内の一室で一夜を明かした。齋木は約束通り、騙まし討ちなぞするようなこともなく、兵士達にもただの村人と説明して部屋に案内させていた。そして、翌朝、再び齋木の部屋を訪れた二人は、目の下にクマができ、疲れ果てた姿をした齋木の前に立った。

「約束の返事は？」

仏貴の質問に対し、立ち上がって齋木は手を前に出し握手を求めた。

「協力しよう。豪防関を明け渡す。なんとしても公譚様を倒し革命を成功させて、一刻も早く良い国を造ってくれ。私達豪防関の者はすべて今日より仏貴殿の配下に入る。期待しているぞ」

「わかった。必ずやつは倒し、良い国を造ってみせる。ありがとう」

仏貴は、がしつと齋木の手を握った。そしてそれから直ぐに豪防関の兵士全てに通達が行き、豪防関に西漢の旗がデカデカと掲げられた。それを見た公望はほおっつと感心すると西漢軍全員に豪防関にすぐさまありったけの食料を持っていくことと、引き続き農作業を続ける事を指示し、自ら豪防関に赴いた。

「お師様！」

花鈴が駆け寄ってくる。仏貴も齋木も後ろからついてきた。

「よくやったぞ、二人とも」

花鈴の頭を優しく撫でてやる。花鈴はえへへと笑いながらうれしそうにしていた。

「公望、とりあえず俺は新たな国の皇帝として合格か？」

「まあ、まだまだじゃ。これが最初の第一歩にしか過ぎん」

「厳しい参謀さんだねえ」

「仏貴殿、こちらの方は？」

「あ、ああ。俺の参謀だ。名を公望と言う。なにやら仙人とかいう存在らしいが詳しい事は忘れた。とにかく、こいつが公譚を倒すための頭脳になってくれるらしいから、斎木もこいつの言う事はなるべく聞いてやってくれ」

「わかった。よろしく頼む、公望殿」

「こちらこそ。斎木よ、どうか仏貴の新たなより良い国を造る手助けをしてやってくれ。わしは、知識しか貸してやれんから」

「うむ、無論だ」

「では、早速じゃが、他三国が合流するまでの間。元気のある者には農作業をさせてやってくれ。弱っているもの、栄養失調になっているものには、十分な食事と休息を取らせる事。肥料はわしの持ってきた肥料を使ってくれ。良いか？」

「よからう」

斎木は直ぐに言われた通りの指示を出し、この先他三国が集まる頃には豪防関の周りにはそこたら中、畑が造られ様々な作物が栽培される事となる。そして、程なくして豪防関が西漢軍にのっとられたという知らせも公譚の耳に届いた。これにより徐々にではあるが、公望の思い描いている構図になってきたのであった。

公望、人間界に降り立つ。其の六

時間は豪防関が西漢軍にのつとられる2、3日前に遡る。処変わって舞台は象の国、公譚皇帝の住まう真美城。公譚は民たちと違って豪勢な暮らしをしてはいたものの、その晴れやかな生活とは裏腹に近頃物思いにふける事が多くなった。

「また考え事？どうしたのん、公譚？」

公譚に寄りかかりながら猫姫は、酒を片手に公譚の顔をなぜた。

「ん？いやなに、なにやら近頃我を亡き者に使用とする無礼な輩がおると噂がたっているではないか。それがちよつとひかかってな」

「そのことなら大丈夫って言ったはずよん？わらわがちゃんとその噂の出所を潰してあげたから」

「しかし、それでも未だに国中にはその噂で持ちきりではないか。それに噂がたったということはそう言う事を考えた輩がおるということ。わが国では考えただけでも死罪と決まっているのだから、皇帝としてその者を直ちに捕らえなければならん」

「いいじゃないん？そんな事気にしてもしようがないわん。最近の公譚はそのことばかり考えて、わらわの事を放置してなくい？わらわ寂しいわん」

猫姫は表面上悲しげな顔をした。

「いやいや！そんなことないぞ。我は猫姫の事を第一に考えている。

猫姫のためならなんでもするぞ！そうだな、所詮噂は噂。我が直接手を下す事もあるまい。気にしていてもしょうがないか」

「そうよん。それより、わらわお腹すいたわん」

「良いぞ良いぞ。これ！奴隷を調理場に連れて行け！」

「はっ！」

兵士に命を下し、でれでれとしている公譚ではあったが、やはり噂の事が気になっているようで猫姫に対する態度に変化が見られてきた。

「術が効きにくくなってるわん。公望ちゃん、面倒くさいことしてくれるじゃない」

猫姫はそんな公譚をみて舌打ちした。そんな折に一週間ほどして公譚の耳に豪防関の話が舞い込んできたのだ。

「申し上げます！」

「何事だ？」

「はっ！たった今入った情報によりますと、豪防関が西漢軍にとられたとのことですよ！」

「何！？」

さすがの公譚もこの話には驚いた。よりもよって豪防関がのつとられるとは思ってもいなかったからだ。

「あらん？」

「真の話か！それは！？」

「はっ！現在、豪防関には西漢の旗が掲げられております」

「己！噂は本当であったか！直ちに兵を集めよ！豪防関に向かい西漢軍を討伐する！」

「はっ！」

「公譚、いいじゃない。たかだかひとつ要塞を取られたからってそんなむきにならなかつて。それよりもっと楽しい事をしましょん？」

怒り狂っている公譚をおさめようと猫姫はしなやかに言ったが、公譚は聞く耳を持つとうしなつた。

「そうも言っておれん。豪防関をのつとるということは、明らかに我に対する反逆行為！許される事ではない。全軍を持って、西漢軍を殲滅する。皇帝として指揮は我がとる」

「なら、わらわも行くわん」

「それはならん。大事な猫姫に危害を及ぼすわけにはいかないし、戦に女を連れてはいけん。なくに、たかだか2万の西漢軍など我だけで十分。猫姫は城にて吉報を待っておるがいいぞ」

「そおおん？じゃあ、わらわは公譚と離れたくないけど、待ってて

あ・げ・る」

「うむ。我も猫姫とは一時も離れていたくはないからな。直ぐに片付けてくるぞ！」

「楽しみにしてるわん」

「では、我も戦の準備に取り掛かろう。久しく兵は動かしていないからな。準備に手間が掛かる。急がねば」

そう言って公譚は戦の準備を始めた。一人取り残された猫姫は酒を飲みつつ、余裕の笑みを浮かべている。

「公望ちゃん。今はあなたの手のひらで踊ってあげる。でも、早々うまくいくかしらん？」

猫姫は酒をくいと飲み干した。

その頃、豪防関には四国すべての兵が集まっていた。集まってもやることは変わらず農作業。ひたすらに作物を栽培している。6万もの兵が作業している上に公望の特製肥料の効果もあって、兵士だけではとても食べきれないほどの食料が出来上がり毎日その量は増えていく。豪防関内部では、公望達統治者が集まり、作戦会議を行っていた。

「後近日中。おそらく、五日後ぐらいには公譚軍とやりあうことになるじやろ」

「どう動くよ？もちろん、この豪防関を砦として公譚軍を待ち受けるのдарろ？」

「いや、わしらは豪防関から出て東に1キロ。この場所で陣を張る」

公望は、トントンと地図を突いた。

「はあ？それじゃあ、なんのためにこの豪防関を手に入れたんだよ。より戦を有利に運ぶためだって言ってただろうが。この要塞を使わないのは逆に不利だろう？」

「私もそう思います。まともに遣り合って勝てるとは思いません。せっかく豪防関があるならそれを十分に使うべきです」

桐生も反論をしてきた。その場に居た皆も納得がいかないような顔をしている。それを論すかのように公望は話した。

「もしこの場所を戦の中心としてしまつては、せっかく育てた畑が台無しになってしまう。それに、6万もの兵が集まったとなれば、要塞に立て籠もると動きが取りにくくなり逆にこちらが不利。そもそも要塞での戦いは、自分達が少ない兵力しかないときに使つてこそ十分に価値が発揮される。こんな大勢いるのなら、外で陣を張つた方がよい」

「だから、なんで豪防関を手に入れたんだよ？」

「それは最初に言つたであろう？そなたの地位を確定するためと公譚をおびき寄せるためじゃ。だれもここを戦場とするなど言つておらん。今回の事は餌にしかすぎん」

「では、ここに陣を張つて公譚軍を待ち構えるとして、その後どう対処するのですか？」

「うむ。ここからが重要じゃ。皆の者しかと聞いて、兵士達全員にその旨を伝えよ。この作戦は迅速さが求められる。しっかり頭に叩き込んで置くように。では説明するぞ」

公望は一連の展開について説明した。その場の全員が作戦について理解する。

「公望、本当にうまくいくか？」

「いかせにゃならんのだ。それはそなた達次第。ちゃんと合図に従えば問題ないはずじゃ」

「公望様、一つ聞きたいことがあるのですが」

「なんじゃ、桐生？」

「あの、公譚軍は確かにやってくるのですか？まず来なかったら作戦の意味がなくなりますよ」

「それは問題ない。花鈴に調べてきてもらった所、案の定公譚も兵を集め動き出している所らしい。必ずやってくる」

「それなら良いのですが」

「では、皆の者。本番は今言った作戦で執り行ってくれ。各国の軍はそれぞれ所定の場所に配置すること。良いか？」

「ああ」

「後は、当日まで兵士達の身体を休めて十分な休息と栄養を取らせておいてやってくれ。それじゃ解散」

言われたとおり、皆戦に備えて休息に入った。そして、四日後。戦場にそれぞれの国は兵を配置した。しばらくして西漢軍の遠方に、公譚軍10万の兵が有象無象とやってきたのが目に映る。互いがある程度距離を取る。

「いよいよか」

「とにかく、そなたらは指示に従って動いてくれ」

「ああ」

作戦開始のドラが鳴る。西漢軍は一斉に公譚軍に突っ込んでいった。公譚軍も真っ向から受けてたつ。とうとう、象の国の将来を左右する戦が始まったのである。

公望、人間界に降り立つ。其の七

公望は、今回の戦に猫姫が出てきていない事を確認したうえで、西漢軍に中央突破の陣で公譚軍10万の兵に突撃をかけさせた。それに対し公譚軍は、五倍近くの兵力をもって三角形を形作る両翼の陣を張り西漢軍を囲い込む作戦に出たようだ。

「やはり両翼の陣か。兵力の差からそう来るとは思っておったが、これは手間が省けたぞ」

公望はにやにやと怪しげに笑っていた。隣に居た仏貴はその姿を見て気持ち悪う！と突っ込みを入れつつ、公望の言った作戦通りに事を進めた。西漢軍が公譚軍の両翼に囲まれそうになる直前に合図のドラを鳴らした。前進していた西漢軍が今度は一転後退を始める。それにつられて、自然と両翼に居た兵は中央に移動し一つの塊になって突撃してくる。

「よし！もう一度ドラを鳴らせ！」

仏貴の指示に従いまたドラを一回鳴らした。すると西漢軍は今度は左右二手に徐々に分かれながら前進をし、後ろから第二陣の北越軍が正面突撃を開始する。さらに両端に陣取っていた東宮軍、南秦軍も二手に分かれた西漢軍に合流し突撃を開始した。しかし、また公譚軍とぶつかり合いそうになる寸前に、ドラが鳴らされ左右に分かれた西漢、東宮、南秦が若干動きを止めただけで、北越軍は引き下がる。そしてある程度下がるとまた突っ込むというこのヒットアンドウェイの動作を何回か繰り返した。

「おーお、面白いように公譚軍のやつらこちらの思惑通りに動いて

くれるじゃないの。あんなに中央に集まっちゃって。そろそろいいんじゃないか、公望？」

「ええ、まさに作戦通りに事は進んでいると思います。最後のドラを鳴らしてもいいんじゃないんですか？」

仏貴と桐生が公望に聞いた。公望は無言でコクッと頷く。それを見て、仏貴は最後のドラを鳴らす指示をした。ドラが鳴らされる。四国の軍は一挙に公譚軍に向かって突進を開始した。二つの軍の距離が縮まっていく。するとどうだろう。気がつけば公譚軍10万の兵は何時の間にか四国の軍6万に綺麗に円状に囲まれていた。まさに公譚軍は四面楚歌の状態である。円はじわりじわりと小さくなり、それに呼応して中心の公譚軍はさらに小さな塊になっていく。

「よっしゃー！このまま殲滅だー！全軍やっちゃまえー！！」

その光景を見ていた仏貴は意気揚々と叫んでいたが、そこに公望は待ったをかけた。

「なんでえい、公望？」

「もう勝負の結果は見えておる。無駄な血を流す必要はない。それ、花鈴」

公望が花鈴に指示を出すと花鈴は「はい」と返事をしドラの所に行き、ドラを二回鳴らした。四国の軍の動きがぴたりと止まる。

「では、わしはちょっくら行って来る」

「お、おい。行くなってどこに？」

「見てればわかるわい」

風麒麟に乗り公望が戦場の真っ只中に入っていた。そして指揮していた公譚軍の大將を見つけ話しかける。

「そなたが、公譚軍の大將か？」

「そうだ。公譚様にこの軍を任されている僧雲だ。おまえは？」

「わしは、この仏貴軍の参謀である公望と言う。そなたに降参するよう言いに来た」

「降参だど!？」

「そうじゃ、いくら10万の兵をもつそなたらでもこうなってしまうては、唯一方的に消耗させられるだけ。勝敗は見えておる。無駄な血を流すものではない。そなたらはいずれここにいる仏貴の軍と共に新しい国を支え護る新たな刀とならねばならん。あの腐った公譚に義理立てをし、無意味に命を落すより、降参してわが軍に入り共により良い国づくりの手助けをしてやってくれぬか？ 仮にここでそなたらが死んでも、公譚は何も思いはせん。そなたらの事を一つの駒にしか思っておらんからな。そのような者のために大切な命を粗末にするものではない。そなた達だってもはや公譚に忠義はありはせぬじゃろ？」

「むう」

「そなた一人が公譚に忠義を持っていたとしても、他のものはどうじゃ？ 皆が皆そなたと同じではないぞ。守るべき家族が居て、自分

のこれからの人生を幸せに生きて生きたいと願っておるはず。その願い仏貴なら叶える事ができる。もし、馬鹿な考えを貫いて全軍に死して忠義を見せろなぞというのであれば、わしが自らこの場でそなたを仕留め無理やりにも降参させるぞ」

すらりと飛燕を抜き、僧雲に向けた。

「くっ、わかった。確かにお前の言うとおりで。しかし約束をしる。必ずより良い国を造ってくれると。俺達が、家族が幸せに暮らせる政をし、二度と公譚様の様にならないと」

「うむ。約束しよう」

「なら、降参する」

「話のわかる大将で助かったぞ。公譚軍及び四国の軍を代表して礼を言う。そなたらはこれよりわが軍に加わるが良い」

僧雲は直ちに降参の意思を示すため全軍に武器を捨てさせると、旗を振った。それを見た仏貴は、全軍に戦の終了の合図であるドラ三回叩いた。緊張の糸が一挙に消え、公譚軍合わせた約16万の兵が豪防関にやってくる。公望も仏貴の下に戻ってきていた。

「いやいや、話のわかる大将で助かったわい」

「公望様、降参させてきたのですか？」

桐生と斎木は感心しながら聞いてくる。

「当然じゃ。あやつらもいずれは新たな国の礎と成る大事な民の集

まり。こんなところで命を粗末にしているものではない」

「じゃあ、おまえ最初からそのつもりだったのか？」

「そうじゃ」

「はぁーん。すげーな。こんだけの大战で誰一人死なせないなんて
仏貴もさすがにびっくりしながら公望の行動を褒めた。

「わしは完全平和主義者じゃからな。血を見るのは嫌じゃし、争いも嫌いじゃ。そなたもこれから民を束ねる存在になるのなら、もっと先のことを考えて、自軍、敵軍関係なしに民がどうやったら幸せに暮らせれるか思考を働かせぬか。その辺がそなたには足りんぞ。行き当たりばったりでは困る」

「その辺はお任せください。私達がしっかり仏貴様を支えましょう。
ねえ、齋木殿」

「無論だ」

「うむ、頼むぞ桐生、齋木達。そなたらがついていれば安心じゃ」

「なーんだよ。俺一人じゃだめだったのか？」

「まだ甘い」

三人は口をそろえて仏貴に言った。仏貴はへーんだと少しすねたようである。その姿を見て花鈴は笑った。さて、この状況になって困ったのは公譚の方である。自分の陣営で吉報を待っていた公譚は

予想外の連絡を聞いた。

「申し上げます！」

「どうした？もう片がついたか？」

「いえ！わが軍は全軍敗北。西漢軍に取り押さえられました！」

「何！？」

ぱっと立ち上がると、陣営を走りぬけ、戦場の見える場所に立つ。すると全軍が武器を捨て豪防関に向かっていくのが見えた。

「ば、馬鹿な！？たった二万の兵にわが軍が負けだと・・・」

しばし呆然と見つめていると、唇をかみ締め即座にたった一人、象の国に舞い戻っていった。真美城では、優雅に猫姫が戯れている。そこに憤怒した公譚がやってくる。

「どうしたのん、公譚？」

「わが軍が全滅した・・・おのれおのれおのれー！！」

「まあ？やっぱりわらわも行った方がよかったんじゃない？」

「仏貴め！来るなら来い！我が自ら手を下してくれる！！」

「ち、ちよっとう、こうたくん」

激怒している公譚は猫姫の言葉も聞かず、自室へと戻っていく。

「むむむ。やってくれるじゃない公望ちゃん。わらわの術が効かなくなってしまうたわん。しょうがない。人間界のゴージャス生活はこの辺にして、まずはやっかいな仙人共から潰しちゃうなきゃだめなようねん。でもそのま・え・に、公望ちゃんにはお痛をしておかなくちゃねんっ」

猫姫は相も変わらず優雅に酒を飲みつつ戯れていた。一方象では、今回の戦の話が国中にあっという間に広がり、民衆は新たな皇帝の存在に期待を膨らませ、仏貴がやってくるのを今か今かと心待ちにするようになり、希望のない生活にたったひとつ希望を見出し始めていた。

仏貴達はというと、勝利の祝賀もあげず休息を早々に取ると直ぐに行動を起こし、今まで作ってきた作物をすべてかき集め、台車にありったけ積み込み豪防関を後にした。その食料の量は、公望の特製肥料の効果もあって、あっという間に作物は育ち、象の国と自分達あわせて食べても何ヶ月ともちそうな程である。そして戦から数日後にはもう象の国の入門まで到着していた。

「良いか、仏貴？この門の先にはそなたを心待ちにしておる民衆が多々おる。こういうのは最初が肝心なんじゃ。威風堂々とした態度で入って行けよ」

「わかってるって」

「仏貴の後ろに斎木と桐生が並んで入って、残りのものは指示した通り直ぐに民に食料を与え、傷ついている者、病の者の対処に回れ。では、門を開けるぞ」

「ああ」

公望と花鈴は大きな門を開けた。仏貴達はゆっくりと勇ましく入っていく。それを見た民衆がわらわらと近寄ってきて、新たな皇帝の姿に見惚れた。仏貴は堂々と馬に跨り、大声を張り出しながら、民衆の中を抜けていく。

「皆の者！俺が西漢の統治者仏貴だ！！公譚を倒し新たな国を造るためにやってきた！！まず手始めに食料不足から解消する！！これから、皆に食料を配っていく！量はたくさんあるからなくなる心配はしなくていい！！焦らず、兵士達から受け取ってくれ！！病を患っている者は、遠慮なく申し出てくれ！！！」

兵士達は直ぐに食料を民衆に配りだした。わー！と民衆は叫ぶと、久しく見る食べ物に感激をし我先にと食いついてくる。それを、花鈴が兵士達と協力して手際よく捌いていった。本当に久しぶりに象の国に笑顔とうれし涙が溢れた。仏貴の最初の印象付けとしては、最高の状態である。

「なるほどね。兵士達に農作業をさせてたのは、これを見越しての事だった訳か」

「今頃気づくな。桐生なんぞはすぐに気づいておったようじゃぞ」

「そうなのか？」

「うすうすですけどね」

「ふーん。なんにしても、お前を参謀にしたのは正解だったかな」

「まだ気を抜く出ない。ここからが本番じゃぞ。今は敵の目の前に

いる。公譚を直に倒すのはそなたの役目、それを持ってはじめて民衆に認められるのじゃぞ。わしはもう手を貸さん。というか、猫姫の問題がある故、わしはわしでそれをなんとかせねばならん」

「じゃ、とりあえず、兵士に指示は出して俺達は身でも隠すか。民衆の事は、桐生と斎木に任せよう」

「わかりました」

そうして仏貴は、象の国の隅々までに食料を運ばせ、病を患っているものの治療も行なわせた。その間、仏貴、公望、花鈴の三人は真美城近くのとある空き家に身を隠すと、今後の話をし始める。

「ふう、とうとう象の国に入ったな」

「うむ。ここからが問題じゃ。猫姫のことはわしらでなんとかするが、そなたは大丈夫か？公譚は武芸百般に優れていると聞いておる勝てるか？」

「武芸の腕なら俺だって負けないぜ？倒せる自信はある。なにより公譚と背負っている物が違う。それより、お前の方こそなんとかなるのかよ？前負けたじゃないか」

「それなんじゃが、花鈴」

「はい？」

「猫姫を人間界から追い出す役目、そなたに任せる」

「ええ！？」

「いや、わしはあの手のタイプは苦手だな。それにあやつの術は女性には効かん。気をつけるのは、毒だけじゃ。わしがやってはあの嫌あんな香りだけでやられてしまうわい。と言う訳でよろしく」

ぽんっと花鈴の肩を叩いた。花鈴は焦ったが、公望の頼みであるし、もともと公望の手助けをしたくて付いて来たんだから役に立たねばと思い、了承した。

「では、明日行動を起こすぞ」

そう言って三人は眠りについた。

次の日……

朝から町の状態を見て周り、ちゃんと食料などが行き渡っているかを確認した後、三人はいよいよ真美城に乗り込んだ。玉座の間に公譚が座り、横で猫姫が立っている。

「公譚。おまえを倒しに来た！俺と決闘しろ！」

ビシッと仏貴は指をさした。

「ほお、待っていたぞ。我を倒そうなど無礼千万。ひよっこが！その罪万死に値する。良からう、相手をしてやる」

余裕綽々で公譚が立ち上がると、ふたりは一斉に剣を抜き飛び掛っていった。猫姫はしなやかに公望の方に近寄ってくる。

「ひさしぶりねえ、公望ちゃん。あれだけ痛い目あわせてあげ

たのに、懲りずにまたやってきたのねん？今回の事はちよつとわらわも頭にきたわ。この間程度で済むと思わないことよん？」

「猫姫！」

「あらゝん？なゝにお譲ちゃん」

「あなたの相手は私よ！お師様には指一本触れさせないんだから！
！」

「ふうゝん。ちゃちな代わりね、公望ちゃん。こんな小娘にわらわが倒せると思って？」

「やあゝつてみないとわからんぞ」

「まあ、いいわん。二人まとめて痛い目にあってもらいましょ」

猫姫は手をふわつとあげると毒の香りを風に乗せて花鈴に向けた。
しかし、花鈴に効果がない。

「あらん？」

「あなたの使う術が香りと聞いてぴんつときたわ。なぜお師様が私に任せたのか。香りは空気中に含まれる水分に包まれて飛散して飛んでくる。なら、私の周りの空気を凍らせれば香りも凍って効かなくなるわ」

「ふうん。あなた公望ちゃんの弟子なの？公望ちゃんの弟子にしてはできるじゃないん」

「じゃから言ったろ？やってみないとわからんと。言っておくが花鈴はわしより遥かに強いぞ」

「あらあら、おもしろいじゃない。じゃあこうしましょう。わらわに傷一つでもつけられたら、わらわもおとなしく人間界から手を引いてあげるん。でもどんなに強くても、わらわに傷をつけられるかしらん？」

「だそうだ。花鈴、実力見せ付けてやれ」

「はい！」

花鈴は宝貝を持つと水を超高压に圧縮してそれをさらに氷でコーティングし、猫姫に斬りかかって行った。こうして、ふたつのバトルが繰り広げられるのである。公望は、そのふたつのバトルをキセルをふかしつつ見守っていた。

しばし観察する事、仏貴と公譚は一糸乱れぬ攻防を繰り広げ、実力は互角。しかし、若さと今の今まで実戦をしていた仏貴と贅沢三昧をして体のなまっている公譚では、勝敗は自ずと見えていた。それでも尚、仏貴と互角なのはさすが大国の主である。もし現役だったら直ぐにやられていただろう。

「ほほお、仏貴も言うだけあってなかなか強かったんだな。これなら、任せておいても大丈夫か。じゃがあやつ、集中力が足りないかなあ。何時足元すくわれるやら。ま、なんとかなるじゃろ。それより猫姫のほうじゃが・・・何故あれだけの術を喰らって傷一つ点かんのじゃ？そういえば、あやつの羽織っている衣は何処かで見たような・・・？」

花鈴が斬りかかったり、仙術で攻撃しても猫姫にはまるっきりダ

メージがない。猫姫は動こうともせず余裕で笑っている。花鈴はさすがに体力が尽きてきたらしく、いったん距離を置いて荒い息遣いをする。

「どうして、何も効かないの！もうっ！豪天斬撃掌！！」

やけになってすばやく印を組み気の斬撃を掌から出したが、やはり猫姫にはそよ風程度にしか当たらない。

「あら〜ん？公望ちゃんより強いって言っても所詮こんなものなの？猫姫がっかりい〜」

猫姫は指を頬につけくねくねと身体を動かす。

「でも、確かに強いと思うわよん。実力だけだったら、大老君と同じくらいまでいってるんじゃないかしら」

「ううう、お師様」

困った顔で花鈴は見てくるが、公望はうーんと悩む。そして、ふと頭の片隅にあった記憶が蘇った。

「あああー！！！！思い出した！！確かそなたのその衣、超寶貝の一つで、完全絶対防御型の寶貝ではなかったか？」

「そうよん。超寶貝の中でも一級品の二大寶貝の一つ、防全布よん」

「お師様、何ですそれ？」

「うむ、超寶貝にはその中でも頂点に立つ、二つの寶貝がある。そ

のうちの一つで完全防御でありとあらゆる攻撃を吸収し、羽織っている者を完全を守る防御型宝貝があるのじゃよ。師匠の話では大分昔に行方がわからなくなっていると聞いておったが、まさかそなたが持っておったとは……。こらー！卑怯じゃぞ！！」

「そんなことないわん？公望ちゃんだって、その子使ってわらわの攻撃無効化してるじゃなくい？お互い様よん」

「お師様、どうしましょう？」

「ふっぬう」

さすがの公望もこれは予想外だった。防全布の前では、いかに花鈴が強かろうとも文字通り傷一つつけられない。かといって、面倒くさがりで戦いの嫌いな公望としては自分からやりあいたいとは思わなかった。そんな折に、どうやら仏貴の方が決着がついたようである。

「かはっ！」

仏貴の剣が公譚の身体を貫いた。公譚は、猫姫の方を向くと手を差し伸べる。

「ま・お・・・き」

「ざくんねん！やられちゃったのん？公譚ならそんなやつ返り討ちにしてくれると思ってたのに。誘惑する相手間違えちゃったのかしらん。まあ、いいわ。もうあなたには用はないわよん。さっさと死んじやいなさい」

「そ……んな。我・はまお・き……のこと……本当に愛・
・し・て……た」

仏貴は剣を抜くと公譚はどさっと倒れた。

「最後の最後まで哀れな。しかしそれが己の罪と知れ」

仏貴は決め台詞を言うとは明後日の方向を向いてポーズをとり、自分
分に酔いしれている。

「阿呆か……」

その光景を見て安心したのと同時に、本当にこやつに国を任せて
大丈夫かと一抹の不安を抱きつつ、公望はポツリと呟いた。

それはさて置いて、猫姫をどうするかである。公望がうんうん悩
んでいると、猫姫から意外な言葉が発せられた。

「もういいわん。今回はわらわが引いてあげる。公譚やられて興冷
めしちゃたし、公望ちゃんには今度は仙人界で痛い目にあってもら
いましょ。じゃあまたねん」

猫姫はふわっと浮くと空に向かって飛んでいった。しばし、無言
の二人。

「お師様……とりあえず、猫姫人間界から追い出す事には成功し
たんですかね。この場合……？」

「う、うむ。おそらく。千里眼を用いても人間界にあやつは存在せ
ん。とりあえず、任務は成功したのかの？にしても、最後の最後ま
でわからん奴め！後が怖いっつうのじゃ」

「仙人界で痛い目とか言っていましたよね？」

「何をする気なのやら……。まあ、良いわ。仙人界なら師匠その他十二仙達がおる。なんとかするじゃろ。とにかく、これで任務は果たしたぞ」

「はあ、つつかれた」

花鈴はため息をつくと同時に地面に座り込んだ。公望は花鈴に苦勞さんとねぎらうと仏貴の方に行く。

「これ、何時まで自分に酔っておるか」

「んん？あ、悪い悪い。そっちはもう済んだのか？」

「うむ。猫姫は追い払ったぞ。これで晴れてそなたは新たな国の皇帝じゃ」

「よっし！じゃ、早速桐生達呼んで建国支度するとするか！！」

「そうじゃな」

三人は、哀れに死に絶えた公譚の亡骸を丁重に葬り、墓石を立てると皆を集めに外に出た。これで、ようやく象の国に平和が訪れようとしていたのである。

公望、人間界に降り立つ。其の八

公望と花鈴は町を散歩していた。町はにわかに活気付き始めている。仏貴が新たな皇帝となり、象の国改め文と称するようになって早数日。山のようにある仕事を桐生と齋木の手伝いのもと仏貴は必死にこなしたため、町の復興作業はすこぶる順調のようである。

「皆元気になってきたみたいですね、お師様」

「そうじゃな。国としてはまだまだじゃが、民に笑顔が見受けられるようになったのはいい傾向。この調子なら文も安泰じゃろ」

「でも、仏貴さん。あまりの仕事の量にぼやいてましたね」

花鈴がくすくす笑う。

「あやつもなく。それぐらい予測しておけつつうのに。本当桐生と齋木を摂政に持ってきて良かったわい。あやつひとりだったら心もとないわ。自覚が足りん。自覚が」

やれやれと公望はため息をついた。そんな平和な会話ができるようになったこの文の国で散歩の途中、周りと打って変わって違う落ち込んだ雰囲気をもし出した女の子が目に入った。

「ん？」

公望は不思議に思い、近寄っていく。女の子は壁にもたれながら顔をうずめて座っていた。

「どうした、娘っ子？」

「・・・・・・・・」

女の子からは返事がない。相変わらず顔をうずめたままだ。

「ん」

公望は袂から飴をとりだすと、トントンと女の子を肩を叩いた。その子はようやく顔を上げる。その顔の目の前ににこつと笑いながら、飴を差し出した。

「これ・・・な」

「ん？ 飴というものじゃ。なめてみるといいぞ。とても甘くておいしいから。ほれ」

女の子はおずおずと公望の手から飴を受け取ると口に入れた。

「あ！ 甘い。おいしい」

「気に入ったか？ まだいろいろあるから、食べるか？」

「うん！」

公望が差し出した様々な種類の飴に女の子は飛びついた。少し元気が出たようである。

「で、どうしたそなた？ こんな所に座って、家には帰らぬのか？ 両親が心配しておるのではないか？」

「あたし、家ない。おとんもおかんも死んじゃって・・・あたしひとり」

公望の質問にせっかく元気が出てきた女の子が泣きそうになった。それを見てやさしく聞き返す。

「行くあてはないのか？」

「うん。あたしひとりぼっち」

「そうか。では、わしがしばらく面倒をみてやろう」

「えっ？」

公望はそう言うとき女の子を片手で抱きかかえ、頭をなげる。

「ほれほれ、わしがついてやる故そんな寂しい表情をする出ない。子供はもつと無邪気に元気であらんな。そなた名はなんと言う？」

「にやんにやん
娘娘」

「娘娘か。わしは公望じゃ。こちらにいるのは花鈴という。娘娘は何歳じゃ？」

「4才」

「そうかそうか。そうじゃ、飴以外にもチョコレートと言うものもあるが食べてみるか。うまいぞ」

袂からチョコを出す。娘娘は興味本位で手にとって口に入れた。その味にカルチャーショックを受けたような表情でびっくりする。

「おいしい！！口の中で直ぐ溶けちゃったけど。まだないのおじさん？」

「おじさんではない。これからはわしのことは公望と呼べ」

「うん。で、公望、もうないの？」

「おお、あるぞ。好きなだけ食べるといい」

「わぁ」

ようやく娘娘に笑顔がこぼれた。公望はパクパクとチョコを食べている娘娘を優しく優しく撫でてやっている。その光景を見て、花鈴はちよつとムツとした。

「おゝしゝさゝま。面倒みるって言っても、私達もう任務果たしたんだから、仙人界に帰らなきゃならないでしょ。どうするんです。そんな軽はずみな返事して」

少し怒った口調で言う花鈴に、公望は気にも留めず話を娘娘と続ける。

「丁度、わしら塾を開こうと思っておってな。娘娘はそこで暮らそう」

「じゅくってな？」

「ん？勉強とか武芸とか、まあ、いろいろ教える所じゃよ。今からその家に行こうとしておったところなんじゃ。皇帝からは許可をもらっておるから、さあ、行くか」

「ちょ、お師様」

花鈴を置いてさっさと歩いていく公望の後を必死で花鈴は追いかけた。しばし歩く事、公望と娘娘は笑いながら話をしているその後ろを、ずっとムツとした状態で花鈴がついていき、ついた先に、大きな家が建っていた。

「ここじゃ」

「うわあ、立派なお屋敷。ここで暮らすの、公望？」

「そうじゃよ。ここを自宅兼塾とする。どれ、そなたら二人は先に入っておれ。わしは宣伝と生活の準備を兼ねて少し出かけてくる。

花鈴、娘娘の面倒を頼むぞ」

「えっ？あ、はい」

公望は娘娘をおろすと、じゃっと言って町にまた出向いていった。屋敷の入り口で花鈴と娘娘が二人取り残される。

「おねーちゃん」

娘娘はぼーっとしてる花鈴のすそを引っ張った。

「え？私の事？」

「そうだよ。おねーちゃん、公望行っちゃったし、家の中入ろうよ！」

「そ、そうね。じゃあ娘娘。入りましょうか」

おねーちゃんと呼ばれることに少しくすぐったさを感じながら、花鈴は娘娘を連れて家の中に入っていた。家の中は、とても広く三人で暮らすにはもったいないほどである。家具もあらかた揃っていたし、庭も立派だ。

「ねえ、おねーちゃん」

家の中をきよろきよろ見ていた花鈴に娘娘は声をかけてくる。

「なーに？」

「公望言ってたけど、おねーちゃん達って仙人って言うんでしょ？それなんなのかあたしに教えてよお」

「ええ、いいわよ。お師様が帰ってくる間、教えてあげる」

花鈴は仙人について話し始めた。その話が終わるか否やの時、公望が大荷物を抱えて戻ってくる。

「お師様、お帰りなさい。早かったですね」

「うむ。やる事がたくさんあるの。とりあえず、宣伝の方は風麟に任せたので今後必要な分だけ揃えてきた」

荷物をどさっと置くと、すぐにまた外に出る。二人は興味本位で

ついていった。公望は大きな筆を持つと、家の壁にでかかど秀英会と書いた。

「なんて書いたの。公望？」

「ん？しゅうえいかいと書いたのじゃ。それがこの塾の名じゃよ」

「お師様、塾って具体的に何をなさるつもりですか？」

「先に言ったであろう？勉学と武芸を教える。無論無料だな。対象は4才から9才くらいのつもりじゃ」

「仙人界に帰るんじゃないかなったんですか？」

「師匠からは新しい国造りの手助けをして来いと言われておる。これは、その一間。今後の文の国を支える者達を若い内から育てるのじゃよ。それに、この国もまだ子を面倒見れるほど生活は裕福でないからな。これから忙しくなるぞ」

「はあ」

「さて、良い時間じゃな。娘娘、お腹は減っていないか？」

「うん。すいたよー！」

「よし！ご飯にしよう！！今食事を作ってやる故待っておれ」

公望は勇んで厨房に食材を持って入っていった。二人は、机のある厨房隣の一室で座って待つ。その内部屋は凄くおいしそうな匂いで充満する。娘娘のお腹が鳴り、思わず声を上げる。

「公望！まだー！？お腹すいたあー！！！」

「うっし！できたぞー！」

公望は、机にずらーっと料理を並べた。

「こっちが、娘娘の食事な。で、こっちがわしらの」

並べた料理を手際よく、皿に盛り二人の前に置いた。

「あれ？お師様。仙人って生臭物禁じられてるんじゃないでし
たっけ？」

「そうじゃよ」

「じゃあ、なんで娘娘の食事は、魚とか肉料理が入ってるんです？」

「あのなく、娘娘は人間じゃぞ？わしらと違って、ちゃんとしたもの
を食べなければ病気になってしまいうし、成長に影響が出るであろ
う？わしらは、生臭ものは食さんが娘娘にはきちんとした食生活を
させねば」

「あゝ、なるほど」

「よし！では、娘娘良いか？一日の食にありつけたこと、そしてわ
しらのために命をとられてしまった生き物達に感謝を込めながら、
ありがたく食べるのじゃぞ。この生き物達が犠牲になっておるから
こそわしらは生きておれるのだからな」

「うん！」

「うむ。じゃあ、手を合わせて・・・いただきます」

「いただきます！」

娘娘は元気よく言うのと早速料理に手を伸ばした。しかし、箸の持ち方がうまくいかず料理がつかめなくて、全然口に入らない。ようやくつかんでも、食べようとした瞬間に落ちてしまう。

「公望〜！食べられな〜い！」

「そなた、箸も使えんで今までどうやって食べていたんじゃ？」

「え〜？手でつかんで食べてた。こんなちゃんとした料理食べた事ないもん」

「そうか、しょうがないの。わしが食べさせてやるわい」

公望は料理を箸でつかむと娘娘の口元に持って行って口を開けさせた。

「ほれ、あ〜ん」

娘娘はぽくつと食べた。自然と笑みがこぼれる。

「おいし〜！」

「良く嚙んで食べるのじゃぞ。嚙む事は脳の活性に良いからな」

コクコクと頷きながら、言われたとおり良く噛んで料理を味わっている。公望はその頃合を見て、次々と食事をつかんでは娘娘に料理を食べさせた。娘娘は一口食べる事においしいおいしいと喜んでゐる。公望も口にあつて良かったとニコニコしている。反面、花鈴は無言だった。

「お師様、私にだってあんなことしてくれたことないのに！」

花鈴は内心で文句を言いながらもくもくと食事を平らげる。憂さ晴らしに公望の食事にも手をつけた。

「あっ！花鈴！それ、わしの・・・」

「お師様は、娘娘に食べさせてあげるので手一杯でしょ？そんなこととしては、せっかくのおいしい料理が冷めてしまいます。もったいないのでわたしが食べます」

公望の有無も言わさぬ速さで食事を平らげていく。一方では娘娘はもつとくつとねだってくる。仕方なく公望は自分の料理をあきらめて娘娘に食べさせた。

「花鈴。もったいないとおもうのはいい事じゃが、そんなに食うと太るぞ・・・」

「わたしは太らない体質だからいいんです！」

もうやけになっている花鈴はがむしゃらに食べ続けた。そうこうしている内に、料理はあつという間になくなり、三人は手を合わせてご馳走様と言うと、公望の指示に従つててんでに自分の皿を厨房に持っていく。

「そうじゃ、花鈴」

「なんです？」

「娘娘に、箸の正しい持ち方教えてやってくれんか。箸も正しく持てんようでは、今後問題あるでな」

「わかりました」

「頼むぞ。わしは、ちょっと明日に向けての準備をしてくる」

皿を片付けると厨房を後にし、外に出て行った。そして庭で、持ってきた材木を飛燕でスパスパッと切っていく。あらかたの材料が出来上がると、ひとつひとつの部品を組み立てていった。作ったのは、長机である。そう、大広間に入るだけの長机を十個近く作ったのだ。それぞれ出来上がると、それを持って大広間に綺麗に並べ、机の上に紙と筆を置いた。大広間正面には、大きな黒板を取り付けた。もちろん黒板なんぞ、文にはない。わざわざ別の国に行って取ってきたのだ。

「こんなもんか」

パンパンと手を叩いて次にやった事は裁縫である。子供用の道士服とおそろいの大きめな道士服を縫い繕った。そして、身体を拭く布と洗うための布を二枚ずつ用意し、さらに香料の入った洗髪剤と石鹸も一緒に揃え、袋につめた。そして準備が整うと花鈴達の下に向かう。花鈴は娘娘に丁寧な箸の持ち方を教えていた。

「うー、難しいようおねーちゃん」

「娘娘ならできるわよ。ほら、もう一度この豆をつまんでみて」

「うゝ」

娘娘は教えられた通りの箸の持ち方で机に置いてある豆を真剣な面持ちでつまもうとしていた。そーっと豆がつままれ、持ち上がる。

「やったー！！出来たよおねーちゃん！！」

「うんうん。えらいえらい」

花鈴は優しく撫でてやった。

「おー！娘娘！できるようになったかー！！」

公望はひょいっと抱っこした。

「出来たよ、公望！」

「これで、明日からは自分で食べられるな？」

「うん！」

「よしよし。では、二人とも出かけるからぞ」

「どこ行くの？」

「どちらに行かれるのです？」

「ん？風呂じゃ風呂。先ほど出かけたときに近くに風呂屋があったでな」

「お風呂？」

「風呂ってな〜に？公望」

「なんじゃ？二人とも風呂を知らんのか？水浴びをお湯にしたようなもののなのじゃが」

「へー、水浴びをお湯ですか」

「そんなの知らないよお」

それもそうかもしれない。花鈴は山奥で育って、風呂というものを経験した事がないだろうし仙人は風呂に入る必要性がないから仙人界でも入ったことはない。娘娘は、象の時代では風呂といえば高級階級の極少数の人間しか入れず、一般の人間が利用する事はまずできないからだ。

「とにかく、気持ちの良い疲れの取れるものだから行くぞ」

「はーい」

三人は家を出て、風呂屋に向かった。公望は娘娘をおろし、娘娘は走って先に行く。その姿を見て転ぶ出ないぞと注意を促しながら、そつと後ろからついてきていた花鈴の横に並んだ。

「なあ、花鈴？」

「なんです？」

「そなた、なんか今日機嫌悪くないか？」

「べーつーにー」

「いや、絶対機嫌悪いじゃろ。何があった？」

「お師様は愚鈍すぎるんですう」

知らん顔しながら、先に行った娘娘の後を花鈴も走って追っつけた。

「なんなんじゃ。わし、なにか悪い事したかあ？」

首をかしげながら、ゆつくりと二人の後を歩いていった。歩く事10分少々、風呂屋に到着。お台に座っている人間に顔を見せると、すんなり通してくれた。一応公望はまだ仏貴の参謀の立場にいるからである。この辺は顔パスができるのだ。

「こっちが女湯。ほれ、着替え一式。中に染料と布が入っているからそれで頭と身体洗っておいで」

「あれ、公望は一緒に入らないの？」

「わしは男湯」

「別々なんですか？」

「当たり前じゃろ！それじゃあな。上がり終わったら、入り口でお

互い待っている事」

公望はさっさと中に入っていった。花鈴達も女湯の方に入っている。

「風呂なんて久しぶりじゃ。ふいゝ極楽極楽。そういえば、家に何か足らんと思っておったら風呂がないんじゃないわ。仙人界に戻ったら作るか」

のんびりと湯につかりながら疲れを癒していた。一方、花鈴達は始めてみるお風呂というものにビクついていた。

「おねーちゃん。これ、中入ればいいのかな？」

「だと思っけど、なんか湯気たってるね・・・」

花鈴はそっと足を入れる。水が熱いのびっくりして思わず足を引っ込めた。

「どうしたらいいんだろ・・・？」

周りは誰もいない。風呂の入りがわからず二人は立ち尽くしていた。そこに公望の鼻歌が聞こえてくる。どうやら隣がすぐ男湯で繋がっているようだ。

「お師様あー！」

「んゝ、なんじゃ！」

「お風呂ってどうすればいいんですか!？」

「阿呆！ただ中に入ればいいんじゃない？」

「だって、水が熱いですよ！？」

「風呂とはそんなものじゃ！熱いって言っても適温じゃぞ！気持ちいいから入ってみろ！！」

「だって、おねーちゃん」

「うーん」

花鈴はまだ戸惑いがあるようだ。そこに意を決して娘娘が飛び込んだ。

「えいっ！」

ドッポーン！！！！

「あ、大丈夫！？娘娘！？」

「うわー、気持ち良いー。おねーちゃん入ってみてよ。気持ちいいよ」

「そ、そう？」

花鈴は恐る恐るゆっくり浸かってみた。最初は水の温かさに戸惑いがあったが直ぐに慣れて心地よさに代わる。

「本当だ。気持ち良いー」

二人は、んぐりと背を伸ばした。そして娘が花鈴にお湯を掛けたところから、やったなーっと二人して笑いながらパシャパシャとお湯の掛け合いを始めた。

「そなたらー！楽しむのはいいが、あまり入っていると湯辺りして倒れるから、程々にして頭と身体洗って出て来いよー！わしもそろそろ上がるからな！」

「はーい！」

「じゃあ、娘娘。後50数えたら、上がって頭とか洗おうか」

「うん」

「いーち、にー、さーん……」

二人は声を揃えて数を数える。50数え終わった所で、風呂から上がると頭と身体を洗い始めた。

「おねーちゃん。洗ってー」

「ちょっと待ってね。私先洗っちゃうから」

「じゃあ、あたし、おねーちゃんの背中洗ったげる」

「あ、ありがとう」

「おねーちゃんて、髪も肌も綺麗だよね」

「そう？」

「うん。羨ましいな」

「娘娘だって、綺麗じゃない？」

「そうかな？」

「そうよ」

お互いに流し合いをしながら、そんな他愛のない話をしてキャツ
キャと笑う。

「ほーら、動かないで」

花鈴は娘娘を洗い終わると二人して、脱衣所に戻って着替えをし
た。

「あれ？この服おねーちゃんと同じじゃない？」

「あ！本当だ」

「わーい！おねーちゃんとお揃いお揃いっ！！」

娘娘は喜びながらその場をくるくる回る。その光景を微笑ましく
見ながら花鈴はこの服どうしたんだろう？と疑問に思っていた。二
人は外に出ると、キセルを吹かし夜空を見上げている公望と合流す
る。

「どうじゃ、初めての風呂は。気持ち良いもんじゃろ？」

「うん！」

「はい。ところでお師様。この服どうしたんですか？」

「ん？わしが縫ったんじゃ。寸法は丁度良かったみたいじゃな。何より何より」

「ええ！お師様が縫ってくれたんですか？」

「何を今更驚いておる？そなたが今まで来ていた道士服だって全部わしが繕ったものじゃぞ？」

「公望、ありがとう！」

「良し良し」

抱きよってくる娘の頭をポンポンと叩いてやった。

「あ、お師様。ありがとうございます！」

「ほっほっほ。良きかな良きかな。さて帰るか」

三人はのんびりと家路に着いた。すると風麒麟とジュニアが入り口で待っていた。

「公望様、チラシの方はすべて張り終わりました」

「うむ。すまん、面倒事を頼んでしまって。本来ならわしがやらねばならなかったのじゃが」

「いえ、構いません」

「とりあえず、そなたらも疲れたろ。これを食べてゆっくり休め」

仙丹を風麒麟親子にやると、全員揃って中に入ってしまった。風麒麟親子は別室に入っていく、公望はベッドの置いてある一室に入る。

「さ、わしらも寝るか。明日から忙しくなるやもしれんからな」

公望はベッドにゴロンと横になる。花鈴はいつもの様に横に入り込んできた。それを見て娘娘は困った。

「公望、あたしどこで寝ればいいの？」

「お、そうじゃったな。他にベッドのある部屋あったかな？」

「おねーちゃんは公望と一緒に寝るの？」

「そうよ」

「だったら、あたしも公望と一緒に寝たーい！」

「そうか？　だったらそなたも入ればよからう」

「あたし、公望の隣が良い」

「それはだめ！　お師様の隣は私って決まってるの！」

「えー！　ずるいー！」

「だめなものはだめ！」

「これ、そんな事で言い争うな。だったらわしを真ん中にして左右でそなたらが寝ればいいじゃろ。ほれ、花鈴ちよつと詰めてくれ。さ、娘娘こっちにおいで」

「やったー！」

喜びながら、娘娘は公望の隣に寝転んだ。花鈴は物言い足そうであつたが二人は直ぐに眠りに入り、すやすやと寝息を立てだす。

「ふー、わしとしては川の字に憧れてたんじゃがな。ま、良いか。寝よ寝よ」

ポツリと呟き、自分が父親っぽくなってきたかな？ と思ひながらゆっくりと眠りにつくことにした。

公望、人間界に降り立つ。完結編

公望、花鈴、娘娘が朝食を食べていた次の日。早速生徒がぞくぞくとやってきた。

「あの、こちらで家の子の面倒を見てくれるって聞いてやってきたんですけど」

「ようこそ。ここは勉強から武芸、礼儀作法その他幅広く教え食事の世話も無償で行います」

「私の家ではまだ満足に育ててやれなくて」

「任せておきなさい」

こうやって気がつけば集まること十数名の生徒が秀英会に訪れた。皆してよろしくお願いしますと礼儀正しくお辞儀をしていく。公望は早々に食事を片付けると、集まった生徒を大広間に招いた。用意した机に一人一人座らせる。

「さて、皆の者始めまして。わしがここの講師を務める公望というものじゃ。皆には将来文の国を支えられる存在になって欲しいと願うこの塾を始めた。至らぬ点は多々あると思うがよろしく頼む。とにかく、まずは皆仲良くするように。喧嘩は駄目じゃぞ？互いを思いやり、弱いものを助ける人間になってもらい。そのことだけはよくわかっておいてくれな」

「はーい！」

「うむうむ。元気なのは良い事じゃ。ではまず自己紹介からしてもらおうか」

生徒達は言われるがままに一人一人自己紹介をする。一通り自己紹介も終わった頃一人の生徒が質問してきた。

「せんせーい。ここって何をしてくれるところなの？」

「んー？具体的に勉強じゃよ。文字を教えたり、計算を教えたり、礼儀作法を教えたり……。まあ、いろいろじゃ。そなたらは一応この塾の生徒になったのだからこの塾の方針に従ってくれ。そんな堅苦しい場所ではないから、とにかく一日一日学んだ事を見につけていけば良い」

「はい！」

「ではまず、文字から教えるかな」

公望は時間を区切りながら、毎日文字、計算、礼儀作法、武芸、料理、農作業などを教えはじめた。その途中途中、口癖のように言っていたのは、とにかく相手の立場に立って思いやりを持って、弱いものを助ける存在になれということである。この授業には娘娘も参加していた。花鈴は教えられる事は少なかったが、それでも公望の手助けをし共に先生をやっていた。最初花鈴は慣れなかったがそれでも一生懸命に優しく教えていたので、生徒からも慕われるようになった。公望も別に先生といっても先生先生しているわけではなく、気の良いおじさんみたいに手取り足取りのんびり教えていて、直ぐに生徒から好かれた。昼食、夕食は公望の用意した材料で自分達で作り、しばらくすると自分達で育てた作物を使って料理を行っている。肉や魚は自分達で調達できないので、公望が準備していた。こ

ういった日々の中で一番生徒達が楽しみにしていたのは、おやつ
時間である。公望がたまたま三時のおやつがてら作ってやったら大
好評で、これで生徒の心をがっちり掴んだ所もあった。

「せんせーい！そろそろおやつ時間だよー！」

「うん。食べたーい」

皆てんで揃ってせがんでくる。

「おう、待っておれい。今作ってきてやるから、皆庭の机に行きな
さーい」

「わーい！」

生徒達は庭に出て今か今かと待ち焦がれ、公望も急いで支度する。
しばらくすると甘いおいしそうな香りがしてくる。

「今日は、バームクーヘンを作ってみたぞ」

「いっただっきまーす！」

公望の作るお菓子はどれも文の国では見た事のない物ばかりで、
甘くておいしく生徒達は喜んでほうばっている。

「私、大きくなったら先生のお嫁さんになるー！」

「あー、ずるいー。私もなるー！」

「あたいもー」

「おお、そうかそうか。うれしいこと言ってくれるの。生まれて初めてそんなこと言われたわい。しかし、そういった言葉は本当に大切な人が出来たときにとっておけ」

女の子達を相手にニコニコとしながら一人一人頭を撫でてやる。その光景を見て花鈴はいつものようにムツとしていた。しかし、いつも男の子たちの言葉で和まされる。

「僕は、花鈴先生見たく強くなって文の国一番の武芸者になるんだ！」

「僕も強くなって皇帝様を支えられるようになりたいな。弱い人を助けたい」

「なんで花鈴先生はそんなに強いのか？」

「それはね、一生懸命努力したからよ」

「僕達も強くなれる？」

「もちろんよ！努力さえすれば、誰だって強くなれるわ。でも文武両道でがんばってね」

「よし、がんばるぞー！」

「おうー！」

そんな感じで毎日が和気藹々と過ぎていき、季節はあつという間に夏真っ盛り。さすがの暑さに、生徒達もばてていた。

「せんせーい。暑い」

「こう暑いと勉強も頭に入らな」

「ま、もう少し我慢してくれ。今日のおやつは取って置きを用意してやるから」

「本当!？」

「うむ」

「じゃあがんばる」

「午後からは、野外実習にいくから又涼しくなるわよ」

「花鈴先生どこ行くんですか？」

「川遊びに行こうと思ってるの」

「へー！楽しみ!!」

「ほれほれ、楽しみは後々にして先を続けるぞ。高尚この問いを解いてみよ」

「はい」

一番の年長者である高尚が問題を解く。

「正解。やはりそなた頭がいいな」

「ありがとうございます」

「高尚はしっかりしてますしね」

「うむ。さすが一番の年長者。塾のリーダーにして良かったわい」

「また、先生もからかわないでくださいよ」

「いやいや本当じゃぞ。今後も周りの生徒達の手本になってやってくれ」

「がんばります」

そんなこんなで午前の授業も終わり、昼食を食べ終え皆揃って野外研修に向かった。ついた先は近くを流れる川である。

「皆好きに遊べ。でもくれぐれも深い場所には行くなよお！」

「わーい！」

皆次々に川に入っていった。キャツキャと騒いでいる。それを土手に座りながらのんびりと見ていた。

「そういえば、水泳も教えておいた方が良くないかな？」

「すいえい？なんですかそれ？」

「いや、水を泳ぐってただそれだけじゃよ」

「あ！そういえば、私も泳げません」

「そうなのか？」

「はい」

「ふーむ。では、泳ぎの練習もさせるか。おーい！皆の者集合！」

全員がわらわらと戻ってくる。公望は袂から水着をバンッと取り出した。だから公望の袂には一体どれだけのものが入っているのか！？

「これより、皆これに着替えてくれ。泳ぎを教える故」

花鈴ともども全員が着替えると公望は泳ぎを教え始めた。

「おーい、悶着。沈んでおるぞ・・・」

「先生、浮きません・・・」

「まあ、最初はそんなもんじゃ」

そうして公望は夏の間毎日水泳を教える事にした。その日は簡単な水遊びをして引き上げる。帰ってから直ぐにおやつの準備に取り掛かった。

「先生。今日は取って置きとか言ってたけど何が出てくるのかな？」

「楽しみだね」

「あー、早く来ないかな」

皆わくわくと楽しみに待っている。そこにお待たせと公望がやってきた。みんなが公望の持ってきた物に注目する。

「先生！これ何！？」

「アイスというものじゃ。やはり夏はアイスじゃろ。カキ氷も良いかなと思ったが、定番を攻めねば」

「わー、なんかいろんな色があるう」

「色によって味が違うから、それぞれ食べ比べてみると良い」

皆一斉に手を伸ばした。口に入れるなり驚きの声を上げる。

「冷たーい！」

「でも、すごくおいしいよね。これ」

「あたい、この緑の好き」

「おっ、娘娘は抹茶が好きか。なかなか通じゃな」

「先生の食べてるのは何？」

「これはストロベリーじゃ。まあ、イチゴ味のアイスじゃな。わしはイチゴに目がなくての」

「へー」

「そういうば、花鈴にはこれじゃな」

公望は微笑ましく眺めていた花鈴にピンク色したアイスを渡した。
きよとんと花鈴は見返してくる。

「お師様、これは？」

「食べりゃわかる」

花鈴はペロリと舐めてみた。その味にびっくりする。

「あれ！これ桃の味がします！！」

「そなた桃好きなんじゃろ？そなたように作っておいた」

「お師様、私が桃好きな事ご存知だったんですか！？」

「まあな」

「え？でも私今まで桃が好きだなんて一言も・・・」

「弟子の好き嫌いぐらい把握しておかなければな」

公望はいたって普通に返答するとアイスをペロペロと舐める。花鈴は自分の事を気にかけてもらって凄くうれしい気分になった。塾を開講してからというもの公望には余り相手にしてもらえていなかったし、自分に興味を持ってくれないと少し落ち込み気味だったからだ。そうやって、皆に気を配りながら教えていく事早一年も経とうとした時、生徒全員を見送ってから部屋で公望は手紙を読んでいた

た。

「お師様、何を読んでらっしゃるのですか？」

「ん？生徒の親からの感謝状じゃよ。そなたも読んでみ」

花鈴は手紙を受け取ると読んでみた。内容は、家の子が凄く立派に成長してしっかりしてきたとか自分より頭が良くて逆に困ってしまうとか子供に教えられて自分もしっかりしていききたいという様なことが書いてあった。

「なんか、こうして手紙をいただくとやった甲斐があったって気がしますね」

「まあ」

「公望、何してるの？」

「手紙を読んでもうだけじゃよ。ところで嬢嬢。塾は楽しいか？毎日幸せか？」

「うん！凄く幸せ。塾でも友達たくさん出来たし、楽しい！」

「それはなにより。明日はまた違った事をするつもりだから、楽しみにしておれよ」

「何するの？」

「秘密じゃ。今日はもう遅い。嬢嬢はもう寝なさい」

「あれ、公望は？」

「ちょっと花鈴と話があるから、先に寢床に行ってなさい。なーに直ぐわしらも行くから」

「はーい」

娘娘は、てってってと寢室に入っていった。その姿を見て公望はため息をつき少し困った表情をする。

「話ってなんですか、お師様？」

「うむ。そろそろわしらも仙人界に帰らねばならんと思ってな」

「もう、帰られるのですか？」

「仕方あるまい。もともとわしらと人間達では住む世界が違う。手紙を読む限りでは皆もう十分わしの意味を継いでおる。もうわしらがおらんくてもよからう」

「でも、それでは皆が寂しがるのでは？」

「そこじゃ、わしもなんのかんのと生徒達に愛着が湧いてしまったからな。いざ離れるとなると辛い・・・」

「じゃあ、もう少し留まったら駄目なのですか？」

「一生あやつらの面倒を見てやるわけにはいくまい。このままいけば別れが辛くなる一方じゃ。それに、これ以上仙人が許可もなしに留まるのは良いことではない。元々一年が限界と予想はしておった。

そろそろ潮時じゃろ」

「娘娘はどうするのです?」

「なんとかする」

「そうですか・・・」

「とりあえず、明日もまた早い。寝るとするか」

「はい」

公望は、ベッドですやすやと寝ている娘娘を見ながら心を痛めると自分も眠りについた。あくる日、公望は集まった生徒にある指示を出した。

「今日は一風変わった授業をするぞ」

「何をするんです?」

「うむ、今日はわしがちと用があって出かける。その間、そなたらには商売をやってもらいたい」

「商売?」

「そう。わしが用意したお守りやお札といったもの、後自分達で今まで作ってきた作物などを自分達の手で売ってもらいたい」

「へー、楽しそう」

「正直商売とは難しいぞ。今のご時勢なかなか買ってはくれんかもしれん。しかしそれを自分達で考えて何とか完売すること。それが今日の課題じゃ。わからない事があつたら花鈴先生に聞く様に」

「はい！」

「では、わしは出かけてくる。花鈴、後の事は任したぞ」

「はい、お師様」

公望は花鈴に生徒の事を任せると城へ向かった。仏貴の下に行く。仏貴はうず高く積まれた書類に埋もれながら必死にデスクワークをしているところだった。

「よう、久しぶりだな公望」

「うむ、そなたも頑張っておるようじゃな」

「頑張らないと桐生たちに怒られるからな」

「ところで桐生は何処におる？」

「うーん、たぶん会議室の方だと思う」

「そうか。じゃ、頑張れよ」

「ああ」

公望は会議室の方に向かった。会議室では桐生、斎木他官僚たちが話し合いをしている。

「あら、公望様。お久しぶりです」

「朝から仕事とは大変じゃな。で、仕事の途中悪いのじゃが、ちと桐生。そなたに頼みがあってやってきた」

「私にですか？」

「うむ」

二人は会議室を出ると、公望が今までの塾の事と娘娘の事をかくかくしかじかと説明し、娘娘をそなたが預かって、塾を引き継いでもらいたいと頼んだ。

「わしらは、そろそろ仙人界に戻らなければならん。しかし、塾の生徒達はしっかりして手が掛からなくなってきているとはいえ、娘娘は両親ともおらん。かといって仙人界には連れていけない。だから、あやつの母親代わりになって面倒を見てやってくれんか」

公望は深々と頭を下げた。

「そんな、公望様。頭を上げてください。公望様のお頼みなら喜んでお引き受けしましょう」

「本当にすまん。そなたにはそなたの仕事があるというのに」

「いえ、人一人面倒見て、塾を引き継ぐ事など仕事の片手間です。出来しますよ。幸い、仏貴様の下、優秀な部下も揃って任せられるようになりしましたし、私はお目付け役みたいなものですから。斎木殿もおられますし。今は斎木殿が仏貴様の片腕となって働いていますので、

「丁度手も掛からなくなってきたし私は大丈夫です」

「そうか、では頼む」

「あ、その代わり今日の仕事手伝っていただけます。ちょっと問題を抱えてまして知恵を貸していただきたいのです」

「わかった」

そして二人はまた会議室の中に入っていった。夕暮れ時になり公望は秀英会に戻っていく。皆が出迎えてくれた。

「お帰りなさい！先生！」

「うむ、ただいま。どうじゃった、商売はうまくいったか？」

「うん！」

「先生ー！みんな売ったよー！！」

「すごい？すごい？」

「うむうむ、すごい！皆偉いぞ」

一人一人の頭を撫でてやる。

「花鈴、ご苦労じゃったな」

「いえ」

「さて、皆大広間に集まってくれ。これより大事な話がある」

「はい！」

わらわらと生徒達は大広間に集まりそれぞれの机の後ろに座る。

「そなたらにわしらの存在について教えておかねばならん。しかと聞いてくれ」

公望は自分達が仙人と呼ばれる存在であり、人間とは違って人間界に居る事が許されない事、もう仙人界に帰って先生を辞めなければならぬことを話した。それを聞いて皆が泣き出す。

「せんせーい。いなくなっちゃのお」

「行っちゃやだよお」

「皆泣くな。しょうがないことなのじゃ。わしとてそなたらと別れるのは寂しい。しかし人生は出会いがあれば別れも必然なのじゃ。そなたらはもう十分にわしの教えを受け継ぎ意思をしっかり持つておる。わしはそなたらを信頼し別れるのじゃ。わしの後任の先生は、桐生という宮廷の女性に任せた。これからは、その桐生をわしらだと思いつかりと勉強に励んでくれ。そして高尚」

「はい」

「そなたはこの塾で最年長のリーダーじゃ。桐生と共に皆を支え引っ張ってやってってくれ」

「わかり……ました」

「これにてわしらの授業は終わりじゃ。わしらは明日の朝旅立つ。皆わしの教えをしっかり守って健やかに幸せに生きよ。これがわしからの最後の言葉じゃ」

「ううつ、うえーーん！」

皆が落ち着いた頃、一人一人に言葉を投げかけ見送った。最後の一人を見送った後、娘娘が公望の袖をぎゅっと掴んだ。

「公望く、やっぱり行っちゃうの？」

「うむ。すまん」

「あたし・・・またひとりぼっちになるの？」

「いや、そなたのことは桐生に任せてある。これから桐生を母と思ひ暮らすが良い。それにそなたはもう一人ではない。大勢の友達が出来たではないか？それはかけがえのないものじゃぞ」

「・・・おねーちゃんも行っちゃうの？」

「ごめんね」

「・・・・・・・・」

「良いか、娘娘。わしらは離れていても心はそなたの中にあり、一緒に生きておる。わしらは決してそなたらを忘れはせん」

「あたしも公望とおねーちゃんの事、ぜーったい忘れない！」

「うむ。わしはさよならは言わん。いつか何かの縁でまた逢えるかもしれないからな。別れはまた新たな出会いをもたらす。次会うときがあったら、元気な姿を見せてくれな」

「うん！」

「じゃあ、お師様、娘娘。今日は最後の夜。三人でゆっくり寝ましよう」

そうして三人は寢床に向かった。今日は花鈴が気を使ってか、公望と花鈴の間に娘娘を寝かした。二人の温もりに包まれて、娘娘は寂しくもゆっくり眠りについていった。次の日の朝、早々に桐生がやってきて、娘娘と塾を託し公望達は風麒麟に跨った。

「達者でな、娘娘」

「元気でね」

「またいつか会おうね！公望、おねーちゃん！！」

「うむ。では桐生、後の事は任せたぞ」

「任せて置いてください。しっかりと面倒みますから」

「じゃ、行くか、花鈴」

「はい」

公望達はふわっと宙に浮くと、空に向かって一直線に飛んでいっ

た。

「名残惜しいですね」

「こうなる事はわかってはおったが、割り切れぬものじゃな。わしもまだまだ修行が足りん」

「公望様、どちらに行かれますか？」

「ああ、蓬萊山に向かってくれ。師匠に報告せねば」

二人は蓬萊山へと向かい、大老君に報告しに行った。

「戻ったか」

「はい」

「千里眼で大方見ておったが、おぬしやっておることが太公望と似ておるな。やはり太公望から名を取って授けたのは良かったかもしれん」

「誰ですそれ？」

「先代の大老君の弟子じゃよ。公譚軍の倒し方とか食料問題の解決とかやり方がそっくりじゃ」

「あんなものは、兵法の基本中の基本。私はそれにのっとったまでのこと。食料の事だって誰だっと思いつきますよ。私は極々当たり前前の事をしたまで。ところで、なにやら戻ってきて感じたのですが仙人界が殺伐としてませんか？」

「気づいたか。実はそなたらが人間界に行っている間にとうとう妖怪仙人達と争いになってな。引き金は猫姫なんじゃが」

「あやつか・・・また、阿呆なことを」

「それでわしらは、十二仙や竜吉の働きもあってなんとか他の妖怪仙人達の鎮圧には成功したんじゃが、肝心の猫姫を抑えられずにいる。猫姫は防全布を羽織っておるから、攻撃が効かんのじゃ。こちらも妖仁の変化術で対策を取り、なんとか被害は出ておらんが一向に進展がなくてな。にらみ合いがここ数ヶ月続いておる」

「へー、ところで人間界についての報告ですが」

他人事の様に話を受け流すと、人間界での事を報告しようとする公望に大老君が呆れた。

「おぬし、何を他人事の様に受け止めておる。そなたも十二仙の端くれなら何とかしようとか思わんのか？人間界の事は後で報告書を出せばよい」

「だって、師匠からの命は人間界から猫姫を排除し、新たな建国の手伝いをしろでしょ？仙人界の事は師匠達でなんとかしてくださいよ。それより、今回の働きで花鈴は大いに活躍してくれたのですから、褒美の一つでもやったらどうです？な、花鈴」

「えっ？わ、私は別に・・・。ただお師様の役に立ちたくて付いて行っただけですから、褒美だなんてそんな」

「遠慮することはないぞ。この人使いの荒いくそったれじじいになんでも請求すればいい」

「おう、その人使いの荒いくそったれじじいからもう一つそなたに命を下す」

「なんです？」

「猫姫を何とかして来い」

「はあ？^{もつろく}耄碌したか？？師匠達がなんとも出来んものを私がなんとかできる訳ないでしょ」

「おぬし、いい加減猫をかぶるのはよせ。今はどちらにせよ猫姫をなんとかせねば仙人界に平和ない。花鈴を人間界に連れて行くことを許可したのだから、今度はそなたが折れろ」

「ちっ！面倒な。私には何のことやらさっぱり」

「四の五を言わずさっさと行け！猫姫のいる場所は、ここより東北に位置する妖怪仙人の住まう高尊妖峰じゃ」

大老君に強制的に押し付けられ、公望は嫌々高尊妖峰に向かった。行く途中途中、ずっと愚痴をもらしている。

「なんでわしがせねばならんのじゃ。大体わしに出来る分けなからう。虫も殺せん軟弱者だというのに・・・」

「まあまあ、お師様。お師様が嫌でしたら、私が何とかしますから」

「花鈴、優しいのお。公望うれしい！」

公望は花鈴の言葉を聞いて両手をガシッと握りポーズをとった。花鈴は、はははと呆れ笑いをしている。そんな事をしている内に高尊妖峰に辿り着いた。中に入ると千里眼を用いて猫姫の居る場所を探す。見つけるとそこに向かって一直線に歩いていった。

「どうやら、他の妖怪仙人達は大人しくしておる様じゃな。良かった。途中争いにでもなったら面倒だしの」

「さすが十二仙様達ですね。しっかり鎮圧されてらっしゃるようで」

「このままあやつらに任せとけば自然と解決するんじゃないか？」

「でも、猫姫、防全布を羽織ってますから、やっぱりどうしようもないんじゃない」

「それだったらわしにだってどうしようもできんとか思わんのか？」

「いえ、きつとお師様なら何か良い知恵を持って解決してくれるのではと」

「今回は知恵でなんとかならんわい。力でなんとかせねばならんじやろ。嫌じゃなく。暴力はんたーい！」

公望は叫びながら歩いていく。やっこのことで猫姫の居る場所に到着。そこには猫姫と対峙する妖仁と他の十二仙が集まっていた。

「おっ！公望じゃねえか。何処行ってたんだ」

普賢が公望に気がつくのと近寄ってきた。

「阿呆師匠にこき使われておつてな。さてと、なにやら猫姫で問題になってるとか」

「見ての通りよ。こっちの攻撃は効かねえし、猫姫の変な術は妖仁が同じ防全布に変化して何とか中和してくれてるけどよ。ずっとにらみ合い状態なんだよ」

「公望も手伝っておくんないましな」

「おまえの悪知恵働かせてなんとかするっちよ」

有頂と花月喜も近寄ってきて公望を急かした。やれやれと公望は妖仁の方に行きしゃべりかける。

「だいぶ苦勞しておるようじゃな。そなたでもなんとかならんのか？」

「あ、望ちゃん。うん、攻撃は防げるんだけどこっちの攻撃も効かないんだよね」

「つまり、防全布さえ何とかすれば良いということか？」

「うん」

「うむ」

公望は猫姫に歩み寄る。

「あらーん、公望ちゃんじゃない。人間界ではやってくれたじゃないのん」

「やかましい。相も変わらずくねくねしておって、しかもやっと人間界からいなくなったと思ったら次は仙人界か。どれだけ世話を焼かせれば気が済むのじゃ」

「言ったじゃなゝい。わらわの望みは人間界仙人界すべてを自分のものにするこゝとよん」

「一度灸をすえてやらねばならん様じゃな」

「あらん？ 最弱の公望ちゃんにできるかしらん」

公望は何も言わず、飛燕を持ち居合いの構えを取った。しばし後、キーンと音が辺りに響く。公望はそのままやはり何も言わずに後ろを向くと、十二仙達に告げた。

「後は任せた」

「公望ちゃん。何かしたのかしらん？ 灸をすえると言いながら、ポーズを取っただけじゃなゝい」

猫姫は余裕な表情でまったくくねくねしだした。しかし、その動きによつて猫姫を包んでいた防全布がバサバサと斬り落ちていく。

「あ……あら……」

さすがの猫姫もこれには焦った。それを見ていた十二仙達にはやりと笑うと手に宝貝を持ちじりじりと迫ってくる。普賢なんか今までの鬱憤晴らしといわんばかりに禁鞭をブンブン振り回す。

「さあて、どうしてくれようか」

皆していじめっ子モードに入った。

「え、え・・・っと」

たじたじになって猫姫は困りだす。公望がボソッと呟く。

「自業自得じゃわい」

その時、十二仙達の気迫に押されて、今まで余裕綽々としていた猫姫がいきなり泣き出した。そして、ぽんっと猫耳と尻尾の付いた子供の姿になる。その場にいた全員がきよとした。

「えーん、えーん。ごめんなさーい。わらわ、ちょっとわがまましてみたただけなのお」

「泣いても無駄だ。己の犯した罪、その身体で味わってもらう」

クールな奇勝が宝貝をもって攻撃をしようとしたのを公望が慌てて止めた。

「ちよ、ちよい待ち。なんじゃなんじゃ、猫姫。それがそなたの本来の姿か？」

「うん・・・」

「なんで、このようなことをした？」

「わらわ、元々猫だったんだけど、ひっく、猫のとき悠々自適に生

活してて、えぐっ、気がついたら仙人になってたの。その時、うぐっ、空からこの防全布が振ってきて、強くなった気がして、ひくっ、猫のときの習性で自由気ままに暮らしたい、楽しく生きたいって思っ。世界の頂点に立てば、好きに生きられるって、っう、それで・
・・ごめんなさい！」

わーんと大声で泣き出した猫姫を見て、今度は公望が焦りだした。まさか猫姫の正体がこの様な子供だとは思っても見なかったからだ。

「騙されるな、公望。こいつはずるがしこい。この姿も俺達を油断させるためかも知れん」

奇勝は気を抜かず宝貝を構えている。公望は改めて猫姫に聞いた。

「そなた、嘘は言っておらんよな。もし嘘についてわしらを騙していたら、速攻封神するぞ？」

「わらわ、嘘ついてない」

「じゃあ、もう二度と変な考えは起こさん。平和に皆と暮らせると約束できるか？」

「・・・うん」

「ならよからう。他の者達。すまんが許してやってくれんか？猫姫も反省してるようだし」

「甘いぞ、公望。おまえはお人よし過ぎる。だから騙されるんだ。」

「ま、ま、奇勝。そう言わんと。もしこの先猫姫がへんな真似しよ

うとしたらわしが責任もってなんとかするから」

「でもよう、公望。こいつの言ってる事信用して大丈夫か？」

「普賢。その辺は大丈夫だと思うよ。僕、防全布に変化してみてもわかったけど、この宝貝、所有者の気持ちを高ぶらせて、若干所有者の強い気持ちや本能的な部分を操る所あるみたいだし。猫姫が危険というより、防全布自体が危険な宝貝だと思う」

「そういえば、僕の持ってる宝貝全書にもそんな事書いてあったな。危険度ナンバー1の宝貝だとか」

妖仁と大乙がフォローを入れた。

「ほら、そういう訳じゃし。こんな泣きじゃくってる子供をよってたかって責めては、単なるいじめじゃぞ。な、な。そんな殺気だった。わしに免じてな。頼む」

公望は手を合わせて皆に頼んだ。皆は公望がそう言うならしょうがないと、宝貝を納めた。公望は改めて猫姫のところに行くと頭を撫でてやる。

「ま、今回の事は多めに見てやるから、もう二度と悪さするんじゃないぞ」

「うん・・・ありがとう」

「そなた、行くあてはあるのか？」

「ない」

「困ったのお」

「あ、それだったら望ちゃん。僕が面倒みるよ。僕だったら、何かあっても直ぐ対処できるし」

「そうか？妖仁に任せておけば安心じゃな。皆もそうであろう？」

「あ、ああそうだな。妖仁に任せておけば問題はないだろう」

「うん」

「じゃあ、満場一致ということで。猫姫、妖仁の言う事ちゃんと聞くんじゃぞ。ほれほれ何時までも泣いてないで、どうじゃ、鰹節食べるか？」

公望は袂から鰹節を取り出すと猫姫に与えた。猫姫は受け取ると泣き止んでうれしそうに食べてだした。それを見てようやく公望もホッとする。

「ところで、そなた何歳じゃ」

「うーんと、2000歳！」

「子供じゃねーじゃん！！！」

全員から突込みを受け、公望も片方の肩をカクンと落すと苦笑いをした。花鈴はくすくすと笑っている。こうして、人間界を巻き込んだ猫姫の人騒動は幕を閉じたのであった。

公望、人間界に降り立つ。完結編（後書き）

あとがきだよーん。ようやく、第一部が完結いたしました。当初書き出したときは、封神演技を題材にしてその続きを好き勝手に書いてやろうと思っていたのですが、書いているうちにキャラクター達が勝手に動いてくれるもんだから、封神演技の続きなのか完全オリジナルの小説なのかわからない中途半端な第一部となりました。封神演技の好きな方には真すみません。

さて、一応この作品のコンセプトとしてハートフルラブコメ、でもシリアスで深いところがある小説にしようと思ってたんですけど、なかなかうまくいかないですね。第二部からはどうなるかわかりませんが、今後もキャラクター達に振り回されながら書いていきたいと思います。果たして、花鈴の恋の行方は！？そして竜吉の想いは！？超愚鈍で何かと秘密主義の主人公、公望の行く末を温かくこれから見守ってやってください。

公望の実力？

普賢の家。普賢、妖仁、大乙、花憐、花鈴の五人は連日に渡り真剣な表情をしながら会合を開いていた。

「あいつは、無理だろ」

普賢が絶対無理という風に頭を掻きながら話を振った。

「うーん、確かに難攻不落もいい所かも」

「そもそも興味が無いって言うのがね」

「でも、やはりあの方だって人間だったんですから持っていて当然のものでは？」

「いや、そこが問題みたい。その人間の時にね、興味を失ったとか」

妖仁、大乙、花憐も続いて話しを続ける。花鈴に花憐が尋ねる。

「花鈴はちゃんと積極的にアピールとか攻めてみたりとかはしてるの？」

「えーっと、そ、それなりに・・・」

うんうん頭を悩ませながら、花鈴はしどろもどろに姉に返事した。それを聞いて普賢がだめ出しをする。

「それなりにじゃだめだろ。あいつの場合、一発ガツンツと攻めな

いと気付かないんじゃないか？」

「そうだね、大老君様でも手を焼いてらっしゃるくらいだし」

妖仁がにこやかに笑いながら、大老君のぼやきを思い出していた。

「しかし、直球で言ってもだめな気がする。絶対信じゃないよ。やっぱり絡め手で攻めて自然と意識を芽生えさせて方が」

良く知っている大乙が攻略方法を思案する。

「そう言って、もうどれだけ経つよ。一向にそんな気配はないんだろ？花鈴」

「ええ、まあ」

「うーん。猫姫倒そうとしてた時より遥かに難しいかもな。俺も何度かそれらしい風味をかし出して話し振った見たけど、あいつ何にも気付いてねエみたいだし」

「僕もなんとか話しはしたんだけどね。答えはいつも一緒だった」

こうして連日に渡り普賢の家で五人は頭を悩ませていた。しかし、いつも出る答えは決まって無理なんじゃないか？という事である。それを聞いて毎日花鈴は落ち込んでいた。姉は必至に元気を出して諦めない様にと慰めている。そう、この様に毎日五人が集まって何を話し合っているかといえば、公望についてである。なんとか花鈴の想いを叶えてやろうと皆して協力しているのだ。そんな事が日々密やかに行われている事なぞ露知らず、問題の公望はいつもの様にキセルを吹かし縁側に座りながら、ボーっとしていた。猫姫騒動の

報告をすべて押しつけられ、書類にまとめ大老君に提出してからというものの燃え尽きたかのようにやる気をなくし、日々のんびり過ごしていた。花鈴が話し掛けても、へーとか、ほう、とどこ吹く風で受け答えし、余り相手をせず会話らしい会話もしなくなった。それもあるって花鈴は四人に相談を持ち掛けたのだ。

「ライブがしたくなったの・・・」

唐突に空を眺めながら公望は呟き、ようやく重い腰を上げ、連絡寶貝を取り出すとある二人に話しを持ち掛けた。二人は、快く承諾してくれたが、肝心のボーカルはどうするのか？という疑問を投げ掛けて来る。

「その辺は、わしに任せてくれまいか。思い当たる輩がおる」

「それなら分かった。任せるぜ。詳しく決まったら教えろよ」

「うむ」

公望は連絡を済ますとまたボーツとし始めた。夕暮れになり花鈴が帰って来る。

「ただいま、お師様！」

花鈴は元気よく声を掛けるが公望は何も言わず、ちらっと見て溜め息をつく。めげずと花鈴は話しを進める。

「お、お師様！今日は私手料理作ってきてみたんですけど、食べて頂けますか？」

「手料理？そういうもんは、そなたの好きな相手に食べさせてやる

ものじゃ」

「ですから、普段お世話になってる大好きなお師様に食べて頂こう
と思って」

「いや、そうではなくてだな・・・」

「ダメですか？頑張って作ってみたんですけど・・・」

「いや、そなた好きな者がおるならそいつに持っていけば良からう
に。ふう、まあ、ありがたくいただくか。せっかく作ってくれたよ
うじゃしな」

花鈴はパツと顔が明るくなると、せっせと作ってきた料理を机に
並べた。公望はちまちまと箸をのぼす。

「い、いかがですか、お味の方は？」

「うん？うまいと思う。初めて作ったにしては上出来じゃろ。これ
に一言治えて食わせてやれば相手もいころじゃないかの」

食べつつ正直な感想を述べた。

「なんて言えば良いんですか？」

「それくらい自分で考えなさい」

「お師様はなんて言われたらうれしいですか！？」

「わしは、わしのために作ってくれただけでうれしい」

「でしたらこれからも私、お師様のため頑張って作ります！」

「いや、力む相手が違うじゃろおに・・・わしの事はよいであろ」

また黙々と食べ出す。しばし気まずい空気が流れる。花鈴は何とか会話をしようとするが思うように言葉が出せず、黙りこくってしまふ。食事を済ますと公望はまた溜め息をついた。そして無言のまま立ち上がって縁側に行こうとする。

「お・・・」

思わず花鈴は声を出して引き止めようとした。公望が振り向く。

「どうした？」

「あ、いえ、えーと、さ、最近お師様元気が無いようなんでどうかしたのかなと思ひまして」

「そうか？わしはいつもと変わらんぞ？」

「でも、先程から溜め息ばかりついてらっしゃいますし、話し掛けでも上の空の返事しかしていただけませんし・・・。何か悩みとかあるなら仰って下さい！私、微力ながら力になりますから！！！」

「あー・・・弟子に気を使わせるなんて、わしもまだまだじやな。いやなに、たいしたことではない。個人的な事じゃから気にするな」

公望は手をひらひら振る。

「でも気になりますっ！私、お師様の力になって差し上げたいんです。どうなさったんですか!？」

「話せばただの愚痴よ。聞いて楽しいものではないぞ？」

「それでも良いです！何でもおっしゃって下さい!!!」

「じゃあ遠慮なく言わしてもらおうけど、あのくそじじいの事なんだけどさ」

公望が椅子に座り直し愚痴り始めた。口調も人間だったときに戻る。

「くそじじいって・・・大老君様の事ですか？」

「そう！あいつよあいつ。あいつさ、弟子の事なんだと思ってるんだよ。自分の小間使いにしか思ってたねんじゃねーか？最高統治者だかなんだか知らねえけど勝手過ぎだろ。何でも自分の言う事聞くとはいやがって、口答えすれば直ぐ命令じゃとかほざきやがって。俺はもう独立してんだぞ。それをよお。いや俺だってさ譲歩はしてるよ？一応世話になったし。ある程度の言う事は聞くさ。それにしたって限度があるだろ。人間界に行って建国の手伝いっつうのは俺も気にしてたからそれはいいとして、問題は猫姫だよ。自分でもなんとかできねえくせに、弟子に排除しろとか言うし。おかげで死にかけてただろ。で、花鈴のおかげで排除はできたけど、俺にも花鈴にも褒美の一つもくれなけりゃ褒めもせず、揚げ句疲れて仙人界に帰って来りゃ休む暇なく今度は仙人界での猫姫を何とかしろとほざきやがった。まあ、そこまでは百歩譲っても、問題はその後だ。暴力嫌いなのにそれを圧して何とかしてやったのに、あいつ褒めるとこ

ろか、今度は猫姫はお前担当だから人間界だけでなく仙人界で猫姫が行った事や関与したこと全て書類に書いて提出しろだあ？どれだけ膨大な量あったと思ってよ。仙人界での事なんて人間界にいたんだから知らねえつつってんのに、全部自分で調べるだときたもんだ。おかげで十二仙含めいろんな仙人に話聴きに行きまくってよ。それだけでもやってらんねえって。俺はよ？元々、仙人になったら好き勝手に生きて自由気ままに縛られず過すつもりだったんだよ。仙人はそれができるからな。だから道士の時必死になって修行して早く仙人になったんだ。それを自分はこのいう立場だから弟子のおまえもそれに従えとか自分の体裁ばかり気にしやがって。俺の自由や意志は何処に消えたよ？あいつ人を尊重するつつうこと知らねえ。褒めも礼も言わねえ。劳いの気持ち俺にも持てよ。で、このまま永遠とあいつの弟子である以上、俺の思い描いてた仙人生活できねえのかとか考えたら、なんで仙人やってんだと生き方について悩んだのよ。この先も何時意志が奪われるかと思ったら、少しでも空いてる時間を好きに生きようと考えてボーッとしてた訳。でもやっぱ弟子つつう肩書は消えないし、あいつが隠居でもしねえとずっと縛られるのかと思ったら溜め息が出ちまうんだな、これが」

公望は一挙にまくしたてた。花鈴も何時もと違う公望のこの勢いにさすがに「はぁ」と言うことしかできず、何と言えれば良いかオロオロしだった。

「まったく、振り回すのは女だけで十分だったの！な！花鈴！！！」

そんな花鈴に同意を求められ、「あ、はい！そうですね！！！」と言う。しかしこの返答がさらに公望の引き金になった。愚痴の矛先が女性にいつてしまったのだ。

「大体よ。女も女だよ。人間の時散々俺を利用して弄んで自由奪っ

て苦しめて。わがまま言いたい放題な上に口答えの一つもしようものなら、直ぐに怒り出してよ。明らかに自分が悪いのに俺のせいにしてさ。で、なにかにつけて女は感情で生きる人間なんだとか何とか言っと思うが俚にすべてやりやがって。その辺くそじじいと似てるんだよな。それでこっちがちよつと相手せず面倒もみなくなったら急に態度変えやがってお世辞言い出して俺の事持ち上げてよ。その時出てくる言葉なんて全部上っ面。ざけんな！！って感じだよ。あー、思い出しただけで腹立ってきた。だから女は嫌いなんだ。ぜってえ女は信じねえ。今まで何されても何言われても信じ続けて自分がやっぱり悪いのだろうと思ひ、自分を改め相手の気持ち少しでも解って、そうすればいつか報われるかと努力してきて全部裏切ってきやがったからな。あの生き物から出てくる言葉も態度も全部嘘。仮の姿。腹ん中じゃ黒いもん渦巻いてるぞ絶対。もう騙されるのはこりごり。もし誰かが俺の事好きだとかぬかしてきても、気持ちには応えられんわ。その好きつつう言葉が一番信用できねえんだよな。俺のどこに惚れる要素があるつつうの。微塵もねえんだから明らかに利用目的で近づいてくるだけとしか考えられないから。女は怖ー。裏表有り過ぎなんだよ。とりあえず、あのくそじじいと女つつう生き物は俺の一生の敵だな」

公望はうんうんと自分の言葉に頷くと改めて自分の意思を強固なものにした。はつきり言っこの公望の発言は世の女性全員を敵に回す問題発言である。普通の一般女性が聞いたらさぞ怒ることだろう。さすがの花鈴もあまりに言い過ぎとムッ！と思っはいたが花鈴はせっかく話ができるきっかけを作っ、なんとか仲を進展させようとしていたつもりだったので素直に聞くしかない。

「で、でもお師様。あの女性全部が全部そんな酷い人じゃないと思うんですけど・・・」

「あ？そりやそうだろ。女だって多種多様な感情や思考もってんだから。中には良い人だって数多くいる。というか本来普通の女だったらやっぱり人間なんだし思いやりとか優しさとかあって別に酷い生き物だとは言わないよ。ただ、俺女難の相があるらしくてよ。少なくとも俺が人間だった25年間そこらに出会った女は全部そうだった。まずお袋、姉貴に始まり、幼稚園、学校、大学、会社で出会った女連中。皆して俺を苦しめてよ。女に精神的に虐められて自殺考えた時もあったし。酷い酷い。中には巧み話術に話し振ってくるやつもいて、気がついたら出会い系に引きずり込まれて破産寸前まで追い込まれたからな。あの時は借金に追われて本気で死ぬかと思ったぞ。親にも殴られるし縁切られそうになったしな。まあ、俺としては切って貰っても良かったけど。あのお袋の子供やってるのは辛かったからな。だから、くそじじいが仙人スカウトに来たときは、もう人間界から逃げ出したくてよ。詳しく話も聞かず速攻返事したよ。俺の時代の人間界には未練なんか何一つなかった。むしろあったのは憎しみだけだったな。俺の時代の社会は一見平和だったけど中身は狂って理不尽極まりないと思ってたし」

花鈴は公望の時代の社会を知らないので何の事だか良く分からなかったが、とりあえず自殺だとか死ぬ思いをしたとか聞いて公望が人間だった時に辛い思いをしたということだけは理解した。それでも、やっぱり公望の女性に対する見方には凄く偏見があるようである。

「っと、ちょっと愚痴りすぎたな。すまんすまん、わしは一度語り出すと止まらなくての。まあ、そんなことを考えておったんじゃよ。気にせんでくれ。しかし、久しぶりに愚痴ったら少しは楽になった。ありがとう。花鈴」

「え、いえ、とんでもありません。私で良ければ何時でも愚痴聞き

ますので」

「そなたは本当に良い子じゃなあ。」

久しぶりに公望の笑顔が見れた。そこで少しホッとした花鈴は、疑問に思ってた事を聞いてみた。

「あの、お師様。今の話じゃ女性を凄く酷い相手として思ってたらしいと信じないと言っていましたけど、私の場合もそうなんですか？私も女性なんですけど・・・」

「うん？そなたはとーくーべーつ。稀に見る良い子じゃし、わしの可愛い弟子じゃから他の女性とは見る目は違う。共に今まで暮らしてきて少なくとも信用はしておるし頼りにもしている。わしが認めれる女性といえ、そなたと竜吉ぐらいかの。まあ、それでもやはり何を考えているのか分かんところは多々あるが」

「そ、そうですかあ。良かった」

花鈴は自分が特別だと言われてうれしくなった。最初愚痴を聞いた時はどうしようかと思ったが少なくとも自分には悪い印象は持っていない様で心が軽くなる。そこでもう一つの疑問を投げかけた。

「そういえばお師様。ずっと気になっていたことがあるのですが」

「なんじゃ？」

「猫姫の事なんですけど、あの防全布。すべての攻撃を防ぐ絶対防御だと仰ってましたよね？実際私も相手してみてもありとあらゆる攻

撃が防がれて傷一つつけられませんでした。十二仙様方や大老君様さえも手が出せなかったのに、お師様あつという間に斬り刻んで防全布破壊されましたけど、どうしてそんな事ができたのですか？」

「さあ？何故かの？」

「お師様、惚けないで下さいよ。大老君様も猫被るの止めろとかおっしゃってましたし。そういえば今更ですけどお師様の實力、私知らないんですよね。お師様が仙術扱ってるのもそれを用いて戦ってられるところも見えた事ありません」

「見なくとも知っておろう？わしは噂通りの落ちこぼれ仙人。最弱じゃ最弱」

ほっほっほと笑う公望に対し花鈴はしばし考えた。

「お師様、私と本気で戦ってくれませんか？剣術についてはお師様に教わっているんで實力は知っています。だから次は仙術で戦って下さい」

「えゝ」

すこぶる嫌な顔をして公望はぼやいた。剣術は昔から好きだったから相手をするのは楽しいのだが、仙術は気を消耗して疲れるのであまり使いたくないのだ。

「私、立派な仙人に成りたいって言ってたでしょ？そのためにも自分の力量を知っておきたいんです！」

「そなたはもう十分強い。猫姫も言っておったではないか。實力な

らくそじじいと同じだって。そんなそなたが相手では、わしはひとたまりもない。戦わなくなつて力量なんぞわかるじゃろ」

力説する花鈴を諭す様に言うが、それで納得する花鈴ではない。

「私はお師様の弟子です。弟子なら師の本当の実力を知りたい。だから本気のお師様と戦ってみたいんです！」

強く言う花鈴に公望は困った。大概の道士は、確かに自分の師匠の実力を知りたいと思うし、それを知る事で師匠を超える仙人になりたいと考えるのは自然な事である。実際師匠になった者も弟子に對し最初に自分の力を見せ付け尊敬させたり、修行に発破をかけたりにする。まあ中には、ただ自分の凄さを知らしめたいと考えるだけの仙人もいるが、公望の時も仙人になるちよつと前に大老君の真の実力を見せ付けられた。しかし、公望は今まで花鈴に実力らしい実力を見せていない。見せたのは剣術くらい。仙術はまったく見せてないのだ。弟子としては当然の返答である。

「本気と言ってもな。そう出せるものではないし、わしの本気の争いは生きるか死ぬかのどちらかじゃ。よってそなたもわしを殺すつもりで立ち向かって来なければならん。そなたはわしを殺せるか？」

公望は自分の美学に基づき到底無理な質問を投げかけた。

「それは・・・」

花鈴が口をつぐみ黙る。

「その意志がないなら無理じゃ。わしを本気にさせることなどできん。仮になつたとして、わしが死ぬのは良いがそなたを死なせたく

ないぞ。お互い覚悟が必要じゃ」

「・・・分かりました」

「うむ！では戦わなくて良いな？わし、争い嫌いじゃし」

理解してくれたと思い安心した公望だったが、真逆の返答が来た。

「いえ、私も本気になります。本気でお師様を殺すつもりでいきます！」

真顔で真剣な眼をまっすぐ向けて花鈴ははっきり言う。

「そっちかい！えゝゝゝ、わし死んじやうゝ」

「そんなことないですよ。私、お師様にはどんなに殺すつもりでかかっていても絶対敵わないって信じてますから！！！」

花鈴は笑顔で自分の素直な思いを伝える。公望はこの純粹で素直というか率直な花鈴の態度には弱かった。諦めて覚悟を決めた。

「過大評価も良いところじゃなあ・・・ま、やる気が出てるなら大切にやらねばならん。しょうがない。相手をしてやろう。死んだら死んだでよいわ」

やれやれと腰に手を当て花鈴と距離を置く。花鈴は構えた。

「やる前に言うておくが、まずはわしを本気にさせてみよ。わしは自分から本気にはなれん。本当の実力知りたかったら、それ相応の覚悟と力を見せる事」

「はい！では、いきます！」

花鈴は印を組みそれと同じに公望も印を組んだ。公望の方が組むスピードは速く複雑な印である。

「経絡発氣外壁の陣」

公望の周りに蒼白い色をした氣が現れ包む。高位仙術の防御結界だ。それに遅れて花鈴が印を組み終わる。

「風覇撃碎乱舞！」

氣の流れに沿って風が集束し激しい渦巻きになって公望に突っ込んでいく。しかし、公望の結界の前に弾かれた。

「殺す気でいくと言ってなかったかの？まだ甘い。猫姫と戦ったときの方がよほど強かったがな」

「わかってます！」

続けざまに印を組む。

「霸王鉄槌拳！」

拳に氣を集め一直線に放つ。さっきの術よりランクは高い攻撃だ。それでも公望の結界は破れない。花鈴はさらに高位ランクの印を組み連続して攻撃する。

「冥破武焼！・・・破斬！・・・獣咆哮撃！・・・烈波斬岩爆碎掌

!!!!!! はあ、はあ、静清流華繚乱っ!!!!!!」

花鈴がありったけの氣を込めて公望の経絡発氣外壁の陣よりランクの高い術を使っているのにすべて弾かれどうしても結界を破れない。公望は暇そうに地面に肘をたて寝転がっている。

「そんなものでは、わしを本気にはさせれんの」

「はあ、はあ、はあ。じゃあ、これなら!」

花鈴は物凄く複雑な印を組み始めた。それを見てさすがに公望も起き上がる。胡坐をかきながら花鈴同様複雑な印を花鈴より速く組む。花鈴の組み始めた印は仙術の中で最強の術であり禁じ手の術だったからだ。さすがに今の結界では防ぎきれない。一寸速く花鈴が発動する。

「焰縛惨殺焦焼連刃!!!!」

花鈴の全身から大量の氣が放たれ公望を包み込もうとする。その瞬間に公望も術を発動した。

「絶氣神戲授防陣」

花鈴の術が公望を完全に包む。氣は激しくうねりこすれぶつかり合いその摩擦により高温になってやがて炎が生じる。その炎がいくつもの刃となり焼き斬ろうと公望の四方八方から襲い掛かってくる。公望は発動のきっかけとなった印の後さらに継続の印を高速で組み続け最高防御結界を持続させる。炎の刃は結界に触れ相殺されるが消える。とまた次の刃が現れ襲い来る。相殺しては現れ相殺しては現れ、永遠と刃の猛威が消える事はない。

「禁じ手を使いおったな。どうやら本気でわしを殺すというのは本当じゃったのようだよ」

「ええ！当然です！！！」

「しかし、正気か？この術はそなたの氣と連動しておる。そなたの氣が消えるか相手が死なぬ限り襲い続ける。わしがこのまま防御術を使い防ぎ続ければやがてそなたの氣がなくなり、そなたが死ぬぞ？これは、自分の命を代償とする相打ち狙いの術。だから禁じ手の術なんじゃ」

「それはお師様だって同じでしょ？はあ、術を使い続ければお師様の氣だってなくなる。根競べ・・・です。ふう、はあ・・・」

「阿呆！今までずっと高位ランクの術を連発して唯でさえ氣がかなり消耗しておるそなたと一回しか術を使っていないわしを一緒にするな。もともと持っている氣の量だってわしの方が多いんじゃないぞ。根競べになったらわしが勝つに決まっておろうに！」

「や、やってみな・・・いと、ふう、ふう、わからないじゃ・・・ないですか。はあ」

花鈴はもうしゃべるのも辛そうである。それだけ氣が消耗しているのだ。

「愚か者！焼けになって冷静な判断を失う奴は、どれだけ強かろうと勝てはせん。こんなの唯の自殺行為じゃ！戦いでもなんでもない。自ら死のうとしているだけ。この術は勝算があるか、打つ手なしで死ぬ事以外待ち受けていないときに初めて使う術。このタイミング

で使うものではない。そなたは、教えた仙術以外で氷属性のオリジナル術があるじゃろ。何故そっちを使わぬ？そちらの方が仙術より強力なはずじゃ」

「はあはあ、わ、忘れ・・・てま・・・、はあ、した」

「本当に阿呆め」

公望は印を組み続けながら周りの氣を消すイメージを膨らませた。思い浮かべるのはいつもの庭の風景と氣を放出していない花鈴の姿。するとどうだろう、公望の周りに渦巻いていた炎は消え、花鈴から放出されていた氣もぴたりとやんだ。

「あれ？」

「あまり世話を焼かせる事をするな」

疲れ果てすとんと座り込み氣が消えたことにきよとんとしている花鈴に公望は近づいていくと、頭をポンポンと優しく叩いた。

「なんで？あれ？術が消えちゃった。私の氣はまだ残ってるのに・・・」

「わしが消した。あんな無意味な争いは修行でも稽古でもまして殺し合いでもない。そなたの自殺行為。無駄な勝負じゃ」

「お師様が、はあはあ、消したんですか？でも、どうやって・・・」

「わしの空間術じゃ」

「そ、そうなんですか。ふう〜〜っ」

花鈴は呼吸を整えなんとか立ち上がった。

「あゝあ、結局お師様を本気にさせられなかったし、相手にもされなかったなあ」

「そうばやくな。少なくともそなたの覚悟はしかと受け止めた。それに免じて少しだけわしの力見せてやろう」

「本当ですか!？」

「うむ」

そう言って公望は自分の額を花鈴の額に当てた。二人の意識が消えその場に倒れる。ふと気がつくと、小さな闘技場の様な場所に花鈴は立っていた。

「ここは？」

「わしの作った仮想現実の世界じゃ。二人の脳の中。まあ、簡単に言えば夢。意識と意識を繋げたものと思えば良い。ここなら、死ぬということはない。感覚はあってもすぐに再生する」

「へー」

「さて、わしの力見せてやろう。その前に花鈴一つ約束じゃ」

「なんですか？」

「わしがこれから見せる術は決して他言してはならん。何故ならわしは開発したが一生使うまいと決めていた術じゃからじゃ。秘密主義者としては秘密にしておきたいし。世の中には知らぬ事も良い事もあるからな。良いか？約束できぬなら見せぬ」

「大丈夫です！約束は守ります！」

「では花鈴、自分で思う絶対破れない最高位の防御術を発動して身を護ってみよ」

「はい」

そう言われて花鈴は、先ほど公望の使った絶氣神戯授防陣を張り、さらに宝貝で水を集めれるだけ集め最大超圧縮して周りを包みその周りに今度は絶対零度まで下げ固めた厚さ何十メートルにもわたる水の壁で囲んだ。これが今の花鈴の能力の限界のようだ。

「それが最高の防御方法か？」

「はい。これなら防全布並の防御力が出ると思います」

「どんな攻撃も防げる自信はあるか？」

「もちろんです！絶対防げます！かなり時間が掛かりましたがこれなら誰も大老君様でも絶対破る事は無理です！！！」

「よかろう。ではわしの秘奥義見せてやる」

花鈴はどんな術が来るのかと待ち構えた。例えばどんな術が来ようとも防げる自信はある。花鈴は自信と共に始めて見せてもらえる公

望の術にわくわくしていた。しかし公望は微動だにせず何か術を発動するような素振りを見せない。しかし、突然周りの風景が一変し見渡す限りの草原が広がる。そして公望は一言だけ言葉を発した。

「完殺陣秘義、空間の断裂網」

その言葉を耳にした花鈴は身体を何かが通り過ぎていった感触を受けた。公望は言葉を言った他は何もしていない。数秒経って「あれ？」と不思議に思い構えを解こうとした花鈴だったが身体を一ミリでも動かしした瞬間、首より下の身体全部がバラバラに斬り刻まれ首がドサツと地面に落ちた。花鈴は何が起きたのかさっぱりわからない。ただ自分の目と鼻の先に地面がある。何が起こったのだろうと考えようとしたが直ぐに意識が遠退いていった。

「はっ!？」

気がつくと草原の上に自分は立っている。身体に変な感触があり自分の身体をぺたぺた触る。最初夢かと思ったが、目の前に自分が施した大量の水の膜が破けて辺りが水浸しになっていることと水の壁が無惨にもバラバラに斬り刻まれ地面に無数に転がっているのを見て夢でない事を確信した。そう、確かに自分も目の前の光景のようにバラバラに斬られたのだ。

「これがわしの秘奥義の完殺陣の術じゃ。もしこれが仮想現実の場でなかったらそなたは既にこの世に存在せん」

「え? え? 何がどうなったんですか?」

「さあの」

景色が元の闘技場に戻る。

「完殺陣の術は他にもいろいろできるんじゃないが、ま、あの攻撃が一番最強じゃろ。回避絶対不可能じゃからな。さて現実に戻るか」

二人は家の庭で目を覚ますとゆっくり起き上がった。のんびり背筋を伸ばす公望に対して花鈴は納得がいかないような顔をしている。

「どうした？」

「お師様、あの術って私たちの頭の中だからできたんじゃないですか？ あれじゃ夢と同じですよ。夢だったら自分の好きなようにできるじゃないですか」

「しょうがないのお」

公望は証明するかの如く現実世界でちゃんと完殺陣の空間を作り上げた。

「なんだったら、本当に一回死んで見るか？」

「い、いえ！ 遠慮します！！ すみません、疑ってしまっ

「さもありなん。そもそも完殺陣は本当夢みたいな術じゃからな。おかげで開発には道士の修行期間より長い年月を費やした」

術を解きやれやれと縁側に行き座るとキセルを取り出し吹かす。花鈴は凄い！ といった風に感激したキラキラした目をこちらに向けてながら立ち尽くしていた。

「ま、開発したのは良いがこの術を人前で使う事は金輪際二度とな
かろう。そなただから見せたのじゃぞ？絶対、誰にも言ってはなら
んからな？」

「はい！」

元氣欲く返事をしこちらに走り寄ってくると、ちょこんと隣に座
った。ちらりと公望を見る。公望は至って普通にいつもと同じよう
に空を見上げていた。

「本当に大老君様のおっしゃったとおり、お師様は猫被りだ。凄
い！一体、後どれ程の秘密を持ってらっしゃるのかな？いつか全部教
えてもらえたらうれしいな。ううん！絶対に教えてもらうんだから
！お師様、丸裸にしちゃうぞっ」

花鈴はくすくす笑いながらそんな事を思い、公望に対する想いが
また強くなるのを感じていた。

女性のバトル!!!

いつもと変わらぬある日の朝、公望の家に竜吉の世話役である李菜がやってきた。出迎えた花鈴となにやら話をしている。その光景を縁側から見ていた公望の元に花鈴が駆け寄ってきた。

「お師様。ちょっと出かけてきます。竜吉様が私に用があるそうなので」

「ん？そうか、じゃったらついでに竜吉を連れてきてくれないか。わしも話があるのじゃ」

「わかりました。では行って参ります」

花鈴は礼儀正しく返事をし李菜の後について行った。

「竜吉の方から花鈴に用とは、また珍しい事もあるものじゃな」

そんな事を思いつつ日々変わらぬ一日を過ごそうと縁側に寝そべって転寝を始めた。花鈴は李菜の後ろについていき竜吉の部屋へと向かった。

「竜吉様、花鈴を連れて参りました」

「うむ、通せ」

部屋の中から竜吉の声が聞こえ、李菜は静かに戸を開けた。花鈴は少し緊張した面持ちで中に入る。

「李菜はもう良い。ご苦労じゃった。下がって良いぞ」

「はい」

竜吉の世話役をやっているだけあって李菜は物腰が静かで、楚々として部屋を出ていった。花鈴も李菜の雰囲気の影響されて、自然と気が引き締まり余計に緊張してしまう。竜吉とは以前共に暮らしていたとは言え、それは公望が側にいたし相談をしに行った時も公望を通して話が出来たのだ。こうやって直に自分一人呼び出されて何があったのかと緊張するのも当然である。

「竜吉様、お呼びにより花鈴参りました」

「・・・・・・・・」

竜吉は無言で花鈴を見て返事をしない。花鈴は益々緊張して姿勢を正す。竜吉はなにやら機嫌が悪いようである。

「わ、私に話というのは何用でございましょう？」

「・・・・・・・・まあ、座りなさい」

促された椅子に座り、竜吉が話をするのを待つ。竜吉はただ花鈴をじっと見ては何か考え込んでいる感じだった。しばらく痛い空気の中、竜吉がやっと口を開いた。

「花鈴、そちはまだ仙人になっておらんそうじゃな」

「はい」

「という事は、まだ公と共に暮らしているという事か？」

「はい」

「何故じゃ？そなたはもう十分に仙人になれる能力を備えておる。それに公の話ではそちは立派な仙人になるのが夢だとか。それなら直ぐに仙人試験を受け仙人になり独立すべきであろう」

「そ、それは、私がまだまだ未熟者でお師様の下、修行に励みたいと思っっているからです。まだお師様から学ぶ事はたくさんあると思っっていますので」

「詭弁じゃな。そちは嘘をついておるであろう？この間そちの相談を受けた。なにやら男は何をされたらうれしかとか、どう振舞ったら自分を好きになってくれるかとかじゃったな。公の頼みではそちが誰かを好きになっていらっしゃるのことで相談に乗ってやって欲しいと言うことで話を聞き相談にも乗ったが、あの時もしやと思っただのじゃ」

「な、なんのことでしょう？」

「ほう、惚けるか。では、まさかとは思うがそのそちの好きな相手というのが公であるというわけではないのだな？」

「え！？」

凶星をつかれて花鈴はびっくりした。竜吉には自分の想いについては何一つ言っていないはずだったからだ。

「それならこちらとしても別に良い。では、そちの夢である仙人の

試験を大老君に申し出て、今すぐ執り行うとしよう。公もわらわも大老君もそちを仙人になれる資格があると既に判断しておるから、別に問題は無かろうな？」

「い、いえ！それはちよつと・・・」

「何故断る？」

戸惑う花鈴に竜吉は意地悪そうに聞き返しさらに追い詰める。

「立派な仙人になるのがそちの夢。そちが自分をどう思っておるか
は知らんが、師である公も人間界での働きを見ていた大老君もそし
て公と共にそなたの修行を見てきたわらわも、十分仙人になる資格
があり、仙人になった後も、もう自分の力だけで立派になれると認
めておるのだぞ。断る理由なぞなかう？」

「・・・・・・・・」

黙ってしまった花鈴を見て竜吉は溜め息をついた。

「はあく、やはりそうか。そちも好きになってしもうたか。手強い
相手が敵に回ったのお・・・」

「そちも？」

「も」という言葉に花鈴は敏感に反応した。頭の中で「嘘でしょ
？」という文字が駆け巡る。そして思考がごちゃごちゃになってし
まった花鈴に対し竜吉ははっきりと言い放った。

「公はわらわのものじゃ。そちにはやらん」

「はあー！？何を言ってるんですか！？お師様は私のものですよ！」

竜吉の突然の宣戦布告に一瞬カチンっ！と来て花鈴は今まで隠していた想いをこちらもはつきりと言葉にする。

「良く言うの。何時からそちのものとなった？出会って数年しか経っておらず、しかも自分の想いに気がついたのが極最近ではないか」

「そう言う竜吉様こそ、何時からお師様が竜吉様のものになったのですか！それとも既にお師様が竜吉様のお気持ちに御応えになったとでも言うのですか！？」

「確かに公はわらわの気持ちには応えてはおらん。そもそも、わらは気持ちを伝えてもおらんしあの鈍い公の事じゃから気づいてすらおらん。しかし、公に対する想いの長さ強さはそちより遥かに上じゃ。わらわ達は何時から知り合っていると思う？お互い仲も良い」

「仲が良いのは私だって一緒です！竜吉様と違いお師様と一緒にずっと暮らしているし。仰るとおり自分の気持ちに気づいたのは遅いかもしれませんが、想いの強さだったら竜吉様には負けませんよ！」

「しかし、ずっと暮らしているといってもそれは弟子じゃからじゃろ？公だってそなたの事はただの愛弟子にしか思っておらんのではないか？公も言っておったぞ。立派な仙人になるのが夢ならさっさとわしの下を去って自立して自分の弟子を持ったほうが遥かに良いと。つまり、公のそなたに対する想いはそこらにいる師弟関係の想いと一緒」

「そ、そんな事ありません！お師様は女性に苦手な嫌いだと言っていましたけど、私だけは特別だと仰ってくれました！！！」

「ふーん。特別といってもやはり師弟関係にあるからそんなもの当然の事。むしろその女性の嫌いな公と全く赤の他人であるわらわが仲が良いという事の方が特別な関係と言えるのではないか？」

「うう・・・」

花鈴は竜吉のもっともな発言に返す言葉を失ってしまった。竜吉の言う通り、公望は特別な存在だと言ってもそれは弟子としての事。それにこの世で公望が花鈴以外に認める女性は竜吉以外いないと言っていた。

「まあ、そなたはあくまで弟子！・・・として共に暮らしている以上仲が良くなるのは当然。これがわらわも共に暮らしていたら断然わらわの方が有利じゃな。現に前、共に暮らして居た時は以前よりも仲が進展したぞ」

負けず嫌いな花鈴はカツと来た頭を何とか冷静に戻して竜吉に言い返す。

「じゃあ、竜吉様は私より早くにお師様と知り合い、想いも持っていて仲もそこそ良いと仰いますけど、そんなに長く知り合っていてお師様の気持ちに何か変化でもあったのですか？私の見たところじゃ全然変化がないように思いますけど？むしろ、弟子になってからのお師様が私に対する想いの方が少しは変化があったように思いますよ。それにお師様は、私が弟子になった最初から打ち解けて接してくれました。お師様の事だから、竜吉様と仲良くなると言ってもどうせ打ち解けてくれるまで時間が掛かったのでしょうか？」

「そ、それはそうじゃが……」

「やっぱり。お師様の性格上そんなに簡単に赤の他人の女性に打ち解けて仲良くなるなんて事ありませんもん。それに竜吉様は私を唯の弟子と仰いますけど、聞いたところじゃお師様、自分の氣に入った女性しか弟子にしないってずっと仰ってて、大老君様や御友人方を困らしていたそうじゃないですか。つまり、そのお師様の弟子になった時点で私は氣に入られた存在であるということ。そこらの仙人との師弟関係とは違うんですよ」

「むう……」

今度は、一変形勢が逆転して竜吉の方が返す言葉を失ってしまった。花鈴の言う事ももつともなのだ。痛いところを突かれ竜吉は下を向く。花鈴はどうだと言わんばかりに腰に手を当て胸を張った。そこに、竜吉は突然素直になって話してくる。

「確かにそちの言う通りなのじゃ……。そなたより早く知り合い、わらわの想いも直ぐ芽生えた。しかし公は、いくら頑張って振り向いてもらおうとしても、全然氣づく事も応えてくれる氣配もない。長い年月を重ねてようやく今ぐらいに仲良くなれただけ。公の事は周りから良く聞いていたし、女性に対してそういう想いを抱いているなら、わらわもあきらめざる得ないかとも思った。でもどうしてもあきらめられん。忘れようとする程、逆に想いが強くなる。わらわはこの様な気持ちは生まれて初めてなんじゃ……。わらわは立场上、公とはなかなか会う機会がない。公も別に会いに来てくれる訳でもない。だから、弟子になって共に暮らし好きに話が出るそなたがうらやましいのじゃ」

この素直に自分の気持ちを伝えてきた竜吉に威張っていた花鈴は驚き戸惑った。何千年と生き歴史の本に載る程有名な人物で、尚且つ仙人界一の美女兼歌姫であり仙人界に住まうものの憧れの存在の竜吉が、まだ道士である自分に憧れている事と、自分と同じく今まで誰かを好きになるという事を知らなかった事にびっくりしたのだ。花鈴からしてみれば、てっきりこれ程の女性なら幾多あまたの男性から言い寄られて付き合った経験だって当然あると思っていた。そもそも冷静に考えてみれば、まだ仙人としても若く周りに比べひよっこみたいな公望に竜吉程の偉大な仙人が想いを抱く事自体不思議である。花鈴は気持ちを落ち着けるとその辺を聞いてみることにした。

「あの、竜吉様。竜吉様は何故お師様の事を好きになられたのですか？お師様は仙人界では落ちこぼれ駄目仙人で一番の変わり者だって噂でしょ？それをどうして竜吉様程の方が」

「それはな花鈴。あるほんの些細な、でもわらわにとってとても大きなきっかけからじゃ」

「そのきっかけをよろしかったら話してくれませんか？」

「うむ」

そう言って竜吉は話を始めた。時は公望が仙人になったばかりの頃に遡る。当時の公望は齡24でスカウトされ道士の期間一年ちょっと。実は妖仁に続いて二番目に早く仙人になっていたりする。竜吉が始めて出会ったのは公望が仙人になって独立したりくたりと放浪生活をしながらオリジナルの術の開発に勤しんでいる矢先の頃、竜吉が大老君からある任務を頼まれた時だった。

「今回の任務は竜吉、おぬしに頼みたい。現段階で頼め解決できる仙人はおぬししかおらん」

「わらわを人間界に降ろすと言うのか？大老君。それ程の問題が人間界に生じているおるのか？」

「うむ。今人間界では異常現象の余波を未だに受け気象が激動し、雨も降らず砂漠化が広がり、作物も育たん状態じゃ。唯でさえ大規模な戦でほとんどが焼け野原になっている人間界がこのままでは、完全に滅んでしまう。せめてそなたの水を操る力でなんとか水を人間界にもたらし気象を修正して欲しい」

「そうは言うが、大老君。解っておるのか？わらわを人間界に降ろすということはわらわに死ねという事と同意義じゃぞ？」

「それを承知で頼んでおるのじゃ。仙人界、神界の澄んだ空気ですきたことしかなく、純血仙人であるおぬしにとって人間界の空気が猛毒であることくらいわしとて解っておる。しかし、今や人間界は滅亡の危機に立たされておるのじゃ。それをみすみす放って置くわけにはいかん。わしだって辛い。じゃがあえて頼む。残された人間達のためにおぬしの命をくれ」

大老君は土下座してまで竜吉に頼んだ。それを見て竜吉は覚悟を決めた。

「よかろう。わらわも長く生き過ぎた。人間達のためこの命捧げても悔いはない」

「許せ、竜吉・・・」

そうして竜吉は猛毒が広がる世界、人間界へと降り立った。水を操る力を用い空気上の水分を操作して国々の気象を修正したり、砂漠地方に大規模なオアシスをいくつも作っていく。その作業にすらいくら時間が掛かるかわからないだけでなく、氣を大量に消耗するため身体は弱っていく一方。それに追い討ちをかけるが如くその間もどんどん竜吉の身体は毒に犯されていった。

「もう・・・持たぬか・・・ごぼっ！」

人間界に降り立ち十数日経った時、とうとう毒が身体に蔓延し竜吉は血を吐き倒れた。

「うぐっ・・・半分もこなして・・・いないと・・・いうのに。はあはあ、まだ・・・死ねぬ」

血を大量に吐き地べたを這いずる様になんとか先に進もうとするが、立ち上がる力も残っていない。次第に意識が遠退いていく。

「すまぬ、大老君。約束は果たせぬようじゃ」

心の中で謝り、目がかすれ、もう死を意識した時、竜吉の傍に一人の青年が立っていた。意識が朦朧とし目も良く見えずその者の姿ははっきりとわからなかったが、確かにその場に居た。青年は静かに竜吉を抱きかかえる。

「誰じゃ???」

「ご無礼をお許してください」

その青年は突然竜吉にキスをした。そして竜吉の体内に息を吹き

込み自分の精氣をほとんど分け与える。するとどうだろう。毒に蝕まれ、氣もほとんど枯れ果て虫の息だった竜吉の身体は全快し、体内の毒も浄化された。竜吉の意識がはっきり戻る。

「そちは？」

「若輩者の仙人でございます。あの阿呆が土台無理な任務を与えたように変わってお詫びいたします。尻拭いとして私もこの任務手伝います。私の傍にいる限り竜吉様にとって猛毒である人間界の空気を術で除去できますし、私は人間界に詳しいので何処で竜吉様の力を使えば効率的かわかりますので」

丁寧な物腰と口調で青年は答えた。

「それはありがたいが・・・し、しかし、仙人が人間界に關与するのは掟で禁じられておるのじゃぞ？ ばれば唯ではすまん」

それを聞いた瞬間、青年の口調が急に変わる。

「あの阿呆の作った掟なぞ知るか。さあ、こんな任務さっさと終わらせて仙人界に戻りましょう」

青年は竜吉を急かして自分の靈獣に乗せた。竜吉は何故か素直にその指示に従った。二人を乗せたその靈獣は凄い速さで青年の言われたところに飛んでいく。竜吉は青年の指示に従い能力を使う。すると、まだまだ先の見えなかった任務がものの2、3日で達成できたのだ。

「さあ、帰りましょう。長居は無用です」

そのまま青年は竜吉を連れて仙人界に戻り、竜吉を蓬萊山まで送り届けた。そして竜吉を降ろして直ぐに立ち去ろうとする。それを竜吉が引きとめた。

「ま、待て。そち、名は？」

「知ってもお耳汚しになるだけです、それじゃ失礼します」

青年はまだ話をしたそうだった竜吉に見向きもせずさっさと立ち去ってしまった。竜吉はその場に立ち尽くし、ふと自分の唇を触り、まだ残っている青年の唇の感触を確かめた。

「あれが始めての出会いで、わらわにとって生まれて初めての接吻じゃった。今でもあの感触は忘れはせん。あの時好きという気持ちが芽生えだしたのじゃ」

「へー、そんな事があったんですか」

花鈴は竜吉の話を真剣に聞いていた。

「うむ。その後直ぐその青年を毎日毎日わらわは探した。会いたくて話がしたくての。しかし、一向に見つからん。それでそれから数日してからじゃったかな？大老君の部屋の傍を通ったとき、聞き覚えのある声が大声で聞こえてきたのじゃ。それでそっと中を覗くとな。おったのじゃよ、その青年が。大老君に向かって怒鳴り散らしておったわ」

「えっ？なんて仰っていたんですか？」

「なんつう任務を仙人に与えてんだ！このくそじじい！みすみす仙

人を殺す気か！？わしもまだ、くれてやった精氣と使った術の氣が回復しておらんから、今はこれ以上言わんが。とにかく、ああいふ任務は自分でやれ！あー疲れた……。じゃと言っておったわ」

「あー、はいはい」

花鈴はくすくす笑った。その人らしい言葉であつたからだ。

「で、その青年はの。ぶつぶつ文句を言いながら、まだ精氣が回復しきってなかつたのでふらふらな状態で部屋を出て来たのじゃ。そこでわらは直ぐに声をかけた。しかし、チラリとこちらを見るだけで、やはりそのまま立ち去ってしまったわ。後を追いかけて話しかけても、疲れているからまた今度と相手にもせん。さっさとまた靈獣に乗って何処かに行ってしまった。仕方なくわらは大老君に青年の名だけを聞いたのじゃよ。そこで公望と言う名の大老君の直弟子である事がわかつたのじゃな」

「そうだったんですか」

「うむ。その後は大老君を利用して何かと公を呼び出して会える機会を作つての。なんとか今の仲まで進展させたのじゃ。最初の公は、本当に女性を寄せ付けないというか壁を作つてわらわと接しておつたからな。話をするだけでも相当苦勞したぞ」

竜吉は、ほおーと溜め息をついた。花鈴も一緒に溜め息をつく。自分と違い素敵な出会い方をしたのだなという憧れの溜め息である。

「そう言うわけで、わらははずーと公を慕っておるのじゃ。故に

そちは手を引け！」

説明し終わって急に強気な発言を竜吉はしてきた。しかし、はいわかりましたと言う事を聞く花鈴ではない。他の事ならいざ知らず、公望の事は断じて譲れなかった。

「嫌です！」

「わらわ達は成り行きとはいえ接吻もした仲じゃ。もうわらわのものと言っても良い」

「それだったら私だって毎朝お師様に頼ですけど口付けしてます。お師様は私が口付けなしないと起きて下さいません。私がいなくてはしっかりしていただけないし、私を必要としていらっしゃるの私のものです！」

「しかし、公は別にすっかり生きたいとは思ってないじゃろ！？自分の好きなようにのんびり暮らしていききたいと言っておったぞ！そちを必要とはしておらん！」

「そんな事はありません！！！」

お互いキツ！と睨み合い火花を散らす。わいのわいのとどちらも一歩も譲らない姿勢でその後も言い争った。そして、譲らぬ花鈴に対して何故自分ほどの仙人がこんな小物の道士と本気で言い争わなければならぬのかと気高いプライドがふつふつと湧き上がり、竜吉はどうとう決めての一言を言い放ちその決着のつかないと思われた争いに終止符を打つ。

「まあ、この場でこの様に言い争ったって無駄な事じゃ。公の気

持ち次第じゃしな。それにそもそもわらわとそちでは最初から勝敗は見えておる。そちを相手にする必要なんてないのじゃったわ。そちの想いは絶対に叶わぬからな」

ふっと軽く優雅に笑うともう勝ったかの様に振舞った。それを聞いて花鈴は頭にまた血が上り、カッとなって叫ぶ。

「どういう意味ですか！？私だってお師様を振り向かせる自信はあります！絶対に想いは叶えて見せます！！！」

「意気込むのは良いが、残念じゃったの。そちはまだ知らぬ様じゃが、仙人界の掟で師弟間の恋愛及び結婚は禁止されておるのじゃ」

「え・・・」

突然知らされたその掟に花鈴は言葉を失った。

「師弟間で恋愛や結婚を行えば、自ずとその感情が邪魔をし教える師にも教えられる弟子にも甘えが出て修行にならんということだな。大老君が禁止したのじゃ。師弟はいずれライバル関係になりお互いが負けないよう競い合って自己を高めていかねばならんという立場にある。その掟についてはもちろん公も知っておるぞ」

「嘘・・・。そんな掟、私知りませんでしたよ・・・お師様だって周りの方だってそんな事一言も」

ショックを隠しきれない花鈴に元の優雅な物腰と口調に戻った竜吉がじわりじわりと追い詰めていく。

「別にそちに言う必要性を感じなかったのじゃろ。公は自分が好か

れているなんて思ってもいないしの。そちの好きな相手は他にお
と勘違いしておる。それじゃったら何の問題もない故に。言ってお
くが花鈴。特例でもない限り仙人の掟破りは重罪じゃ。例えそちが
どんな罰を受けても良いと覚悟しておっても、その罰は相手である
公にも及ぶ。ましてそちはまだ道士。そなたの責任の分まですべて
師である公が背負うのじゃぞ？ 仮に公がそちの想いに応えても、公
はそちの罪まで背負って罰を受け、そちは無罪放免じゃ。罰もどん
なものが与えられるかわからん。仙骨を取られ仙人界を追放される
やもしれん。まあ、仙骨を取られた時点で今まで生命を保っていた
氣の根源がなくなるのじゃからその状態で人間界に追放されれば、
生きるための氣の貯蓄がなくそれは死を意味するかの」

「そ、そんな・・・・・・・・」

「それとも何か、そちは公を最悪死なせても良いと思っておるのか
？ 本当に好いておるのであれば、公の事を考えて身を引いてこそ真
の想いというのではないか？」

「・・・・・・・・」

花鈴は完全に黙り込んでうつむいた。竜吉の言葉が心に突き刺さ
り、とても痛い。次第に座っていた腿にポツリポツリと染みが出来
てくる。自然と涙が溢れ、止め処なく流れ落ちていった。それを見
た竜吉はさすがに言い過ぎたかと思い、柔らかい口調で慰め謝った。

「すまん、花鈴。そちの想いの強さは知っておった。じゃから、こ
の掟の事は知らぬのならあえてわらわは何も言わず、真っ向からそ
ちと競って公の気持ちを掴むつもりじゃったのじゃ。わらわのいら
ぬプライドがそちを傷つけた。許せ。しかし、報われぬ想いである
事は事実なのじゃ。」

「……すうんっ……こんなことなら、お師様の弟子にならなければ良かった……」

「じゃが、弟子になれたからこそ芽生えた思いじゃろ？ 考えればそちも哀れじゃな。好いてはならん相手を好きになり、例え報われても掟により直ぐに辛い想いをせねばならん。想いを打ち明けずこのまま公と暮らし悶々と日々を過ごすか、掟を破って公に重罰を与えるか。そのことを考えればわらわはまだ幸せの立場におけるの」

竜吉の言葉が耳に入っていないかのように花鈴はひたすら声を上げず、大粒の涙を流し続けた。竜吉ももうなんと言ってやれば良いのかわからない。そんな折だった。竜吉の部屋の扉に音がして外から李菜の声が聞こえる。

「竜吉様。公望様が参られました」

「失礼するの、竜吉」

公望は竜吉の返事も聞かぬうちに部屋の中に入ってしまった。

「ど、どうしたのじゃ？ 公」

「いや、花鈴にそなたを連れてきてくれるよう頼んだのじゃが、一向に帰ってくる気配がないのでな。なにやら花鈴が粗相をして迷惑でもかけたかと思ってやってきたのじゃ。そなたの方から花鈴だけを呼び出すなんぞ珍しいからの」

しゃべりながら花鈴と竜吉の座っている方に歩いていく。そして

花鈴の隣に着いた時、花鈴が泣いている事に気がついた。

「どうした花鈴？何か竜吉に叱られてもしたか？」

優しく声をかけ頭をよしと撫でる。花鈴は公望に頭を触られて一瞬びくっと身体が動く。

「竜吉。花鈴が何をしたか知らんが、そんないじめないでやってくれ」

「いや、わらわは別にいじめたわけでは・・・」

「冗談じゃ。何を焦っておる。そなたがそういう人ではないくらい知っておる。で、一体何があったのじゃ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ほっほっほと笑う公望に対し二人とも黙ったまま答え様としない。花鈴は公望に撫でられてさらに涙が強く出てくる。

「何か話があつて竜吉は呼んだのであろう？何があつたかは言いたくないならあえて聞かぬが何の話だったかくらい教えてはくれぬか？」

「じ、実はこの。花鈴の好きな相手についてでちよつと・・・」

「はぁーん。その事か。大方花鈴は道士でまだ修行中の身、恋愛なぞしとる場合ではないとか相手の仙人と釣り合わぬとかその辺じゃ

ろ。そんな事なら別に良いのではないか？どう生きようが個人の自由じゃろ」

「いや、そういう事ではなくもっと別問題なんじゃが」

「まあ、なんにせよ。花鈴の想いのまま自由にさせてやってくれ。わしもそなたに協力はしてくれと言ったが、深くまで面倒を見るとは言っておらん。こういうのは自分の力で勝ち取ってこそ意義がある。わしらは、ほんのきっかけを与えてやるだけじゃ。花鈴は十分一人の力で男一人落せる器量も容姿も持っておる。花鈴も自信を持て。な？」

撫でていた頭をポンポンと軽く叩く。

「・・・ひっくっ・・・」

「ところで、竜吉。話があるのじゃが良いか？」

「う、うむ」

泣いている花鈴をそっとおいて、竜吉は公望の話を聞く事にした。

「本当に公は鈍いの！」

「お師様のほか・・・」

二人の気持ちを何一つ知りもせず話を始めている公に花鈴と竜吉は二人してそう思った。

公望、これからどうなるの？（作者の疑問）

「というわけじゃ。引き受けてくれるか？」

「え？何をじゃ？？」

花鈴の事と自分の事と公望のあまりの鈍さに頭を悩ませていた竜吉は公望の話を全く聞いていなかった。呆れて公望がもう一度簡略に説明した。

「じゃから、わしはライブをやりたいと思っておってバンドメンバーを集めておる。ベースとギターは見つかったが肝心のボーカルがおらん。そこで、仙人界一の歌姫であるそなたにそのボーカルをやってほしいと言っておるのじゃ」

「あ、ああ。そうか。それは構わぬが……。ボーカルとかライブってなんじゃ？」

「あのな、そなた何を聞いておったのじゃ。ライブとはそなたが開いておる歌会みたいなもの。ボーカルは歌い手のことじゃ。今までは歌会でそなた一人ソロで活動しておったが、それをバンド形式。つまり仲間と共に音楽を作り上げてやろうと言っておるのじゃ」

「それは、公と一緒にそのライブというものをやるという事か？」

「そうじゃ」

「うむ。それなら良いぞ。ボーカルとやら引き受けた」

竜吉は公望と一緒に出来るかと聞いて快く承諾した。公望もそれ聞いて安心する。

「よかったわい。ボーカルはバンドの華じゃからな。そなたなら打って付けじゃと思ったのじゃ。泰然、奇勝もそなたなら文句はあるまい」

「ん？泰然、奇勝ともやるのか？」

「そうじゃよ。バンドとは基本的にボーカル、ギター、ベース、ドラムで成り立つ。ギターは泰然、ベースは奇勝、ドラムはわしがやる。わしら三人は人間じゃった時、音楽経験があるからの。何か問題があるか？」

「いや、ないぞ。公がおるなら別にわらは他が誰であろうと構わん」

「ふむ。わしの用件はそれだけじゃ。あ、そうそう、ついでじゃ。花鈴にも聞いておかねば」

公望はまだ泣き続けている花鈴の傍に近寄った。

「さて、花鈴。何をまだ泣いておる？そなたにも頼みたいことがあるのじゃが、聞いてはくれぬか？」

膝の上で握り締めている花鈴の拳を優しくそっと握ると、首をかしげうつむいている花鈴の顔を下から覗き込んだ。花鈴は目を合わせ様としない。公望はじっと見て静かに柔らかく言う。

「実はの、聞こえておったと思うがそなたにもボーカルを頼みたい。

竜吉と花鈴のツインボーカルでバンドを組みたいと思っておるのじゃ。どうじゃろ？わしと共に音楽をやらぬか？」

「ん？公。花鈴にもボーカルをやらせるのか？」

「うむ。そなた一人でも十分すぎる程、華はあるし歌唱力も問題ないのじゃが、わしは欲張りでの。もう一花バンドに欲しいのじゃ。それに以前花鈴の歌を聞いたとき、そなたの歌声とすばらしくシンクロしておつての。二人で歌えば、すばらしいハモリになる」

「ほお。まあ、確かに花鈴は容姿同様可愛らしい声をしておるからな。なんとなく歌声も想像ができる。悪くはないの」

「じゃろ？ということじゃ。どうじゃ花鈴？やってはくれぬか？」

「・・・・・・・・」

花鈴は黙ってうつむいたままである。公望は辛抱強く花鈴の言葉を待った。花鈴は涙をぬぐうと、か細い声で公望の質問とは全く関係のない質問で言葉を発する。

「お師様。お師様は師弟間での恋愛が仙人界で禁止されているとご存知だったのですか？」

「んん？そうじゃが、それがどうかしたか？」

この質問に不思議そうに公望は答える。

「何故そのことを私に教えてくださらなかったのですか？」

「いや、教える必要はなからう。知ってなんになる？そもそも師弟とは家族の様なもの。恋愛感情なんて芽生えんからな。わしも仙人界に来てまだ日が浅いとはいえ、その様な話聞いた事もない。むしろ師匠が弟子に、弟子が師匠に、恋をするなぞということはありえないものとして考えられておる故、仙人界の掟でもはつきりと明言はされておらん。暗黙の了解なんじゃ。じゃから、わしも別にその掟を教える必要はないと思ったのじゃが、いけなかったか？」

「・・・うう・・・う」

花鈴の目からぬぐって消したはずの涙がまた溢れてきた。それを見て公望もおろおろしだした。

「え？え？わし、何か悪い事言ったか？？？」

困って竜吉の方を見るが竜吉は呆れて溜め息をつくだけだ。

「す、すまん。立派な仙人になるのが夢であるそなたに、仙人界の事すべてをしっかりと教えてやらなかったことはわしの責任じゃ。あの、これからはきちんと教える故に。その・・・泣くでない」

「公、そういう問題ではないぞ。ほんに花鈴が哀れじゃ」

「あ、え、そ、そりゃ、わしは師匠として駄目かもしれんが、それは、花鈴だって了承してわしの弟子になったんだぞ？わしは、わしの教え方で・・・」

「そうではない！」

「？？？」

全く意味が解らないといった感じで公望は縮こまっていった。なにやら空気が痛い。どうやら自分が悪いということだけは理解したが、何が悪かったのかさっぱり見当もつかず、眉をしかめる。

「公、そちはもう少し乙女心と言うものを理解せい。そのせいでわらわもどれだけ苦勞していることか」

「そうは言っても、わしだって人の心が読めるわけではない。はっきりものを言ってくれねばわからぬ」

「はっきり言わずともなんとなく空気でわかるじゃろ？ あれだけわらわも花鈴も雰囲気をかもしだしているのだから、空気を読め」

「読んどうわい。とりあえずわしに非があつて責められておることくらい解っておる」

「では、花鈴の事もわらわの事も解るであろう？」

「これ以上何を解れと言う？ 花鈴については、立派な仙人になる夢と好きな相手と結ばれる様に精一杯協力しているし、そなたには師匠にこき使われ自由が束縛されて辛いじゃろうと思い、無理だつて聞いているし、師匠にも何度も直訴しておる。わしはわしなりにそなたらの事に気を使っておるぞ」

「そうじゃなくてな・・・」

はあゝとまた大きく竜吉は溜め息をついた。公望の鈍さには本当困らされる。それ以外については良い人なんじゃがと竜吉はつくづく思った。その竜吉と公望の会話に花鈴がやっと口を挟んでくる。

「お師様」

「なんじゃ？」

「お師様はその掟についてどう思われているのですか？」

「どうって。そんな掟守る必要なんてなからう。わしは少なくともそんな掟はなくすべきじゃと考えておるが」

それを聞いてようやく花鈴が顔を上げた。

「ど、どうしてですか？」

「じゃって、掟というものは、それを破ると自分以外の他人や社会に迷惑なり悪影響を与えるために定めるもの。掟の根源は道徳にある。道徳さえ心得、行動しておればそもそも掟を定める必要なんてないのじゃ。しかし、人というのは人間であれ仙人であれ神人であれ過ちは犯す。感情や複雑な思考を持ち社会を形成している以上、誰かを傷つけてしまったり、殺めてしまったりと、放置すればその社会になんらかの大なり小なり損害を与えてしまうような事を未然に防ぐために掟とは定めるのじゃぞ。決して個人の自由意思を束縛するためには有る訳ではない。まあ、掟について語りだしたらどれだけあっても話が止まらんから、追々話していくとして、その事を考えると恋愛なんぞもろに自由意志ではないか。しかも誰かが誰かを好きになるというのは生き物の本能、本質の部分に当たる。それを掟で縛って禁止してどうするのじゃ。恋愛において師弟関係じゃとか人種の違いとか性別の違いとか歳の差とか様々な要因なぞ関係ない。好きになったらどうしようもない。お互い好いてしまったら尚の事。その社会において倫理的に問題があっても、それを束縛して

良い者なぞこの世におらん。というかおってはならん。誰かを好きになり付き合って、結婚して、それが社会や周りの他人に迷惑を与えるか？そりゃ、嫉妬したりする相手、羨み妬む相手はおっても、人の自然な感情じゃろ？自分が迷惑をかけたわけではない。恋愛に限らずその点の理屈を誤解しておる者が多数おるが、むしろそっちの方が由々しき問題じゃ。人が快適に安全且つ幸せに暮らすために掟を定めるのに、逆に束縛して苦痛を与えてどうする。本末転倒じゃ」

「じ、じゃあ、お師様はその掟については反対なんですわね！」

「反対も何もわしの美学的理論に基づけば守るつもりなぞさらさらないわ。まあ、それはわしの個人の理屈じゃから、他の者はどうかは知らん。しかし、どう考えてもその掟はおかしい。師匠は何を考えて定めたのか？じゃから、阿呆じゃと言っくんじゃ。仙人界のトップがそれで良く今まで平和じゃったのか不思議でならん。花鈴には先日師匠の愚痴を言ったばかりではないか。あやつはおかしいんじや」

「でも、掟である以上、破ったら厳罰を受けるのでしょ？」

「じゃから、そんなものは知らんと言っておるではないか。その掟を破って厳罰を受けるなぞくそ喰らえじゃ。むしろ定めたあいつが罰を受ける。わしは、厳罰を受けるつもりも、掟を守るつもりもない。社会と他人に迷惑さえかけなければ何をして、何を思おうと個人の勝手じゃ。わしは、仙人界に来てからずっとその美学に基づいて動いておる。その美学がわしの掟。唯一わしを縛る事のできるもの。もし仮にじゃぞ、そなたの姉の花憐が師匠である大乙に恋をする、あるいはその逆でも良い。それで気持ちを伝えて両想いになったとしよう。そこでくそじじいが、掟破りじゃ、厳罰じゃなぞ言っ

てきたら、わしは断固として抗議するぞ。場合によっては個人の尊厳を守るため実力行使にも出て本気でくそじじいとやりあう。・・・潰すよ？冗談抜きで」

最後の言葉を冷たい本気の口調で付け加えた。その言葉が公望の本当の本気であると感じた花鈴は急にパツと明るい笑顔を向けた。声も元気になる。

「そうですよね！そもそもその掟自体がおかしいんですよ！お師様の言う通り、守る必要も罰を受ける理由もない！！！」

「そうじゃ。そんなもの普通に考えれば誰だっておかしいと思うじやろ？恋愛は個人の個人の問題であり、好きにすれば良い」

「うんうん！」

「じゃが、わしの言っている理論はあくまで他人や社会に迷惑及び悪影響を与えない範囲でじゃぞ？その辺はきちんと線を引かねばならん。賢いそなたなら解るであろう？まあ、法律、つまり掟については長話になるので、今後教えていってやろう」

「はい！もちろん解ってます！」

花鈴は先ほどと打って変わって、もう満面の笑顔を浮かべうれしそうに返事をした。

「でじゃな、話は本題に戻るが、そなたはわしと共に音楽をやらぬか？」

「ぼーかるって歌い手でしたよね？」

「うむ」

「お師様とやれるんですね？」

「うむ。やってもらいたいなと思っておる。まあ、嫌なら無理強い
はせぬが・・・」

「いえ！喜んでやらせていただきます！私歌うの好きですし！！！」
凄いい気迫で返事をしてきたので、それに気圧され少しびっくりし
つつ公望は良かったと思った。

「では、用も済んだし帰るかの。竜吉の話は終わったのか？」

「え、あ、うむ。わらわの用は済んだが・・・」

「だが・・・なんじゃ？」

しばし無言で考えた後、竜吉は恐る恐る公望に聞く。

「の、のう、公。そのバンドとしてこれから共にやっていくのじゃ
よな？」

「そうじゃが？」

「だったら、わらわもそちと共に暮らしては駄目かの？」

「ん？」

「いや！ほら！バンドについて詳しくはわからぬが、練習とかもしなければならんのじゃろ？わらわがここに居ては、いつまで経っても大老君に縛られてなかなか自由が効かん。練習の参加にだって出来るかどうか。それでは、他の者達にも迷惑が掛かってしまうじゃろ？それに、公も言っておったではないか、大老君からわらわを自由にしてくれるように直訴しておると。だったら良い機会じゃから、この際わらわも自由に生きようかと思って」

「仕事はどうする？」

「仕事は、別にやることはない。十二仙が形になりしつかりと役目を果たしておるのでわらわがやることは滅多な事がない限りほとんどないのじゃ。やる事といったら極々たまにある歌会だけ」

「ふむ、そうか……。そうじゃな。歌会もライブで代わりになるし、仕事がないならこれ以上そなたの自由意思を束縛する必要はないの。なら、好きにすれば良い。わしの家で暮らそうが、どこか別で一人で暮らそうがそなたの勝手じゃ。わしの方は問題ないし、もし師匠から何か言われればわしがなんとか言いくるめる故」

「じゃあ、そちの家で暮らしても良いのか！？」

「うむ」

公望の返答に竜吉もまた花鈴と同様パツと顔が明るくなり笑顔を見せた。

「さてと、帰るか」

公望はさっさと部屋を出て行く。花鈴と竜吉は揃って後について

いった。歸りがけ、花鈴は竜吉の方を見ると竜吉は見上げる花鈴にニヤリと笑った。花鈴はムツとしてお互いまた睨み合い火花を散らし合う。後ろでそんな事が行われているとも露知らず、公望はのんびりとしながら泰然と奇勝に連絡を入れていた。

公望、バンドを組む（前書き）

皆さん、お久しぶりです。このサイトでの評価・感想にて心無い人に荒らし行為を受け、ガラスのハートが見事に砕け散って落ち込んでいた作者です。いやー、荒らしを受けてから書く気力が無くなりました。連載も止めようかと思っていましたが、とりあえず、更新いたしました。もし待っていた方がいらっしゃったら申し訳ありません。

私、辛口感想だとへこむし、頑張つてといわれると頑張る単純な性格しておりますので、今後何かと落ち込んで本気で連載が中止になるかもしれませんが、楽しみにしてる方がいらっしゃいましたら励ましの一つもいただければ直ぐに復帰いたします（笑）

さて、第二部に入り封神演技からほとんど外れたオリジナルラブコメとして再スタートを切りました。この先どうなっていくのかは私にもわかりませんが、まあ、ラブありシリアスありほのぼののありのゆっくりなペースで進めて行きたいと思っておりますので、応援の程よろしくお願いいたします。

まだハートブレイク中の作者より

公望、バンドを組む

「マジで竜吉様と組めるのか！！！」

「うむ」

「最高じゃん！なあ、奇勝」

「まあ、そうだな」

連絡を聞いて早速やってきた泰然は、あの竜吉とバンドが組めると聞き俄然張り切っていた。奇勝は相変わらずクールさを保っていたが、内心高揚していたようで珍しく笑顔を見せている。

「じゃあ、竜吉様がメインボーカルで花鈴がサブになるのか？」

「いや、曲に合わせてメインを決めるか同じくらいにした方がいいじゃろ」

「あ、ああ、そうだな。その方がバンドとしては良いんだった。いやー、しばらくバンドなんて組まなかったから基本的なことをすっかり忘れてるぜ」

頭を掻きながら、はっはっはと泰然は笑っている。

「それは別に構わんが、まさか腕の方まで忘れてなまってるのか言うんじゃなからうな？二人とも」

「まさか。仙人界に来ても練習は怠ってないぜ。よく奇勝とジャム

ったりしてたしな」

「ああ」

「それなら安心したわい」

「そういう公望こそ、ドラム大丈夫なのかよ？お前がドラムやるなんて聞いた事もなかったぜ？俺らの腕についてこれるか？」

「まあ、わしはブランクがあるからの。仙人界に来て一度もドラムには触れてないし。じゃが、音楽感性は鈍っておらんぞ。直ぐに実力取り戻してやるわい。曲がりなりにも竜吉と組むのじゃからな。下手な演奏しては、失礼に当たるといふもの。わしとて自信ぐらいある」

「なら良いか」

「そういったことは、やはり一度スタジオに入って併せて見ればわかるだろ」

「そうだな。奇勝の言うように実際併せればお互いの実力とか音楽方針とかがわかるだろ」

「うむ」

「そういえば、その事なんだけどよ。スタジオどうするよ？仙人界にはスタジオどころか、アンプもないぞ？いや俺達は楽器とアンプは個人で持ってるけど、繋ぐ電気もないし」

泰然がふと思いついたかのように話を持ちかけてきた。まあ、泰

然の言う事も最もである。仙人界に電気という文化はない。よって人間界のアンプやギターもろもろは使えないのだ。しかし、公望はその問いを見越していたかのように答えを返した。

「その辺は大丈夫じゃ。大乙に頼んで、人間界と同等の電気が流せる発電機みたいな宝貝を作ってもらっているところじゃかな。大乙も難しい事ではないと言っておったから、そろそろ出来ておる頃じゃないかの」

「さすが公望だな。ちゃんとぬかりはないというところか」

「当たり前じゃ、奇勝。自分からやりたいといっておいて準備が出来てなくてどうする」

「じゃ、その問題は大丈夫として。本題に入ろうか」

そう言って五人は今後のバンドの方針について話し出した。

「あの、皆さんすみません。そもそもばんどってどういうものなのですか？」

「うむ、わらわもその辺を聞いておきたいぞ」

話の輪に入れず、花鈴と竜吉が質問してくる。泰然が公望の変わりに答えた。

「簡単ですよ。バンドというのは軽音楽、ポップスとかロックとかいろいろジャンル分けされますけど、基本はギター、ベース、ドラム、ボーカルで構成されるもので集まって一つの音楽を演奏しようというものです。俺がギターをやらせてもらって、奇勝がベース、

ドラムは公望がやります。お二方にはその演奏に併せて唄って頂ければいいんです」

「軽音楽とはなんじゃ？ わらわの歌会とは違うのか？」

「うーん。説明するのは難しいですね。竜吉様が開かれている歌会。あれは少なくとも軽音楽とは言いません。民族曲に近いですね。音楽にもジャンルという分野で様々なものがありまして、オーケストラだったり、吹奏楽だったり、ジャズだったりといろいろあって言葉では説明できませんね。実際聞いてみるのがよろしいかと思ひます」

「そうか」

竜吉には丁寧な言葉遣いで泰然は受け答えをしている。どうも、まだ竜吉の存在には慣れていないようだ。

「最初は慣れないかと思いますが、絶対にはまりますよ。とりあえず、何のジャンルでこういった曲調のものをやるか、つまり音楽性ですね。それを決めようと今話しているのです。で、公望、やるなら当然オリジナルだよな？」

「もちのろん。わしはオリジナル以外やる気はせん。というか、わしらは生まれ育った時代も国も違う故、コピーはできんじやろ。やつても意味がない。面白味もない。その辺はむしろわしが心配しておるぞ？ おぬしら二人のうちどちらか曲は作れるのか？ わしは作れるが、譜面にはおこせんし、弦楽器は弾けんからの」

「それは問題ない。俺達は二人とも曲は作れる。ただ後は音楽性か。何のジャンルをやる？ 俺達はメロコア系が好きだが」

「奇勝達はメロコアか。わしはメタルが好きなんじゃが。それもデスメタルとかヴァイキングメタルとか。しかし、基本的にはなんでもやれるからの」

「じゃあ、このバンドの方向性はメロディックメタル辺りになるのか」

「そうじゃな。それが一番良いと思うが……。しかし、できればせつかくこの様に仙人になっておるのじゃから、仙人界では、やる以上新しいジャンルを開拓して行きたいと思っておる」

「ほお、おもしろそうじゃないか。なあ、泰然」

「ああ、新ジャンル開拓って言うのは音楽家として夢見る所だからな。全員が違う時代、国で育っているなら融合ができるかもしれない。よし！それで行こう！！！」

泰然は今にもギターを弾こうかと言わんばかりに張り切りだした。それを嬉しそうに見ながら公望はさらに今後の方向等について話出した。

「とりあえず、バンドの方針は楽しく音楽をやり、本気で音楽を愛するという事でいこう。という事で、全員絶対に仲良くやる事が前提じゃな。その辺は問題なからう？」

「ああ」

「うむ」

「はい」

「大丈夫だろ」

「うむうむ。では、あとバンド名とバンドリーダーはどうする？わしとしては、バンド名はバンドの華である竜吉と花鈴の名を取って、竜花と名づけたいのじゃが・・・」

「竜花か……。良いんじゃないか？なあ」

泰然は全員の顔を見た。全員それで良いといった感じで、頷く。

「では、後はバンドリーダーじゃが……。やはり竜吉が良いのかの？」

「そうじゃないか。やっぱり竜吉様は既に歌会をやってらっしゃるし、知名度もナンバーワンだし」

そこに今まで話についていけず黙って聞いていた竜吉がやっと口を挟んだ。

「のお、バンドリーダーとは、聞いてるところじゃとバンドの代表者みたいなものの様じゃが」

「ええ」

「それをわらわにやれと言うのか？」

「嫌ですか？バンド名も竜吉様と花鈴から取ってますし、地位的にも仙人達に好かれていることからやはり竜吉様が一番良いかと思

うんですけど」

「嫌ではない。しかし、反対ではある。そもそもバンドをやりたい
といいだしたのは、公であろう？ わらわも公が誘ったからバンドを
やる気になったのであって、公でなければやる気なぞでなかった。
だから、公がバンドリーダーを勤めるべきではないのか？」

「私もお師様がリーダーとか言うのやられた方が良いと思います！」

花鈴もようやく話に入ってきた。

「うーん。公望ねえ。俺は良いけど……。どう思う、奇勝？」

「俺は、音楽がやれば誰がリーダーだろうと関係ない」

奇勝は根っからの音楽好きなのでそういった面倒な事は気にしな
いのだ。奇勝は音楽に関しては純粹なところがあるらしいと泰然か
らは聞いていた。

「ええー、わしがやるのおー。面倒じゃし、わしは上に立ってまと
める器なぞないぞ？」

「しかし、公。そちが言い出したことじゃろ？ わらわは公がリーダ
ーでないのなら、バンドは組まんぞ？」

「わ、私ものです！」

「えー」

文句をぶーぶー言っている公望に対し竜吉と花鈴はそこだけは譲

れないと言いき張った。泰然の方を見ると、諦めろという感じに笑っている。しょうがなく公望は承諾した。

「あくまで形式上じゃからな。じゃあ、リーダーとして一言。とにかく仲良くやっていくこと。楽しくなければ音楽ではない。その辺だけはちゃんと守る事。良いな？」

全員が快く返事をした。こうしてバンド「竜花」が結成されたのである。その日はそれで解散する事になったが、帰り際、泰然が肝心な事を聞いてきた。

「おい、公望。で、練習場所のスタジオはどうするよ。後、練習する日は？」

「練習場所はわしの家じゃな。スタジオを作っておく故に。後は練習日は今日から一週間事に一日やるとの事でどうじゃ？」

「了解。じゃあ、来週までに奇勝と二人で何曲か作っておくよ」

「頼むぞ」

「任しておけ」

そう言って二人は帰っていった。

「うーん！来週が楽しみじゃな！！！！」

「お師様、嬉しそうですね」

珍しくやる気を出して楽しそうにしている公望を見て花鈴が尋ね

てきた。

「当然じゃ。バンドがやれるとは正直思ってたからの。仙人には娯楽が無い故に、良い娯楽が見つかったものじゃ。これもそなたらがボーカルをやってくれると言ってくれたからの事。心からお礼を言うぞ」

「そんな、お礼だなんていいですよ」

「そうじゃぞ、公。わらわ達もそちとやれて嬉しいからの。のお、花鈴？」

「はい！」

「しかし、公がそこまで嬉しいがるという事は、バンドというものは相当面白いものじゃという事か？」

「うむ！音楽が好きな者なら絶対にはまるぞ。しかも自分達で音楽を作っていくというのじゃからな。わしの音楽感性がビビビッと反応しておる。このバンドは絶対に成功するぞー！」

公望はやるぞー！といった感じに早速来週に向けて準備を始めた。それを嬉しそうに見ていた二人に、公望は思いだしたかのように言葉に向けた。

「そうい・え・ば、竜吉は今日から我が家で暮らすのじゃったな？」

「うむ」

「では、ひとつだけ守って欲しい事がある」

「なんぞや？」

「花鈴とは仲良くする事。これは、花鈴にも言いたい。花鈴も竜吉と仲良くするのじゃぞ？ 郷に入れば郷に従うという諺もあるしの。二人とも良いな？」

「相分かった」

「はい！」

「ま、それだけ守ってくれば文句は無い。後は好きに暮らしてくれ」

そう言ってまた公望は準備を続けた。竜吉と花鈴は縁側に座り、話を始める。最初に話を振ったのは花鈴だった。

「竜吉様。本気で宣戦布告してきましたね。家にまでやってくるなんて」

「当然じゃ。チャンスがあるなら最大限に活かさねば。今までそちに遅れを取っておったからな。一挙に巻き返してやるぞ」

「そううまくいきますかね。私、はっきり言っておきますけど、手を一切抜かず譲る気はさらさらありませんから」

「わらわも譲る気は全くないぞ。この際地位だとか体裁だとかすべて捨てる覚悟じゃからな。本気で公を落してみせる」

「私だって！」

「ふむ、おもしろい。わらわの大人の魅力が勝つか、そなたの若い故の子供らしい素直さが勝つか勝負じゃ。恋愛において立場なぞ関係ないからの。わらわの地位だとか気にせず、そちも真っ向から掛かってくるが良い。それでこそ落した時の充実感が増すというもの」

「言われるまでもありませんよ」

二人はお互い見つめあい、ふっ！と笑った。

「まあ、公の事以外は仲良くやっていこう。公に言われたからの。下手に約束を破って嫌われたくもないし、別にそちが憎いわけでもないしの。わらわにとってしてみれば、そちは好敵手みたいなものじゃしな」

「そうですね。私もお師様には嫌われたくないし。竜吉様、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ」

お互い深々と頭を下げ、この時点で本格的な公望争奪戦が始まったのである。

公望、ちょっとした秘密。

ダダダダダダダ！チュンツチュンツ！！と、ある広場から銃声が聞こえ物陰に隠れている二人の横を銃弾が嵐のように通り過ぎていく。二人は壁を背にして座りながらタバコを吹かしていた。片方がパートナーに声をかける。

「なあ、リチャード。どうしてこうテロリストって言うのは無駄に弾を撃ちたがるのかねえ。弾だって無料ただじゃないっていうのに」

「さあな」

間延びした言葉で声をかけてきたパートナーにリチャードと呼ばれた男は笑いながら返事を返す。

「大方日ごろの鬱憤晴らしでもしてるんじゃないのか？テロリストの考えてる事なんて俺にはわからんよ。お前はと思う？サキ」

サキと呼ばれた男はふーっとタバコの煙を吐き上を向いた。

「俺にもわからん。知りたいとも思わん。それより俺は疲れているんだからさっさと任務を終わらせて温かいベッドで横になりたいね。いくら夜生活の俺でもいい加減眠い」

サキはあくびをしながらさも眠そうに返事を返した。

「その意見には賛成だ。やれやれさっさと終わらせるか」

「だな」

そういうと壁際からちらりと広場を見て、人の数をリチャードが数えた。

「右に10人、左に17人、正面に5人だ。左と正面はお前に譲ってやるよ」

「あー、ずりいー。面倒な方よこしやがったな」

「お前の腕ならたいした事ないだろ。そういうわけでゴー！」

リチャードはサキの文句を受け流し愛銃のガバメントで一発一発パンツ！パンツ！と右に居たテロリスト達の頭を打ち抜いていく。相変わらず良い腕してるなと思いつつながらサキもやれやれと愛銃のマグナムに弾を込め、リチャードと違いパパンツ！と二発ずつ弾を打つ。サキの打った二発の弾は一発がテロリストの銃に当たり破壊し、もう一発が相手の太ももに当たる。

「ぐあっ！！！」

テロリストから悲鳴が聞こえた。それから二人はお構いなしに、銃を撃っていく。

「サキよお。おまえ相変わらず腕が良いのに殺さないんだな。そっちの方が手っ取り早いだろうに」

「無駄な殺生は嫌いだね。俺の美学に反するんだよ。いかに無駄打ちせず相手を戦闘不能状態に陥れるか。こういうのは華麗にこなさないよね。それでこそ美しい」

「はいはい」

あくまで戦闘でも優雅さを保とうとするサキに呆れながらリチャードは銃を打ち続ける。あっという間にリチャードの方は片付いたようだ。

「おい、俺のほうは終わったぞ」

「なら残りくれてやろうか？」

「遠慮しとく。俺はのんびりとタバコでも吹かしながらサキ先生の美学とやらを見せてもらうさ」

「ああ、しかと見とけ」

二人は笑いながら話をしリチャードはタバコを取り出して火を点けた。サキは自分の美学にのっとりの確に二発の弾丸でテロリストどもを戦闘不能状態にする。

「さて後一人」

空になったリボルバーに二発弾を込め、さっと構えた。パパンッ！と二発の弾は正確に真っ直ぐ飛んでいき、相手の銃を破壊すると同時に隠れてほんの数センチだけ物陰から出ていた肩に直撃する。

「ギャ！」

テロリストの悲鳴が聞こえ、ようやく銃声がおさまり静かな夜に戻っていった。

「うーん。お見事。よくあそこに当てれたものだ」

「お前だって出来るだろうが」

「まあな。さてと後は警察の連中に任せて俺達はずらかろうぜ」

「そうだな」

リチャードに促されて二人は立ち上がると外に出て行った。外には大勢の警官が待機している。

「終わったからもう、突入しても良いぞ」

リチャードが警察に指示を出すと警察隊は一挙に広場へと突入していった。二人はそのまま車に乗りC I A本部に戻る。

「ご苦労だった。特殊エージェントリチャード、サキ」

「いえ」

「あれくらいなら問題ないですよ。ボス」

「うむ、しかし最近やたらテロリストが活動をしている。これから荒れるかもしれないから二人ともそのつもりでいてくれ。報告は警察から聞くからお前達はもう下がって良いぞ」

「言われなくても帰ります」

サキはのんびりとあくびをするとさっさと部屋を後にした。後ろからリチャードも着いてくる。

「さてサキ、仕事も終わったし、どうよ、これから一杯？」

「いや今日は遠慮しとくわ。すこぶる眠いからベッドが恋しくて」

「そうか、じゃあまたの機会にな」

「おう、悪いな」

「良いつて」

二人は本部から出てリチャードは自分の車に乗ると、手を上げてさっさと帰っていった。

「ふむ。わしも帰るかな」

サキはその場から瞬時に消えた。

「師匠、入りますよ」

大老君の部屋の前に現れたサキはトントンとノックして中に入っていた。

「お、戻ったか、公望」

「ええ、只今戻りました」

「どうじゃった？人間界の方は？」

「そんなことご存知でしょ？アメリカはまだまだ荒れてますよ。お

かげでここしばらくずっと任務任務。いい加減疲れます」

はぁと溜め息をつき、サキこと公望は大老君の部屋の椅子によつこらしよと腰掛けた。

「確かに最近は人間界も荒れておるの。まあ、おぬしもここ連日の任務で疲れておるじゃろうが、今後も頼むぞ」

「はいはい。その代わり例によって例の如く、報告及びデータは師匠の方で処理してくださいね。わしは報告書なぞ書く気はありませんから」

「分かっておる」

「じゃあ、わしは眠いのでさっさと退散します。それでは」

「うむ、ゆっくり休め」

珍しく大老君からねぎらいの言葉をもらいちよつと違和感を感じたが眠気の方が強く直ぐに部屋を出て待たせていた風麒麟に乗った。

「いつもすまんの、風麒麟。夜遅くまで付き合わせる。というかもう朝方か」

「いえ、構いません。では家に帰りますので落ちないようにしていただきますませ」

「うむ」

公望は風麒麟の背中であぐさると仮眠を取り始めた。しかしそ

こは風麒麟。公望を落さないように最善の注意を払いながらも最速で家まで飛んでいく。

「着きましたよ、公望様」

「う、うーん。ありがとう」

公望は風麒麟から降りるとふらふらと自室に戻っていった。ベッドには花鈴がやすやすと気持ち良さそうに寝ている。それを見て公望もパタンとベッドに寝転がった。直ぐに睡魔が襲ってきて夢の中にまどろんでいく。そして次の日の朝、何時ものように花鈴に口付けされて目が覚めた。公望は何事も無かったかのようにおはようと花鈴に挨拶すると早速縁側に出てぼーっとし出す。花鈴は隣にちょこんと座っていた。

「最近お師様、眠そうですね」

「うん？」

「あくびばかりされてますよ」

「そうか？それはきつと花鈴の可愛い寝顔に見とれてて時間の経つのを忘れてしまい、ねっけんからじゃろ」

「またあゝ、お師様ったら」

公望の冗談に花鈴はくすくすと笑う。こういった会話が花鈴にはとても嬉しく感じられた。冗談と分かっていても可愛いと言われると自然と心がうきうきしてくるのだ。そこに竜吉も起きてきたらしく、二人の下にやってきた。

「おはよう。公、花鈴」

「うむ、おはよう」

「おはようございます、竜吉様」

竜吉は公望の隣に座るため花鈴の反対側に行きゆつくりと腰掛ける。

「今日も仙人界は平和じゃの」

公望はうーんっと背を伸ばしまたあくびをした。

「公、そちまだ寝足りんようじゃな。というか最近よく眠そうにしておるぞ」

「竜吉、そなたも花鈴と同じ質問をするのじゃな。そんなにわし眠そうにしておるか？」

「うむ」

「はい」

二人は声を揃えて返事をした。そこに竜吉が付け加える。

「のお、公。そちは一体夜何をしておるのじゃ？頻繁に出かけておるようじゃが？今日も朝方帰ってきたであろう」

「え？そうなんですか、お師様？」

「うん？竜吉は気づいておったのか？」

「うむ。この家に来てまだ2、3日じゃが、その毎日で夜になると公はどこかに出かけているのには気づいておった」

「へー、私全然気がつきませんでした」

公望は二人の頭をポンポンと叩くと、またあくびをして返事を返した。

「仕事じゃよ仕事。別にそなたらが気にするような事ではない。仕事と言ってもたいしたことではないし、あの阿呆くそじじいにこき使われておるだけ。しかし、気づかれていたとは。二人を起こさないように細心の注意を払って出かけておると言うのに」

「わらわはそんなに睡眠を必要としないのでな。自ずと気づいてしまふのじゃ。しかし仕事とは……。やはり十二仙の関係している仕事なのか？」

「いや、至って個人的な事じゃよ」

「ねえねえお師様。一体何をなされているのですか？」

花鈴は興味深げに聞いてくるが公望はさらりと受け流す。

「ほっほっほ、花鈴。世の中には知る必要の無い事もあるのじゃ。深くは追求せんでくれ」

「えー、教えてくださいよお」

「そうじゃぞ。わらわも知りたい」

二人は必死に公望が何をしているのか気になって教えてくれと頼むが公望は秘密とだけ言って、キセルを吹かす。

「もう、本当にお師様は秘密主義なんだから」

「秘密が人を引き立たせるスパイスじゃよ」

「でも、わらわたちには教えてくれても良いのではないか？」

「ま、いずれじゃいずれ」

公望は立ち上がると逃げるように風麒麟の部屋へと向かった。

「竜吉様。お師様、一体何をなさってらっしゃるんでしょうね」

「さあの。十二仙の仕事ではないと言う事は、本当に至って個人的な事なのじゃろ。特にあの大老君が関与しておると言う事は、どうせろくな事ではなからう」

「お師様、余りご無理をしてお身体を壊さなければ良いんですけど」

「そうじゃな。とりあえず、公が秘密と言っているなら深く追求しないでおいてやろう。疲れているのにさらに追い討ちをかけてはいけないからの。公が何時か自分から教えてくれる事を待つとしよう」

「うーん。そうですね。でもやっぱり気になるなあ」

花鈴は公望が何を隠しているのか気になってしょうがないようだった。それは竜吉とて同じ想いである。しかし、やはり公望にあまり負担をかけさせたくないだったので竜吉はあえて何も聞かないことにした。しばらくして風麒麟に仙丹をやりつつちゃっかり逃げていた公望が戻ってくる。

「うーむ。珍しくちと腹がすいたの」

「お師様お腹すいてるんですか!？」

花鈴がここぞとばかりに食いついてくる。

「え、ああ、ちよつとだけ・・・」

公望は言ってみただけなのに花鈴の勢いに気圧されちよつと後ろに退いた。花鈴はその言葉を待っていたかの如く、目を輝かせて張り切っている。

「でしたら、私何か作ります!」

「い、いや、別に良いよ。自分で作るゆえに」

「いえ!是非作らせてください。お師様ちよつと待っててくださいね!」

花鈴は公望の言葉を無視してさっと立ち上がると調理場へ走っていった。それを見ていた竜吉もピンッ!と来たらしく、負けじと行動を起こす。

「あ、わらわも作ってきてやろう」

「いや、良いつて本当に。第一竜吉は料理できるのか？」

「あなどるでない。わらわの料理も中々のものじゃぞ。花鈴には負けん腕はしておるぞ。公はちよつと待っておれ」

そう言つて竜吉も調理場にいそいそと向かつていった。

「えーと」

一人取り残され立ち尽くしていた公望だったが、とりあえず部屋で待つことにした。一方調理場では……。

「何で竜吉様まで来てるんですか？」

料理の準備をしていた花鈴がやってきた竜吉に食って掛かった。

「公がお腹をすかしているからじゃ」

竜吉はさも当たり前のように受け答える。

「お師様のご飯は私が作りますから竜吉様は下がっててください」

「何を言う。手料理で公を釣ろうなぞ、そんな良い機会逃す訳なからう。そち一人おいしい想いをさせる気はない」

「むむ。では、早速勝負といきますか。どっちの料理がお師様の口に合うか、気に入られるか。勝負です！」

「無論じゃ。負けるつもりは無いぞ」

「私だって！」

二人は睨み合うとお互い競い合いながら凄い量の料理を作り出した。調理場からはとても良い匂いが漂ってくる。その匂いに公望のお腹が呼応して鳴った。

「なにやら良い匂いがしておるな。これなら期待できそうじゃ」

公望は早くご飯が食べたいと思っていたが、いつまで経っても二人がやってくる気配が無い。

「？」

不思議に思い立ち上がって様子を見に行こうかとした時に、公望の部屋の戸が開いた。花鈴と竜吉の二人は持ち抱えられないほどの料理を何とか運んでくる。

「お待ちせしました！お師様！！！」

「待たせたの。公」

二人は机の上にならずらーと皿を並べた。しかし余りの量の多さに置ききれず、床にまで皿を置いている。それを見て思わず公望は一変して胸焼けが起こってきた。自分はちょっとだけお腹がすいていて、酒のつまみ程度の料理が出てくるのかと思っていたからだ。

「ちょ、ちょっと二人共。作りすぎではないのか？わしはちょっと小腹が好いただけなんじゃが・・・」

「いえ、お師様のためにちょっと頑張りました。で、お師様！竜吉様の料理と私の料理のどっちがおいしいか食べ比べてください！」

「これだけの量を一人で食べると？」

「そうじゃ」

「・・・」

余りの量の多さに呆然としている公望に対し、さも当たり前のように竜吉は受け答える。二人はじつと公望を見て目を輝かせながら早く食べて審査しろといわんばかりに急かしてくる。

「そ、それじゃ、いただくのでしょうか」

公望は焦りながら箸を伸ばし料理を一品一品平らげていく。一口食べるごとに二人は味はどうかとこちらの料理がおいしいかとか尋ねてくる。それに一々受け答えしつつ、公望は半分ほど平らげた辺りでお腹が一杯になり本当に胸焼けが起こってきた。

「あの・・・まだ食べなきゃならんかの？」

「もちろんです！」

「どっちの料理がおいしいか決着をつけたいのじゃ。ほれ公、これなんかどうじゃ。わらわの自信作じゃぞ」

「あ、お師様。私もこの料理には自信が有るんです！」

二人はずずいっと料理を勧めてくる。公望はさすがに冷や汗が出てきた。しかし折角自分のために作ってくれた料理。残すわけにはいかない。というより、どちらかの料理を残そうものなら恨まれそうな勢いが二人から感じられた。公望は覚悟を決め、必死の思いで料理に手をつける。そして何とかすべての料理を平らげた。余りの量の多さに公望のお腹は悲鳴を上げ、もうパンクしそうである。

「で、お師様！どちらの料理がおいしかったですか！？」

「どうじゃ？公？」

「あー・・・」

公望は食べる事で精一杯になり途中から味なぞ気にしている余裕がなくなっていたのでなんて答えればよいかわからなかった。とりあえず、最初に食べた料理の感想を述べた。

「どちらもうまいと思う。花鈴はわしの料理の腕を受け継いでおるし、竜吉の方は今まで食べた事のない味付けじゃった。総合して言うなら、若干竜吉の方がうまいかの」

「ええ〜！」

「ふっ！勝った・・・」

「ま、まあ、二人とも料理は甲乙付け難いほどにおいしくはあった。ただ、花鈴の方はわしの味付けと似ているのでいささか食べ飽きておる節があるというだけじゃ。これがわしではなく他の者に食べさせていたら結果はどうなっておったかわからん。そう落ち込む出な

い花鈴」

「むむむう」

悔しそうにしている花鈴を慰めつつ、公望はベッドに横になった。

「とりあえず、二人ともありがとう。十分すぎるほどに満足した。悪いのじゃが皿を片付けてもらえるか」

「うむ」

「はい」

二人はせつせと皿を片付け始める。

「今回はわらわの勝ちじゃの」

皿を片付けながら竜吉は勝ち誇ったかのようにニヤリと花鈴に笑った。花鈴は、むっときて言い返す。

「まあ、今回は竜吉様に譲って差し上げたんですよ。私の料理は以前お師様に召し上がっていたみたいです。でも次は手を抜きませんよ」

負けず嫌いの花鈴はあくまで勝ちを譲ってあげたと言い張った。それを聞いて竜吉は呆れる。

「素直に負けを認めぬか。花鈴」

「負けてません！お師様はどちらの料理も甲乙付け難いと仰ってら

したではないですか！」

「しかし、わらわの料理の方が若干上だとも言っておったぞ？」

「それはまだ食べた事の無い味で物珍しさがあつたからです！次は勝てます！」

自信満々で答えた花鈴に竜吉もカチンと来て言い返した。

「言つたなく！。では、また次。改めて勝負じゃ！」

「勝負です！」

また、二人の間に火花が散った。一方の公望はうんうん唸っている。

「・・・今度から二人の前で腹がすいたなぞ絶対に言わんでおこう・・・」

公望は自分のちよつとした発言に後悔しつつ、パンパンに膨れ上がった腹をさすった。

公望、人間界に遊びに行く(上)

「うーん。困ったなあ」

花鈴は、ジュニアに乗りながら頭を抱えていた。

「どうなさったんです？ マスター？」

ジュニアは仕切りにうんうん唸っている花鈴に心配そうに声を掛ける。

「んー、ちょっとね。お師様の事で」

「公望様がどうかしたんですか？」

「んー」

花鈴はジュニアの問いに答えず頭をわしゃわしゃと触る。

何を悩んでいるかといえば、竜吉の存在であるのだ。竜吉が来て早数日経とうとしているが、その間自分が思っていた通りに事が進まないのだった。何とか公望にモーションを掛けようとするのだが何かに付けて竜吉が対抗してくるため、本来の目的から外れてしまっている気がする。

元々負けず嫌いな花鈴は、対抗されるとそっちの勝負に勝つ事に意識が行き公望の事を考えている余裕が無くなってしまっていた。よくよく考えると自分のやっていることは、逆に公望に迷惑を掛けられていると思われる。そしてそういう状態が正直楽しいものでもない。それでなんとか自分も公望も楽しくなる手段をこうして考

えているのだった。

「駄目だ。さっぱりわかんない。竜吉様とは仲良くしつつ且お師様に振り向いて貰うには、なんかもっとお互いが楽しくやらないと。やっぱり竜吉様の存在は大きいなあ。仙人界には娯楽がないから、何か遊べるところとかでもあればお師様も喜んで下る気がするんだど……。まず自分が楽しくできないとねえ」

そんな事をぶつぶつと呟きながらジュニアの背中を見つめ仙人界をふらふら漂っていると、いきなり顔に紙が覆いかぶさってきた。

「わわ！なにになに！？」

急に視界が遮られ、思わずジュニアの背中から落ちそうになりつつなんとか紙を顔から剥がす。

「もう！何！？」

八つ当たりの紙を投げようとしたが、その手が止まる。ちらっと見た紙に興味が惹かれたのだ。まじまじとその紙を見てみる。そこには色鮮やかな光景が広がっていて、綺麗な絵や可愛いキャラクター達が描かれている。文字は見た事のないものだったので読めなかったが、描かれている絵だけで思わず楽しくなるような場所であった。

「これだー！」

花鈴はまるで宝の地図を手にしたかの如く喜んで早速公望の家に戻って行った。

「のお、そなたは花鈴と何を競っておるのじゃ？」

さて公望家では公望と竜吉が茶を飲みながら話しをしている。最近の竜吉と花鈴とのやり取りを見ていた公望が、あまりに競い合っている二人に興味を持ったのだ。というより、対外その競い合いで被る被害者が公望だったので関心を持たざる得なかったのである。

「そ・れ・は」

「それは？」

「秘密じゃ。花鈴とわらわの問題なのじゃよ」

にこにこと竜吉は、公望との会話を楽しんでいる。久しぶりに二人きりになれたのが嬉しいらしい。

「秘密ねえ。まあ、わしも秘密主義じゃから文句は言わんが……。それに何かと巻き込まれているわしの事を考えてくれ」

公望は、ハアーっと溜め息を付く。

「そちが愚鈍だから悪いのじゃ」

竜吉は現状を楽しんでいるらしく態度を改める気は無いようだ。

「そう言えば、もうすぐバンドの練習日じゃな」

「そうじゃよ。わしは楽しみじゃ。泰然達がどの様な曲を作ってくるか……。考えただけでわくわくする」

「わらわも早く軽音楽とやらを歌ってみたいの」

「うんうん。竜吉もやる気があるのは良いことじゃ」

公望も竜吉とは別の思惑で、にこにこしながら茶を啜る。そしてふと思い出したかの様に言葉を出した。

「それにしても、花鈴は何処に行ったのかの？散歩してくるとか言っておったが、散歩にしてはちと長すぎる気がする。何か問題でもあったか？」

「公、花鈴の事は良いではないか。あの子は十分出来る道士。いや、もう仙人として扱っても良いくらいじゃ。何かあっても自分で対応できるじゃろ？それより、折角久しぶりに二人きりになったんだから今のこの時間を楽しもうぞ」

竜吉は少しむっとして言葉を発した。公望はそれに気づかず空を見て話を続ける。

「んー、しかしの。なんのかんの言っても可愛い弟子じゃからな。実力はあるとは言え、やはり師匠としては心配じゃな。まあ、平穩な仙人界で何か問題があるとは思わんが・・・」

「公！」

「な、なんじゃ？」

いきなり大声で竜吉に呼ばれてびっくりして返事をした。竜吉を見ると少し不機嫌な顔をしている。それを見て何か悪い事でも言っ

たのかとまた公望は悩んだ。

竜吉の方は貴重な二人きりの時間にまで花鈴が話題に上がり、公望が気にするものだから嫉妬したのだ。竜吉は公望家に来てから纏っていた殻を破ったかの如く、素直に感情を出すようになっていた。

「公、そちは今誰と話しをしている？」

「え、竜吉とじゃが」

「だったら、話のときぐらいわらわを見て話をしてくれ。相手の目を見て話をせず、他の事を考えるなぞ相手に失礼じゃぞ？」

「あ、ああ。そうじゃな。すまぬ」

竜吉のもっともらしい発言に言いくるめられて、公望は改めて竜吉の顔をじっと見つめた。しかしその視線に、言った本人の竜吉がドキ！っとして思わず目を逸らしてどぎまぎしてしまう。

「あ、いや、だからと言ってそんな見つめられても・・・」

「どないせいつちゅうじゃ・・・」

戸惑う竜吉に呆れて公望が溜め息をついた。そんな矢先に元気な声が公望邸に響き渡った。

「お師様あ！！！！」

「ん？花鈴がようやく帰ってきたか」

部屋を出て入り口を見ると、一目散に紙を手持ってそれを振り

ながら走ってくる花鈴がいた。

「そんなに急いでどうした、花鈴？」

「はい！お師様！ここに行きましょう！！！」

花鈴はバツ！と持っていた紙を公望に見せつけた。公望は紙を受け取るとそれを読んで見る。

「なんじゃ、ティファニーランドではないか」

「お師様、ご存知なんですか？」

「うむ。知っておるが。花鈴はここに行きたいのか？」

「はい！お師様とここに行ってみたいです！」

「ふむ」

「なんぞやなんぞや？」

しばし考えている公望のもとに気になって竜吉もやってきた。公望は無言で竜吉に紙を渡す。

「ふーん、ティファニーランドとか言う所か。なにやら楽しそうじゃの」

まじまじと竜吉もその紙を見た。

「でしょ！？ですから、私もそのてほにーらんどとか言う所に行っ

てみたくて」

「てほにーではない。てい・ふあ・にー」

公望が訂正する。

「あ、はい。その、て、てい・・・ふあ・・・にーとにかくお師様と行きたいんです」

「うーん」

「公、ここはどういうところなのじゃ？」

「んん？ 一大テーマパーク。様々な娯楽要素、遊園地だったりショッピング、つまり買い物できる店が立ち並ぶ大人から子供まで楽しめる遊び場であり、その紙に書いてあるようにデートスポットでもあるのじゃ。まあ、行った事があるが間違いない楽しい所ではある」

「ほう！」

デートスポットと聞き竜吉も目を輝かせた。

「へー、そんな場所だったんですか」

感心して聞いている花鈴に公望は片方の方を落とす。

「そ、そなた、ここがどういう場所かも知らずに行きたいとか言っておったのか？」

「え、はい！ 唯紙を見ていたら綺麗で楽しそうな場所だと思って

「！」

「・・・これがラブホとかのチラシじゃったらどうするつもりじゃったのじゃ・・・」

公望は呆れてぼそっと呟いたがどうやら花鈴には聞こえていたらしい。ラブホの事が気になって聞き返してきた。

「らぶほってなんですか？」

「いや、知らなくても良い。まあとにかく、ここに花鈴は行きたいのじゃな？」

きょとんとして聞き返してくる愛弟子にゴホンゴホンと咳払いをして話を逸らし本題に戻した。

「はい！」

「公！わらわも行きたいぞ！」

竜吉も両腕を上げ、胸の辺りで拳を握り締めている。

「うーむ。行くのは構わんが、これは人間界のチラシ。つまりティファニーランドは人間界のアメリカと言う国にあるのじゃよ」

「え！？そうなんですか？？？」

「うむ」

それを聞いて花鈴は心底がっかりした。仙人は人間界には降りら

れない。くどいようだがスカウト以外で人間界に降りるのは掟で禁止されている。

「・・・じゃあ、駄目ですね。折角良い場所見つけたと思ったのに。人間界じゃしょうがないですね・・・」

落ち込んだ花鈴を見て公望は決意した。腰に手を当て大きな声で言う。

「よし！行くか！！！」

「え？」

「いや、良い機会じゃしな。花鈴から何処かに行きたいと誘ってくるなぞ珍しいし、わしも久しぶりに行きたいしの」

公望も暇つぶしと最近の二人のぐたぐたの疲れを吹き飛ばしたくて行く事にしたのだ。

「で、でも掟は？」

「そうじゃぞ？公」

二人が心配そうに聞いてくる。しかし公望はそれを、何を今更と言う感じの態度で受け流した。

「そんなもの守るわしだと思うか？前にも言ったが、掟は人に迷惑をかけねば些細な事なら破っても問題はおきん。わしら人間界に降り立って誰が迷惑を被る？こう言った状況ではばれなければ一日ぐらい問題ないじゃろ」

「い、良いんですか？お師様？」

「問題なしじゃ！何かあればわしが責任持って何とかするゆえ。二人が行きたがっているならそれを最優先にしなければの。見聞を広めるには持って来いじゃし、第一わしも見たら行きたくなったから！」

「やったー！」

花鈴は公望も行きたいと言ってくれた事もあって手を上げて、はしゃぐほど喜んだ。竜吉も珍しく花鈴と二人でキャツキャと騒ぎ嬉しそうである。

「よし！では、人間界に行くにはそれ相応の準備が必要じゃし、今から行っても全部は回りきれないから明日朝一で行く事にしよう」

「はーい！」

こうして公望達は内緒で人間界に降り立つ事にしたのである。

公望、人間界に遊びに行く（中）

「お師様！起きてください！今日ていふあにーらんどに行くんでしょ！……！」

「ふあゝあつと！」

花鈴に急かされ朝も早くから公望は目を覚ました。正直まだ眠い。

「今何時じゃ？」

眠い眼をこすりながら、人間界から持ってきていた机においてある時計をちらりとみると時計の針は五時を指していた。花鈴は早く行きたいようで今か今かと待ちわびている。

「か、花鈴。楽しみにしているのは良いが、ちと早すぎるぞ。今から行ってもティファニーランドはやっておらん。開園は十時からなんじゃ」

「えー！？そうなんですか？」

「そう。じゃから、もう少し寝ていようではないか」

「私、わくわくしちやって寝れませんよ！」

まだ寝たり無い公望に対しぼちり目を覚まして興奮気味の花鈴は、どうしようと困った表情をした。

「うーん。しょうがないのおゝ。やれやれ、起きるとするか。しか

し花鈴。こんなに最初から飛ばしておつては今日一日もたんぞ？ テイファニーランドは、広いからの」

「大丈夫です！」

「はあ、まあ良い。とりあえず時間が余るゆえ、どんなところか参考程度にあれを渡しておくか。どこにやったかのお」

頭をかきつつ公望は書類棚の方に向かい、なにやらごそごそと探している。

「お、あったあった。ほれ花鈴、これでも見ておれ」

「なんですこれ？」

「パンフレットじゃよ。それにティファニーランドの詳しい事が書いてあるから読んでみるといい」

「え、でもお師様。私この文字読めません」

「あー、そうかそうか。じゃ、ちょっと待て。今、仙人文字に翻訳してやる」

公望は筆を取ると、あっという間に仙人文字に翻訳して花鈴に渡してやった。花鈴は興味津々に翻訳されたパンフレットを読み始める。

「さてと・・・」

部屋から外に出て何時もの様に縁側に座って寝起きの一服を吸お

うとした公望に、見計らったかの如く竜吉が部屋から出てきて声をかけてきた。

「おはよう、公」

「おはよう。なんじゃ、そなたも早いな？そなたも花鈴と一緒に寝付けない口じゃったか？」

「いや、わらわは別に寝ずとも良いのでな。軽く横になっておっただけ。それより、公の方こそ早いではないか？」

「うむ。花鈴に無理やり起こされた」

ふうふうと煙をはきつつ、ちよつとぼやいてみたりもする。竜吉はくすくす笑って公望の横に座った。

「で、当の花鈴は？」

「ん？部屋でパンフレットを読んでおるよ」

「パンフレット？・・・確か、資料みたいなものだったか？」

「そう」

「ふうん。ところで公。ティファニーランドには何時頃出かけるのじゃ？」

「開園が十時じゃから、一時間前には行っておればよからう」

「十時というと、冥王星の刻か。まだ時間はあるの」

「うむ。もう少し寝ていたかったのじゃがな。まあ、良いわ」

公望はあくびをしてまたキセルをふかす。そうしてまったりと竜吉と話をしている内に時間はあつという間に経ち、八時半を回った頃、公望は別室に行き服を持って戻ってきた。

「そなたはこれに着替えてくれ。かりーん！そなたも服を用意したから着替えてくれ！」

自室に向かって大声で中に居る花鈴に声をかけた。中から元氣の良い返事が返ってきて花鈴が顔を出す。

「公、何故着替えなければならん？」

不思議そうに服を受け取りながら竜吉は尋ねてきた。

「人間界には人間界の社会があつて、時代や国、流行によって着る服が違う。今のわしらの格好はアメリカでは不適合で変な格好として見られるからじゃ」

「なるほどの」

「さて、わしも着替えるとするか」

花鈴と竜吉の二人は服を受け取ると自室に戻っていった。公望も自室に行き人間界での服装に着替える。黒のジーンパンに、ラブアンドピースと英語でロゴの描かれた紺色のTシャツ、そして若干長めの春物のコートを羽織りサングラスをかけた。鏡の前で髪型をセツトして鉢巻をバンダナに変えると自分の格好の確認をし、部屋を出

る。竜吉と花鈴は既に着替えが終わり庭で待機していた。花鈴は可愛らしい薄ピンク色のワンピースで、竜吉の方は青っぽい黒色のロングスカートに白色の長袖でシックに着こなしている。本当に二人とも似合いすぎる程に可愛らしく綺麗に着こなしていた。

「二人ともよく似合っておるな。さすがに容姿が良い者は何を着ても似合う」

公望は感心した様に二人を褒めたのに対し、花鈴も竜吉もいつもと違う公望の姿に見とれてしまった。

「お師様、かっこいいですよ！」

「そ、そうか？ そんなこと言われたのは、家族以外では初めてじゃ」

「公、わらわも本当にかっこいいと思うぞ」

「あ、ありがとう。と、とりあえず、そろそろ行くとするか」

自分の容姿に対して生まれて初めて言われた他人の女性からの称賛に戸惑い照れつつ、二人の下に歩み寄っていった。

「あ、そういえばお師様。竜吉様を人間界にお連れしても大丈夫なんでしょうか？ 竜吉様って確か人間界の空気は毒なんじゃ・・・」

「わらわは一日くらいなら問題ないぞ？ 若干気持ちは悪くなるやもしれぬが」

「その辺は問題ない。わしと共に居れば周りの空気は浄化できる。一緒に行動している分には大丈夫じゃよ」

「そうですか。じゃあ、早速行きましょう！」

「では、行くか」

公望がそう言うと、三人は庭から忽然と姿を消した。次の瞬間三人の目に飛び込んできたのは近代的建物が立ち並び、溢れんばかりの人で埋め尽くされたティファニーランドの入り口前広場だった。

「な、何この人の多さ！それに見たことない建物ばかり！！！」

花鈴は初めて見るアメリカの光景と人の数に驚き、辺りをきよろきよろ見渡している。竜吉もさすがにびっくりしたようで、ポカーンと立ち尽くしていた。

「あゝ、そうだった。今日はニューヨークの休日だったんだ。しかも天気も気温もすこぶる良好で絶好の行楽日和。これだけ人が集まっても当たり前か……。忘れてたわ。こんなことなら明日にしなければ良かったかなあ。まあいいや一日あれば全部回れるだろ。とりあえず二人とも迷子にだけはならないようにね」

「はい！」

今にも子供のように飛び出していきそうな花鈴とカルチャーショックを受けている竜吉に人間だった時の言葉に戻して注意を投げかけた。

「えーと、並ぶ列の最後尾はと……。あ、あっちだ。ほら二人とも行くよ」

三人は長い行列の中に加わると開園の時間まで待つことにした。途中公望はタバコの自動販売機を見つけ、人間だった時に愛煙していたタバコを買って早速おいしそうに吸っている。公望は暇な時のタバコの一服が好きなのだ。何故かタバコの吸っている姿が良く似合い、ダンディさをも少しだしてしまふ。友達や先輩にも昔、自分ほどタバコが似合う人はそう居ないだろうと言われていたものだ。一方の花鈴達は花鈴が持ってきたパンフレットをお互い見合い、ここに行きたいだのなんだのと和気藹々と話しながら今か今かと開園を待っている。

「はあ、休日の遊園地になんてくるものじゃない。待ち時間が長い！」

公望はぼやきつつ、ようやく動き出した行列に沿って歩いていく。

「一日券、大人三枚下さい」

「お支払いは現金ですか？」

「いえ、カードで」

「かしこまりました。こちら大人一日券三枚です」

チケット売場で英語で話しチケットを買うと二人に手渡した。そしてとうとう待ち焦がれた入園である。

「で、お二人さん。回る順番計画は立ったのかな？」

「はい！まず、ここに行きたいです！それで、順番に回っていいかどうか」

「早速ジェットコースターか。ま、人気があるのを先に落としておいた方が待たなくて良いな。じゃ、行くか」

ジェットコースターって何かと言われ、体験すれば分かると返事を返すと三人は向かっていった。最初に来ただけあって比較的空いていたので早々と乗ることができる。花鈴も竜吉も初めて乗る乗り物に緊張と期待で鼓動が強くなる。シートが付けられるとその鼓動はより早く強く打たれた。ジェットコースターはゆっくりと空に向かって一直線に上っていく。そして最高点に来た瞬間、ほぼ垂直のレールを物凄い勢いで落ちていく。ティファニーランドの売りはどの絶叫系アトラクションも世界最高の高さで激しさを誇るところであり、もちろん足置き場などない。

「キャーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！！！」

花鈴も竜吉も割れんばかりの声を張り上げ叫んでいる。しかしそれは楽しい的な叫びであり、さすがに怖いとは思わない様だ。

「お疲れ様でしたー！」

元気な声で係員が戻ってきた客達に声を掛け、手馴れた様子で出口へと誘導している。

「おもしろかったあー！次ぎ行きましょ！次！！！」

「うむ！行くぞ行くぞ！」

花鈴も竜吉もすこぶる気に入ったようで、必死に乱れた髪を直している公望を急かして次のアトラクションへと早足で向かった。

「ね、ねえ、もうちょっとゆっくり行かない？」

花鈴と竜吉は次から次へとアトラクションを体験していく。世界最高峰のバンジージャンプだったり世界一高い位置にあるフリーフォールだったり東京ディズニールンドのスプラッシュマウンテンを何倍にも激しくした乗り物だったり時速200キロは有に出るゴーカートだったりと、ありとあらゆる存在する絶叫系の区域を網羅している二人に対してもう疲れてしまった公望は提案を持ち掛けたが、あっけなく却下された。

「嫌ですよ！こんなに楽しいの初めてですもん！」

「そうじゃ！のんびりしては他の人に先を越されて待ち時間が長くなるであらう！？」

子供のように興奮している二人は、一度と言わず一日に二度も三度も回りたいたって凄く速さで回ろうとするのだ。

「そりゃ、確かに早い方が混まないし人気のあるアトラクションはお昼にはもう乗れないほどに待ち時間は長くなるけど・・・」

「ですから、早く回っちゃいましょうよ！こんなに広いんですから、もたもたしていたら回りきれませんよ！私、一回だけとか嫌です！！！」

「わらわもじゃ！ほら、公！行くぞ！！！」

「はぁ、はいはい」

二人に手を引つ張られ公望は、もうされるがまま。こうなつては自分も楽しまないと損だと割り切り心を切り替え二人のペースに付いて行った。

公望、人間界に遊びに行く（下）

「ふーむ、人間界は面白い所よの。わらわが神界の者でなければ毎日でも遊びに来たいわ」

「私も他の国でこんなに面白い所があるなんて知りませんでした！」

早足に次なるアトラクションへと向かいながら二人は楽しそうにしゃべっている。公望は二人の後ろを歩き、満足している花鈴達をタバコを吸いながらにこやかに見ている。

「次はここか？」

「そうですね。パンフレットではここになってます」

ある建物の前に三人は来た。もう昼を回り、人が大勢並んでいたが順番の中に入っていくスピードが速いのでそこまで待つほどでもなさそうだ。

「公、ここはどんなところなのじゃ？」

「ホーンテッドマンション。お化け屋敷だよ」

「お化け屋敷？」

二人は声を揃えて不思議そうに聞き返した。どうやら花鈴の国でも竜吉の暮らしの中でもお化けの存在は認知されていないらしい。

「まあ、中に入れば分かるさ」

二人を促しつつ薄気味の悪い建物の中に入っていった。

「なにか、やたら暗くて薄気味の悪い所じゃの。あれだけの人が入っていったのに恐ろしいくらいに静かじゃ」

「そうですね」

建物の中は薄暗く、ところどころに割れたビンが転がっていたり血の跡等がついている。このお化け屋敷は病院の廃屋をイメージして作られたもので、その廊下を三人は歩いていった。平静を保っているものの若干竜吉が珍しくびくびくしてながら歩いているようだ。反面花鈴は楽しそうに辺りを見渡している。

「あ！あそこに誰か居る！」

花鈴が指差した方は手術室と書いてある場所で、少しだけ扉が開いておりちよつとだけ中が見えるようになっていた。だが、薄暗くはつきりとは見えない。

「どこじゃ？」

「ほらあそこ」

「わらわには良く見えぬな」

「竜吉様行ってみましょう！」

興味津々な花鈴は竜吉の手を引っ張り無理やり手術室の方へと近づいていった。近づくとか確かに中に人が居る。オペ用の服を着てメ

スを持ち、横たわっている人の腹部を切り裂いてまさに手術をしている途中だった。しかし、何かがおかしい。その医者らしい人は切り裂いているメスを自分の口元に持っていているのだ。後姿しか見えないので何を行っているかわからないが、辺りにはくちやくちやと嫌な音が響いている。

「何をしているんでしょうね？」

「さあの」

花鈴はもっと見てみようとして扉を押した時、ギギギッと扉のきしむ音がした。その音に反応し手術をしていた医者が童吉たちの方に顔を向けた。

「ひっ！」

その顔を見て思わず童吉は悲鳴を上げる。医者の顔は眼球が外に出てゆらゆら揺れており、口元は真っ赤に染まっている。口をいやらしそうに動かし、くちやくちやと音をたて手にもっているメスの先には患者の腹から切り裂いて取った内臓がくっついていていた。そう、患者の内臓を喰べていたのだ。

「見たなあゝ」

医者はそう良いながらメスを持ち近づいて来たので、おもわず花鈴は構えた。その瞬間、医者は消える。

「あれ？」

拍子抜けしてしまった花鈴は構えを解き、改めて中を見るが患者

の姿も無い。二人は何処行つたのだらうと辺りを見渡している時、竜吉は肩を叩かれた。

「なんじゃ、公」

てつきり公望だと思い、振り向くとそこには先程手術台で横たわり腹を切り裂かれていた人が立っていた。腹部を切り裂かれ、血は吹き出し中の内臓が垂れ下がっている。

「私の食べた内臓・・・返して・・・」

薄気味の悪い声で無表情に青い顔をしてしゃべりかけてくる。

「キ、キヤ」

竜吉は突然割れんばかりの叫び声を上げて一目散に逃げ出した。それを面白がるかのように患者は追いかける。

「嫌あ！来るでないー！！！」

全力疾走で逃げている童吉は足元に転がっている物に気づかず何かに蹴躓いて凄いい勢いで転んでしまった。

「痛あ！」

起き上がりながら蹴躓いた物を見つめる。そして、また悲鳴を上げた。蹴躓いた物、それは人の生首だったのだ。しかも血走った目だけが動いており竜吉の方を恨めしそうに見ている。気がつくとな周

りにはその生首の本体である身体が無惨にも切り刻まれ転がって、廊下の壁にどんどん手の形をした血の跡が広がっていく。

「・・・・・・・・！！！」

直ぐに起き上がり、その場から逃げようとした竜吉は声にならない悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。今度は、逃げようとした廊下の前の一室の扉が不気味に音を立て開き、中からうめき声を上げて頭をうなだれて長い髪を垂らした人が苦しそうに出てきたのだ。挙句、細い綺麗な足も血だらけの手に掴まれて身動きが取れない。

「えー！ーん！怖いよお、嫌あ！！！」

もう、四方八方から怪奇現象だったりゾンビみたいな人に囲まれ座り込み、竜吉はどうとう泣き出す。

「竜吉さまあー！」

「おーい。大丈夫かあ」

遅れて後からついてきた花鈴と公望が竜吉の下に駆け寄ってくる。

「公！わらわ、もう嫌！こんなところ早く出よう！！！」

やってきた公望に必死にしがみつき何とか立ち上がると、早く出たいと急かす。

「ああ、後ちよつとだからとにかくそんなにしがみつくなって」

泣きじゃくっている竜吉の頭をそつと撫でてやると、早足で出口

の方へと向かっていった。その間も、驚かせ役の人や作られた怪奇現象に竜吉は悲鳴をあげて公望に抱きつく。そして、ようやく出口の光が見え竜吉はホッと肩をなでおろした時、最後の決め手の一手が来た。

「逃がさない・・・」

辺りに声が響き渡ると後ろの天井から不気味な人形が迫ってきて、それを見た竜吉は急いで出口に走り行く。もう出口はそこだ！と言う時にいきなり目の前が暗くなった。

「キャ！」

上から降ってきた何かにぶつかって視界を遮られた竜吉は、それをよくよく見ると首を吊った人だった。

「く、苦しい」

「嫌あ――――――――――」

「――――――――――！」

近くに隠してあるテープから音声が流れ竜吉はゾッ！として叫びつつ後ろに下がろうとするが後ろからは人形が迫ってきている。もう大丈夫だろうと安心した矢先に来たあまりの恐怖に神経が耐え切れずとうとう竜吉は気を失って倒れてしまった。

「あらあら。はいはい、ちょっとどいてね」

首を吊った人形をどかすと公望は竜吉の身体を抱きかかえてさっ

さと出口を出る。

「お疲れ様でしたあ！」

にこやかな笑顔で係員が挨拶をしてくる。公望は軽く頭を下げて、竜吉を抱きかかえたまま近くにあったベンチに向かい竜吉を寝かした。

「竜吉様大丈夫ですかね？」

「ちょっと、刺激が強すぎたかな？冷やしたタオルでも貰ってくるよ」

公望は濡れタオルを係員から貰うと竜吉の額にそっと乗せてやる。そして、隣併せのベンチに花鈴と座った。

「花鈴の方は、大丈夫そうだね？」

「はい！私ああ言うの好きです！」

「そうか、花鈴はホラー系も好きなのか……。俺は苦手なんだけどね。俺も最初ここに入った時はあまりにも怖くて、一人で部屋に夜居られなかったからなあ。あの時は先輩に無理言っただけ泊まってもらったっけ」

「へー、お師様でも怖いと思うんですね」

「当たり前だって。俺こう見えてかなり繊細よ？二度目だから慣れてたけどさ」

公望はタバコを取り出し口にくわえるとライターでタバコに火を点けた。

「・・・うーん」

タバコを二回程ふかした時、竜吉が気がついて起き上がる。

「大丈夫か？」

「・・・なんとか・・・」

「二人はちょっと待ってな。俺アイスでも買ってくるわ」

「はい」

公望はベンチから立ち上がると、アイス売り場へと向かう。

「大丈夫ですか？ 竜吉様」

「う、うむ。人間とは恐ろしい生き物じゃな。なんというものを作るのじゃ。その思考が信じられん。あのような所の何処が面白いのか」

「そうですか？ 私面白かったですよ」

「ううう、信じられんわ」

竜吉は思いだすと身震いした。花鈴はそんな竜吉を見て笑っている。そんな二人にある若い男性二人組みが声を掛けてきた。

「君達、今暇かい？」

「良かったら俺達と一緒に遊ばねえ？」

「え？えーっと、竜吉様。この人たちなんて言っているんですかね？」

異国の言葉が分からず、声を掛けられた花鈴は戸惑い竜吉に助けを求める。

「どうやら、わらわ達と遊びたいといっておるようじゃ」

「竜吉様、言葉分かるんですか？」

「うむ。昔人間の文化に興味を持っの。少し勉強した事がある。しゃべったり、速い言葉は聞き取れぬが。どうやらわらわ達は人間界で言うナンパを受けているらしい」

「なんばですか？」

「おそらくの」

「どうよ？俺達も二人だけでよ、暇しているんだ。遊ぼうぜ」

声を掛けてきた二人のうちちょっとガラの悪そうな男が竜吉の肩に手をかけた。竜吉はその手をバシっ！と払いのける。

「そちの様な小物が気安く触れるな」

「おお、おお！なんだよなんだよ！つれねえじゃねえか？」

叩かれた男はムツとしたらしく、少し強めに声を出す。もちろんこの会話はお互いに通じていない。

「生憎とわらわ達は待ち人がおる。ゆえにさっさとこの場から立ち去れ」

言葉が伝わらないと分かっているながら竜吉はツンツとした態度で言い返した。その態度にますます男は頭にきたらしい。なにやら英語で大声でまくしたてている。しかし竜吉は全て無視を決め込み、花鈴もそれに習って放っておくことにした。その内、その大声になったんだと周りの人が興味を示し、人だかりが出来る。

「何だ一体？」

アイスを買って戻ってきた公望は、なにやら人だかりが出来ている竜吉達の方に早々と向かう。人を押しのけて現場に辿り着いた。

「どうしたよ？」

「あ、公。何かこの者達がナンパをしてきているようなんじゃない」

「ナンパだあ？ははは、そりゃそうだ。こんなに美しい女性が二人並んでりゃ否が応でも声を掛けてくる男は居るだろ。あ、花鈴は桃味のアイスで良かったよね？竜吉は何が好みか分からなかったのだからソーソドックスにミルクココア味にしてみたんだけど」

「ありがとうございます」

「公、これはなんという食べ物じゃ？」

「アイスだよ。牛のお乳をシャーベット状に固めて添加物を加えたもの。甘くておいしいから食べてごらんよ」

「うむ」

竜吉は花鈴の食べ方を見てそれに習い食べてみた。その味にカルチャーショックを受けたような表情をする。

「冷たくて甘いの！若干苦味があるのが良い」

「良かった気に入ってくれたか。竜吉の好みがわからなかったからさ、どうしようかと悩んでたら時間食っちゃって」

「大丈夫じゃ。これおいしいぞ。わらわ気に入った」

「それはなにより」

「おい！さっきから無視してんじゃねえ！！！」

声を掛けてきたガラの悪そうな男がとうとう怒鳴り散らしてきた。竜吉達同様無視をしていた公望は面倒臭そうに返事を返す。

「なんだよ？」

「なんだよじゃねえ！今、こいつらと話しているのは俺達なんだよ！なに無視決め込んで勝手に話し進めてるんだ！？」

「悪いけど、この二人は俺の連れだね。ナンパなら他を当たってくれよ」

「あぁん？さっきから見たりや調子に乗りやがって。お前こそ邪魔なんだよ！」

男は急に殴りかけてきたが、ひょいっと公望はかわす。

「ったく。怒りの矛先がなんで俺に来るんだよ」

「うるせー！とにかくお前は邪魔なんだよ！」

「お前が邪魔だ」

公望はストロベリーアイスを食べつつ凄い速さで一発男の鳩尾みぞおちに蹴りを入れた。

「うげっ！」

男は痛みで気を失い倒れ、もう一方の男はまずい相手を敵に回したと直感的に分かったらしくすみませんと謝ると倒れた男を抱きかかえて去っていった。

「わー、お師様が人に手を上げた所初めて見ました」

「わらわもじゃ」

「あれは正当防衛。仕掛けてきたのはあっちが先なんだから自分の身を守るためにちよっとだけね。この程度なら俺の美学には反さない」

公望はベンチに座りなおすとアイスをほうばった。

「さてと、二人とも凄い勢いで回るものだから予定よりも早く全部回っちゃったね。どうするこれから？」

「え？もう全部回っちゃったんですか？このパンフレットにはまだ残ってるアトラクションあるみたいですけど」

「ん？ああ、それは今建て直し中で工事してるから今日は行けないんだ」

「そうなんですかあ」

「残念じゃのお」

二人はがっかりした感じで溜め息を付いた。

「ま、良いじゃない。俺前来たときその場所行ってみただけはつきり言って面白くは無かったしさ。二人ともティファニーランドの主要で人気なアトラクションには全部回ったんだし、最後にそのアトラクションを行くと楽しい想いが消えちゃうかもしれないからルートの十分だと思う。後は夕方から始まるパレードくらいじゃないかな？」

「そうか」

「でも、私は一応全部回ってみたかったです」

「また今度来れば良いじゃない。さて、パレードまで時間あるしその間買い物するなり気に入ったアトラクションをもう一度行くなり

しょうか。どっちが良い？」

「もう一度回るつもりじゃったが、わらわはその買い物とか言うものをしてみたいの」

「あ、私もしてみたいです。この国でどんなものが売られているのか見てみたい」

「よし！じゃ、ショッピング街に行こうか」

そして三人はショッピング区域に向かっていった。そこにはいろいろなグッズやお菓子など様々なお土産が売られているだけでなく、極普通の服屋、雑貨屋等も立ち並んでいる。二人は興味津々で品物を見ていた。

「お師様あ！これ見て見て！可愛いですよっ」

「公、わらわにこの服は似合うかの？」

花鈴はティファニーランドメインキャラクターのティファキャラクターの大きなぬいぐるみを抱え、竜吉は青色のカジュアルドレスを持ってきた。

「うんうん、可愛いよね。竜吉もその服凄く似合うと思う。試着してきたら？」

「試着？」

「試しに着させてもらう事。あそこに試着室があるから着替えてみなよ。他にも気に入った服があったら着てみたら？」

「うむ、分かった」

竜吉が試着室に行き着替えている間、公望と花鈴は持ってきたぬいぐるみの手とかをいじり遊んでいる。

「ティファキャラは本当可愛いよね。俺も好きなんだ」

「へー、これといふあきやらって言うんですか」

「正式にはティファキャラットだけど」

「良いなあ、欲しいなこれ」

「じゃあ、買えば良いじゃない？そのために来たんだから」

「あの、その買うってどういうことなんですか？売ると違うんですか？」

「あー、そっか。花鈴は売った事があっても買った事がないのか。それは竜吉が着替え終わったら一緒に説明してあげる」

「公、どうじゃ似合うか？」

試着室の扉を開けて物凄い綺麗な格好をした竜吉が出てきた。元々持っている気品さを上品に保ちつつ服がよりそれを引き立てている。

「ほお〜〜」

公望は思わず声をあげて見とれてしまった。周りに居た客達も買い物を止めて一斉に竜吉の方を見ている。

「な、なんじゃ、どこか変か？」

「いや、凄く似合ってる。こんなに綺麗に服を着こなした人初めて見た。竜吉は服のセンスも良いんだな」

「竜吉様凄く綺麗ですよ！」

「そうか、ありがとう。わらわも着てみてこの服が気に入った。欲しいの」

「じゃあ、是非とも買わないとね」

「公、その買うということじゃがなんなんじゃ？」

「今、その事を花鈴とも話をしていたんだけど説明してあげる」

公望は、人間社会における貨幣制度について説明した。

「なるほど。つまりそのお金とやらを払って代価として品物を手に入れるわけか」

「そう」

「じゃ、お師様。買うにはお金が必要なんですよね？」

「そう」

「しかし、わらわ達はこの国のお金どころかお金と言うものすら持つておらんぞ？ お金がなければ欲しくても手に入れられぬのじゃろ？」

「その辺は大丈夫。俺持つてるから」

「そうなんですか？」

「当たり前だろ。持ってなかったらどうやってここに入れたんだよ？ ここだってお金無しで入れる場所じゃないんだぞ」

「それもそうじゃな」

「じゃあ、説明もしたところで初めてのお使いじゃないけど二人にお金渡しておくよ。それで自分の好きなもの買えば良いさ」

公望は財布を取り出すと二人に手持ちで持っていた紙幣数十枚渡した。ここで買い物するには十分すぎる程の額である。二人はお金を受け取ると竜吉は服を中心に見て周り、花鈴はグッズを中心に見て回った。

「で、欲しいものが決まったらあそこのレジって言う所で品物渡してお金を払って買い物は終了」

見て回っている二人に声を掛け、公望は喫煙コーナーに向かうと一人タバコを吸っている。しばらくボーっとしているうちに外は暗くなり始め、そろそろパレードの始まる時間だ。

「そろそろ行かないとな」

そんな事を考えている時、丁度二人がたくさんの紙袋を抱えてやってきた。

「・・・あ、あのさ、ちょっと買いすぎじゃない？」

「えへへ、見てたら全部欲しくなっちゃって」

「うむ、どれもこれも良い物ばかりだな」

二人はにっこりと満足気に笑っている。

「で、お釣りは？」

「はい」

二人から渡されたものはコイン数枚だった。それを見つめ公望は呆れる。

「な、何？これだけしか無いの？もう少しさ、考えて買い物はしようよ」

「えー、だってお師様。中々来れない所を折角来たのに買わないのは損でしょ？」

「そうじゃ、今度は何時来れるかわからぬのだからな。買えるときに買っておかねば」

「・・・人間だったら、二人とも生活できないな・・・」

寂しくなった財布の中に受け取った小銭を入れ、そんな事をふと

思ってしまう。この二人が本当に仙人でよかったとつくづく思うものだ。まあ、女性と言う生き物は買ひ物が好きだという頭があったからある程度は覚悟をしていたものの、直で経験してみると予想外の凄さ。

「じゃ、そろそろ行こうか。パレードが始まっちゃう」

二人から荷物を受け取ってパレードが見えるティファニー城前へと案内していった。ティファニー城は夜になり綺麗にライトアップされ、噴水が様々な形状で飛び交っている。周りには観光客だけでなくそれ以上にカップルが多かった。

「わー！綺麗な場所ですね！ここですよ、飛んできた紙に描かれてた場所！実際見てみると紙に描かれていたのより全然綺麗ですね！！！」

「うむ。見事じゃ」

二人はうつとりと城を見つめた。そんな時何処からか陽気な音楽が流れてくる。三人は音楽の聞こえる方に向き直ると、様々なキャラクターの着ぐるみが踊りながら手を振ってやってきた。続いてライトアップされたパレード車もゆっくりとやってくる。車の上にはメインキャラのティファキャラが観客達に大きく手を振っていた。

「わー！」

「綺麗・・・」

二人は思わずパレードの方に歩み寄って行った。その二人に近づいたりサキヤラットというティファキャラットの妹の着ぐるみが近

づいてきて手を握る。

「わわ！」

花鈴は手を握られて嬉しそうに竜吉の方を見た。竜吉も握手をしてもらう。

「おーい、丁度良い機会だから写真撮ってあげる」

「じゃしん？」

「とにかく二人とも並んで」

公望に言われてリサキヤラットを真ん中にして二人が並んだ。

「はい、笑って。いくよー」

満面の笑顔を向ける二人と手を前に振っているリサキヤラットに向かってフラッシュが二回たかれた。ポラノイドカメラから写真が出てくる。

「はい、二人とも」

「なんですかこれ？」

「見れば分かる」

最初黒かった写真が徐々に光景を映し出し、二人が映し出された。

「あー、これ私です！」

「うむ、わらわも居るな」

「これが写真っていうもの。その場の風景をそのままそのフィルム
っていうものに写し取るんだ」

「へー！」

「人間の文化とは凄いの」

「じゃあ、お師様。今度は三人でお城を後ろにして写しましょうよ
！」

「そうじゃそうじゃ。三人で写そう」

「ああ良いよ」

公望は近くに居た人を捕まえてすみませんと言って写真を撮って
もらうように頼んだ。その人は快く返事をしてくれ、三人は公望を
真ん中にして城を背に写真を三回撮ってもらった。

「ありがとうございます」

丁寧にお礼を言うと写真を受け取り、二人に渡す。

「これ一生の宝物にします！」

「わらわもじゃ」

「はいはい」

喜ぶ二人に公望はにっこり笑うと三人はまたパレードを見ることができた。それから一時間程してパレードも終了し、これにてティファニーランドの楽しむところは全て楽しんだことになる。

「さてと、これで全部だしもう遅い時間だから帰ろうか？」

「えー、もう帰るんですか？」

「もう少し居たいの」

「じゃあ、もう少しだけ」

二人のブーイングにより少しだけその場で夜景を楽しむ事にし、三人に良い雰囲気が出る。しかし公望はこういう雰囲気に慣れておらず頃合を見計らって帰ろうとするのだがもう少しだけでももう少しだけ二人は言い、結局閉園の時間まで居たのだった。

「さ、もうここも閉まるから帰るよ」

「むー、もっと居たかったなあ」

「うむ。この様な良い場所は仙人界には無いからの。残念じゃ」

「また、連れて来て上げるから」

二人をなだめつつ、さあ帰ろうと公望は術を発動させた。その場から三人の姿が消え公望の家の庭に光景が変わる。

「ふいー、さすがに一日居ると疲れるね。まあ、心地の良い疲れだ

けど。二人とも楽しかったかな？」

「はい！すっごく楽しかったです！！！」

「うむ！」

「それはなにより」

「お師様は楽しかったですか？」

「ん？うん、楽しかったよ」

「良かったー！！！！本当誘って良かったです」

「ありがとう花鈴、竜吉」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「ありがとう、公」

「うん。さ、もう疲れちゃったから寝ようか」

「はい」

公望は、荷物を花鈴と竜吉の部屋に置くとさっさと自室に行き着替えてベッドに横になる。花鈴も着替えてやってきたがさすがに疲れていたらしく、話も満足にしないうちに自然と寝てしまった。それを見て公望も目を瞑り寝ようとする、しばらくして部屋の扉が開きそこに竜吉が立っていた。

「どうした？」

目を開けて竜吉の方を見ると竜吉は枕を抱き抱えつつうつむいている。公望は言葉を待った。

「あ、あの公。わらわも一緒に寝ても良い？」

「何故？」

「・・・一人で部屋に居ると、ホーンテッドマンションの時の事を思い出して怖い・・・」

「あー、そっか。じゃあおいで」

公望は術でベッドを広げ隣にスペースを空けると、ポンポンとそこを叩いた。竜吉はいそいそとベッドの中にもぐりこんでくる。

「竜吉にもあんな一面があっただ。意外だわ」

「うむ。わらわ、あんなに怖い想いしたのは生まれて初めてじゃ。思い出すとドキドキする」

「ははは。俺、竜吉が寝るまで起きていて上げるから安心して良いよ」

「でも、わらわ別に寝る習慣はないのじゃが・・・」

「それじゃあ、ゆっくり休めるようにちよつとしたおまじない」

公望はそうとうと竜吉の頭を自分の胸元に抱き寄せた。

「こ、公」

「こうすると安心するでしょ？」

公望は何気なくしたつもりだったが、竜吉は恐怖でドキドキする鼓動と別のドキドキを感じた。そのうち、公望の温かい身体の温もりが心地よくなりようやく安堵感が広がると竜吉も自然と眠くなってきた。

「温かくて気持ち良い・・・」

竜吉はさらに顔を胸にうずめるとあまりの心地よさに珍しく眠りについていった。

「やれやれ」

竜吉が寝たのを確認すると、やっと公望も眠りにつくことができ疲労と朝が早かった事により公望も直ぐに寝息を立て始める。今日は久しぶりに楽しい一日だった。

公望、罰を受けるらしい

生きること全てを恐れていた。・・・何故皆俺を苦しめる？悪気があるわけではない。いや、悪意もあるだろう。自分の言う通りにならない、自分が嫌々守っているのに俺が守らないことに苛立っているのか。・・・頭がボーっとして破裂しそうだ・・・。自分を偽って、自分の生き方ができない。社会が俺を否定している。俺も社会を否定している。なじもうとはした。そのための努力も出来る限りしたはず。しかし、自分の性格と夢と生き方に反した人生と俺を否定する存在に耐えられない・・・。でも、その中で否が応でも生きなければならぬ強烈なジレンマ。この世に生を受けた以上課せられた業。その業に気づき身体が拒否反応を示すようになったあの日・・・。否定、苦しみ、毎日がその繰り返し。周りから否定され自分も自分を否定し、それでもその考えや行動を許さないプライド。己はなんなのか？何のために生き、何のために死ぬのか？答えの出ないまま浮かぶのは辛いの一文字。楽しい事だけをして生きたいがそれは許されない・・・何故許されない？何故？結局、甘えていただけなのか。誰かに守られ頼らないと生きていけないんだな、俺は。否！違う！それは俺の生き方じゃない！でも、そうであってほしい自分が居る。俺が求めているのはなんだ？わからない。どうやって生きれば？・・・。頭が痛い、自我が壊れる・・・。

「ぐっ！」

公望は小さなうめき声を上げて目を開けた。目に映るのは天井の壁。頭に手を置くとしばしボーっとその天井を見上げた。時計の針が指すのは、もう朝が過ぎ十一時を回るところ。

「治ったんじゃないのか・・・。久しぶりだな、この感じ。仙

人界に来てからこんなこと無かったのに。昨日、人間界で遊んだのが悪かったかな？」

まだ破裂しそうな圧迫感と、もやもやした霧のようなものが掛かった頭を抑えながらゆっくりと身体を起こす。部屋には誰も居ない。自然と、今、頭を駆け巡っていた思考を掴む。

蔓延したうつ病、パニック障害、その他もろもろの精神疾患。酷くなるストレス社会に耐え切れず増加する心の病。自分も入院したあの日から精神が狂い、薬で無理やり抑える生活。それでも抑えきれずに身体にまで拒否反応が出て食欲は落ち、むしろ吐いたり下痢をし、自分の身体感覚がわからず意識が朦朧と消えていくそんな毎日。その一日一日を逃げたくて、助けて欲しくて心のどこかで誰かに救いを求めていた。せめて少しでも自分を肯定し理解してくれる相手が欲しかった。

「あの時、師匠が来てやっと救われると思っていたのに。実際、仙人界でこんな感じになったことないのにな」

公望はまだ治らない頭を必死に抑えながらポツリと呟いた。人間だったときは直ぐに薬で何とかしていたが、仙人界にはその薬は持ってきていない。自らの力で治さないと駄目だと思ったし、現に自力でなんとかしたはずだったのだ。

「辛い」

そう思ったとき、ふと外で騒がしい声が聞こえるのに気がついた。

「やれやれ、またか」

重い頭のまま部屋を出て声の聞こえる方に目を向ける。そこには

言い争っている花鈴と竜吉が居た。その姿を見て公望は何故か安堵感を覚え、頭が楽になっていくのを感じる。

「だーかーら！私が洗うんです！」

「そちはひっこんでおれ！わらわが綺麗に洗ってあげるのじゃ！」

竜吉と花鈴は、洗濯籠を地面に置きわいのわいのと騒いでいた。

「これ！何をギャーギャー朝からわめいておるのじゃ？」

はぁと溜め息をつきながら、公望は二人の下に近寄っていく。

「あ、おはようございます。お師様」

「おはよう、公。相変わらず朝が遅いの」

「おはよう。で、二人は今度は何で争っておる？」

「いえ、お師様の服を洗って差し上げようとしたら竜吉様が口を出してきて」

「口を出すとはなんじゃ。わらわも丁度洗ってあげようとしておった時に花鈴が邪魔をしたのであろう？」

「違いますよ！竜吉様より私の方が先に洗おうとして準備だつてたじゃないですか！？」

「違う！わらわが先に洗濯板を持ってきたのじゃ！そちは服を持っていただけであらう！！！」

「私は最初から洗うつもりだったんです！」

「わらわだってそうじゃ！」

二人はまた言い争いを始めた。そこに公望が呆れてストップをかける。

「ち、ちよい待て！そなたらそんな些細な事で争っておったのか？そんな事どちらが洗おうとも良いではないか」

「良くない！」

「良くないです！」

声を揃えて公望の顔を見てきた二人の勢いに思わず公望はたじろぐ。

「そ、そうなのか？」

「そうです！重大な事なんです！」

「うむ！」

「わ、わかった。では、お互いが満足するまで大いに争ってくれ。わしは少々疲れておるようだな」

触らぬ神に祟りなし。特にこういう気分ときは遠目にして放置しておくのが良い。公望は苦笑いをしながら早々にその場を離れ、いつもの定位置である縁側に座って昨日買いだめしたタバコを吹か

した。二人の姿を見ているとさっき勝手に駆け巡っていた自分の思考が馬鹿らしく思えてくる。まだ完治はしていないが、起きた時より気分は楽だ。

「ある意味二人の存在は、わしの薬か。はたまた病の根源かもな」

自然と笑みがこぼれる。今日も仙人界は平和そうだと思った矢先に連絡用宝貝が鳴った。

「もしもし？」

「公望か？わしじゃ、直ぐに来い」

「師匠？用件は？」

「来てから話す」

ブチっと連絡が途切れた。なにやら大老君は機嫌が悪いらしい。

「二人とも。すまぬが師匠から呼び出しを受けた。今から行ってくるゆえ」

「はい、行ってらっしゃいませ」

「行ってらっしゃい」

「あ、竜吉様。目を放した隙に何勝手に洗おうとしてるんですか！？」

二人の騒がしい声を尻目に公望は風麒麟の元に行くと蓬萊山まで

連れて行ってもらった。部屋をノックすると中から「入れ」と声が聞こえ公望は中に入っていく。

「なんの用ですか？」

「何故呼び出したかは、言わずとも分かっておるであろう？」

「・・・はあ、人間界に遊びに行った事ですか」

「うむ」

「いけませんでしか？」

いけしゃーしゃーと言う公望に大老君は低い声で叱咤する。

「当たり前じゃ！今までは、おぬしは勝手に人間界に行く事があっても遊びに行くわけでもないし誰かと接触する様な事もなく、ただ人間界の様子を見に行っておるだけじゃったからわしも眼を瞑っておったが。おぬし一人ならいざ知らず、竜吉や花鈴まで連れて遊びに行くなぞ何事か！」

「良いじゃないですか別に。何かさしたる問題がある訳でもないでしょう？」

「大いにある！おぬし一人ならわしもフォローが出来るが、竜吉と花鈴が勝手に行った事にはさすがに由々しき問題じゃ。これを放置しておけば他の仙人達まで勝手に行つて良いものかと勘違いしていずれ人間界に関与をすることになるやもしれん。唯でさえおぬしの勝手な行動により掟を破つても良いと言う風潮が漂つておると言うのに」

「で、結論は？」

面倒臭そうに公望は頭をかくと、さっさと言いたい事を言えと大老君を促した。

「当然に罰を受けてもらう。無論三人ともじゃ」

「竜吉と花鈴は罰を受ける必要はありません」

「何故じゃ？」

「私が社会勉強としてむ・り・や・り！連れて行ったからです。咎は私に全てあります」

無理やりの部分を強調する。

「ほお、あくまで二人は無理やり連れて行かれたというのじゃない？」

「ええ、無理やりです」

「ふーん」

大老君は長い髭を撫でて少し考えているようだ。そこに心を見透かしたかのように公望が言い放つ。

「罰を受けるのは私一人で十分です。どうせあれでしょ？掟を破るとどうなるか仙人や道士に見せ付けてしっかり守らせるための口実でしょ？」

「それが分かっているなら素直に罰を受けるということじゃな？二人の分も背負う事になるから相当重い罰じゃぞ？」

「そんなこと言わなくとも、重い罰じゃないと今の仙人達に効果が出ない事くらい分かっていますよ」

「・・・おぬし、わざと人間界に行ったな？」

「さあ、なんのことやら。私は日頃のストレス解消に遊びに行っただけです」

平然とした態度で公望は言い、大老君は少し笑った。

「相変わらず喰えぬ奴め。まあ良い。では早々に皆に通達して皆の目の前で公式に罰を執り行う。おぬしはそれまでここで待機しておれ」

「はい」

公望は大人しく指示に従い椅子に座ると大老君は白桜童子を呼び出し、直ぐに仙人界に住まう者全員に公望の罰を執り行う事を知らせに行かせた。

公望、真意とは？

「えー！お師様が罰を受ける！？」

白桜童子から話を聞いた花鈴はその事実衝撃を受けた。

「はい、今から蓬莱山天空広場にて公開致しますので見に来てください」

「何故、公望が罰を受けるのじゃ？」

洗濯し終わり服を干していた竜吉もやってくる。

「掟七条、仙人は人間界に降り立ってはならないの掟を破ったからです」

「そ、それだったら私達だって罰を受けないといけないんじゃないんですか！？」

「いえ、大老君様の判断により公望様のみに罰が与えられます。とりあえず、直ぐに執り行われるので天空広場までお越しください。私は他も伝えに行かなければならないので。それでは」

白桜童子は伝えるとさっさと飛び立ってしまいました。

「お師様が罰を受けるなんてそんな・・・」

「うむ。公は大丈夫と言っておったのに……。とりあえず、天空広場に行くぞ」

「はい！」

花鈴はジュニアに乗り二人は急いで天空広場へと向かった。天空広場には大勢の仙人や道士でごった返している。正面の舞台の上には大老君が居た。

「皆集まったな？では、これより掟を破った重罪人公望の罰を執行する。執行人は普賢。第七条人間界に行ってはならないを破った罪により百叩きの刑と処す」

「なんだあ、ただの百叩きかよ」

「それぐらいなら重罪って程じゃないんじゃないか」

集まった仙人達から声上がる。まあ、日頃厳しい修行を受けている仙人、道士にしてみれば体罰などさして辛いものではない。百叩きなぞそれほど怖いものでもないのだ。

「ただし！執り行う鞭は超寶貝の禁鞭とする」

「げっ！」

会場にどよめきが走った。それもそのはず。確かにただの百叩きならさして怖いものでもないのだが、よりにもよって超寶貝のひとつ禁鞭を用いるのはさすがに怖い。いくら日頃鍛えている仙人でも禁鞭の猛威を一太刀でも喰らえば、下手すれば命を落しかねないからだ。それほどまでに禁鞭の攻撃力は高く、だからこそ七大寶貝に名を連ねているのである。

「では、重罪人公望。こちらに来るように」

大老君に呼ばれて舞台袖に居た公望は無言のまま舞台上がった。そして、普賢に対して背中を向ける。

「では、普賢。やってくれ。良いか、手加減してはならんぞ」

「はい」

普賢は禁鞭を握り締めると公望の方へ向いた。

「許せよ公望。これも十二仙の長としての役目だ」

「構わぬ」

「行くぞ」

普賢は禁鞭を思いっきり振った。普賢の力が鞭へと伝わり鞭がしなる。バシッ！！！！と物凄い音とともに公望の服は破け、背中に鞭が食い込む。

「ひとつ！ふたっつ！」

大老君は当たるとたびに声を高らかにして数えていった。ビシッ！！バシッ！！！！と禁鞭の猛威が容赦なく公望の背中に当たり、公望の背中は肉がえぐれ血は滴りもう骨まで見えそうなほど傷ついている。さすがに公望も我慢はしているものの立っているのが辛くなってきた倒れそうになるがそれを必死にこらえる。

「うわぁー・・・」

「あれは痛いなんてものじゃないぞ。普通もう死んでるって」

「ううう、気持ち悪くなってきた・・・」

「よく耐えてるな、公望」

会場からは嫌な声がところどころで流れている。ある仙人なんかはもう見ていられないとばかりに、顔を背けている者も居た。

「お師様・・・」

「公・・・」

花鈴と竜吉は辛そうな表情を浮かべながら公望の罰を見ている。そうこうしている内によりやく最後の一振り。

「ひゃーく！」

普賢は渾身の力を込めて禁鞭をしならせた。バシコーンッ！！！！と凄い音がしてその衝撃に何とか耐えていた公望もとうとう吹っ飛んだ。ドサッ！という音をたて公望は舞台端に倒れこむ。さすがに身体に力が入らない。公望は倒れたまま。

「これにて、重罪人公望の刑を終了とする。良いか皆の者、掟を破るとどうなるかしかと目に焼きつけ、今後も掟はしっかりと守るよに！では、解散」

大老君が言い終わると、皆が辛そうな顔をしながら各自邸宅へと戻っていった。普賢、大乙、妖仁、奇勝、泰然、花鈴、竜吉は直ぐ

に公望の元に駆け寄る。

「大丈夫か公!？」

「お師様!」

「うう・・・い、痛い」

「そりゃあ、痛いでしょ望ちゃん。禁鞭で叩かれたんだもん。命があっただけマシだよ」

「俺も一応ばれないように手加減はしたんだけどよ。わりーな。これも役目でよ」

「ねえ公望、なんでまた人間界に行ったりしたの? こうなるの分かってたでしょ?」

「おい! 公望! 今日バンドの練習日だっていうのに、お前がこれじゃ練習できないだろ? せっかく曲作ってきたって言うのに」

「・・・す、すまぬ」

息も絶え絶え、公望は何とか一声出して泰然に謝った。

「お師様! とりあえず、直ぐに手当てしないと! 家に戻りましょう!」

「うむ。風麒麟、公望を運ぶのじゃ」

「はい!」

皆してそつと公望を持ち上げると風麒麟の背中に乗せた。その間も公望はうめき声を上げている。

「よし、では花鈴戻るぞ」

「分かってます！」

公望を乗せた風麒麟は凄い勢いで家へと向かう。その後を竜吉と花鈴も追った。そして、公望の家。風麒麟は公望の部屋に行くと花鈴達に手伝ってもらって公望をベッドにうつぶせに寝かせた。その公望の背中を花鈴は改めて見て気持ちが悪くなる。あまりにも酷い傷。いや、傷と呼べる範囲を超えている。肉は完全に削ぎ落とされ骨が露骨にむき出している。溢れ出る血によってベッドは徐々に真っ赤に染まった。

「どど、どうしましょう竜吉様！」

「うむ、これほどの傷。しかも受けたのが禁鞭によるものとする、普通の治療では回復せぬ。仙丹でも回復できぬしここは仙魂丹が必要じゃな」

「仙魂丹って何処にあるんですか!？」

「わからぬ。仙魂丹は貴重な物故、数が少ない。しかも確か、今悪い具合に仙魂丹はどこもきらしておるのではなかったかな」

「そ、そんな。というか、竜吉様!なんで竜吉様はそんな落ち着いているんですか!お師様がこんな状態になってなんとも思わないんですか!？」

「そんなことあるわけなからう！わらわだってどうすれば良いか動揺しておるわ！今にも泣き出しそうなのを必死に堪えておるのじゃぞ！……！」

「だったら、なんとかしないと！」

「くう……、せ、仙魂丹なら、わしの薬箱の中に確か一つだけ、あつたはずじゃ……」

「そうなんですか！？だったら直ぐ持ってきます！」

花鈴は急いで薬箱を持ってきた。しかしどれが仙魂丹か分からない。

「竜吉様どれですか！？」

「えーっと、あ、これじゃ！」

竜吉は拳よりちょっと小さいくらいの大きさの丸く黒い玉を取り出した。

「これをどうすれば良いんですか！？」

「普通は食せば良いんじゃが……」

「き、禁鞭の傷は、食べるだけでは、回復、しない。直に、塗りこまない……」

「分かりました！お師様！じゃあ、塗りこみますよ」

花鈴は竜吉から仙魂丹を奪い取ると直ぐに公望の背中に塗りこみ始めた。

「ぐう！し、しみるう・・・」

「我慢してくれ、公。わらわはなんとか術で止血はしておるゆえに」

そう、実は竜吉。さっきから平静を装っていたのは、術で公望の背中の止血をするためにそれに集中していたからだ。竜吉は水を操る。血液中にも水分が含まれるためそれを操作してなんとか止血しようとしていたのだ。もしそれがなかったら、今頃既に出血多量で公望は死んでいる。

「お師様、塗り終わりましたよ！」

「うー、さっきよりかは楽になったが、さすが禁鞭。仙魂丹の力でもそう簡単に完治せぬか」

「とりあえず、血も止まった。これで何とか大丈夫じゃろ」

「よ、良かったあ」

花鈴は力尽きたかのようにその場に座り込んだ。竜吉も安堵の溜め息を出す。

「すまぬな二人とも。迷惑をかけた」

「いえ、そんなことないです。私の方こそごめんなさい。私が人間界に行きたいだなんて言ったせいで・・・」

「すまぬ公。そち一人に罪をかぶらせてしまった」

二人はすまなそうに悲しい表情をして謝った。公望は気にせずとも良いという感じに手をひらひら振っている。

「で、でも、なんでお師様が罰を受けなきゃならないんですか！あの時お師様、大丈夫だって、大老君様が何か言ってきたても問題ないって仰っていたのに！」

「それに、何故そちだけが罰を受ける？わらわ達も同罪じゃろ？」

二人は納得いかないという感じで公望に迫った。しばし考えた後に公望は真意を伝える事にする。二人には知っておいて貰いたかった。

「・・・理由があるのじゃよ」

「理由？」

「うむ。実はな、最近仙人界の掟に対する遵守の念が薄れておったのじゃ。わしが自分の美学にのっとって行動しておるとはいえ、度重なる掟破りにより周りの仙人達が掟を破っても問題ないと勘違いを初め仙人界の風紀が乱れつつあった。ほんの些細な事ではあるが、その歪みはいずれ大きくなり仙人社会に大きな影響を及ぼしかねん。だから改めて掟を破るとどうなるか皆が再確認する必要があったのじゃ」

「だからといって、何故お師様一人が背負わなきゃならないんですか？」

「その小さな歪みを巻き起こしたのがわしじゃからじゃ。これは自分でまいた種。今後もしの美学にのっとって行動するためには、一度こういう状態にならないということとは元々考えておったのじゃよ。それが、たまたま花鈴達が人間界に興味を持ったのを機会に良い頃合だと思って行動したんじゃ。だからそなたらが罪を背負う必要がなかった。遅かれ早かれ何時かは罰を受けねばと考えておったからな」

「公、そちは何処まで思慮深いんじゃ。その考えには敬意を払うぞ」

「いや、ただわしは自分の美学に基づいて行動したいだけ。このまま行けば、その美学も崩さなきゃならなくなり、住み難くなることは必然じゃ。わしは誰かのために罰を受けたのではない。自分の生き方を守るために罰を受けたのじゃ。ただそれだけ」

「お師様の美学は難しすぎるんですよ」

花鈴と竜吉は改めて公望の考えが自分達には到底及ぶ範囲ではないんだなという事を理解して凄いなあとつくづく感心した。公望はそんな花鈴の言葉を聞いて人間だったときの事を思い出す。

「ははは、昔親にもそう言われたな。あんたの考えは難しすぎるっての。よく意見が合わなくて喧嘩してたっけ。・・・はあ、ようやく痛みが引いてきた。死ぬかと思ったわ。そういえば、今日はバンドの練習日だったの。泰然の奴怒っておったなあ。今からでも練習するか？」

「だ、駄目ですよ。そんな身体で動いたら。せめて身体が治るまで安静にしてください」

「そうじゃ」

二人に引き止められて公望は仕方なく安静にしている事にした。泰然には一応連絡をして明日に練習しようと言っておく。

「さて、まあなんにせよ今回は事情が事情だったがゆえにあえて罰は受けたが、今度はもう罰を受けるつもりは無いぞ。また人間界に遊びに行こうな、花鈴、竜吉」

「はい」

「うむ」

「あ、その代わり罰をもし受けるときはお師様だけじゃなくて私もちゃんと受けますからね」

「わらわもじゃ。そち一人背負わせたくない」

「その気持ちだけでわしは救われる。そなたら本当に良い人じゃな。しかし、次は罰を受ける様なへまはせぬゆえ大丈夫じゃよ」

公望は、ほっほっほと笑った。その笑顔を見て二人も自然と笑みがこぼれる。

「そういえば、今日の洗濯問題は結局どうなったんじゃ？」

「え、あ、今回は二人で洗う事にしました」

「うむ。あのまま言い争っていたらいつまで経っても決着がつかな

さそうだったのにな」

「そうか。最初からそうすれば良いものを……。まったく、今度からそういったことは当番制にでもしないと駄目かの」

「いえ、競って勝ち取るから意味があるんです」

「その通り」

「はあ、まあそなたらが良いならわしは何も言わぬよ」

何故競っているかが未だにわからないまま公望は溜め息をついてとりあえず仲良くするようになつて言うと、まだ痛みが完全に引かない背中をさすった。

公望、いざセッション

朝目が覚めてみて公望はふと思った。今の生活はちょっと問題があるのでは？

「のう、花鈴」

「なんですか？お師様？」

「時にそなた、何時までわしと一緒に寝るのじゃ？」

「え？」

「いや、最近ちと忘れておったがそなたには好きな相手がおるのであろう？わしと一緒に寝ていてはいくら師弟関係とはいえ、相手方にしてみれば気分の良いものではない。確か転移の術の失敗で怖くなったからという事で共に寝てはいたが何時の間にかそれが当たり前になっておる。ティファニーランではバンジージャンプとか高い所から落ちるのに楽しそうにしておった所を見ると、もう怖いという想いは無いのであろう？なら共にもう寝る必要は無い」

「そ、それは・・・」

戸惑う花鈴。

「今後は自室があるのだから自室で寝なさい。わしを起こしに来る必要も無い。良いな？」

「で、でも竜吉様だって一緒に寝てるじゃないですか」

「わらわ、まだあのお化け屋敷の事が怖い」

竜吉は思いだして身震いし、びくびくしている。

「あー！ずるいですよ竜吉様！本当はもう怖いとか思っただけに！」

その姿に食って掛かる花鈴に対し竜吉は明後日の方向を見ながら何食わぬ顔をしている。

「いや、わらわは怖い。怖くて怖くて一人でおれん」

「まあ、わしもその気持ちは分かるからの。ああいったホラー関係の恐怖は早々には治らんよ。じゃが、花鈴はもう大丈夫であろう？」

「むー」

ほっぺたを膨らまして花鈴ちよつとすねる。

「まあ、竜吉も正直一緒に寝るといふのはどうかと思うが」

「何故じゃ？」

「十歳過ぎたら男女同衾せず。同じ部屋に居るのは良いが、別に恋人でも妻でもないのなら同じベッドで寝るのはおかしい。竜吉用のベッドも部屋に用意するからそこで怖いのがおさまるまでおることじゃな」

「えー」

竜吉もごね始めた。二人して良いじゃないかと言って来るが公望はあくまで男女同衾せずと言い張った。

「花鈴はもう怖い気持ちは無いし、竜吉は共に寝るということ自体おかしかろう？一人で居るのが怖いというだけなら別に、同じベッドで寝る必要はない」

「そんなあー」

「公、どうして突然その様な事を言い出したのじゃ？」

「いや、前々からおかしいとは思っておったのじゃがわしは甘くての。二人がトラウマを持っているならそれが落ち着くまでと思って許可していたが、さすがに今の状態は風紀的に良くないと思ってな。甘やかすときは甘やかすが、厳しいときは厳しくせねばならん気がした。まあ、なんとなくじゃが。このことを周りに知られて変に誤解されても困るし、特に花鈴に関しては好きな相手との結ばれる確立がより少なくなってしまう。それは由々しき問題じゃ」

「わ、私の事は大丈夫ですよ！」

花鈴が何とか説得を試みるが話題がすり返られる。

「そういえば花鈴。その好きな相手との事はどうっておるのじゃ？最近話を聞かぬが？気持ちは伝えたのか？自分からアプローチしておるか？」

「え、えーと」

「なんじゃ、うまい具合に進んでないのか？駄目じゃの。何時までもわしなんかにくつついておるから優柔不断になるのじゃ。やはり無理を言ってもあの時仙人試験を受けさせ独立させるべきじゃったか」

うーんっと公望は唸りだした。真剣に花鈴の事を考えているのである。愛弟子には幸せになってももらわないと。最近になっていくら自由主義を尊重するとはいえ、今のままでは絶対に良くない、自分の様に駄目仙人になってしまおうと公望は思案する。

「よし。では近いうちに仙人試験を受けれるよう師匠に進言しておこう」

「だ、駄目です！」

花鈴は手をバン！っとベッドに叩きつけ、ズイ！っと公望に顔を近づけた。

「何故じゃ？」

「だって！だって！・・・お師様は私が仙人になって独立してこの家から居なくなっちゃうことをなんとも思わないんですか？」

「そりゃあ、寂しくはなると思うが花鈴にとっては今よりも断然幸せになれると思う。そもそもその好きな男とうまくいかないのもわしが足枷になっておるからではないのか？」

「そんなことはありません！」

「では、何故花鈴程純粹で可愛い娘が男一人も落せんのか？何か

相手に問題があるのか？というよりもそろそろ誰が好きなのか教えてくれぬか？このままではわしはそなたを不幸にしたままになってしまう。協力せねば」

真剣に公望は花鈴を見つめた。心の底から協力したいと思っているからだ。

「あ、相手の名前はまだ言えません」

「どうしてじゃ？」

「・・・・・・・・」

花鈴は黙り込んでしまった。困って公望は竜吉に話を振る。

「なあ、竜吉は花鈴が誰を好きなのか知っておるのではないか？教えてくれぬか？」

「それは、わらわの口からは言えぬ」

「そなたもかあ。うーん困ったの。では、花鈴はその者とうまくいっておるのか？」

「あまり良い状態ではないといった方が良い。しかし花鈴は今のままで満足はしておるようじゃ」

「満足はしてません！」

「ほら、花鈴もこう言っておるじゃないか。ならやはりなんとかせねば」

「その前に公。そちがなんとかならなければならんとわらわは思うぞ」

「？」

「もう少し、乙女心を理解しろというか、いい加減女性不信をなんとかしろと言っておるのじゃよ」

「わしがそれをなんとかすると解決する問題なのか？」

「そうじゃ」

「？」

良く分からないといった感じに公望は首をかしげた。何故自分の女性不信が関係してくるのがさっぱり分からない。それを治したところで花鈴とその好きな相手とうまくいく理屈がいまいち掴めなかった。そんな折。

「公望！居るかー！！！」

外から泰然の大声が聞こえてきた。公望は部屋を出てやってきた泰然と奇勝を迎え入れる。今日バンドの練習をする約束だったのだ。

「なにやら朝早くからやってきたな」

「当然！俺の音楽魂が燃えさくっててよ！俺の愛器が早く鳴らしてくれとせがんでいるんだよ」

「早く練習がしたかった」

熱血な泰然と裏腹に奇勝はいつものようにクールに言っている。

「お前の方はどうよ？昨日罰喰らって相当深手だったじゃないか。もう大丈夫なのか？」

「まあ、まだちと痛むが練習は出来る状態にある。問題はない。待たせてすまなかったな」

「そうか。なら良し！早速お前が用意したスタジオ見せてくれよ」

「こっちじゃ」

公望は家のある部屋に二人を促した。広い空間にちゃんとしたドラムセットが置かれ、大きなスピーカーが二台ありマイクも準備されマイクスタンドにささっている。端っこに置かれた発電用宝貝にはコンセントがいくつも付いていた。

「おお！なんかスタジオっぽいじゃん！かぁー燃えてくるぜ！」

「ああ、いい感じだ。早速持ってきたベーアン繋がせて貰うぞ。チューニングしたいからな」

「あ、俺もマーシャル繋ごっと！」

二人は持ってきた楽器をスタンドに置き、アンプをセットし始めた。セットが終わると直ぐに音出しが始まりチューニングをしだす。

「いいねえ、なんかいい感じに反響してるじゃないか」

「スタジオって言うより、ライブ会場っぽいな」

「そっちの方が雰囲気が出ると思ってたの」

「でかしたぞ、公望！さて、俺はチューニング終わったけど奇勝は？」

「俺も終わった」

「じゃ、公望。ちょっと肩慣らしにジャムでもすつか？」

「良いぞ」

公望はドラムセットの元に行き椅子に腰掛ける。スティックを持ってスネアやクラッシュシンバルなどを叩いてウォーミングアップの変わりにルーディメントを叩き始めた。それに併せて泰然と奇勝も弾き始める。二人ともかなりの腕前だ。このジャムだけで一曲できそうな感じである。最初はハイハットを抑え目に叩き、スネアも音を下げメロディックに叩いていた公望は二人の実力を見て測りいけると思って半拍おいていきなりスネアをリムショットでパカーン！！と叩き付けた。凄く大きく良い音が部屋に響く。そこから急にエイトビートだったのをフォービートに変え、ツインペダルでドコドコと十六分を刻み始める。曲調ががらりと変わりメタル風味になった。泰然はエフェクターで音色を変え鳴きの音から反転歪ませる。奇勝も指引きでベースの音を強くした。おもわず心から叫びたくなるようなそんなメタルの曲調。この時三人は心が一つになって自分達の音楽に酔いしれた。

「やべー！楽しい！」

「ああ、やるな公望」

「そなたらもさすがじゃな。ああ、これにキーボードが居てくれたらと思わず願わずにはいられないの」

ジャムを止め三人は満足げに互いの演奏力を確かめた。

「さてと、腕ならしもお互いの演奏力も分かって音楽性は一致しているみたいだし、後は竜吉様達か」

「そういえばそなたら曲を作ってきたのであったな」

「おうよ！」

「では、竜吉達を呼んでくる故ちよっと待っておってくれ」

公望はスタジオを出て花鈴と竜吉を呼びに行く。

「竜吉様、俺達の曲好きになってくれるかな？」

「さあな。音楽性があってればいいんだが」

「三人は良い感じだからよ。本当、このバンドで竜吉様には唄って欲しいよな」

「そうだな」

そんな感じで二人は待ちつつ、自分達の作った曲を再度弾き始めた。

公望、バンド練習開始

「ほう、これが軽音楽というものか。良い曲じゃな」

やってきた竜吉と花鈴に泰然達は作ってきた曲を聞かせてみると中々良い反応が返って来た。竜吉はうんうんと頷いている。

「最初の曲は、わらわが歌会でやっておるような曲と似て優雅な感じじゃ。しかしどこか音の響かせ方が違うの。ふむふむ。二曲目は激しい曲なので初めて聞くとちょっと驚くが力強くて良い」

「そうですね。三曲目なんかは私の故郷の祝い事の時なんかに使われる民族曲に似た明るい曲でどれも良い感じだと思います。私はやっぱり三曲目が好きかな」

花鈴も相槌を打ち素直な感想を述べた。

「わらわは最初の曲が好きじゃな」

「良かったあ。竜吉様に気に入ってもらえましたか。最初の曲なんかは竜吉様の歌会を模して作ってみたんで違和感は無いと思うんですけど」

泰然と奇勝は竜吉が自分たちの曲を気に入ってくれたので安堵し喜んだ。一方の公望はちよっと考え込んでいる。

「そうか、二人はそういうのが好きか・・・」

「ん？公は三曲の中でどれが一番好きなんじゃ？」

「うーん。やっぱりメタルが好きだから二曲目が一番やりやすくて聞きやすい気はするの。しかし、二人はそっち系統の曲が好きなのか。そうなるどドラムが難しくなるの。ボーカルに合わせて作りたからな。あまりメタルっぽくはできませんか？ いや、三曲目はバイキングメタルっぽくするとか。しかしの、んー・・・。」

ちょっと困った表情の公望。

「わ、私も二曲目は良いと思いますよ！ 凄く力強くて迫力があってなんか頑張ろうって気がします！」

「わらわも二曲目と最初の曲とどちらが良いかと悩んだんじゃ。うん、二曲目は良いと思う」

公望が二曲目が好きと言ったのを聞き、竜吉も花鈴も慌てて二曲目を褒めだした。公望は、はてなと思いつつもどの曲も素晴らしかったので問題ないかと判断し特に気にしないことにしたが、しかし花鈴と竜吉の心の中では公望の好みを知ることが出来てしっかりとインプットされる。

「お師様はああいった曲が好きなんですネ。良し！ 二曲目に想いを込めて唄おう！」

「公は激しいのが好きなのじゃな。うむ。わらわもそういうメタルとかいうジャンルに慣れなければ」

とかなんとか二人は考えていたりする。その間公望達はすぐさま練習に取り掛かっていた。スタジオ内を音が反響して結構五月蠅い。花鈴と竜吉の二人はその五月蠅さに最初耳を痛そうにしていたが、

徐々に耳が慣れ心地よい音色に変わってきた。もともとが良い曲なので、ただ五月蠅いだけではなく心に響く感じなのだ。特に奇勝のベースと公望のバスドラムの音が素晴らしいほどにマッチングしていて低音が身体全体を覆い気持ちが良い。

「公望。おまえ、強弱はすげーうまいし聞かせる感じのドラムは叩いてるから一曲目はそれで良いけど、三曲目はもうちょっとおかず増えないか？」

「そうだな。もう少し、ドラムの音数が欲しい。跳ねる感じはできてるんだけど、ちょっとツインペダルにこだわりすぎてるんじゃないか？手がおろそかだぞ？」

「相分かった」

泰然と奇勝に指摘を受けながら公望は、ちょっとドラムソロっぽいリズムを所々に入れてツインペダルの音数を減らし手数を増やす。そんな感じでその日の半日ほどを練習で費やした。竜吉と花鈴はその場で出来上がっていく曲を静かに聴いている。というより、公望のドラム姿を惚れ惚れと見ていた方が正解かもしれない。

「さてとちょっと休憩入れるか」

「そうだな」

「すまんの。わしがブランクがありすぎて思っていた以上にそなたらの足を引っ張ってしまった」

「いや、正直俺らが予想していた以上に公望はうめえよ。こんな短時間で三曲の土台作っちゃったからな。曲調も全然崩すような事も

ないし、むしろ安心してドラムを任せられるから俺達も好きに弾けるよ。な、奇勝」

「ああ、特に俺のベースにうまい具合にバスドラを合わせてくるのは驚いたな。かなり複雑なコード弾いてたんだが。もうこの三曲出来上がったといっても過言じゃないだろ。十分ライブで通用するぞ」

「二人にそう言ってもらえると助かるわい」

ドラムの椅子から立ち上がり、休息に入った二人の下に近寄ってさらにどんな感じにしていくなかを入念に話し合う。そんな中、ふと思い出したかのように公望は花鈴達に話を振った。

「で、二人ともどうじゃ？」

「え？何がですか？」

「いやだから、さっきから聴いていてなんか思ったこととかあるじやろ？ここをこうして欲しいとか、もっと抑えるとか激しくするかそういう意見が出てきても良いと思うんじゃが」

「わらわとしては、今の所特に気になったところはない」

「えーと、私は三曲目をもうちょっと軽やかな感じにしてくださいるともっと雰囲気が出るんじゃないかと・・・」

「となると、もうちょっと音質変えるか？」

「いや、下手に変えるとイメージが逆に壊れる気がする。ここは公望のドラム次第だろ」

「うーむ。ドラムねえ。これ以上アップテンポにするとおかずが入れ難くなって、ツーペダに頼らざる得なくなるが。二人はそれが嫌なんじゃろ？」

「できれば三曲目は、あまりバスドラを表に出して欲しくないんだよな。奇勝のベースも抑えてるしよ」

「んん・・・」

泰然の言葉に公望は腕を組み真剣に考える。人間の時、メタルオンリーで聴いていたため他のジャンルの事をよく知らない公望としてはやはりツインペダルに頼りたくなってしまうのだが、それではせつかくの曲調が壊れてしまう。確かに実際練習してみても、三曲目にツインペダルを入れるのは正直違和感を感じる。しかし、かといって単発打ちや変則打ちだけではせつかくの曲を生かすきれない気もするのだ。公望は必死に唸る。それを見て花鈴はしまった！と思った。

「あ、あの、すみません！軽音楽を知らない私が勝手に口出しちゃって。お師様そんなに悩まなくても良いですよ。今のままで十分良いと思いますから」

唸る公望に花鈴はなんとかフォローを入れたが、公望は納得していない様だ。

「いや、そういう素人の率直な意見が欲しいのじゃ。実際聴く客たちは素人が多いからの。それになにより、唄うのはそなたらじゃ。そなたらが気持ちよく唄えなければ意味が無い。ボーカルを引き立たせるのもドラマーの腕の見せ所じゃからな。うーん・・・」

「いや、本当にお師様。今のままで十分素敵な曲ですから。私の言った事は気にしないでください」

「駄目じゃ。やはりバンドとして活動する以上、全員の意見を反映させなければ。じゃから花鈴も竜吉ももっとそういった意見をバンバン出してくれ」

「は、はあ」

自分の言った言葉で公望に迷惑をかけてしまったと思ったが、公望がそれで良いと言ってくれたのでとりあえず花鈴はほっとした。

「なあ、泰然。わしちよっと思っっていることがあるのじゃが」

「なんだ？」

「ほれ、最初に言ったと思うが仙人ならではの新しいジャンルを開拓しようと言っておったじゃろ？」

「ああ、俺もそのつもりで曲を作ってきたつもりだが」

「そこでなんじゃが、ちよっと変わったやり方をわしなりに取り入りたいと思うのじゃが良いか？」

「変わったやり方？」

「うむ。ドラムに弦楽器を取り入れようと思う」

「ん？つまり、おまえがドラムをやりつつギターを弾くという事か

「？」

「簡単に言うとそうじゃが、ただギターではない。わしの故郷の民族曲で使われる三味線という弦楽器を曲の中に入れたいと思うのじゃ。聴いてる限りだと、おそらく合うと思うのじゃよ」

「ふーん、おもしろそうじゃねえか。ちょっとやってみるか」

「うむ。では、ちょっと取ってくる故しばし待っていてくれ」

公望は部屋を出て物置においてある三味線を取りに行った。その間四人の間でまた話し合いが行われる。花鈴は気を利かせて皆にお茶を用意した。しばし場が和む。

「三味線ねえ。聴いた事ねえな。どんな楽器でどんな音が出るのか楽しみだ」

「そうだな。公望の奴感性は自分で言っていた通りすこぶる良いから、あいつが合うというならおそらく良い感じになるんじゃないか」

「ああ、ところで竜吉様」

「なんぞや？」

「竜吉様、この三曲のメロディに詞は入れられますか？ちょっと花鈴と二人で良い詞を考えて欲しいんですけど」

「わらわ達が考えるのか？」

「ええ、やはり詞はボーカルの人に作ってもらいたいです。歌い

手が想いを伝えられるような詞はやはり、ボーカルの手で作った方が良いと思うので」

「うむ。わらわは大丈夫だと思うが。花鈴はどうじゃ？」

「私も大丈夫です。ちょっと今聴いていて伝えたい言葉が思い浮かんだんで」

「では、お二人でちょっと考えていてください。今後も作詞はお二人に任せるのでお願いします」

「分かった」

こうして竜吉と花鈴はどんな詞が良いか話を始めた。まあ内容としては、やはりラブソング系を主に考えているようである。

さて、そのラブソングのテーマになっているとは露知らずの公望は物置をがさごそと探し回り、どこに閉まったかと手を拱いていた。

「おかしいの。確かこの辺に置いたはずなんじゃが・・・、これじゃなくて、あー、お！あったぞあったぞ」

物置の奥から黒のソフトケースを取り出す。中を開けると新品同様の三味線が入っていた。

「懐かしいな。昔沖縄で買ったんだっけ。当時ははまってたのお。腕が落ちてなければ良いが」

三味線の中から取り出しちょっと軽く琉球曲を弾いてみたりする。

「んー。やっぱり本皮は良い音がするのお。早速持っていくか」

ちょっと懐かしい気持ちを思い出し、軽い足取りでスタジオに戻っていった。

「おつまたっせさん！」

「お、それが三味線とか言う楽器か？」

「うむ」

「ほう、弦が三本しかないんだな。ベースよりも少ないなんて初めて見た」

全員が興味津々と言った感じで見に来る。

「お師様、弾けるんですか？」

「うむ。弦楽器は苦手なんじゃが、これだけは練習しての。ちょっとは弾ける」

そう言って軽く音を鳴らしてみた。全員がその独特の音色に聞き惚れる。

「わー、良い音ですね」

「うむ、民族っぽい音じゃの」

「これを三曲目に入れるのか。うんうん、確かに合いそうだ。よっしゃあ！休憩もそろそろにして練習再開するか！竜吉様達は良い詞作ってくださいね」

「任せておけ」

「はい！」

そうして再び練習が始まった。三曲目のイントロをギターではなく公望の三味線から入ることにしてみると、これまた凄く民族的感觉になる。しかも、ただ三味線の音が響くのではなく途中からバスドラのツーバスも入ってきて独特な曲調ができてきた。泰然も奇勝もそれに合わせて途中から楽器を弾き始める。そんな感じで公望は、ギターソロだったり途中のおかず部分に足はツインペダルで手は三味線を弾くという荒業をやっていく。しかし、一見むちゃくちゃなように見えても曲としては怖いくらいにマッチングしていた。こうして一日の最初の練習は終了。

「最初にしては上出来だな」

「ああ」

「うむ。もう完成と言っても良いかもしれぬの」

「そうだな。じゃあよ、来週までにまた次の曲頑張っ作ってくるからよ。この調子でいけば一ヶ月も掛からないうちに、ライブできそうだな。まあ実際、ボーカルが入ってみたいと分かんないけど」

「大丈夫じゃ。次回の練習までには詞を完成させて、しかと唄ってみせるゆえ」

「任せといってください」

「ええ、期待してますよ。じゃ、お疲れ様でした」

「お疲れ様、また来週な」

「じゃあな、公望」

そう言って泰然と奇勝は帰っていった。

「そなたらが、作詞をするのか？」

公望はいつもの縁側に向かい腰掛け付いてきた花鈴と竜吉に話しかける。

「はい！」

「うむ。任せられての」

「ふーん。確かに歌い手が作った方がより気持ちは伝わるからの。良い判断じゃ。最初わしが作ろうかとも思っておったが、そなたらが作れるならそれに越したことは無い。なにより面倒臭いでの。ほっほっほ、で、どんな詞にするつもりじゃ？」

「それは出来てからのお楽しみです」

「うむ」

竜吉と花鈴は意味有り気にお互い顔を見合わせてにつこりと微笑んだ。

「ま、期待させてもらおうかの」

公望はゆつくりとタバコに火をつけて、ふけていく夜の空を見上げた。

別れ

それは、本当に些細な事だった……

花鈴を自室で寝かせることにしたため久しぶりに朝をゆっくりと自分のペースで起きる事のできた公望は、だるいとか言いつつまだ枕に顔をうずめていた。そんな折に來客があつたようだ。外で花鈴達以外の聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「どう？俺の気持ちに応えてくれないかな？」

「え、そんなこと急に言われても……」

「初めて見たときから君にぞっこんだったんだ」

「はあ」

「な、試しに付き合ってみない？」

相手はなにやらしつこく迫ってくる。

「いえ、私困ります。私にはちゃんと好きな人いますし」

「誰？」

「それは……」

「朝から五月蠅いの」

公望は折角のんびりした朝を迎えられたというのにやかましく聞こえてくる声に気分を害しながら部屋の扉を開け、声の主の方に顔を向けた。そこには花鈴と十二仙の一人である貴信が居た。

「やはり貴信か。いつか来るとは思っておったが・・・」

げんなりしながら公望は溜め息をついた。反面貴信は意気揚々と言葉を返してくる。

「よう！公望。相変わらず間が抜けてるな。しかし今は悪い間の抜け方だ。俺達は今大切な話をしているんだ。邪魔をしないでくれ」

「大切な話ねえ。どうせ花鈴を口説きに來たのであろう？」

「分かってるなら口出さないでくれよ。で、どうかな花鈴ちゃん。俺と付き合ってみない？」

「ですから、お断りしますと何度も言っているではありませんか」

「そうつれないこと言わないでさ。好きな人が居るっていつでもまだ付き合っているわけじゃないんだろ？」

「そ、そうですけど」

「だったらさ。試しで良いから付き合ってみない？もしかしたら、付き合っているうちに気持ち変わるかもしれないし、花鈴ちゃんを不幸にするようなことは絶対にしないから」

「で、でも」

「これ貴信。花鈴が困っておるではないか。あまりしつこく言い寄るものではないぞ」

見かねて公望が助け舟を出す。

「第一花鈴には心に決めた相手がおるのじゃから、それを尊重してやらぬか」

「でもよ、聞いてる限りじゃまだ気持ちを伝えたわけでもないし、付き合えるって言う保障もないんだろ？ そんなあやふやで、下手に失恋して痛手喰うより俺と付き合っておいたほうが良くないか？」

「阿呆。花鈴ほどの器量の持ち主が失恋なぞするか。大体それを分かっているからそなた、花鈴に声を掛けにきたのであろう？ 付き合う前に自分のものにしてしまおうとな。そなたも相変わらず女癖が悪いな。そうやって一体何人の女性を泣かせてきたか。ほとんどの女性に声を掛けて食い物にしてきたであろうに。花憐のもとにも声を掛けに言ったと聞いておったから、その内花鈴にも声を掛けに来るであろうとは思っておったんじゃないか」

「いや、今回は俺は大真面目だぜ。本気で好きになったんだよ」

「嘘をつけ。今までもそうやって口説いておったであろうが。そんな奴に可愛い愛弟子はやれんな」

公望は貴信の性格を良く知っていたため、花鈴を付き合わせることを断じて拒否した。貴信は仙人界でも指折りの美形だが、それと同時に仙人界きつての女好きなのだ。さらに、釣った魚には餌をやらんというタイプで口説き落とす事に楽しみを持っているところがあり付き合ってしまうと直ぐに他の女性に手を出すという浮気癖が

酷いためたちが悪い。そのせいで何人もの女性が泣かされてきたという話だ。そんな相手に愛弟子を付き合わせるわけにはいかない。

「お前の意見なんて聞いてない。俺は花鈴ちゃんと話があるんだ。ほっというもらうか」

少し貴信の態度が変わり口調がきつくなってくる。公望は気にせず話を返した。

「そうはいかん。わしとて一応花鈴の師匠をしておるのだからな。ちゃんとした相手と付き合ってもらいたいと思っておる。弟子である以上、師であるわしの許可なしに恋愛をさせるわけにはいかん」

「ちっ、堅物が。お前の考えは古いんだよ。恋愛に師匠も弟子も関係ないだろ。花鈴ちゃんの意志の問題だ」

「その意見には賛成じゃが、お前のような輩に花鈴はやれんわ」

「部下の意見なんて聞いてないんだよ。とにかくおまえは引っ込んでろ。俺は花鈴ちゃんに用があるんだ」

何とか穏やかに済まそうとしていた公望は自分が一番嫌いとする上下関係を口にされて頭にきた。ふいっとそっぽを向くとその場を立ち去ろうとする。

「はいはいそうですか。じゃ、まあせいぜい頑張ってくれ」

「あ、ちょっとお師様!」

「なんじゃ」

頭にきてその場から立ち去ろうとした公望に花鈴が待ったを出した。凄く困った表情をしていかにも助けてという感じである。これが一人前の仙人ならなんてことはないのだろうが、花鈴はまだ道士立場上断りにくいのだ。しかも相手がただの仙人なら公望も何とか言い切れるのだが、貴信は自分より位の高い摂政という二番目の地位の十二仙だ。一応上司に当たる以上公望も何も言えないのである。

「お師様からも何とか言ってください」

「すまん、花鈴。他の相手ならいざ知らず貴信相手ではわしは何も言えん。十二仙という立場上わしより位の高い相手には逆らえん」

「そんなのお師様らしくないですよ。大老君様にさえ逆らってらっしゃるお師様がいきなり立場の事を口にするなんて・・・」

「じじいはわしの師匠じゃから逆らえるんじゃ。しかしわしも十二仙の地位に立つ以上、ある程度の上下関係には従わなければならんのじゃ。これで花鈴が一人前の仙人なら断ることも容易かったのじやろうが・・・。じゃから早く仙人になれと言っておったというのに。まあ、自分でなんとかしなさい。ま、貴信は女癖は悪いが試しに付き合ってみるには良い相手ではないかの。男前じゃし経験も豊富じゃしうまくリードしてくれるのではないか」

貴信に頭がきてもうどうでも良いという感じの公望に花鈴はずっと気にしていた事を尋ねてみる。

「あ、あのお師様はこれで仮に私が貴信様と付き合ってもなんとも思わないのですか？」

「思わん。そなたはそなたの歩む道がある。貴信と付き合おうとも自分の好きな相手と付き合おうともそれはそなたが決める事。どちらにせよわしの元から去っていくのである事には変わらんのじゃかな」

この公望の返答に花鈴はショックを受けたのと同時にムツと来た。

「じゃあ、お師様は私が誰と付き合っても良いって仰るんですね！」

「正直貴信と付き合うことには反対じゃが、そなたが決めたならそれはそれで良いと思う」

「分かりました！！！！お師様にとって私ってその程度の存在だったってことですね！良いです！私貴信様と付き合います！！！！」

「良いのか？そなたには好きな相手がおるのではなかったか？」

「良いです！どうせ叶いませんから！！！！お師様の馬鹿！！！！」

花鈴は公望に向かって怒鳴ると貴信の元に駆け寄っていつてしまった。公望は貴信から言われた事と何故自分が馬鹿と言われなければならぬかという事に悩んでさらに頭にきた。

「花鈴！貴信と付き合うなら、もうこの家にも帰ってこなくても良い！貴信と共に暮らせ！せいぜい幸せになれ！！！！」

皮肉交じりに公望も花鈴のほうをむかずに大声を出すと竜吉の部屋に向かった。花鈴も相当カチン！ときいているらしく負けじと言い返してくる。

「分かりましたよ！もう二度と帰ってなんかきませんから！今までお世話になりましたー！！！」

その声に返事することなく公望は竜吉の部屋に入り扉をピシャ！と強く閉じた。中では竜吉が少しびっくりしたように公望を見ている。

「な、なにやら公。不機嫌じゃな。そんなそちは初めて見たぞ」

「ふん。知らんわ。どうせ花鈴は何時かは仙人になって独立する存在。今出て行こうが、誰と付き合おうが自由じゃわ」

公望はまるで自分に言い聞かせるように言葉を発している。正直公望の中でも何故こんなに頭にきているのか分からなかった。貴信に対して怒るのは自分の嫌いな上下関係を口にされたから良いとして、花鈴に対して自分はどうしてこんなにもイライラして心がいちもやしているのだろうか？

「しかし、良いのか公？花鈴を貴信の元にやって」

「分からん。もしかしたら貴信は今回は本気なのやもしれんし。花鈴も貴信と付き合うといった以上わしからは何も言えぬじゃろ？」

「公、あれが花鈴の本音だと思っておるのか？」

「？」

「ほんに乙女心の分からん奴じゃな。ま、わらわとしては邪魔者がいなくなっただけが良いが。競争相手がおらんのはちと寂しいとは思わが」

「ん？ 竜吉は花鈴が邪魔者じゃったのか？」

「いや、こちらの話じゃ。あ、あと公。本当に花鈴に戻ってこなくて良いと思っておるのか？」

「仕方あるまい。今のままわしの元におってはあやつは駄目になってしまう。どちらにせよ明日明後日という早いうちに無理やりでも仙人試験を受けさせ独立させるつもりだったんじゃ。そうなたら、誰と付き合おうが花鈴の自由じゃからな。今回は良い機会じゃったのかもしれん。わしは花鈴には幸せになってもraitたいのじゃ」

「ふーん。では、花鈴は何時まで経っても幸せにはなれんの」

「何故じゃ？」

「それはそちの問題じゃ」

「???」

「ま、花鈴との決着もあっけなく付いた事だし。公、わらわとゆっくり話でもしよう」

「うむ。良いぞ」

公望はそのまま竜吉と話を始め、一方の花鈴は貴信と共に公望邸を出て行ったのであった。

公望、分からぬ想い

心の中で泣いていた。自分がそんなにも小さな存在だった事に悲しくて悔しくて……。溢れ出しそうになる涙を必死になって抑えている。負けず嫌いな自分としては他人の前で涙は見せたくなかった。それでもどうしようもない感情が押し寄せ、やがて抑えきれない涙は頬を伝う。

「どうしたの？」

優しい声に抑えている感情がはちきれそうになる。

「……泣いても良いんだよ。泣きたい時は我慢しないで泣けば良い」

そっと頭を抱き寄せる。温かな腕、優しい声。そのぬくもりに思わず甘えそうになるのをまた必死に耐えるが、我慢できずにとうとう声をあげて泣き出した。

「それで良いんだ。感情を無理に抑える必要は無い。好きなだけ泣きな」

貴信の胸に顔をうずめ花鈴は泣いた。これでもかというくらいに泣いた。やがて泣き尽して涙も出なくなった頃、ようやく花鈴は貴信から離れ顔を袂でぬぐう。

「ありがとうございます」

「良いさ。誰でも泣きたい時はある。そうだ。ちょっと良いかな？」

「？」

「付いてきてよ」

貴信は靈納^{れいな}という靈獣に乗り、花鈴をある場所へと促した。付いた先は、山々が聳え立ち小さな清流が流れ木々には色とりどりの葉が付きとても景色が良く吸い込まれるような雰囲気をもじだしている綺麗としか言いようの無い場所だった。

「ここは、俺の秘蔵の場所なんだ。ここに来ると素直な自分になれるって言うのかな？そんな場所だね。悩み事とか辛い事とかがあるところに来るんだ」

「綺麗な場所ですね」

「うん。まあ座りなよ」

貴信は岩の上に降り立ち座ると横に花鈴を座らせる。

「公望と喧嘩したのがそんなに辛かったのかい？それともやっぱり自分の好きな相手の事を忘れられないとか？」

「・・・どちらもです・・・」

「ははは、そっか。でも公望とはさ、喧嘩するほど仲が良いとかどつかの諺であるし気にする事無いさ。後、好きな相手の事はしょうがないよね。そう簡単に諦められる訳無いと思うし、あの花憐ちゃんの双子の妹でしょ？だったら結構頑固な所ありそうだしね」

「・・・・・・・・」

「それでも良いさ。公望は俺の事ああ言っていて、それは確かな事だし俺もそれは否定しない。でも今回は、花鈴ちゃんの事は本当に本気で好きになったんだ。遊び人に思われているかもしれないけど、本気で好きになった相手には俺は大切にするしちゃんと守ってあげる。俺も焦らないからさ、ゆっくりでいいから花鈴ちゃんも俺の事好きになってくれたら嬉しいな」

花鈴は無言のまま貴信の言葉を聞いた。辺りは川のせせらぎだけが響いている。本当に気持ちの良い場所で辛い事を忘れさせてくれるようなところだった。花鈴はじっと流れる川を眺めている。貴信もそれ以上は何も言わず同じ様に川を眺めていた。

「貴信様」

しばらくして花鈴が小さな声で口を開いた。

「ん？何？」

「貴信様って優しい方ですね。私、お師様以外の男性に優しくされた事有りませんでした。だから・・・」

「だから？」

「・・・すみません。どう接して良いのか分からないんです。こんなにはつきりと気持ちを伝えられた事もないのでどうして良いか・・・」

「良いんだよそれで。今はまず自分の気持ちに整理をつけなきゃな

らないときだからさ。俺はこういう性格だから物事ははっきり言うけど、自分の感情を押し付けるような真似はしない。って言っても説得力無いか！はっはっは！今こうして無理やり花鈴ちゃんを捕まえたんだもんな。いやー、我ながら凄い行動力！」

貴信は柔らかい笑顔で笑った。花鈴もその笑顔を見て少し気持ちが晴れたようでちよつとだけ笑顔を見せる。

「あ！今笑ったね！良いね。やっぱり花鈴ちゃんは笑顔が一番似合ってる。いつもそうやって笑っていてくれたら俺も幸せだな。しかし良いよなく。花鈴ちゃんに好きになってもらえる奴。正直花鈴ちゃんに好かれた普賢も羨ましいぜ。つうか、一緒に今まで暮らしてた公望が憎たらしいね。俺も花鈴ちゃんみたいな弟子が欲しかったあー！」

「でも私、お師様に迷惑かけてばかりでしたから、貴信様の弟子になってたら大変だったかもしれませんよ？」

「迷惑かけてたの公望だろどうせ？」

「えーっと、そうかもしれません」

くすくすと花鈴は笑った。

「しかし、花鈴ちゃんもよく公望なんかの弟子になったよな。あの変わり者の弟子を勤められるってことは相当しっかりした子なんだね。花鈴ちゃん、良い嫁さんになるよ」

「私の国の言葉で、そういうこと言う人は働かないぐーたら亭主になるって言いますよ」

「あら？実は当たってたり？」

とぼけた感じで貴信は頭を掻いた。

「でも貴信様の仕事でのお噂はかねがね聞いてますよ。普賢様を支える摂政として最も優秀な働きをしているって。かなりの切れ者と伺ってます」

「そんなことないさ。俺はただ良い仙人界にしようとしているだけで別に変わった事はしていない。切れ者と言われるのは天才仙人の妖仁くらいだろ」

「でも、お師様は今の仙人界が平和なのは普賢様の实力と器の広さと貴信様の力添えがあつてこそだと仰ってましたよ」

「ははは、公望に褒められても喜んで良いのやら。いや実際は嬉しい事か。あの公望に褒められるなんてことは滅多に無いからな」

「そうなんですか？」

「ああ、あいつが社交的に褒める事はあっても個人的に褒める事は無いからな。あいつは自分の認めた相手じゃないと心を開かないしさ。なんだかんだ言つて実はあいつが一番凄いのかも。結構裏でいろいろ動いているつつう話は普賢から聞いたことあるし、まず普賢が認めてる奴だからさ。普賢も厳しい奴だよ。俺ですらまだ認められて無いところあるっていうのに、公望に関しては全面的に信頼してるみたいなんだ」

「へー、でも確かにお師様は凄い方ですよ？」

「花鈴ちゃんが言うなら間違いないんだろうな」

「正直私にも何を考えてらっしゃるのか分からない所だらけですけどね」

また川を見つめて公望の事を思いだした花鈴。公望にもう帰ってこなくて良いと言われた事が少し脳裏をよぎる。考えてみれば、あんなふうに怒られた事は弟子になって初めての事。以前公望と戦った時に怒られたけど、あれは自分のためを思ってた事。それとは違う純粹な怒り。あの場は勢いで出てきてしまったけどそれが自分に向けられて、どうして良いのか分からない。

「ほら、また暗い表情しているよ」

「あ、ごめんなさい」

「謝る事じゃないけど、早くその表情が無くなると良いね」

「頑張ります」

「いやいや、頑張るのは俺の方さ。もっと元気になれるようにずっと笑っていられるように俺も頑張らないと。わがままとか言っただけからね。俺なんだって叶えちゃうよ？」

「ありがとうございます」

花鈴は貴信の笑顔を見て公望の事を忘れる努力をすることにした。自分でもうすすすとは分かっていたのだ。竜吉に言われるまでも無く自分の想いは決して公望に届かないと……。決して届かない絶

壁の花より、今自分を見てくれて大切にしてくれようとしている目の前の一面に広がる花園に行った方が良いのだろうと花鈴は心を割り切ることにした。でないと言信にとって失礼に当たると思ったからだ。花鈴は気持ちを切り替えると言信と話を始めた。言信と話をしていると自然と言望の事を忘れられて気持ちが楽になる。そうも感じていた。

一方の言望は・・・。

「だるう」

縁側に寝そべってタバコを吹かしていた。竜吉との話も一段落し竜吉は用があるといったて出かけ行ったので、ゆっくりといつもの定位置に腰を落ち着けていたのだがどうもしっくりこない。あつちを向いたりこつちを向いたりところどころと縁側を転がっている。

「なーんか、落ち着かんの」

ムクツと身体を起こすと、いつもなら美味しそうに吹かしているタバコを不味そうに灰皿に捨てる。そして、いつも花鈴と竜吉が喧嘩をしている場所をじっと見ていた。ほんの昨日までやかましいなと思っていたその喧騒が、今では何年も前の出来事のように感じられる。

「何時かは離れねばならん事じゃったんじゃがな・・・」

あんな感じに別れるつもりではなかった。きちんと仙人にして温かく門出を祝ってやるつもりだった。言望は自責の念に駆られる。

「やはり、わしは師として不合格であったな。こうなることは可能

性として考えていたはず。花鈴は良く持った方じゃ。せめて、貴信と幸せになってくれれば良いが・・・それだけが気がかりじゃな」

そう思いつつ、心のどこかで貴信と幸せに暮らしている花鈴に対して嫌だという想いを抱いている事を公望はまだ気づかなかった。いや、気づいてはいたのだろうが心が本能的に無理やりその想いを消し去ろうとしているのだ。

「わしは・・・何を・・・考えておるのか・・・」

ポツリと呟くと何もかもを忘れるかの如くタバコを口にくわえ火をつけた。滝の音だけが公望の変わりに叫ぶかのよう、大きな音を立てて流れ落ちていた。

どよめいちゃったり？

「こら！公望！仕事はどうした仕事は！！！」

連絡用宝貝からやかましい大老君の声が聞こえる。

「面倒臭いんでやってません」

「面倒とはなんじゃ！最近おぬしたるんどるぞ！」

「良いじゃないですか。私がやらなくても誰かがやるでしょ？」

「阿呆！そしたら何のための十二仙じゃ！自分の役目くらいちゃんと果たさんか！！！」

「はいはい」

ぽちっと五月蠅そうに連絡を切った。机の上には処理しなければならぬ書類がうず高く積まれている。公望は別にやる気も起きず、ベッドで転がっていた。花鈴がいなくなってから、公望はずっとボーっとした毎日を過ごし昔と同じ様な生活に戻っていたのだ。竜吉の方は毎日用があるといって朝から出かけている。いつもの縁側に行く気力も無く公望はベッドに横たわり瞑想する日々を送っていた。

「最近のわしは変じゃ。どうした？何かがおかしい。前と同じ生活をしてそれを望んでいたはず・・・」

頭でずっとそのことを考える。しかし、自分の何がおかしいのか何が変わったのかが分からず答えはいつもの様に出ることは無かつ

た。

「・・・分かん！」

瞑想してもどうも心が落ち着かない公望は、今度は家の中をうろうろし始める。あっちに行ったりこっちに行ったり。その姿を見てさすがの風麒麟も不思議に思ったらしく声を掛けてきた。

「公望様いかがなされたのですか？」

「・・・のう、風麒麟。わしは昔と変わったか？」

「と、申しますと？」

「いや、今の暮らしは昔となんら変わらぬ生活をしておるはずなのに何か違和感を感じるのじゃが。わしはどこか変わったのかと思っ
てな」

「確かに今の生活は昔の公望様の生活と変わっておりません。しかしあえて言うなら、花鈴殿がいらっしゃらないことではないでしょうか？」

「うーん。しかしそれは既に予測の範囲内であったこと。弟子が独立したからといってわしに何か変化があるとは思えぬのだが」

「そのことに関しては私には解りかねます」

「うーむ」

公望はまたうろうろとし始めるがうろつくのも疲れると思い、昔

瞑想していた龍穴のある岩場に向かうことにした。

「すまぬが風麒麟。あの場所に連れて行ってくれ」

「はい」

風麒麟は公望を乗せると岩場へと向かう。着いて早々に岩場に腰掛けると胡坐をかき手を組んでまた瞑想にふけた。龍穴のおかげもあって少し思考が整っては来たものの、ある問いに対してそれはありえないと脳裏をよぎった言葉を消し去る。するとまた頭がごちゃごちゃしてくるのだった。

それからしばらくすること、公望邸に一人の訪問者が現れた。普賢である。実は今日は十二仙の定期報告会であり、何時もなら寝に來るだけの公望でも休んだ事が無かったはずなのに今日に限って出席しなかったので心配になってやってきたのだ。まあ大老君から様子を見て来いと言われたのもあるが、どちらかといえば個人的に話があった。

「おーい！公望！居るかー！」

シ~~~~ン

「あれ、おっかしいな。てっきり家にいると思ったんだけどな。そういうえば花鈴の姿も見えねえ。二人でどっかに行ったのか？」

無断で中に入っていくと扉、を開けて公望を探す。しかし人の気配すらない。ただ公望の自室の机の上にく出かけてくる>という伝言が書かれているのだけは発見した。

「んゝ。伝言が書いてあるって事は花鈴と一緒に出かけたわけでは無いんだな。っていうか、なんだゝ？この書類の山。あいつ仕事してねえのかよ。ったく花鈴は何してるってんだ。いつもならしっかり者の花鈴が公望に発破をかけて仕事させてるって言うのに。こりゃ、二人とも説教だな」

普賢は二人ともいないことを確認すると説教をするため公望を探しに行くことにした。公望の行きそうな所には大体見当がついていたからだ。さっそく霊獣の姫火信きびしんに颯爽と乗り指示を出す。

「姫火信。公望の行きそうな所は分かるよな？宴会に使ってたあの岩場か、東の岩島かどちらかだろう」

「ういっす！」

姫火信は普賢を乗せゆっくりと飛び立っていった。最初に向かったのは良く公望と飲んでいた龍穴のある岩場だった。上空から見渡すと案の定ポツリと一人座っている仙人を発見。普賢は姫火信から飛び降りると真っ逆さまにその座っている仙人の頭上に落ちていった。

「とう！」

物凄い勢いで座っていた仙人の頭を踏みつける。仙人はぐえっ！とか言いながら押しつぶされた。それくらいで死なない所が仙人の凄い所だ。

「痛いのに。誰じゃ？こういうことやるのは大方普賢辺りじゃろ」

「分かってるじゃないか」

普賢は公望に押し掛かりながら笑っている。

「重いっつうんじゃないでさっさとどかぬか」

「そいつうあできねえ相談だな。おまえ何定期報告会さぼってんだよ」

「あゝ、そういえば今日じゃったか」

「大体、お前んち見たけどなんだあの書類の山は？仕事もしてねえのかよ。とうとうすっかり者の花鈴もおまえのなまくらがうつちまったか？それとも愛想付かされて出てったのかな。はっはっは」

「・・・そうじゃ」

「は？」

「愛想つかして出て行ったのじゃよ、花鈴は」

「はぁー!？」

冗談交じりで言った普賢は予期せぬ返答に驚いた。あの花鈴が公望の元を去っていくなど到底考えられない事だったからだ。花鈴が公望に対する想いに関しては相談を受けていたし花憐からも聞いていたこともあって誰よりも知っていたつもりだったのだ。それがまさか・・・。

「嘘だろ？」

「本当じゃ。あやつは今、貴信と付き合って共に暮らしておる」

「き、貴信と付き合ってるうー!？」

さらに衝撃的な事実を聞かされて普賢は思わず公望の身体から飛び降りた。

「い、一体何があったんだ!？」

「何も無い。あやつ自身で貴信と付き合うと言ったのじゃ。ま、それなら貴信と暮らせと言ったのはわしじゃが・・・あいたたた」

ようやく重い普賢が身体から降りてくれたので元の体勢に戻しつつ蹴られた頭を撫でた。普賢はぽかーんとしている。

「どうした?何か不思議な事か？」

「いや、だってよ、花鈴は・・・え?冗談？」

「大真面目じゃ。花鈴は自分の好きな相手の事を諦めて貴信と付き合うことにしたのじゃよ。その方が良かったのかもしれん。花鈴はあまりその相手とうまくいっておらず進展も無い様じゃったからな。叶わぬ夢を追いかけるより近くの現実じゃろ。女の子にとって貴信の様な良い男に言い寄られるのも嬉しいものじゃろうし。ま、性格に難がある気はするが花鈴はしっかりしておるゆえ貴信も自ずと花鈴だけを見るようになるのではないか」

「お、おまえはなんとも想わないのか？」

「?何を想うのじゃ?花鈴が幸せならそれで良いと想ってはおるが」

「・・・・・・・・」

「なんじゃその訝しげな表情は？」

「と、とにかく事情は分かった。それでおまえ仕事に身が入らなくなっただけのことか」

「いや、そういうわけでは・・・」

「いや現にそうだろう。あー、悪い。俺ちょっと用事思い出したから行くな」

「うむ」

普賢は慌てて姫火信に乗り、飛び去っていった。

「何しに来たんじゃ？」

普賢の行動に意味が分からないまま公望は普賢の飛び去って行った方を見ていたが姿が見えなくなった頃、また瞑想にふけりだした。

「大変だぞ！」

「どうなされたのです？ 普賢様」

自分の家に帰った普賢は入るなり大声で叫び、その声に反応して共に暮らすようになった花憐がやってきた。

「大変なんだ花憐！ 花鈴が花鈴が！」

「落ち着いてください。花鈴がどうしたのでしょうか？」

「いや参ったな！ちょっと妖仁や大乙も呼んで緊急集会開かないと！」

「ですから、花鈴がどうしたのでしょうか？」

至極慌てている普賢をなだめつつ花憐はあくまで穏やかに聞いている。しかし次の一言でその穏やかさも吹っ飛んだ。

「花鈴が公望を捨てて貴信と付き合ってるんだ！」

「えー！本当ですか！？」

「たった今、公望から直に聞いてきたんだ。間違いない！」

「そ、そんな！あの子に限って心を曲げる事など無いはずです！一途で純粹で、熱く堅い揺るがぬ心を持っているあの子が自分の想いを変えるなんて……！」

「だから大変だといっているんだ！」

「それが事実だったら私、どうしましょう。そんな心変わりする妹なんて生まれて初めて聞きましたわ。今まで散々普賢様方にご相談してご迷惑をかけているというのに、なんとお詫びしてよいか」

「いや、そんなことは気にする事じゃないけど。なんでまた心変わリなんかしたのが凄く気になるな」

「確かに」

しばし唸る二人。自分たちの知っている花鈴はとても強い意思を持っていて負けず嫌いで頑固者。一度決めたことは死んでも変えない揺るがぬ強い心の持ち主であると認識していたのに、何故？

「とにかく妖仁達を呼ぶか？」

「いえそれより、直に本人に聞いたほうが早いと思います」

「そ、そうだな。良し！貴信に連絡してみよう」

普賢は宝貝を取り出すと震える手で貴信と連絡を取った。

「あ、貴信か？俺だ」

「普賢？どうした？」

「お、おまえ花鈴と付き合ってるって本当か？」

「ああ、そうだけど」

「ちょっと花鈴と話がしたいからよ。俺の家まで来させてくれないか？」

「いいぜ。ちょっと待ってな。花鈴ちゃん！普賢が家に来いって行ってるけど、どうする？」

「……………」

「分かった。お、すまんすまん、来客中だったもんでさ。今から行くってよ」

「そうか。じゃあ、待ってるから」

普賢は連絡を切った。しばし呆然とする。

「やっぱり本当だったんだな・・・」

「あの子、何を考えてるのかしら・・・」

花憐も実の妹の考えが分からなくなり、はあ〜と溜め息をついた。

公望、暗いんです・・・

「貴方、一体何を考えてるの？」

「え、何って？」

「公望の事だよ」

「・・・・・・・・」

普賢邸に呼ばれ椅子に腰掛けた花鈴は早速普賢と花憐に囲まれ尋問を受けた。

「なんでまた貴信なんかと付き合うことになったんだ？あれだけお師様お師様と公望の事しか考えていなかったお前がどうして突然心変わりなんてしたんだって聞いてんだ」

「・・・・・・・・」

「花鈴、貴方そんな簡単に自分の想いを変える子じゃないでしょ？決めたことは絶対何があっても遣り通すって子だったのになんてまた・・・」

「・・・・・・・・」

だんまりを決め込んでいる花鈴に浴びせるがの如く普賢と花憐は質問をしていく。しかしその質問に対し、花鈴は機嫌を悪くしているようである。公望の事を触れられるとどうも気に喰わないらしく顔がきつくなっているといった。

「私、正直ショックよ。貴方がそんな子だったなんて思いもしなかったわ。貴方の勝手な想いにいったいどれだけの人が相談に乗って協力したと思っているの？ここにいる普賢様だつてずっと貴方の事を気にかけて何とか想いを叶えてやろうと十二仙の仕事が忙しいにもかかわらず、合間を見て尽力してくださっていたというのに・・・。私申し訳なくて申し訳なくて、姉として恥ずかしいやら悲しいやらなんとお詫びして良いか分からないくらいなのよ。そのこと分かっているの？」

「貴信様と付き合ったら悪いの！？」

花憐の説教じみた発言に花鈴はどうとう怒り出した。

「いや、悪いとは言って無いけど何で心変わりしたかって聞いているんだ」

「別に良いじゃないですか！私が誰と付き合おうと！それは確かに普賢様方にはご迷惑をかけたかもしれないけど、恋愛はどうしようと私の自由でしょ！」

「それはもちろんの事よ。別に貴方が貴信様や他の誰かと付き合ってもそれは誰も文句は言えないわ。でも、今回は例外よ。私達の中で貴方に対する価値観というものが分からなくなってきているし、あれだけ公望様の事では相談していたのにいきなり何の話も無く貴信様に移るなんて信じられないと言っているの。一体何があったのかまず話してくれないかしら？」

怒った花鈴に対しあくまで平然と対応する花憐。やはり双子といっても花憐の方が大人びている。普賢と付き合うようになってから

その大人びた感じがよりいっそう引き立てられた感じがあった。しかしそんな花憐の言葉も今の花鈴には逆効果である。花鈴の中では公望の話は禁句になっていたところもあったが、元々負けず嫌いな花鈴は今の状況に意固地になってしまっているようである。

「そんなことまでお姉様達に話すことじゃないじゃない！私が決めたんだからそれはそれでいいの！とにかくもうお師様の話するの止めてくれない！！！」

「なんだなんだ？焼けに熱くなってるな。そんなに公望は花鈴に対して悪い事でもしたのか？それならそれで良いんだけどよ。俺の方からしっかり説教しとくから。でも、さすがに公望が花鈴に対して何をしたのが分からない事には俺からも何にもいえないぞ？あいつも別にお前に何か悪い事したとか思っていないみたいだし」

「それならそれでお師様にとって私はその程度の存在だったって事なんです！もう！ほっといってください！！！」

花鈴は立ち上がって出て行こうとする。そこに普賢と花憐がそれぞれ最後の言葉をかけた。

「花鈴、貴方今貴信様と付き合って幸せ？」

「幸せよ！すっごくね！」

「それなら別に良いぞ。あゝ、全然関係ない話だけどそういうえば公望の奴落ち込んだな。口には出しては無いけど態度であいつ直ぐ分かる。あいつ仕事も最近してないし元氣も無いしずっと瞑想にふけててよ。何が原因でそうなったのかね？花憐分かるか？」

「さあ、公望様のお考えは私には分かりませんわ」

「おっと悪いな。全然関係ない話しちまって引き止めちゃった。お前が今幸せだって言うならそれで俺達は満足だ。今後も貴信と幸せになってくれ。わざわざ呼び出してすまなかった」

普賢の最後の言葉に立ち去るのを止めて耳を傾けていた花鈴に普賢はもう良いといった感じに手を振り帰る様に促した。しかし花鈴は、帰ろうとしない。

「あの、普賢様。お師様が落ち込んでらっしゃるって本当ですか？」

「ん？本当だ。落ち込んで仕事もしないから書類の整理がつかん！と大老君様も怒鳴ってらしたし、定期会議にも初めて出席しなかったしな。ま、今の花鈴にはどうでも良い話だろ？公望が落ち込んで様が病気になるうが死のうがお前には関係の無い話だ。その事は十二仙のまとめ役である俺の仕事だからな」

「・・・・・・・・」

「あら、何をしているの？さっさと帰りなさいよ。貴信様が待ってらっしゃるわ。私達の用件は済んだし貴方の結論も聞けたし、何より貴方が幸せだって言うなら私達は貴方の言うとおり文句も何も言えないんだから。ま、私としてもとりあえず花鈴が誰かと付き合っ
て落ち着いてくれたのは安心したわ。しかも相手が貴信様ならなおの事。公望様には悪いけど、公望様なんかより数倍、いえ数百倍貴信様は素敵な方ですもの。公望様と比べるだけ貴信様には失礼だわ」

花憐は珍しく公望に対するけなしを始めた。それに併せて普賢も公望をけなし始める。

「確かにそれは言えてるな。公望は仙人の中でも屑の分類に入るからよ。俺も実は思ってたんだよな。なんであいつみたいなお駄目！仙人で、屑！な奴が十二仙なんかに選ばれたのか不思議だと思ってたんだ。いや、そもそも仙人になれたこと事態が不思議でしょうがない。所詮たまたま仙骨を持っていて、偶然に運が良く大老君様の弟子になれただけの男。実力も無ければ、仕事も出来ない馬鹿だ。落ちこぼれも良いところ。そんなあいつが弟子を持つこと自体おかしい事だったんだよ。その点貴信は仕事はできるしまじめだし優しいし、まあちよつと女癖が悪いけどそれを抜かせば正に十二仙の摂政に選ばれて当然の男だしな。本当になんで公望なんかが十二仙にいるのやら。あいつの存在自体が仙人界を駄目にするぞ。いっそのこと仙人界から排除するよう大老君様に進言するか？」

「それは良いかもしれませんが。公望様が居ては仙人界の威厳に関わる問題になりますものね。はあ、今思えばなんで私の大切な妹をあんな人の弟子にしたのか悔やんでも悔やみきれません。あの人は他人に悪影響しか与えない正にゴミですわ。あんな人が仙人になっっていたらこれから先仙人を目指す者達も駄目になってしまいますね。そもそも公望様は・・・」

「そ、そんなことないよ！！！！」

黙って二人の公望の悪口を聞いていた花鈴は突然大声で叫んで話を遮った。

「お師様は凄い方なんだから！お師様の事何も知らないのに悪口を言わないでよ！！！！」

「あゝん？何をむきになってんだ？花鈴には関係の無い話だろ？お

まあだってそう思っているからあいつの元を去ったんだろうが。所詮あいつはその程度の男だって事だよ。師が弟子を破門するのは聞いたことあるけど弟子が師に愛想尽かすなんて聞いたことないな。それだけあいつは器の小さい奴だったのさ」

「違います！お師様の心は海よりも深く空よりも広くて誰よりも器の大きい方なんです！」

「でも、おまえは愛想尽かしたんだろ？」

「そ、それは・・・」

「論より証拠ってな。お前の行動で全部分かるんだよ。ま、おまえもあいつの事見限って正解だった。貴信と幸せにな」

「ええ、心から貴方の幸せを願っているわ」

花鈴はそれ以上は何も言えないまま二人に追い出され家を出ると、ムカムカ！としながらジュニアの背中に乗った。そんな事があってから間もなく二回目のバンド練習日がやってきて泰然、奇勝の二人と律儀にも花鈴も参加して公望の家に行く。

「あれ？竜吉様、公望の奴居ないんですか？」

「うむ。この二、三日家におらんようじゃ。何処に行ったのやら、せっかく花鈴と二人で詞を考えたというのに」

「バンドリーダーがそんなのでは困るな」

「まったくあいつ何やってんだよ！ちょっと連絡してみるわ」

泰然は宝貝を取り出すと公望に連絡を入れる。

「あ、もしもし？今何処にいるんだよ？何？そんなところにいねえでさっさと来い。今日バンド練習日だろうが・・・はあっ！？やる気しねえだ！？馬鹿かお前！皆待ってんだぞ！おまえが誘ったバンドだろうが！・・・ああ、ああ居るぞ・・・・・・おう、とにかく直ぐ来い馬鹿！」

「どうじゃった？」

「ええ、なにやら気分が乗る気がしないとか馬鹿なこと言ってましたけどとにかく来るそうですので、私達はスタジオで準備しています」

四人はそのままスタジオに入り準備を始め、公望が来るまでとりあえずメロディ合わせと詞を聞くために練習を始めた。それから小一時間程して公望が入ってくる。

「すまぬ遅くなった」

「遅いぞ！ほらさっさと叩いてくれよ！ボーカルが入って良い感じなんだから。それに新しい曲も作ってきたんだぞ」

泰然に急かされ直ぐに公望はドラムセットの椅子に座って練習に参加したがその間一切花鈴の方を見ていない。その後も練習は進むが公望は一度足りとも花鈴を見ようとせず、ドラムだけに専念した。しかし前の練習と少し違っている。

「おい公望」

奇勝が曲を止め公望に話しかけた。

「おまえ、今日どうした？全然身が入っていないって言うか、音が単調で前みたいなさくさくする様なドラム叩いて無いぞ。俺のベースにもあつて無いし何より心に響かない」

「ん？そうか？わしはいつも通りに叩いているつもりじゃが・・・」

「いや確におかしい。練習していても楽しくも無ければ違和感ばかりがあるそんなドラムだ。そんなドラム叩かれたらこっちがやる気を無くしてしまう。ドラムはバンドで柱となる存在。お前がしっかりしてくれなかったら曲になら無いだろ？」

「すまぬ。もう一度頼む」

トーンの低い声の公望の頼みに奇勝は険しい顔をしながら公望のリズムに合わせて一曲を弾き始めるが、奇勝はやはり途中でベースを弾くのを止めアンプからシールドを抜くとベースを片付け始めた。

「どうした奇勝？」

「泰然、悪いが今日の練習は俺止める。公望がこんな音のドラム叩いてるようだったら練習するだけ無駄だ」

「そうか・・・」

「公望、お前何を悩んでいるか知らないが音楽をやるときはちゃんと割り切れ。音は正直だ。自分の心を素直に投影する。もし割り切れないなら悩みを解決しろ。それが出来ないですつとこの調子なら

俺はこのバンドから抜けるからな。やっていてもおもしろくない」

「・・・・・・・・」

奇勝は片づけを終わるとさっさとスタジオを出て帰っていった。泰然もどうしようかと思ったが、確かに奇勝の言うとおりやっついて違和感を感じていたので仕方なく帰ることにした。

「せっかく竜吉様と花鈴のボーカルが入って良い感じだったのにな。あゝあ、公望が入ってから変になっちゃった。奇勝は音楽に関しては抜けて感性が高いから、心に靄があると一発で分かっちゃうぞ？奇勝の言うように何を悩んでるのか知らねえけど、来週までにさっさと片つけろ。頼むぜ公望」

「・・・すまぬ」

泰然もスタジオを出て行き、公望も立ち上がるとスタジオを出て行った。竜吉と花鈴も続けて出て行き先に外に出ていた公望はただぼーっと池を見つめている。その後ろを花鈴も帰ろうと通り過ぎようとした時、公望が一声かけた。

「のう花鈴」

「はい！」

花鈴は何かを期待した感じで返事をする。

「そなた、今貴信と居て幸せか？」

「え？・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・そうか。なら・・・良い」

公望はそのまま花鈴を一度も見ないまま自室へと向かい入った。その後姿を竜吉と花鈴が見つめる。

「花鈴」

「何です竜吉様？」

「そちは素直になった方が良いと思うぞ。わらわはあれからずっとそちの所に行き作詞作業をしていたため、公の状態は分からぬかったがそちが出て行ってから公はずっとあんな感じじゃ。わらわが居なくなってもあんな風になってくれるのかの。正直そちが羨ましい」

「・・・・・・・・」

花鈴は無言のまま寂しそうな、でも何処か嬉しそうな表情を浮かべるとジュニアの背に乗り公望の家を出て行った。

花鈴の任務

「花鈴、おぬしに特例として任務を言い渡す」

ある日大老君に呼ばれた花鈴は突然の命令がくだされた。任務の内容は人間界の文の国に降り立ち不穏な動きのある者を探し出し、あわよくば捕まえるというものだった。最近文の国では世代交代をし新たな若い皇帝に代わったらしいのだが、それをよくないと思っている反対派の輩が内部に居るらしくその探りを入れて欲しいらしい。

「何故道士の身分である私の様な者がそんな人間界に関与すると言う重大な任務を下されるのですか？」

「おぬしが公望の弟子じゃからじゃ。本来ならこの任務は公望に任せるはずじゃった。それがあやつめ、何があったか知らぬが落ち込んでめつきり仕事を拒否するようになった。何を言っても耳を貸さうとせん。それで、公望とともにかつて文の国造りに携わった事が有り人間界に詳しいおぬしにこの任務を与える事にしたのじゃ。なに、内容は至って簡単じゃ。おぬしでも直ぐに解決してこれるようなものじゃしな。それにこの任をもって仙人試験の代用として思うっておる」

「仙人試験の代用？」

「つまり、本来なら仙人試験は龍を生け捕りにすることが内容じゃが、今回が特例として任を与えている以上仙人試験も特例として変更し、今回の任務を解決したら仙人として認めるということじゃ」

「は、はあ」

余り気乗りのしない花鈴。しかし大老君からの直々の命令である以上背く訳にはいかない。仕方なく任務を遂行する事となった。ただ、大老君もさすがに一人でやらせるのも不安だったらしく仙人試験の審査委員も兼ねて竜吉とともに連れて行かせるとのことだった。

「竜吉様にとって人間界の空気は毒ですよ？一緒に行って貰って大丈夫なんですか？」

「問題は無かろう。先にも言ったが至極簡単な任務。数日と掛からぬ内に解決できるじゃろ。そんな短い期間なら竜吉にとってもさして負担にはなるまい」

大老君は事の次第を説明するため竜吉を呼んだ。話を聞いた竜吉は快く承諾し二人は直ぐに人間界文の国へと降り立つ事になったのである。早速文の国の入り口に降り立った二人はジュニアに隠れているように頼むと町の中に入っていく。

「で、花鈴。不穏な動きを探れと言う事じゃがどうするつもりじゃ？」

「とりあえず城に行つて内部に潜入しようと思います。ただ、不穏者を探すとすると長く城に滞在しなければなりません。そうなるとそれなりの身分が必要になってきますが今は情報が足りません。町で情報収集しましょう」

「うむ」

二人は町にとりあえずその辺の人に話を聞いて見た。

「この国は良い国だよ。前皇帝の仏貴様が必死に尽力なさったことによって町はすこぶる活気付いた。仏貴様は民の事を一番に考えて下さっていたからね」

「へー、それで今の皇帝様はどうなんですか？」

「神貴様の事かい？そりゃ素晴らしいお方さ。仏貴様と桐生様の息子様なんだが、お二方の良い所を受け継いでたった十歳と言う若さで今の文の国をさらに良い国にしてくれているんだからね。神貴様も仏貴様に負けないほどあたし達民の事を十分に考えた治世を行ってくれているのさ」

「神貴様か……。あの神貴様は一体どういうことが好きとか分かりますか？」

「それりゃあ、町を見たら分からないのかい？ところどころ絵だとか焼き物だとか楽器だとかいろいろな芸術的なものが売られていたり置いてあったりしてるでしょ？神貴様は芸術に力を注いでらっしゃるのさ。芸術は心を豊かにすると言ってね。こと音楽には目が無いのさ」

「そうですか、ありがとうございました」

「で、どうだい？あんた達旅人かなんかだろう？良かったら文の国特選のこの虎の絵、安く売ってあげるよ！」

「あ、いえ私達お金持ってないんで」

「なんだい冷やかしかい。ま、お金が出来たら是非うちの店でお土

産でも買っていった」

「は、はい。それじゃあ」

二人はそそくさとその場を後にした。

「芸術、音楽かあ」

「どうした花鈴？」

「いえ、これで自分達の身分を決めることは出来たんですけど問題はどうやって内部に入り込むか。そもそもその不穩者がいるかどうかを確認しないと」

しばし頭を悩ますことあることを思いついた花鈴はある場所に向かうことにした。向かった先は秀英会。そう昔公望とともに立ち上げた塾だ。この塾は城内部の人間と深い交流がある。もしかしたら城内の状況を詳しく聞けるかもしれないと花鈴は思ったのだ。二人はしばらく歩く事秀英会の前に来た。

「ここに何か手がかりがあるのか？」

「うーん。分かりませんが、ここは昔お師様と作った塾なんです。もしかしたら城に勤めている人が居るかもしれません。ごめんくださいーい！」

「どなたですか？」

中から若い男がやってきた。

「すみません。私達旅の者なんですけど、ちょっとお城について知りたい事があってこの塾にやってきたのですが」

その男は不審そうに花鈴達を見ている。

「この塾は将来この国を背負って立つ者達の集まる場所。あなた方のような旅人が来る所ではありません。城の事もおいそれと話すことはできません」

「そこをなんとか」

「お帰りください」

男は一方的に帰れと言い相手にもしようとしない。花鈴はなんとか食い下がるがそれでも男は帰れと言うだけ。そんな折外の騒がしいのが聞こえていたのだろう。塾の中からもう一人女性が出てきた。年は三十歳くらいか？落ち着いた感じの雰囲気を出している女性である。

「どうしたのです。賽？」

「いえ、先生。なにやら怪しげな旅人が城の事を教えろとか言ってます」

「旅人？あ、あら、もしかしておねーちゃんじゃない!？」

「え、おねーちゃんって・・・まさかあなた嬢娘!？」

「そう！お久しぶりおねーちゃん！お逢いしたかった」

「先生。お知り合いですか？」

「ええ、あなたはもう中に戻りなさい。この方達とは私が話をするわ」

「分かりました」

賽は娘娘に言われ中に入っていく。

「いえ、本当にお久しぶりだよ。また逢えるなんて思っても見なかった」

「私もよ。あの娘娘がこんなにも立派に成長して」

「公望先生は来て無いんですか？」

「え、ええ。ちょっとお師様は事情があって」

「そうですか。お逢いしたかったのに。あ、こんなところで立ち話もなんだから中にどうぞ」

二人は娘娘に促されて二人は塾のある一室に通された。そこは昔公望と三人で食事をしていた部屋だ。昔と何一つ変わっていない。

「懐かしい。何も変わってないのね」

「ええ、ここは思い出の場所だから。ところでおねーちゃん、今日はまた何の用で来たの？確か仙人は人間界に来てはならないと言う話ではなかったっけ？それになにやら城の事を知りたいとか」

「ええ、実は」

花鈴は娘娘に人間界に來たいきさつを説明した。そして城内部で何か問題が起こっていないか、不穏な動きをするものが居ないかを聞いてみる。幸いにして娘娘は桐生に引き取られて以来城の内部で生活していたため詳しく、現在神貴の世話役もやっているとこの事で情報を得るには持って来いだった。しかし、話の中でこれと言って問題のある発言は出てきていない。

「私の知る限りでは、仏貴様の甥っ子に当たり現在の宰相をなさっている静功殿が王位継承のときにもめたと言う事くらいで、それ以外で何か不穏者が入るなんて話聞いたこと無いよ。その静功殿だって今は神貴様の良き右腕として活躍してるし」

「そう。そうなるとやっぱり城内部に潜入しないと駄目か。ねえ、娘娘。私達を何とか神貴様お抱えの宮廷音楽師にしてもらえないかしら」

花鈴は、神貴が芸術、特に音楽に興味を持っていると聞きこちらに竜吉が居る事を考慮して音楽師としての身分でいこうと考えていたのだ。

「うーん。おねーちゃんの頼みだもんね。うん！任せといて！」

「ありがとう！」

「じゃあ、おねーちゃん。今日はゆっくり休んでいてよ。おねーちゃんと私久しぶりに話がしたいな。公望先生の事も聞きたいし」

「良いわよ」

こうしてその日はゆっくりと懐かしい思い出話をしながら塾で休んでいく事にした。

次の日、宮廷に連れて行かれた花鈴達は神貴の前で頭を下げていた。

「娘娘。この者達か？おまえが私のお抱えの音楽師にしたい者とは」

「はい。この者達は私の知り合いで遠い遠方の国よりわざわざ神貴様が音楽がお好きと聞きつけやってきてくれたのです」

「ほう。お前達。頭を上げよ」

「はい」

二人は顔を上げた。二人の容姿を見て周りの兵達が思わず溜め息をつく。特に竜吉の方に釘付けになっているようだ。

「私のお抱えの音楽師は既に存在する。その者達よりも素晴らしい音楽を奏でると言うなら音楽師として召抱えてやろう。しかしなんだ？お前達楽器を持っていないではないか。どうやって音楽を奏でると言う？」

「はい。私共は楽器を奏でるのではなく歌によって神貴様のお気持ちに安らぎを与えたいと思います」

「ふむ、歌とな。おもしろい。では一曲歌ってもらおうか」

「分かりました」

竜吉と花鈴は顔を見合わせると一緒に歌を唄い始めた。背筋が思わずゾクツとするような美しい声。その場に居た誰もが余りの美しいその声に聞き惚れ、それぞれの仕事を忘れ耳を傾けていた。二人は一曲唄い終わると頭を下げる。

「おお！なんと素晴らしい声か。この世にこのような歌声を持つものがおったとは！近頃身体の調子が悪く気がめいていたが、今の声でかなり癒されたぞ」

神貴も二人の歌声には絶賛し、有無を言わず召抱える事にした。

「ありがとうございます」

唄い終わった後、時を同じくしてこの場にもう一人の来客が来た。

「閣下！」

「うん？どうした？」

「はい。なにやら閣下にお目通りをしたいと申し出ている者が居るのですがいかが致しますか？」

「うむ。よからう。今の歌声でいささか元気が出てきた。普段なら通さぬ所だが気分が良いゆえ通せ」

「はっ！」

神貴の命に従い兵が一人の女性を連れてくる。その女性は着物を着て頭にかんざしを挿し、舞子さんのような格好をしていた。その

姿にまたその場に居た兵士達全員が感嘆の息を吐く。そう、誰もが思わず溜め息をつくほどにその女性は美しかった。竜吉と同等、いや、かもし出している雰囲気が独特で、もしかしたらそれ以上の美しさを持っているかもしれない。その女性は優雅に神貴の前で頭を下げた。花鈴も思わず見惚れ竜吉に声を掛ける。

「うわー、綺麗な人ですね。竜吉様」

「うむ。わらわ以上かもしれん」

「この度お目通りを賜りまして光栄にございます」

「おまえは何者だ？」

「はい、私は遠い東の果ての日本と言う国より参った医者でございます。神貴様のご容態が余り芳しく無いとの噂を聞き私が力になれぬかと思ひやってきた次第でございます」

「医者とな」

「はい。私の私見で申し上げますと、こうして直に神貴様とお逢いしてみてやはりお体の調子がよろしく無いように思われます。少々、診察させていただきませんか？」

「う、うむ。確かに最近身体の調子が良くない。お抱えの医者に見せても一向によくなる気配は無かった。よし、試しに診てみる」

「では、失礼します」

その女性はゆっくりと神貴の元に歩み寄ると、脈を図ったり心臓

に手を当てたりと診察してみる。

「どうだ？」

「はい。神貴様のお体はどうやら肝の臓がかなり弱ってきているようです。それに心臓の鼓動も遅く力がありません。疲れもかなり溜まっているように思われます。試しにこの錠剤を飲んでみてくださいませ。滋養強壮と肝の臓の働きを活発にし身体の毒素を排出する薬です。それとこちらの粉薬は不安を解消し元氣の出るお薬です」

神貴は渡された二つの薬を受け取る。しかし飲もうとはしない。皇帝と言う座に居る以上命が狙われる事もある。もしかしたらこの薬は毒かもしれない。そういう警戒心があり飲むのをためらっているのだ。

「大丈夫です。毒ではありません。私が試しに飲んでみましょう」

その女性は同じ薬をその場で飲み、薬が安全だと言う事を証明した。それを見ていた神貴は意を決して飲んでみる。するとどうだろう。身体のだるいのが取れ、もやもやしていた頭がすっきりし元氣が出てきた。

「おお！久しぶりの爽快感だ。これが日本と言う国の薬か。凄いな」

「神貴様、もしよろしければしばらくの間私を召抱えていただけませんか？そのためにわざわざ遠い日本からやってきたのです」

「うむ！氣に入った！おまえも召抱える事にする。お前名をなんという？」

「桜と申します」

「桜か。これから余のためその持てる医学の知識を発揮してくれ」

「はい」

「では、娘娘。花鈴と竜吉と桜を部屋に案内してくれ。私は久しぶりにやる気が出てきた。溜まっていた仕事をこなす」

「分かりました。では皆様こちらへ」

娘娘に促されて三人は城のある一室に通された。部屋は広く途中で半分に仕切れる扉がついている。一室で二部屋分を兼ねている様だ。

「おねーちゃん達はこちらの部屋を使って。桜さんはこちらのお部屋をお使いください」

「分かりました」

「娘娘、ありがとうね」

「いえいえ。では私は仕事があるから何か用があったらいつでも呼んでね」

「うん」

娘娘は部屋を出て行き、桜もまた促された部屋の方に向かっていった。花鈴は今後の事を考える。

「さてと潜入はできた。後は不穏者を探すだけなんだけど、でも入った感じそんなに不穏な動きがあるように思えないんだけどな」

「そうじゃな、至って平和な国のように思える」

「うーん。とりあえず私、神貴様の様子を伺っていますね。竜吉様は休んでいてください」

「相分かった」

花鈴は外に出て神貴の書斎に向かう。場所は娘娘から聞いていたので直ぐに分かった。そっと外からばれない様に神貴の様子を伺う。傍に娘娘の他、男が立っていた。どうやらあれが静功らしい。静功は必死に神貴の仕事の手伝いをしている。花鈴はずっとその様子を見ていた。

花鈴、仙人になっちゃった

「どうじゃ花鈴。変わったことはあったか？」

しばらく様子を見ていた花鈴の下に竜吉が心配そうにやってきた。花鈴は無言のまま頭を振る。

「わらわも少し城の中を歩いてみたのじゃが、やはり至って平穩な場所じゃ。何か不穩な動きがあるような気配すらない。大老君め。本当に不穩者がおるのか？花鈴の実力を試しているだけではなからうな」

「それは分かりません。とりあえずまだ着いたばかりですし、もう少し様子を見てみないことには……。少なくとも城の他のところで不穩な動きは無いんですよね」

「わらわの初見ではの」

「となるとやっぱり神貴様の身近に何かが起こる可能性があるって事ですよね。うーん、でも見たところ何にも変わらないし……」

「お二方をなさってらっしゃいますの？」

突然後ろから声を掛けられて二人はびっくりする。振り返るとそこには気配も無く近寄ってきていた桜が居た。竜吉がその気配の無さに少し不信感を抱く。

「あ、桜さんですか。もう驚かさないでくださいよ」

「あら、別に私驚かすつもりは無かったですけど」

「その割にはそちは気配を消して動くのじゃな」

「気配？私は普通に歩いてきただけですよ」

コロコロと口元を押さえながら笑っている。本当に動きといい容姿といい綺麗な人だと花鈴は思った。桜はさらに何をしているのかと聞いてくる。その問いに正直に言えるはずも無い花鈴はしどろもどろになり何とか話をごまかそうとする。

「い、いえ。私こういう城って初めてで、えーっと、神貴様達がどのような仕事をなさっているのかなと思って。ほ、ほら、町では皆神貴様は凄い人だと褒め称えていたので、わ、私も興味が湧いたんです。だからこうして邪魔にならない様に影からそっと仕事を見させてもらっているんです」

「あら、そう。だったら私も見させていただいてもよろしいかしら？確かに神貴様の手腕については日本にも伝わっていたわ。噂どおりのお方か私も見てみたい。一緒に見ても良いかしら？」

「え、ええどうぞ」

こうして桜も花鈴の傍により神貴の仕事の風景を眺め始めた。神貴は至って快調に仕事をこなしていて、静功も真剣な表情をしながら神貴にアドバイスをしていた。そんなおり神貴が疲れたといって休息に入る。そこへすかさず静功が水を持ってきた。

「閣下。調子が良いからといって余り真剣に根詰められると身体に良くないですよ。さ、お水でも飲んで休んでください」

「ああ、いつもすまぬ」

神貴は渡された水を何気なく飲んでいゐる。その水を桜はじつと見つめていた。それからしばらくして神貴はまた仕事を始めようとしたがなにやら首を回している。

「うーむ。さっきまであんなにやる気があったのに一度休息を取ったらやる気が失せてしまったようだ。身体が気だるいし少々疲れたのかもしれない。今日はこの辺にしておこう」

「それが宜しいかと」

「うむ。そういえば静功、娘娘。そろそろ夕食の時間だが今日来た花鈴、竜吉、桜を同席させたいと思うのだが良いか？ いろいろ話を聞いてみたい」

「閣下の御心のままに」

「うむ。では娘娘、花鈴達を呼んできてくれ。私は先に食事の席に行く」

「分かりました」

神貴は立ち上がると部屋を出ようとした。それを見ていた花鈴達は慌てて自分達の部屋に戻る。戻って直ぐに娘娘が呼びに来た。

「おねーちゃん。神貴様と一緒にお食事をしたいと仰ってますけどどうする？」

「私は良いわよ。ね、竜吉様」

「うむ」

「桜さんもご一緒にどうぞとの事ですが」

「あら、私も呼んでくださるのですか？ 光栄ですわ」

「ではこちらにどうぞ」

三人は娘娘に連れられて食事の間へと向かう。部屋の正面に豪華なつくりの椅子と机がありその後ろには虎と月の屏風が描かれている。その席に神貴は座っていた。その前の両側を各自の机が並べられている。入って右手に静功が座っており空いていた左手に娘娘が座る。その隣に花鈴と竜吉が座り、静功の隣に桜が座った。

「神貴様。この度はお食事にお招きいただきまして恐悦至極に存じ上げます」

桜が軽くお辞儀をした。

「うむ、私もお前達と少し話がしたくてな。特に桜。お前の来た日本と言う国の事を知りたい」

「私の知る限りでよかったですらお話いたします」

「うむ。まあ話は食べながら追々聞くことにしよう。これ持って参れ」

神貴が手を叩くと女官達が料理を運んできた。色取り取りの豪華

な食事である。その中にはもちろん生臭物、つまり豚とか牛とかの肉料理も入っていた。

「さあ、遠慮せずに食べてくれ」

「神貴様すみませんが、ここにいる花鈴さんと竜吉さんは宗教の関係上こういった生臭物を食べることは出来ません。折角のお料理ですが、その辺を承知してください」

進めていた神貴の言葉にどうしようかと悩んでいた花鈴達に娘が気を使って助け舟を出した。

「ん？ そうなのか？ それは知らなかった。では、好きな物、食べれるものだけを食べてくれ」

「ありがとうございます」

「神貴様、申し訳ありませんが私もこういった生き物を料理した食事は食べる事ができません」

桜も申し訳なさそうに断った。

「何故だ桜？」

「私は医者です。命を救う事を職業にしています。それなのに命を奪い生きるためとはいえ食すると言う事は医者として矛盾していると考えているからです。なにとぞその辺をご理解していただきますようお願いいたします」

「そうか。桜は正に医者 of 鑑だな。私もそういう生き方を学ばなけ

ればならない。命とは確かに大切なものだ」

「その通りです。日本の諺で一寸の虫にも五分の魂という言葉があります。どんな小さな虫にもすべからく生きる誇りを持っているという意味です。彼らだって生きるために誇りを持って生きているのです。それを奪ったのですから神貴様も私達のために犠牲となったこの動物達に敬意を評してありがたいといたदैてくだされば、この者達も生きた甲斐があり救われると思います」

「一寸の虫にも五分の魂か。良い諺だな。うむ分かったぞ。普段何気なく食べていたがこれからは感謝しながら食べる事にしよう」

「良い心がけだと思います」

こうして皆食事を始めた。もちろん神貴が料理に箸をつけるまでの間は誰一人として料理に箸を伸ばさない。神貴に敬意を払っているからだ。神貴が食べ初めてから花鈴達も箸を伸ばす。

「それで、桜よ。日本とはどんな国だ？」

「美しい国ですよ。地殻変動で四季というものがなくなり変わってしまいましたが、代表的な花の桜は咲き乱れ木は紅葉し、富士山と言う山は雄大に靈験あらたかに聳え立っている良い国です。地殻変動と戦争以来医療に力を入れてまして、その発展が目まぐるしくあります」

「ほう、桜とな。お前と同じ名だな。どんな花か見てみたいものだ」

「それなら私写真をいくつか持ってまいりましたので、宜しければ献上いたしますよ」

「写真？」

「ええ、風景を写し取り紙に投射したものです。見ればお分かりになりますわ」

そう言って懷から写真を何枚か取り出し神貴に見せた。

「これが桜の花です。こちらが夕富士ですわ」

「おお！なんと美しい。これが日本の国の光景なのか？」

「ええ」

「ほお」

感嘆の息を吐きながら神貴は写真を何枚もめくっていく。

「献上すると言ったが貰っても良いものなのか？」

「ええ、もちろんですわ。そのために持ってきた物ですから」

「ありがとうございます。心洗われる思いだ。私もこの様な美しい国にこの国をしたい。うむ。時に桜よ、この日本の国から来たお前から見て今の文の国はどう思う？」

「良い国だと思います。民は活気付き、貧困にあえぐ者達も少ない。民を見ていればそれだけでこの国の良さが分かります」

「そうか、そう言ってもらえると嬉しい」

「ただ、それは私の認識でしかありません。もしかしたら良い国ではないのかもしれませんが」

「? ということだ?」

「世界と言うものは認識によって生まれているということです。次元空間上には存在しますが私達人間が認識して初めてそれが具現化されているということです。ですから仮に私達が世界を認識していなかったらそれはそこに存在しないと言う事を指します。認識していてももしかしたらそれは現実ではなく仮想現実である可能性も同時に秘めているとも言えますね」

「・・・難しい話だな」

「簡単に言えば、ここにある皿。これは私達は料理を盛りつけるための道具として認識しているため皿として名づけられ役割を果たします。しかし、もし皿の存在を知らない人がこれを認識していなかったらどうなると思います?」

「・・・分かんない」

「まず人は見ることによってその物体を認知します。それによりこの皿というものは次元空間上から具現化されます。しかし、皿の存在を知ったからと言って認知していなかったら、それは皿としてではなくもしかしたら投げるものかもしれないただの置物かもしれない。何かを書くための紙の代用品になるかもしれないということです。つまり皿を皿として認知しているから皿はここにあり役目を果たしている事になるのです。そこまではお分かりですよ?」

「うむ。なんとなく」

「ですから、私が良い国だと思ったから良い国であるとその世界の一つとして認識されたということです。他の人から見たらそれは違うかもしれません」

「何が言いたいのだ？」

「要するに、神貴様が皇帝でいらっしゃるのには民が神貴様を皇帝として認識しているからなりえている話であり、その認識が消えれば神貴様はただの人。最悪一つの物体としてしかこの世に存在しないと言う事です。今は民が皆神貴様を慕っているから皇帝の座についていらっしゃるのですがそれは危うい存在であるということを常に頭において置いてください。そうすれば自ずと自分が民に対してなにをすれば良いかということが判ってくるかと思われます。神貴様が良い国にしようという願いと行動によっても認識は変わりますから。良いですか？」

「なるほど、つまりは私の心次第と言う事か」

「そういうことです」

「うむ。勉強になったぞ、ありがとう桜」

「閣下、食事の場でまで仕事の話をすると尚疲れてしまいますよ。さ、お水でも飲んで堅い話は止めにしましょう」

「ああ」

静功が神貴に水を進め、神貴は受け取ると一気に飲み干した。桜

はその光景を黙ってみていたが軽く会釈すると自分の席に戻り食事の続きし始める。しばらく他愛の無い話をしていたがその内神貴の表情が暗くなってきた。

「先の話でいささか疲れたようだ。すまんが花鈴達よ。気分を紛らわすため一曲唄ってくれないか？」

「かしこまりました」

花鈴と竜吉は言われたとおりに歌を唄う。神貴は目を瞑ってその声をしんみりと聞いていた。

「やはり何度聞いても良い歌声だ。心が軽くなる。ありがとう、少し楽になったので私はこのまま寝たいと思う。花鈴、竜吉、また歌を聴かせてくれ。桜もいろいろ話を聞かせてくれ」

「はい」

「はい。あ、神貴様。寝る前にこのお薬をお飲みください。昼間に渡した薬と寝つきを良くするお薬です。これからは朝と寝る前にこの渡したお薬を毎日この私の持ってきた水でお飲みください。良いですね」

「うむ。分かった」

神貴は薬と水を受け取るとその場で寝る前の薬を飲み直ぐに寝室へと向かって行った。そしてその場は皆解散。花鈴達も寝室へと向かった。

「うーん、一日見てましたけどやっぱり何も無いですね」

「そうじゃの。特に変わった感じは見受けられん」

「もしかしたら、夜になったら不穩者は動くのかもしれませんがね。夜は人がいなくなつて動きやすいと思いますから、私寝ないで探りを入れてみます」

「わらわも付き合うぞ」

「ありがとうございます」

そう言つて皆が寢静まつた頃、二人は城内を音も立てずに探つてまわつた。いろいろな部屋を見たり聞き耳を立てたりしてどんな些細な事も逃さないようにする。しかしその夜も何も無かつた。

「何も無かつたの」

「うー、そうですね」

朝方になつて部屋に戻つてきた二人は残念そうに頭を抱えていた。そこに桜が声をかけてくる。

「あら、おはようございます。お二方ともお早いですね」

「あ、桜さん」

「そちも早いではないか」

「いえ、私は早くに寝てしまったので朝早く起きただけですよ」

「わ、私達もです」

「へー、ところで気になっていたんですけど」

桜の言葉に一瞬花鈴がドキッとして鼓動が早くなる。自分達の正体がバレたか？そんな花鈴をよそに竜吉は至って平然と返した。

「なんじゃ？」

「貴方達の関係ってなんなんですか？姉妹何かですか？」

「え、そ、そうです。私達姉妹なんです。ね、竜吉おねえちゃん」

「う、うむそうじゃ」

「へー、美人姉妹と言う奴ですね。お羨ましいですわ」

聞かれた質問がそんな単純な事でとっさのこじ付けをしてみたが、どうやら桜は信じたらしくそれを見て安心した花鈴も言葉を返す。

「桜さんだって綺麗じゃないですか」

「そう言ってもらえると嬉しいですわ」

桜は本当に桜が咲き誇っているかのようなほんのりピンク色した頬を上げてにこりと笑った。

「さて、私は朝の神貴様の診察に参りますのでこれで失礼します」

桜は優雅にその場を去っていく。花鈴はその後も影から神貴の行

動を見つめ怪しい点は無いかと探っており、竜吉は城内を探っていた。あれから食事も神貴と共にとって本当に寝る時意外ずっと見張っている。しかし、努力の甲斐もむなしく何の手がかりも無いまま一週間以上が経過しようとしていた。その時さすがの竜吉にめまいが襲ってきて花鈴と神貴の様子を伺っていた竜吉はその場に倒れこむ。

「竜吉様！」

「だ、大丈夫じゃ。ちょっとめまいがしただけ」

「いけません！直ぐに部屋に戻って安静にしてください。後は私がやりますから」

花鈴に引っ張られ何とか部屋に辿り着いた竜吉はベッドの上に横になる。

「本当に一人で任せて大丈夫か？」

「大丈夫です！直ぐに解決しますので竜吉様は休んでいてください！」

「すみ・・・ぬ。わ、わらわも・・・」

「しゃべらなくて良いんで、と、とにかく私直ぐに解決してきます！」

竜吉の容態を見て焦った花鈴は勢い良く部屋を飛び出していった。それと同時に竜吉の意識が消える。そんな折隣の部屋から桜がやってきた。

「あら、竜吉さん。青い顔をしていますけど大丈夫ですか？」

声を掛けるが返事が無い。

「大変みたいです。直ぐに処置しないと」

桜はいろいろ入っている薬箱からある薬を取り出すと、意識の無い竜吉の頭を持ち上げそつと口から薬を入れ水を流し込む。なんとか竜吉は飲んでくれたようだ。その後直ぐにまた薬箱からある薬草みたいなものを取り出すと香容れの中に入れて香を焚いた。部屋に香の煙が充満する。程なくして顔色が若干良くなった竜吉が目覚めました。

「うーん。なんじゃこの匂いは」

「気がつかれましたか？ だいぶ顔色が良くなりましたね」

「そちが何かしたのか」

「ええ、薬を少々飲まさせていただきました。後この匂いの元の香を焚かせていただきました。この香は匂いはきついですが、人間界の空気を若干清めてくれるものです。しかし駄目ですよ竜吉さん。貴方のように人間界の空気で生きられない人が人間界に長く留まるようじゃ」

この桜の発言に竜吉は険しい顔をして桜を睨む。

「怪しい怪しいと思っておったが、そち何故わらわの事を知っておる？ そちも人間界の者ではないな。もしや大老君の言っていた不穩

な輩とはそちの事か？」

「あらあら、何のことを仰っているのかわかりませんが」

「とぼけるでない」

「そ、そんなに怖い顔しないでくださいませ。私は怪しい者ではありませんよ。貴方だって私の事良くご存知でしょ？」

「?・・・わらわはそちのことは知らんぞ」

「酷いですわ。共に暮らしている人の事もお忘れなんですか？」

「共に?・・・ま、まさかそち・・・!」

びっくりして大声を出そうとした竜吉の唇にそっと人差し指を立てて遮った。

「貴方は私の大切な人の一人なんですから、余り心配掛けさせないでくださいね。とりあえずこの香の焚いてある部屋の中に居れば空気による汚染は少し防げますから出ないでくださいね。私はちよつと花鈴さんの様子を見てきますので。それでは」

あくまでも優雅に桜は部屋から出て行った。残された竜吉はしばし茫然としていたが、クスツと笑いまたベッドに横になった。

「ほんに心配性じゃな。大切な人か・・・ふふふ」

竜吉は嬉しそうにこみ上げる想いのまま笑っていた。さて花鈴の方はというと、どうしようかとひたすら悩んでいた。このまま神貴

を見ていても埒が空かない気がする。もしかしたらこっちの事が相手にバレて行動を起こさないのかもしれない。しかしこれ以上人間界に滞在しているのは竜吉が死んでしまう。一度仙人界に戻るか？いや、命を下された以上途中放棄はできない。居ないうちに何か問題が起こってからでは駄目なのだ。身動きが取れない。問題が起こるなら早く起こってよと神貴をずっと見ていることしかできなかった。

「今日も神貴様の仕事の観察ですか？」

「え、あ、桜さん」

相変わらず気配の無いまま現れた桜。手に何かを持っている。

「これ、貴方に差し上げますわ」

「これは？」

「録音機です」

「録音機？」

「録音機知らないんですか？声をそのまま録音する事ができるんですけど、えーっと、説明するのが面倒なので実際やってみますね。まずこの赤いボタンを押して声を出します。・・・私の名前は桜です・・・こんな感じで、次にこの矢印が二つついているボタンを押すと、ほらカチッて音がしたでしょ？そしたら今度は逆の矢印が一つあるこのボタンを押すんです。すると」

「私の名前は桜です」

「わ！桜さんの声が出てきた！」

「これが録音機というものです。その場の声をこのテープと言うものに写し取る、いわば写真の声版みたいなものです」

「これ頂けるんですか？」

「ええ、それじゃあ頑張って観察しててください」

その場を立ち去ろうとした桜は何かを思い出したかのようにもう一度花鈴の方を向いた。

「そうそう。その録音機を持って今夜十一時に西の離れの間に行つて御覧なさい。面白い声が録音できるかもしれませんよ」

「は、はあ」

「それじゃ」

こうして桜は去っていった。花鈴はそのまま神貴の観察を続ける。しかしその日も特に変わったことは無かった。夜、何の当ても無いためとりあえず桜の言われたとおり離れの間に行ってみることにする。

「あれ？中に人が居るの？今まで居なかったのに」

明かりのついている部屋にそっと忍び足で近づく。中の声が聞こえてきた。

「どうしてまだ効かないんだ！あれだけの量を飲ませたのだぞ！お

前の話では一ヶ月もすれば死ぬと言っていたでは無いか!」

「まあ、そんなに焦らずに毒は確実に効いてますよ。実際神貴様の身体は毒に蝕まれかなり弱っている。このままいけば後数日もしないうちに・・・」

この話を聞いていた花鈴は思わず録音機を取り出しボタンを押した。

「この声って静功様の声だね。毒って何?」

「そうは言うが、変な医者が出てきたせいで最近は神貴様も元気になってきているじゃないか!」

「大丈夫、あの薬は私が極秘で手に入れた毒。無味無臭な上、即効性はない代わりに毒だと気づかれないようになっていてものの約一ヶ月もすれば確実に死にます。いかに日本の医療が最先端を行っというように決して中和することはできません。このまま飲ませ続ければいずれ文の国は静功様、貴方のものになりますよ」

「全くだ。あんなちゃんけなガキにこの国を良いようにされてたまるか。この国の皇帝にふさわしいのはこの私だ。だから、わざわざ高い金払ってまであの毒を手に入れたのだからな。ま、この国が手に入るなら安いものだが」

「とにかく今後も水に溶かして頻繁に飲ませる事です。そうすれば後数日中には静功様のものになりますよ。そのときは私の事もよきに計らってください」

「無論だ。とにかくこれ以上長居をするな。誰かに聞かれ様ものな

ら私の首が飛ぶ。お前はもう行け」

「分かりました」

花鈴はサッと近くに隠れた。中から静功と見知らぬ男が出てくる。花鈴の鼓動が早くなった。

「き、聞いちゃった。これだよね、不穏な動きって・・・まさかあの静功様が不穏者だったなんて。そ、そうだ！録音機！ちゃんと取れてるよね！」

巻き戻して再生してみる。声はしっかりと取れていた。

「やったー！早速神貴様に伝えないと」

早速で神貴の寝室に向かう。

「誰だ？」

「夜分にすみません。花鈴です。お話したい事があってまいりました」

「入れ」

中に入った花鈴は神貴に自分達の素性を説明せず不穏者の事の次第だけを話した。もちろん録音機の事でもある。最初まさかあの静功がと疑っていた神貴だったが録音機を再生させ聞いた話で本当の事だと理解した。録音機を受け取り相分かったと言うとその夜は花鈴を下げさせる。次の日の朝、花鈴達三人と共に玉座に座っていた神貴の元に静功がやってきた。

「おはようございます神貴様。いつものように朝のお目覚めのお水をお持ちしました」

「うむ。いつもすまんな。静功には迷惑をかけてばかりだ。そこで恩返しと言うわけではないがその水、お前にやろう。私ばかりが毎朝喉を潤しては申し訳ない」

「え。いえ、めっそうもございません。私は特に喉が渴いて降りませんので」

「なんだ？私の送る水が飲めんと言うのか？」

「いえ、そういうわけでは」

焦る静功、それを平然と見ている神貴は録音機を取り出した。

「これは昨日花鈴から貰ったのだが、録音機というものらしい。その場の声を記録できる便利な代物だそうだ。皆の者余興がてらに昨日花鈴が記録した会話を流すので聞いてみてくれ」

神貴は録音機を再生させる。すると昨日の静功の話が城内に響く。兵士達がどよめきだした。

「録音機とは世の中には便利な利器があるものだ。お前の声しかと記録させて貰ったぞ」

「ば、馬鹿な。そんな・・・」

「ちゃんと証拠はここにある。つまらん策を練りおって。兵達よ

！静功をひっ捕らえよ！」

「は、離せ！この私がこんなガキに良い様に扱われて良いはずが無い！」

静功は怒鳴りながら兵士達に引っ張っていかれた。

「花鈴。お前に命が救われた。礼を言う」

「いえ、そんな」

「しかし、私は毒を飲み続けた。聞いている限りでは後数日と持たないらしい。もう少し早くに気づくべきだった」

「それなら大丈夫ですわ。私の渡した薬を朝夜二回ずつ飲み続ければ毒は中和されて、毒を飲む前よりお元気になられます」

「うん？だが、日本の薬でも中和はできんともう一人の誰かが言っていたが」

「日本の医学を甘く見てもらっては困ります。その毒の効果を中和する薬なぞ当の昔に作られていますわ」

「そうか。ありがとう桜。ではお前は最初からあの水が毒だと分かっていたのか？」

「いえ、最初に診断した時に直ぐ分かったのです」

「ふむ。お前は本当に名医だな。今後私のために尽力してくれ」

「いえ、私はもう行かなければなりません」

「なんと？」

「まだこの世には病で苦しむ人が多く居ます。私はそれを救いに行かなければならないのです。ですので申し訳ありませんが今日で私はまた旅立ちます」

桜はぺこりと頭を下げた。

「・・・分かった。引きとめはせん」

「あの、私達も行かなければならないんですが」

申し訳なさそうに花鈴も言う。

「お前達も行ってしまおうのか？」

「はい」

「残念だ。お前達の歌声をもっと聴いていたかった」

とても残念そうな神貴。そこに桜が提案をした。

「それなら、その録音機に花鈴さん達の歌声を録音しておけば良いじゃないませんか」

「おお！良い提案だ。花鈴、竜吉、是非頼む」

花鈴と竜吉は快く承諾すると自分達が持ちえるレパートリー全て

の曲を歌い録音した。こうして、花鈴達三人は神貴と娘娘に挨拶すると文の国を後にしたのである。去り際に桜は娘娘に手紙を渡していた。後からこの手紙を読んで娘娘はびっくりする事になる。

「竜吉様、お体の方は大丈夫ですか？」

「うむ、桜殿のおかげで楽になったぞ」

「日本の葉って凄いですね」

「医療だけには力入れてますから」

「ご主人様」

町の入り口に着いた時ジュニアが一目散に飛んできた。

「ジ、ジュニア！あれほど隠れてなさいって言ったのに！」

「だって、余りにもお帰りが遅いんですもん。何かあったのかと心配で心配で」

「あら、可愛い動物さんだこと」

桜は特に驚く様子もなくジュニアを見ている。

「あ、桜さん。これは、その・・・」

「まだ世の中には私の知らない事がたくさんあるのですね。これから旅を続けているいろいろな出来事に出会いそうです。それでは、患者が待っているので私はこれで」

桜は戸惑う花鈴を尻目に悠々と去っていった。花鈴はとりあえず安心して仙人界に戻っていったのである。そして大老君の部屋。

「少し、時間が掛かったの」

「すみません大老君様。思った以上に手こずりました。やはり、私にはまだ任務は早すぎたのです」

「いや、あの状態でよく不穩者を見つけ出しあげく暗殺まで未然に防いだのは良くやった事じゃ。約束通り任務を果たしたと言う事でおぬしは今日より仙人とする」

「はあ、ありがとうございます」

「なんじゃ、折角なれたんだからもっと喜ばぬか。まあ花鈴の実力からしたら既に仙人になっていても不思議はないのじゃから当然かもしれないが。それにしても、桜とか言う者は何者なんじやろうかの？日本の国にあんな名医が居たとはわしとて知らなかった。日本の事は公望の方が詳しいでの」

「そうですね」

二人して首をかしげているのを見て、竜吉は笑いをこらえるのに必死で肩が思わず震えている。とにかくにも花鈴は仙人になったのであった。

花鈴、仙人になっちゃった（後書き）

あとがきだみょーん。

ちよつと書き間違えたところがあったので修正かけました。

一寸の虫にも五分の魂・・・どんな小さな虫にも平等の命が宿っているという意味ではなく、それぞれが誇りを持って生きているので侮ってはならないという意味です。

結構、この諺の意味を間違えて覚えている方っていらっしやるんじゃないでしょうか。私も間違えました（えへ）

ちよつとしたミニ辞典でした。

花鈴のちょっと素直な気持ち

「公、花鈴が仙人になったぞ」

公望の家に戻ってきた竜吉が岩の上で瞑想に耽っている公望に声を掛けてきた。しかし公望はぴくりとも動かず動じる事も無く目を瞑ったまま返事を返した。

「そうか。まあ、あやつならなくても不思議ではない。無事龍を捕まえたか」

「いや、今回は特例として任務を遂行したと言う事を考慮してそれを仙人試験の代用としたのじゃ」

「任務？」

「うむ。人間界の文の国に降り立って暗殺事件を未然に防いだという任務じゃ」

「ほう。花鈴ももうそんな特例の任務を与えられる存在になったか。仙人になった事と言い特例任務を与えられる様になった事と言い、師匠としては嬉しい限りじゃな。もうわしの手を貸さずとも十分一人でやっていけるわけじゃ。めでたいのう」

「どうじゃろうかな？花鈴が仙人になったのは不思議ではないが、任務についてはまだ危ういところはある気がするぞよ。誰かさんの手を借りなければまだあのような任務はできぬ。現に誰かさんに手を借りなければ任務は遂行できなかった」

竜吉は微笑みながら意味ありげな発言をする。しかし公望が相変わらず目を瞑り微動だにしない。

「それは過程論じゃろ？結果がしかと出ているのであれば指して問題ではない。その誰かさんが手を貸したから解決できたと言うより時間さえあれば花鈴一人でも十分解決できたのではないか？今回はそなたが着いて行ったから時間に追われた所があるのであろう」

「ん？公、何故わらわが花鈴に着いて行ったと知っておるんじゃ？」
クスクスと竜吉は笑っている。公望はそれでも知らんという感じに振舞った。

「まあ良い。それにしても公。そちは何時までそうやって瞑想に耽っておるつもりじゃ？」

「結論が出るまでじゃ」

「何の結論じゃ？」

「分からん。分からん事が何故分からんのかを理解するために瞑想しておるのじゃ」

「やれやれ公、この世には頭ではなく感情で理解せねばならんこともあるのじゃぞ？一度素直に感情を出したらどうじゃ？」

「と言うと？」

「公にとってわらわはどういう存在じゃ？」

「ん？その答えは既に出ておる。何故その答えになったかが分からんが結論から言えばそなたはわしにとって欠かせぬ大切な存在じゃ」

「では、花鈴はどうじゃ？」

「花鈴もわしの愛弟子として欠かせぬ大切な存在じゃな」

「その結論が出ておるのなら何故、花鈴を連れ戻さぬ？」

そこで公望は目を開けた。そうなのだ。公望にとってその花鈴の存在が自分にとってどれほど生活に影響を及ぼしているかが理解をしているのだが、自分から出て行き公望自身もまた帰ってこなくても良いと言ったものをどうして連れ戻すと言うような事ができるかと言う事を必死に考えていたのだ。

公望の基本美学は自由意志の尊重だ。誰かの自由を縛るという事をしたくはない。もし仮にここで花鈴を連れ戻すという行動を起こせばそれは師匠として可能かもしれないが、花鈴の選んだ道がないがしろにしてしまうと思えてしまう。さらに貴信と幸せに暮らし念願の仙人にもなれたのだ。これ以上自分の下に留めて置く理由はない。ただでさえ戻ってこなくて良いと言ってしまっているのにここで自分から連れ戻してはただのわがままではないか？

このように考えているとそこに自分の意思というのも考えてしまう。相手ばかりを尊重してはいるが、では自分の意思としてはどうなのか。そもそも何故そこまで悩むほど花鈴がいなくなった事を考えているのか。自分は師匠として弟子の幸せを願っているはず。それなのにそれを覆すような思考が生まれるのだ。花鈴を自分の手元に置いておきたい、そういう思考だ。初めて取った弟子であるが故に感情の移入が強く出すぎたのか？それとも単に親馬鹿ならぬ師

匠馬鹿なのか？しかし、それは竜吉の場合にも当てはまる。その想いが理解できずにずっと悩んでいるのである。

「分からぬ。わしも正直どうして良いのかが分からぬのじゃ。花鈴は貴信と共に居て幸せだと言っておった。さらにこの度仙人に昇格したのであれば万々歳でもうわしの関与する所ではないはず。しかし、安堵している自分に対しどこかもやっとした気分になってすっきりしない気持ちも有るのじゃよ。わしは・・・わし自身が分からぬ」

少し暗い表情で語る公望に対し竜吉はとても嬉しそうだった。

「公もようやく少しは愚鈍さから進歩したかの」

「? どういうことじゃ?」

「いやなに、そういう風に考えられてそういう想いが生まれたのはわらわ達からすればいい傾向じゃと思っただけじゃ」

「何故、わしの心とそなたらが関係する?」

「そこまではおしえな〜い」

ちょっと意地悪そうに竜吉は後ろを向いてまるで子供のように振舞った。こういう態度を見せる竜吉も生まれて初めてかもしれない。竜吉の竜吉らしく無い態度と発言にさらに困惑する公望だったが、次の竜吉の発言にさらに困惑させられた。

「そういえば公。今日これから花鈴の仙人昇格を祝って祝賀会を貴信の家でやるそうじゃ。わらわはそれにお呼ばれしている。無論、

普賢、花憐といった花鈴と親しい者達も是非来てくれと呼ばれている。故に今からわらわはまた出かけるぞ」

「そうか。では、師匠としてわしも行かなければならんのじゃな」

「と思うじゃろ？しかし生憎とそちは呼ばれていないのじゃ。花鈴の方から指名をうけておらん」

「ん？そうなのか？」

「うむ。その祝賀会に行くか行かないかはそちの判断に任せるだそうじゃ。花鈴もそちに似て自由意志を尊重するように育ったではないか。で、どうする？」

「んんゝ・・・」

「時間が無い故にさっさと決めるのじゃ」

「花鈴は別にわしに是非来てくれとは言わなかったのか？」

「うむ」

そこでちよつと公望の表情が暗くなる。ちよつとすねたようだ。

「・・・なら良い。特段呼ばれてもおらん存在が行ってもあちらに迷惑が掛かるだけであろう」

「本当に行かんのか？」

「呼ばれていないなら行くことも有るまい。花鈴におめでとう。こ

れからも幸せに暮らせと伝えておいてくれ」

「はあ、ぜんごん撤回じゃ。進歩したかと思ったが花鈴の気持ちの分からんようならそちは一生瞑想に耽っている事になるぞ。そんなのだからわらわも不安になるのじゃ。せっかく花鈴がこの家から居なくなったというのにわらわは全然嬉しく無いぞ。こんなことならまだ花鈴が居た時の方が競い合えて良かったと言うのに」

竜吉は呆れて頭を振るとさっさと出て行ってしまった。残された公望は何か胸の辺りでつかえたようなもやもやを持ったまま、それを消すためにまた瞑想を始めたのだった。

「本当に公は恋愛には疎いの。これではわらわの気持ちも花鈴の気持ちも伝わって受け止めてもらえるのは何時になる事やら・・・」

空を飛びつつ溜め息混じりに貴信の家へと竜吉は向かった。貴信の家では既に面子が揃っている。普賢、花憐、大乙、妖仁が祝賀会に来ていた。

「竜吉様良く来てくださいました。で、あのお師様は？」

「呼ばれもしない人が来ても迷惑になるだけじゃと言って来ないそうじゃ」

「・・・そうですか」

残念そうな花鈴に竜吉は公望からの伝言を伝える事にした。

「公から伝言じゃ」

その言葉を聞いて一瞬花鈴の瞳が期待に満ちた瞳になる。

「なんです！」

「花鈴おめでとう。これからも幸せに暮らせだそうじゃ」

「………」

期待はずれの言葉に肩を落とし無言になる花鈴に竜吉はまた溜め息をついた。

「そちもはっきりと言わぬからこういうことになるのじゃ。何時までも維持を張らずに素直になれば良いものを」

「い、意地なんて張ってません！」

「では、そちは今本当に幸せだというのじゃな？」

「はい！」

「ほう、それならわらわが公を貰っても良いと、そちから身を引いたと受け取って良いのじゃな」

「そ、それは！」

「それはなんじゃ？」

「……それは、駄目です」

小さな言葉でうつむきながらぼそぼそと花鈴は言った。

「そちも態度をはっきりさせぬか。そうでないとわらわが困る。今のままではそちに遠慮して公に迫る事もできん」

「・・・・・・・・」

竜吉とのやり取りをしているもとに貴信がやってきた。

「どうかしたかい？折角花鈴ちゃんのために竜吉様まで来てくださったんだ。全員揃ったんだしそんな暗い顔して無いで、ほら主役はこっちにこないとね」

「あ、はい」

貴信に促されてテーブルの上座に座らされる。

「えっと、じゃあ皆さん。今日はわざわざ花鈴ちゃんの仙人試験合格の祝いに来てくださってありがとうございます。ささやかながら宴の準備をしてありますので心行くまで楽しんでいってください。ほら、花鈴ちゃんも一言」

「え、あの、皆さん今日は私のために集まってくさってありがとうございます。これからも仙人として恥じぬよう頑張って精進したいと思いますのでよろしくお願いします」

パチパチパチ

「では、花鈴ちゃんが仙人になったのを祝ってかんぱーい！」

「かんぱーい！」

こうして祝賀会が始まった。皆ワイのワイのと騒ぎ出し酒がどんどん進み直ぐにほろ酔いになっていった。そして普賢、妖仁、大乙、花憐が花鈴を囲みに入る。

「花鈴、貴方ようやく念願の仙人になれたのね。おめでとう」

「良かったじゃないか。これで夢が叶ったんだ。これから頑張れよ」

「ありがとうございます。お姉様、普賢様」

「まあ、花鈴なら仙人になれて当然の実力は持っていたからね」

「そうだね。まず望ちゃんの弟子をやってるくらいだもん。望ちゃんでなれたなら望ちゃんより優秀な花鈴がなれないはず無いよ」

「そ、そんな妖仁様。私お師様より優秀じゃないですよ」

「えー、優秀だよ。ねえ大乙」

「そうだね。公望は落ちこぼれ仙人だからね」

「つうかよ。なんで宴好きの公望が来てねえんだよ。しかも弟子の祝いの席だって言うのに。本当駄目な奴だな」

「全くだね」

皆して公望を酒の肴にして笑い出す。しかし反面花鈴は不愉快になっているようで言葉数が少なくなつてムスツとなつてくる。

「いやゝでも、あの公望の弟子でよくちゃんとした仙人になれたよな」

「そうそう。良く人格が持ったよね」

「そこが花鈴の凄い所だよ。あの公望の元で修行して仙人になるんだから」

「やっぱあれか？反面教師とかいうやつか？」

「かもねゝ」

「公望の弟子が花鈴で良かったよな。これがもし他の弟子だったら一生仙人なんかになれずにぐてゝとした日々を過ごす事になってたぜ」

「望ちゃん。本当やる気無い人だからね」

「あんな人に私の妹を預けておいたかと思うと今思えばとても不安な事でしたわ」

「ま、なんにせよ花鈴も立派に独り立ちしたし、いい加減公望はお役ごめんだろ？あの話進めるか？」

「普賢様、あの話ってなんですか？」

「いや、前言わなかったっけ？公望を仙人界から排除するっていう話。あれを大老君様に進言して公望を人間に戻すってこと」

「え!?! あれ本気だったんですか!?!」

「もちろん」

「だ、駄目ですよ!」

「何故だ? おまえにはもうどうでも良い話だろ? 仙人になって独立するんだからよ」

「で、でも」

「ま、なんにせよ弟子に愛想つかされるような仙人は仙人としてなっていないよな。お前らもそう思うだろ?」

「うん」

「望ちゃんも仙人になったらしつかりするかと思ったんだけどね。やっぱり駄目だよな。あれじゃ」

その後も寄ってたかって公望の事をけなし始めた。酒の勢いもあり皆して公望をぼろくそに言いまくる。花鈴はもうその言葉に耐え切れなかったらしくその場を立ち上がった。

「ん? 花鈴何処に行くの?」

「ちょっと一人になりたいの! 皆さんは皆さんで楽しんでください!」

花鈴はジュニアの下に駆け寄るとサッと飛び乗り何処かに飛んでいってしまった。

「ふーやれやれ。世話の焼けるこって」

「でもこれだけ言えば、いい加減素直になるんじゃないの？」

「あの子も意固地すぎるんだから。すみません。皆様にまでご面倒をおかけして」

「良いよ。望ちゃんと花鈴のことだもん。僕達も好きでやってる事だから。でも嘘だとは言えさすがに望ちゃんの悪口を言うのはちょっと辛いね。ね、大乙」

「うん。でも公望ならこれだけ言われても、その通りとか言って笑うと思うから許してくれるよ」

「そうだね。後は花鈴と望ちゃん次第か」

「なんとかなるといいけどな」

「あれ、花鈴ちゃんは何処に行ったんだい？」

「ああ、わりー貴信。花鈴の奴、なんか急用があるとかで出かけたわ」

「ふーん」

貴信は特に気にもしたわけではなく、その輪の中に入り話を始めた。そっと聞き耳を立てて話を聞いていた竜吉は優雅に酒を飲みつつ花鈴は仲間に恵まれているな、やはり恋敵に回すと厄介だなどと思っていた。

さて一人飛んでいった花鈴は特にあてもなくただむしゃくしゃしていたので、とりあえず公望が良く連れて来てくれていた龍穴のある岩場に向かった。岩場に座り込むとボーっと流れる川を眺める。

「・・・なんかせつかく仙人になれて皆に祝ってもらっても全然嬉しく無い・・・」

川は何も答えずたださらさらと静かな音を鳴らしていた。そんな折、突然コツンと頭に固いものが当たった。上を見ると酒のビンが頭上にある。

「なんじゃ、こんなところで一人どうした？」

「お、お師様！」

「隣良いか？」

「あ、はい！」

「よっこらしょっと」

「・・・・・・・・」

しばし花鈴にとって気まずい雰囲気の流れる。そこに公望が酒を入れた杯を目の前に出してきた。

「え、これは？」

「飲め。今日はそなたが仙人になってめでたい日じゃ。わしは祝賀

会に呼ばれなかったが、個人的に祝う分には問題なからう」

「あ、ありがとうございます！」

「本当におめでとうな、花鈴。わしは心から嬉しいぞ。よく今までわしなんかの弟子を務めただけではなく立派に成長したものじゃ」

公望はポンポンと花鈴の頭を優しく叩いてやった。

「ん？なんじゃ、そなた泣いておるのか？」

「い、いえ、つい嬉しくて。皆に祝ってもらうより、こうしてお師様に祝っていただいた方が全然嬉しくて・・・」

「そうか・・・」

花鈴は涙を浮かべながら注がれる酒を飲んだ。その後は特に二人は話をしなかったが、ただゆっくりと流れるこの時間がとても大切で嬉しいもののだと花鈴は実感していた。

一緒に居たくて・・・

「貴信様、お話があります」

仙人昇格の祝賀会が終わった日の夜。花鈴は改まった表情で貴信に話を持ちかけた。

「なんだい？」

「私、貴信様とお付き合いしていて楽しいです」

「それは俺もそうだよ」

「今まで優しくしてもらって私本当に嬉しかったです」

「当然の事をしているだけだけど？」

「でも・・・」

「うん？」

「あの・・・やっぱり私これ以上貴信様とお付き合いは出来ません」

「どうして？」

貴信はこの花鈴の突然の発言にさして驚きもせず静かに聞いた。

「私、どうしても好きな人の事が忘れられないんです。このまま貴信様とお付き合いしていても、私、自分の心を偽ることは出来ませ

ん」

真剣な眼差しで真っ直ぐと貴信の目を見つめた。貴信もまたその視線を受け止め見つめ返す。

「そうか。そんな気はしていたんだ。花鈴ちゃんの性格上、絶対に好きな相手を忘れずにいつか自分の下を去っていくんじゃないかって予想はしていたんだ」

「本当にすみません。あんなに大切にしてもらったのに」

花鈴は心からすまなさそうに謝った。貴信は静かに笑っている。

「はは、良いんだ。俺もほんのちよつとの間だけだったけど楽しい想いをさせてもらったからさ。それに、どんなに花鈴ちゃんを楽しませようと頑張ってみても君の笑顔には何処か暗いところがあった。無理をしているって言うのは僕には良く分かっていたからね。そんな花鈴ちゃんを見ているのも俺にはちよつと辛かったし」

「すみません」

「良いよ気にしないで。別れには慣れてるからさ。だてに女ったらしと噂されて無いよ？ 出会いがあれば別れもあって幾度と経験してきたから。俺はまた誰か大切な人見つけるよ。花鈴ちゃんもその好きな人と結ばれると良いね」

「ありがとうございます」

「・・・ねえ、最後に一つだけ聞いて良いかな？」

「なんですか？」

「花鈴ちゃんがそこまで好いている好きな相手って誰？」

「そ、それは・・・」

花鈴は返答に困った。正直に言うべきかどうか。いや今まで大事にしてくれた貴信に自分の想いを伝えないのは失礼では無いだろうか。花鈴はしばし悩む事、言葉を発した。

「私の好きな人は・・・お師様です」

「お師様って、公望の事？」

「はい」

「仙人界で師弟関係の恋愛が禁止されているのは知っている上での想いかい？」

「はい」

「そう。そっか。公望が好きなのか・・・。あいつの何処に惚れたのか俺には良く分からないけど、俺は正直その想いが叶うとは思わないよ。あいつの女性不信は仙人界でも知らない奴はいないくらいだし。第一あいつ恋愛感情持って無いだろ？」

「それも分かってます。分かっているけど好きなんです！」

揺るぎの無い純粋な真っ直ぐな瞳で貴信に訴える。貴信はその目を見て優しく微笑みそしてただ静かに呟いた。

「・・・もう行きなよ。俺は止めないさ。いつかその思い叶うと良いね」

「今まで本当にありがとうございました」

花鈴は貴信に頭を下げると貴信の家を出てジュニアに乗り空高く舞い上がっていった。家の中一人取り残された貴信は目を手で覆っている。

「俺は本当に・・・好きだったんだ・・・」

覆った目から一粒の涙が零れ落ちていた。

「貴信様とお別れしたのは良いけど、これからどうしよう」

貴信の家から飛び立ち冷静になって自分の気持ちを確かめた花鈴は、別れたものの今後どうして良いのか分からずに悩んでいた。

「お師様には帰ってこなくて良いって怒られてるし、第一仙人になっちゃってるから独立しているわけでしょ。お師様の家に戻る理由が無いよう。どうしたら良いと思う？ジュニア」

「ご主人様。とりあえず姉上様にご相談してはいかがですか？」

「うーん、お姉様かあ。でも貴信様とのことで散々迷惑かけてるし、私はつきりお姉様にはほつといてと言っちゃってるんだよね。それなのに今更おめおめと相談しに行くなんて・・・」

「でも、たった一人のご家族ではありませんか。姉上様もご主人様

のお気持ちは察していると思いますよ？とりあえず、行くだけ行って見たらどうですか？」

「そうね。悩んでもしょうがないし、素直な気持ちをちゃんと伝えればお姉様なら分かってくれるよね」

花鈴はくよくよするのを止め、普賢の家に向かった。扉をノックする。

「はーい。あら花鈴じゃない。こんな夜遅くにどうしたの？」

「お姉様、夜遅くにごめんなさい。どうしてもお話したい事があって来ました」

「何？ここじゃなんだから中に入りなさい」

花憐に促されて家の中に入っていく。その姿に普賢が気が付いたようだ。

「おう、花鈴じゃねーか。こんな遅くにどうした？」

「なにやら話があるそうですわ」

「へー、それは俺も混ざって良い話？」

「はい。普賢様にもご迷惑をおかけしているのでお二人にはきちんと話しておいた方が良いと思って」

「ふーん。じゃ、とりあえずこっちの部屋に来いよ」

普賢に促されてある一室に通された花鈴は椅子に腰掛けた。二人は花鈴を前にして座る。

「それで花鈴。話ってなにかしら？」

「あのね、お師様の事なんだけど」

小さい声でうつむきながら自信なさ気に話す花鈴。二人は次の言葉静静地に待っている。

「私、今まで意固地になってた。ずっと自分の気持ちに嘘をついたの。私、やっぱりお師様の事が好き。どうしても忘れられないの。最初貴信様と付き合えば気持ちも変わるのかなって思ってたけど、やっぱり変わらなかった。確かに貴信様と過ごした時間は幸せだったけど、でも、お師様との時間が一番自分にとってかけがえの無いものなんだって気づいたんだ。同じ幸せでも気持ちの感じ方がお師様と一緒にいる時の方がずっと上で、とても言葉で言えないくらいの幸せなの」

「そう、ようやく貴方素直になったのね。やっぱり貴方はそうでないと貴方らしくないわ」

うつむきながら細く言う花鈴に対し、やんわりとした口調で花鈴は微笑んだ。その意見に普賢も同意しているようである。

「で、貴信の方はどうした？」

「貴信様にははっきりと気持ちをお伝えしてお付き合いを白紙にしてもらいました」

「そりゃなにより。それで、そこまで自分の気持ちに気づいておいて俺達に話って一体なんだよ？」

「あの、どうやったらお師様の下に戻れるかなってご相談しにきたんです」

「はあ？」

普賢は意味が分からないといった感じに間の抜けた返事を返した。普賢の中では帰りたければいつでも帰れば良いだろうという思いがあるからだ。

「どういことなの花鈴」

「あのね。私お師様に、もう帰ってこなくて良い！て怒られてるの。それだけでも帰りにくいって言うのに、私今回仙人になっちゃったでしょ？だから、もう独立しなきゃならないじゃない？帰りたいと思っても帰れる手段が無くて・・・」

「まあ、確かに弟子は仙人になったら師の下を去って独立するのが普通だけど。でもあれだぜ？別に仙人になったらって絶対独立しなきゃならないっていう掟はないぞ？皆ただ自発的に独立しているだけだから、一緒に暮らしている奴も中に入るしな」

この普賢の発言には花鈴は驚いた。てっきり仙人になったら独立しなければならぬのが掟だとばかり思っていたのだ。

「え？そうなんですか？」

「そうだぜ。ただほとんどの仙人が独立して師の下を去っているか

ら風習上そういう風に受け止められているみたいだけど、師の下に留まって修行を続けている奴だって少ないけど居るぞ？」

「それは知りませんでした」

花鈴の顔がパツと明るくなった。

「そうになると、問題は公望様から怒られている帰ってこなくて良いって言う言葉だけが問題なんですね。普賢様」

「あー花憐、俺は別に問題っていうほど問題な気はしないけど・・・」

「でも、花鈴はそれを気にしていますのよ？この子根がまじめですから」

「そうなの。私、お師様に怒られたの初めてで。その上、私の方からももう帰ってきません！って言っちゃっているから帰りたくても帰れなくて」

「そんなの素直に謝ったらどうだ？あいつのことだから普通に受け止めて許すと思うけど」

「そうですわね。公望様は自由主義を尊重される方ですから、花鈴が帰りたいならそれを許可なさる気がします」

「そ、そうかな？」

「ええ」

「ああ」

不安げな花鈴をよそに二人は当たり前のように返事を返した。

「公望様の性格については貴方が一番分かっているんじゃないの？」

「そ、そうだけど」

「だったら何を不安に思っているんだよ。普通に公望の家に行ってあいつにすみません戻ってきましたって言えば良いじゃないか」

「えー、でも・・・」

「まだ貴方らしくないわね。私の知っている妹はもっと強気で、怖いものにも体当たりでぶつかって碎けるのも気にしないような一直線の子だった気がするわよ。素直になったなら自分に自信を持ちなさい」

「・・・分かった。私頑張ってみる！」

「その意気よ。公望様なら何の問題も無いはずだわ。あの方は器の広い方ですから」

そこで花鈴は花憐の言葉に違和感を感じた。

「あれ、お姉様。ついこないだから皆してお師様のこと散々けなして悪口言ってなかった？」

「あー、あの事？あれは嘘に決まってるでしょ。貴方に素直になってもraithたくて普賢様と芝居を売ったのよ。それなのに貴方と来た

らいつまで経っても素直にならないんだから。おかげで妖仁様方にも手を貸してもらって皆で心にも無い言葉をでっちあげたのよ。本当に世話の焼ける子ね」

「そうだったんだ。ごめんなさい、迷惑かけて」

「そう思うなら早く公望様の下に戻りなさい」

「うん！ありがとうございます！お姉様、普賢様」

花憐の言葉を聞き安心した花鈴は早々にお辞儀をすると普賢の家を後にして公望の家へと向かった。向かう途中、緊張している自分に大丈夫大丈夫と言い聞かせて必死に自分を奮い立たせる。そしてとうとう公望の家の前に着いた。鼓動が自然と早くなる。怒られたら、断られたらどうしようという不安で逃げ出したくなるのをぐっところえてゆっくりと中へ入っていく。庭に着くと目の前の滝の岩場で胡坐をかいて瞑想している公望を見つけた。

「お、お、お師様！」

完全に声が上ずっている状態で花鈴は公望に声を掛けた。公望は返事をしない。気まずい公望の沈黙により自然と身体が震えて動けない。それでもなんとかして声を出した。

「あ、あ、あの、私、その・・・」

「・・・・・・・・」

「あの！だから！！！」

「・・・・・・・・」

うまく言葉の出てこない花鈴に対して公望はやはり無言のままだ。そんな折、突然公望の身体が揺れ岩の上から頭から落ちていった。

ドシーン！

「お師様！？」

「い、いったあああ。何時の間にか寝ておったのか。まさか岩場から落ちるとはわしも疲れがたまっておったかのお」

頭をさすりながら公望はやれやれと起き上がった。その場に急いで駆けつけてきた花鈴が心配そうに見つめてくる。

「大丈夫ですか！？」

「うむ。おや、花鈴ではないか？どうしたこんな夜更けに」

「え？あ、えーっと、お師様。私、この家に戻ってきたら駄目ですか？」

小声でうつむき不安そうにしゃべる。

「ん？貴信はどうした？振られたか？」

「いえ、私からお別れしてきました」

「あはっはっは！あの百戦錬磨の女ったらしも振られる事があるのか。さすが我が弟子じゃ！」

花鈴の言葉に公望は思わず笑ってしまった。

「それで、あの・・・もう一度この家で共に暮らしたら駄目でしょうか？」

「んん？しかしそなた既に仙人じゃぞ？別に師匠であるわしの下に居る必要はもう無い。立派な仙人になるために独立するべきじゃろ？」

「いえ、私、まだお師様の下に居たいのです。お師様の下で修行したいです」

「ふーん。なら良いのではないか？わしは別に構わぬぞ」

あっさりという公望にうつむいていた花鈴はようやく顔を上げた。

「良いんですか!？」

「わしの下で修行したいのなら別にそれはそれで良いと思うぞ。その代わり弟子の時より少々厳しい修行もあるかもしれぬが」

「それは構いません!」

「そうか。なら好きにするが良い」

「あの、お師様。怒ってたりとかしないんですか？」

「何をじゃ？」

「いえですから、私がお師様に逆らった上に怒鳴って出て行った事」

「そんなもん過去の話じゃろ。大体そんなちっぽけな事で怒り続けるわけではない。それより、自分から付き合っ出て行くとか言っておきながら貴信と別れた後、独立できるのに舞い戻ってくるといふ行動がわしにはよく理解できないが。女性とはやはり理解しがたい生き物なのじゃろうか？」

「いえ、私は先にも申し上げたとおりお師様の下で仙人として修行を積みたくて戻ってきたのです。そこに矛盾はありません」

「それもそうか」

花鈴の言葉に納得させられ公望はふむふむと頷いた。

「さて、では今日はもう遅い。部屋はそのままにしてある故にゆっくりと休むが良い。またこれから頼む」

「はい！ありがとうございます！」

花鈴は嬉しくて元気の良い返事をすると思気揚々と自室へ走っていった。

そして次の日の朝、公望は久しぶりに胸のつかえが取れた感じになり瞑想する事も無くいつもの縁側に座ってタバコを吹かしていた。風麒麟も隣に座っている。すると後ろから大声が聞こえてくる。

「ですから！お師様の部屋の掃除は私がするんです！！！」

「何を言う！わらわがするのじゃ！そちは引っ込んでおれ！！！」

「竜吉様の方こそ下がってください！布団取り替えるのに邪魔です！！！」

「これ花鈴！布団はわらわが変えようとしておったのじゃぞ！なにを奪い取っておる！！！」

ギャーギャーギャー！と騒がしい竜吉と花鈴の声が公望の家に響き渡る。公望は空を見上げ遠い目をしながら煙を吐いた。

「ほんに、今日も仙人界は平和じゃのお」

「左様ですね」

公望と風麒麟はのんびりとした時間を過ごしていた。

花鈴 稽古（上）

「さあーって、お洗濯しようっと！」

竜吉が久しぶりに仕事があるとのことで蓬萊山に向かったため、今日は特に争うこともなく花鈴はのんびりと洗濯をすることができ
る。

「なんか、お師様の服を洗うときいつもドキドキしちゃうんだよね」

公望の服を早速洗濯籠から取り出し、しばし見つめる花鈴は辺りをきよろきよろ見渡して誰もいないことを確認すると公望の服に顔を埋めた。

「はあ、お師様の香りがする・・・良い香り」

服に顔を埋めながらほおとため息をつく。こうしているだけで不思議と落ち着くのと同時に心が高揚してとても気持ちの良いドキドキとした感じになれるのだ。

「何でこんなに良い香りするんだろ・・・これ、一枚貰った駄目かな・・・い、一枚ぐらいだったら良いよ、ね？」

しばらくそうしていた後、誰に尋ねるわけでもなく呟き、まるで万引きする子供のようにそつとばれないように自分の懷に公望の服を入れようとした。その矢先、後ろから突然声をかけられた。

「花鈴」

「ひゃいっ!!!!」

ビクウツ!としてワタワタと慌てながら声をかけられた方を向く。
そこにはようやく起きてきた公望の姿があった。

「なんじゃそなた。そんな素っ頓狂な声をあげて何を慌てておる」

「わ、私は別に服を貰おうだなんて・・・あ、じゃなくて!」

「ん?」

「と、突然声を掛けられたのでびっくりしまして」

「それはすまなんだな。ん?洗濯か?」

「え、あ、はい!」

「いつもすまん。本来ならわしもせねばならんのじゃが、ついついそなたに甘えて任せっきりじゃ。やはり当番制にでもしてわしもやらねばならんな」

「いえいいですよ!私、好きでやってることですから」

「そなたは本当に良い子じゃな。面倒見も良いし良い嫁さんになりそうじゃ」

「そ、そんなこと・・・」

公望にそう言われてちょっと照れた感じになった花鈴に対し、公望は背伸びをすると茶でも飲むかと言って厨房の方へと歩いていっ

た。

「はあゝ、危ない危ない。と、とりあえず一枚だけ貰っちゃおう」

花鈴は直ぐに公望の服を大事に懐に入れると何事もなかったかのように洗濯を始めた。始めると同時に茶を二つ用意した公望が傍にやってくる。

「ほれ、そなたの分も用意したぞ」

「あ、ありがとうございます」

「ところで竜吉はどうした？起きてから見当たらんが・・・」

「竜吉様ならお仕事があるそうで蓬萊山へ向かわれましたよ」

「ふーん、竜吉に回ってくるほどの仕事のお。また厄介事でなければ良いが」

公望は茶をすすりながら花鈴の隣に座り、ちよっと思案したような面もちを浮かべている。大老君からは別にこれといった変わった話は入ってきていない。そうなるとただの個人的な仕事か？いや、なにか嫌な予感がすると公望は考えていたが、反面花鈴は、服を盗ったことがばれませんかのようにとまた違った意味で緊張した面もちをしていた。

「時に花鈴」

「ひゃい！ー！！」

ばれたのかと思い、また素っ頓狂な返事をした花鈴を不思議そうに見つつ公望は話を続けた。

「そなた、仙人としてわしの下で修行を積みたいと言っておったな」

「え、そのことですか」

花鈴は服の事ではない話を振られ、ほおろつとため息をつく。

「なんじゃ、そなた何を緊張しておるのじゃ？」

「いえ、なんでもないです！それで、修行がどうかしたんですか？」

「うむ。実はな、仙人として修行を積みたいと言うが、その修行をどのような修行にするかと決めることも仙人として本来自分で決めなければならないことなのじゃ。その時点で修行は始まっていると言って良いからの。わしの場合、仙人試験に合格した時点で直ぐ独立しオリジナルの術を開発することを修行として位置づけたが、そなたは既にオリジナルの術も開発しておる。それで、どのような修行が良いかなと考えておったんじゃが・・・そなたどんな修行がしたい？」

「えーっと、私はお師様みたいな凄い仙人になりたいです！」

的はずれな弟子の返答にカクッと肩を落とした公望は、ゴホン！と咳払いすると改めて花鈴の方に向き直った。

「あのなく、わしみたいになつてどうする。そなたはもう十分にわしより凄い仙人なんじゃぞ？今更、へっぽこなわしの様になりたいなぞ言うものではない。大体当初、竜吉みたいな仙人になりたいと

か言っておったではないか」

「いえ、最初はそうだったんですけど、お師様の弟子になってお師様みたいになりたいなって思うようになったんです」

この返答に公望は頭を抱えた。育て方を間違えたのだろうか？花鈴なら自分の様なぐーたら仙人にならず、立派な仙人界をしょって立てる大老君の座すらも退けさせれるほどの人材になれると思っていたのだが・・・。

「ま、まあ、誰のようになりたいというのはそなたの自由じゃから別に良いんじやが、わしの聞いているのは修行の内容じや。どのような修行をしたいと思っておるか聞いておるのじやよ」

「修行の内容ですか？」

「うむ」

「うーん、例えばどんなのがあるんです？」

「そうじゃなあ、仙人界だけでなく神界人間界の全てを知ろうと勉強に励む者もおれば、薬智全の様に医学薬学と言った医療に力を注ぐ者もおる。中には純粹に力だけを求めて強くなろうと修行する者もおるが、まあ多種多様じゃな。自分が修行だと思えるものなら何でも良いと思うぞ。わしは普段から瞑想などをして思考を巡らせることを修行の内容にしておるし。まあ、師匠にはそれは修行ではないと怒られておるがの」

「そうですか。んー、とりあえず私はお師様の下で修行をしたいと思っているので今まで通りお師様の指示に従った修行をしたいんで

すけど」

「これこれ、そんな指示に従った修行をしていては自立にならないじやろ？ いや待て、今までわしは指示らしい指示をしてこなかったことを考えれば、別に良いのか？ 花鈴もわしの下で修行をしたいと言っておるのだし」

うーんと公望は頭を悩ませ始めた。公望の中では仙人になったら自立して自分でなんでもするという概念があるため、いまいち仙人になった後も師の下で修行をするというものがよく分からないのだ。

「んんん。悩んでいてもしょうがないか。とりあえず花鈴は仙人界最強になれるだけの力量を備えておるからな。それを引き出す修行をするのが良いのかもしれん。では、ちょっと久しぶりに稽古でもするか？」

「はい！ あ、でもお師様、洗濯が終わるまで待っていてもられますか？」

「うむ。それは構わぬ。わしも何か手伝おうか？」

「いえ、いいですよ」

「では、待っている間、ずっと考えていた事でも実行に移している事にするか」

公望は立ち上がると池の傍に歩み寄っていった。花鈴はそのまま洗濯の続きを始める。

パンパン！

「これで良しっ！」

しばらくして洗濯し終わり、洗濯物を庭の物干し竿に干した花鈴は公望のもとに歩み寄っていった。

「お師様終わりましたよ」

「そうか、こっちもそろそろ終わる故ちよっと待っておってくれ」

「なにされてらっしゃるんですか？」

「いや、前々から風呂が欲しいなと思つての。もう少しで風呂が完成しそうなんじゃない」

それから五分ほど、なにやら公望は切った木材を組み立てて仕切りを作り木で囲んである風呂の真ん中で区切る。

「かんせーい！」

「出来たんですか？」

「うむ！ちゃんと男湯と女湯に分けてあるから竜吉と共に好きに入るが良い。こっちが女湯じゃ。間違っても男湯の方に入るなよ」

「はい。でもお風呂なんて久しぶりですね。娘娘と文の国で入ったとき以来ですよ」

「そうなんじゃ。あのときに家に作ろうと思っておったのに、なかなか作る機会が無くての」

「そういえば不思議に思ってたんですけど、使ってるお水とかこの流れてる滝とかの水ってどこから持ってきてるんですか？ここって岩の中ですよ？」

「ん？わしが空間を繋げてどっかから無断拝借しておるだけじゃ。じゃからこの風呂も天然温泉と呼ばれるもので体に良いのじゃぞ」

「あ、そうなんですか」

「そうじゃ。そもそもこの家自体、わしの空間によって作られた世界じゃからな」

「へ」

「さて、では稽古でもするか。まず、剣術からやろうかの」

「はい！」

そうして二人は対峙するとお互い寶貝を握り稽古を始めた。出足から激しい攻防が繰り広げられる。公望は居合いを使わずに斬撃を与えてはいるが、飛燕自体が音速で斬れるためほとんどその刃が見えない。しかし花鈴はそれをきちんと見定め、時に避け、時に寶貝で受け止め攻撃は当たらない。花鈴の方も受け手ばかりではなくきちんと攻撃を返してきている。その後、棒術だったり体術だったり一般的な稽古を始めたが、お互いの実力はほぼ互角だった。

「ふーむ。さすが花鈴。一般的な稽古でもわし相手じゃ役不足じゃないの」

「そんなことないですよ」

「やはりもつと実戦的なわしならではの稽古をした方がよさそうじゃ」

「お師様ならですか？」

「うむ。ちよつと額を貸せ」

そう言うとお望は自分の額を花鈴の額に当てた。二人の意識が遠ざかりその場に倒れ込む。気がつくところには、以前公望の術を見せつけて貰ったあの闘技場だった。

「ここならより実践的な稽古ができるぞ。死なぬから全力でやり合えるしな」

「お師様とやり合えるんですか!？」

ちよつと期待に満ちた瞳で聞いてくる花鈴に公望は手を振った。

「いやいや、わしは相手をせぬ。ここでは別の者達と相手をしてもらう」

「別の者達？」

「左様。そうじゃな、まずは奇勝辺りからやってもらおうか」

公望がそう言うとお望に奇勝の姿が現れた。

「これは？」

「わしが作り上げた奇勝じゃ。仮想現実の相手ではあるが實力はほぼ現実の相手と変わらんとする。推測でしか無いがの。ただ使う宝貝は一緒じゃ。そなたはいろいろな相手と実戦的に戦っているいろいろな宝貝を経験しておいた方が良いと思うでの」

「分かりました」

「では、稽古開始」

そうして公望流の稽古が始まった。最初の相手奇勝の用いる宝貝は土斥災ひきぞろと言って土を操る宝貝だ。急に地面から岩の角が刺す勢いで盛り上がってきた。それをジャンプして花鈴は避けると、印を組み仙術を唱える。それを今度は奇勝が土の壁で防いだ。しばらく攻防が繰り返されたが、それ程長くはなかった。花鈴が氷の剣で突き刺し勝敗は決する。

「ほう。奇勝相手でも難なく勝てたな。奇勝もかなりの手練れと聞いておったのじゃが。さすが師匠と同レベルの強さを持っていると言われるだけのことはある」

「そんなことないですよ」

感心している公望に照れつつ花鈴は頭を掻いた。

「ふーむ。これではそんなに修行にならん。良し！面倒じゃ！十二仙全員相手してみよ」

そうして、公望は十二仙全員を出した。と言っても攻撃タイプではない大乙と葉智全、今戦った奇勝と自分、そして特殊な部類にはいる妖仁は出さなかったが総勢七人を相手させた。普賢の禁鞭、貴

信の爆発宝貝爆宿、泰然の三連撃宝貝三月刀、有頂の砲撃宝貝天砲判、養老主の植物宝貝万象陽杖、高楼人の雷宝貝雷光翼、花月喜の氣操作宝貝封氣転氣扇が一遍に花鈴を襲う。これにはさすがの花鈴も手を焼いた。四方八方、遠中近すべての場所から攻撃を受けるのだ。避けたり防御したりするので精一杯。それでも、仙術とオリジナルの氷属性術でなんとか対応していく。

「ちょ、ちょっとお師様。さすがにこの人数でしかも十二仙様方相手ってきついですよ!」

「しゃべっている余裕があるなら問題はなかろう?」

「そんなこと言ったって、キャ!」

雷光翼から出された稲妻を必死に避けたかと思ったら、確実に的に当たる天砲判の砲撃を術で防ぎ、次は上から三月刀を斬りつけられる。三月刀は一回で三回攻撃が繰り出されるので防御陣も三重に張るかそれ以上の高レベルの防御術を使わなければ弾けないが、周りからの止まることのない攻撃の速さに高レベルの防御術を唱えている時間がない。よしんば張れても全員の攻撃の前に長くは持たないのだった。そのため三月刀も避けるしかない。

「がんばれ」

公望はのんびりと弟子の稽古を見ながらたばこを吸い、間の抜けた声援を送っていた。

「お師様、どうしたら良いんですかあ!」

花鈴は囲まれながら必死に公望に救いを求めてくる。

「ん？最初に教えなかったか？一人で大人数を相手にする場合、各個撃破していくことと決して足を止めてはいけないと言うこと。常に動きつつ一人一人倒していけば良い。そなたの氷の術で動きを止めるのもまたありかな。後、遠距離の相手は先に倒しておく方が良い」

あくまでのんびり答える公望のアドバイスをしつかり聞いていた花鈴はそれに従い、動き回りつつ一人一人倒していくことにしたようだ。

「まず、相手の動きを止める・・・えい！」

手を地面につくと氷が地面を走り周りの十二仙の足を凍らせ動きを止めた。そこをすかさず近場に居た有頂に斬りかかり一人撃破。続けざま仙術を用いて飛んでいた高樓人を打ち落とす。そのまま止まることなく次から次へと倒していった。

「ほれ、やればできるじゃないか」

公望の言葉に返事することもなく、集中力を切らさない状態でなんとか普賢と貴信を残す五人は倒せた。しかしここにきて花鈴の攻撃が止まる。さすがに普賢と貴信相手ではなかなかうまくいえないらしい。

「ま、その二人は実力は半端がない故そうそう勝たせてはくれぬじやろうが、そなたの実力なら十分倒せる相手ではあるぞ」

「で、でもお師様。禁鞭にはどうやって立ち向かえばいいんですか？それに貴信様の爆発だって突然起こるんで、動き続けるか常に防

御術使ってないと防げないんですけど」

「とりあえず、禁鞭攻略はあとにして貴信をさっさと倒す事じゃな」

「倒せませんよ」

「貴信は簡単じゃろ？一回の攻撃さえ防いしまえば倒せる」

「一回ですか？」

「そうじゃ」

「うーん」

花鈴はしばらく考えること、公望の言った意味が分かったようだ。防御結界を張ると凄い勢いで貴信に突撃していく。途中、貴信の爆発を受け結界は破かれたが、その煙幕に乗じて一瞬花鈴の姿は消え、次に姿を現したときには貴信の目の前の位置まで来ていた。そのまま剣を突き刺し貴信を倒す。

「それで良い」

公望はうんうんと納得いったように頷いている。残すは普賢のみ。普賢の周りは禁鞭がびゅんびゅん飛び交っていた。

花鈴 稽古（上）（後書き）

あとがきだによろ〜ん！

最近素敵にメタボリックしている作者です。えーえー、新陳代謝異常症候群にかかってますよ。運動しなきゃね。

さて、今回はいろいろ宝貝が出てきたのでちょっと紹介したいと思っています。

普賢の宝貝と奇勝の宝貝は紹介したと思うので省きますね。

貴信の爆発宝貝「爆宿」、自分の視野に入ったものを瞬時に爆発させることの出来る爆発宝貝です。もちろん目に映る範囲なら何もない空間上でも爆発は起こせます。何気に最強の部類に入る宝貝です。超宝貝のひとつ。

泰然の三連撃宝貝「三月刀」、一回の攻撃で三回の攻撃を与えられる打撃系宝貝です。なので刀で防いだとしても、残り二つの攻撃がすりぬけて本体にダメージを与えます。

有頂の砲撃宝貝「天砲判」、一度ロックオンするとその的に向かって確実に砲撃がされるという宝貝です。別名「死の烙印宝貝」とも言います。どこまで逃げてでもその追撃は止むことはありませんので、結界かなにかの防壁で防がないと回避不可能です。

養老主の植物宝貝「万象陽杖」、植物を操る宝貝です。周りに植物がなくとも杖から現れそれには限度はありますが植物を自由自在に操れます。

高楼人の雷宝貝「雷光翼」、背中についた翼型宝貝。もちろん飛べます。稲妻を操り好きなところに雷を落とせます。落とすだけじゃなく、一応前にも雷を出すことはできます。

花月喜の氣操作宝貝「封氣転氣扇」、仙人に必要な氣をある程度操作することが出来ます。操作と言っても相手の氣をどうにかするのではなく、宝貝による攻撃を吸収しそれを貯めて好きなときにはき出せるという代物です。ただ、無尽蔵に吸収することは出来ません。能力の高さによってはそっくりそのままはじき返す事も出来ます。

以上が今回出てきた宝貝でした。

最初は十二仙を出さずに公望自らの手で稽古をつけさせようか、あるいは本当に誰かを呼んで稽古を受けさせようかと考えましたが、一度十二仙の宝貝が何を使っているかくらい知っておいた方が良くないですか？という幻聴（笑）が聞こえたので、都合の良い公望の空間の中で全員出させてみました。公望の空間術はまだまだ謎に秘めていますねえ。とにかくいろいろ出来るんです！

ちなみに、大乙は宝貝造りがメインなので自分の宝貝は作れるけど持っていません。いずれ持たせようと思います。妖仁は変化が出来るので宝貝を必要としません。薬智全は「養命鍼」という宝貝を持っています。これは完全に治療用宝貝なので戦いには使われません。ただ使用時に治るんですが患者が相当痛い思いをする宝貝です。

まあ、宝貝の紹介はこの辺にしてまた追々気になりそうなことがあったらあとがきに書いていきます。今後もし愛読のほどよろしくお願ひしますね。

花鈴 稽古（下）

「それで、禁鞭はどうやって攻略するんですか？」

一旦稽古を止め花鈴は公望に相談してきた。

「まずは自分で攻略してみなさい。そなたの能力なら余裕のはずじや」

「そんなこと言われても、あんなに鞭が飛び交ってる中どうやって攻撃すれば良いんですか？ あんなの一発でも当たったらやられちゃいますよ？」

「花鈴、戦術とはただ派手に動けば良いものではない。またどんな武器にも隙は存在する。必要なのは頭じゃ」

「はあ」

「まずは敵の動きを良く見ることに」

花鈴は公望に言われ普賢の振るう鞭をじっとみつめる。しかし、どうみても隙がないように思える。一体どこから立ち向かっていけばいいのかさっぱり分からない。

「とりあえず、自分の思うようにやってみなさい」

「はい」

花鈴は返事をするといく組み始めた。禁鞭に対し接近戦は無理と

判断したのだろう。とうやら仙術で力押しするようだ。

「氣流掌碎！」

氣を掌に集めて思いっきり前に打ち出した。氣がうねり掌の形でそのまま普賢へと飛んでいく。しかし、禁鞭の前になんく弾かれた。その後も何度か仙術で攻撃を試みるがすべて弾かれてしまう。

「うーん。今の私の仙力じゃ禁鞭の威力を吹き飛ばすことは出来な
いみたい。じゃあ、氷術使ってみよう」

そう言うと、闘技場の気温が急激に下がり辺りが凍り始めた。花鈴は凍らせることで禁鞭の動きを止め、本体にもダメージを与えようと考えたのだ。その効果は若干ではあるがあったようで、普賢の動きが少し鈍る。しかし禁鞭そのものの動きは変わっていない。

「これも駄目なの。だったらこれで！」

また地面に手を置き、氷を走らせる。以前公望が普賢とやり合ったときのように下から攻めようとしたようだが、無論それは地面ごと抉られ氷は届かなかった。

「はあ、やっぱり駄目か」

「のお、花鈴」

「はい？」

「氣になっておったのじゃが、そなた水の術を開発したのは良いが、もしかして気温を下げて凍らせることと、寶貝の水を凍らせること

と、地面を氷を走らせることしかできぬのか？さつきからずっとそれしかしておらんが・・・」

「え、そうですけど」

「・・・・・・・・」

弟子のきょとした返事に公望は無言のまま頭を下げ手を当てた。もう少し発想力があっても良さそうなのに、これではせっかく融通の利く氷の属性にしても意味がない。

「はぁ、もう少し発想力を活かさぬか。そなたの能力なら余裕じゃと何度も申しておるといふのに」

「では、どうしたら良いのですか？」

「そなたは宝貝によって水も操れるし、術によって氷も操れる。その二つを組み合わせたたり、また仙術と組み合わせたたりすることもできるのじゃぞ？この術はこれしかできないという固定概念を捨てる事じゃ。そうすれば、術の発動時間だって短縮して素早く相手を倒すことも容易」

「そう言われても・・・」

困ったように花鈴は腕を組んだ。それを見てしようがなく助け船を出すことにする。

「例えば、気温を下げて凍らせるにしても、これに風が合わさればより早く凍らせることが出来る。氣の力を用い仙術に氷の属性を組み合わせればその凍らせる力は何倍にと膨れあがるぞ。ブリザード

なんかはそうじゃな」

「ぶりざーど？」

「そうじゃ、仙術の中に大気を操る術があったであろう？」

「流々操自の術の事ですか？」

「左様。あれを使うだけでかなり変わってくるぞ？ブリザードだけじゃなく、虚空につららの刃を何本もだしそれをその術に乗せ自由自在に操るとか。試しにやって見よ」

「はい！」

言われるがままにまず虚空につららを何本もだし、その後印を組んで流々操自の術を発動させる。大気の流れに沿ってそのつららは自分の思ったように動かせた。

「わー！楽しい！」

「これ、喜んでないで操って攻撃して見よ」

空中で自由自在につららを動かして遊んでいた花鈴に指示をだすと、花鈴は分かりましたと言い普賢に向けてつららを打ち込んだ。しかし、それも全て弾かれる。

「お師様。やっぱり駄目ですよ？」

「当たり前じゃ。せっかく自由自在に動かせるのに真っ正面から打ち込んでどうする。そなたは陽動と言うものも覚えなくてはならん

な」

「陽動？」

「目くらましみたいなものじゃ。本来の目的を隠すために別のことを行いそちらに集中させるのじゃよ。それを使うだけで禁鞭は攻略できる」

それを聞き花鈴は直ぐに意味を理解したようだ。もう一度同じ術を使いつららを操ると同時に別の仙術で真っ正面から術を打ち込んだ。普賢はその仙術を弾いたが直ぐに倒れ込む。背中につららが刺さっていた。

「やったー！」

「うむ。まあ、そんな感じでやり方次第で力が及ばない相手でも倒すことは可能なんじゃ。しかしそなたの場合、別にそんな方法をとらなくてももっと簡単に倒せたのじゃぞ？」

「そうなんですか？」

「うむ。試しにもう一度普賢を出すからやってみよ」

そう言って公望は普賢をもう一度出現させた。

「どうやるんです？」

「そなた水を操れるなら、簡易的な雨を相手に与えることくらい出来よう？」

「え、ええ」

「では、雨を普賢に降らせ」

言われるがままに花鈴は宝貝を使い雨を降らせた。普賢の身体が濡れていく。

「次に、その雨をつららのように凍らせる」

「はい」

雨が凍りつららになって落ちていく。普賢はそれを必死に禁鞭で弾いていた。しかしあまりの数のつららを全て弾くことは出来ない。何本かずつ普賢の身体につららが刺さる。

「こうしているだけでもいずれ相手を倒すことは出来る。こっちの方が楽ではあるな」

「なるほど」

「ただ勝敗をさっさと決めたいのなら、決めての一手がある」

「なんです？」

「この今の段階で、気温を下げて凍らせるのじゃ」

「今ですか？」

「左様」

さっきは凍らせる事が出来なかったのにこの方法で相手を凍らせるのだろうかと首を傾げ不思議がっている花鈴だったがとりあえずやってみることにした。するとどうだろう、さっきとうって変わって普賢の身体がみるみる凍り倒れてしまった。

「ええ！なんで！？」

「水に濡れておったからじゃ。濡れている分凍るのが早いし、表面が凍らなくとも内部の体温が水に吸い取られ急激に下がるから生命を維持できなくなり、脳みそから冷えて凍死する。普通に気温を下げている場合、そなたの力量ではまだ絶対零度まで下げるのに時間がかかりすぎるし、相手が動いていれば余計体温が上昇して凍りにくい。しかしこのやり方なら瞬時に凍らせ凍死させることができる」

「凄いですね！」

まるで他人事のように目を輝かせて言っている花鈴にため息をつきつつ公望は続けた。

「そなたはせっかく姉から水を操る宝貝を貰っているんだから、それを活用しなくてどうする。しかも、なにげに氷属性術は仙術と組み合わせてもかなり使い勝手の良い術じゃ。そなたはもつとイメージを膨らませ発想力を豊かにする必要があるの。後、以前教えた転移術を使えばより確実に倒せる」

「転移術ですか？」

「そう、試しにやってみようか？」

「お願いします！」

「では」

公望は闘技場に上がりまた普賢を出現させた。普賢はかなりの勢いで禁鞭を振るっている。普通の攻撃はともじやないが通用なさそうである。花鈴はわくわくしながら公望の動きを見ていた。公望は飛燕を抜く。

「いくぞ。しっかり見ておれ」

「はい！」

公望は言った傍からその場から消えた。次に現れたとき、普賢の目の前に立ち刀が突き刺さっている。そしてその刀を抜くと普賢は倒れ込んでいった。

「これが転移術を使ったゼロ斬撃じゃ。刀の転移する位置を相手の身体の内蔵にすることによって切り裂く方法じゃな。回避はほぼ無理な技じゃ」

「凄いです！お師様！！！」

「なに感心しておる。これを出来るようにするために、わざわざあのときそなたにこの術を教えたのじゃぞ？少しは活用せぬか。これを使えば猫姫の時の防全布にだって対抗出来たのに」

やれやれと言った感じに花鈴のもとに歩み寄っていく。花鈴は術の凄さもさることながら、公望が自らの術を実際に使って相手を倒したことを見せてくれたことがよほど嬉しかったらしく、もう目を輝かせ羨望の眼差しで公望を見ていた。公望が己の術を使って相手

を倒すと言った行為は弟子になってから、以前この空間で完殺陣の術を見せて貰ったとき以来であったせいだろう。

「お師様！私、お師様の術もっと見たいです！」

「だーめ」

「ええー、なんでですか？」

「わしは秘密主義者だから。自らの手の内をさらすような真似はしたくはない。先にも言ったとおり、どんなものにも弱点はある。下手に見せて攻略されるとまた新しい術を考えなければならぬのでそれは面倒じゃ」

「良いじゃないですか、私にくらい見せてくれたって」

「そのうち機会があればの。それよりそなたはもっと発想力を豊かにする修行をした方が良さそうじゃ。やはりここでいろいろな相手と戦ってみるのも良いかもしれん。今度は師匠と戦って貰おうかの」

そうして次は大老君を出現させ、花鈴は稽古を続けた。さすがに大老君は易々とは倒さしてくれず自分がやられることが多かった。相手は重力を操り何倍何十倍と重力が掛けられ身動きが直ぐにとれなくなる。酷いときには何万倍もの重力を扱ったため空間が歪み、重力場が生まれ吸い込まれて跡形もなく消滅もした。現実世界だったら何回死んだことだろう。それでも戦いながら花鈴はいろいろ思いついたことに挑戦しどんどんと技の種類も増えていった。やつの事で互角にやり合えるようになった頃、公望が休憩を入れる。

「もともと師匠と同レベルの力量を持つと呼ばれるそなたがそんな

に苦戦してどうする。やはり実戦経験の少なさが問題か。いや、それよりそなた無駄な動きが多すぎるぞ。もっと最小限の力で最大限の効果を発揮せねば。どんなに非力なものでも強いものを倒すことは出来るぞ」

「そ、そうですか？」

「うむ。確実に急所を突くとかの。例えばこことか」

公望は何気なく腕にある急所、討結を突いた。すると花鈴の腕に激痛が走り痺れて動かなくなる。

「いッ！ いったぁー！ い！！！」

花鈴は腕を押さえて地団駄を踏む。

「なんで軽く突かれたただけなのにこんなに痛いんですか！？」

「それが経脈の急所というものじゃ。戦いにおいてこうやって急所を突くとより確実に早く相手を戦闘不能に落とせる。経脈の箇所によって、そこの機能が停止したり殺すことも可能」

「そ、そうなんですか」

花鈴はまだ痛みと痺れの取れない腕をさすりながら聞いている。

「まあしかし、この短期間で自分の実力をだいぶ出せるようになったのは良い成果じゃ。今日はこの辺にして、とにかくもっと発想力を付け氷術の応用技をもっと増やすと良い」

「はい、分かりました」

「では戻るか」

意識が飛び、現実の世界に戻ってきた二人はゆっくりと起きあがると縁側に並んで座った。公望はいつものようにたばこを吹かす。

「はあ、私もっと修行しないと駄目ですね」

「強さを求めるなら。ま、今のままでも十分強いから別にこれ以上強さを求める必要はない気もするが。現時点で既にそなたに敵う仙人なぞ早々おるまい」

「いえ、一人は確実に居ますよ」

「ん？誰じゃ？」

「お師様です！」

「いやわし勝てんから」

意気揚々という花鈴に公望は平然と答えた。それでも花鈴は何故かにこにことしている。

「勝てるとしたら竜吉辺りじゃないかの。そういえば竜吉はまだ戻ってこぬのか？そんな厄介な仕事が舞い込んできたのかの。火の粉がこっちにまでやってこなければよいが」

どうも嫌な予感がしてならない公望は眉をしかめながら空を見つめていた。

嵐の前触れ

しばらくして竜吉が帰ってきた。

「はあゝ、ただいまあゝ」

「おかえりなさい。竜吉様」

「おかえり。なにやら疲れておるようじやの」

「うむゝ。わらわ疲れたゝ。公、癒してゝ」

急によよと竜吉は公望に寄りかかった。

「ちょ！竜吉様！」

「癒してって、何をすれば良い？」

「良く花鈴にしてあげてる事をわらわにもやって」

「？」

公望は良く分からないといった感じの表情を浮かべた。花鈴は離れてくださいと必死に竜吉を引っ張っている。

「ほらゝ、抱きついたりとか、頭撫でてあげたりとか」

「なんじゃ、そんなことか。ほれ」

ギューッ！

「にゃ」

「竜吉様！離れてください！っていうか、なんで竜吉様そんな態度取ってるんですか！？竜吉様、人格変わってますよ。にゃって何です？」

「良いではないか。わらわだってたまには公に甘えたい。特に今日のような面倒な仕事がいってくると気持ちも暗くなるというものよ。そちはいつもこうしてもらっておるではないか。わらわだってしてもらってもよからう」

「よくありません！それは私の特権です！」

「いつからそちの特権になった？」

「最初からです！」

「これこれ、そんな事で争うでない。それで竜吉。面倒な仕事とはなんじゃ？もしやわしにも関係する事か？」

「うむ。それなんじゃが仙人界全員に関与することじゃ」

それを聞いて公望は溜め息をついた。嫌な予感がするときには大概当たる。良い予感は当たらないのにその辺が不平等だと思ったりする。

「そなたが珍しく師匠に呼ばれたと思ったらやはりな。わしの部屋に来い。話を聞こう」

公望は竜吉を促し自室に招きいれた。花鈴もついてくる。

「何が起こった？」

「隕石が降ってくる」

「何故分かる」

「未針がそう予測した」

「未針？ 竜吉様なんですかそれは？」

「わしも初耳じゃぞ？」

「うむ。未針とはな、大乙の師匠に当たる高碧が作った未来予測する宝貝じゃ。過去と現段階の状況の情報を集積しそれを基に起こりうる未来を予測するのじゃ。大老君はそれを参考に来るべき未来の対策や政を行っておる」

「未来なぞ完全には予測できぬであろう？ いかにも優れた宝貝とはいえ不可能な話」

「それはもちろん分かっている。あくまで未針はその可能性があるというものを一番高い確率ではじき出すものでしかない。だから、大老君もあくまで参考としておるとのことじゃが、今までその未針が予測した未来はほとんどはずれておらん。高碧は神界の極秘書を物を基に創り上げたと言っておったがわらわも詳しくは知らぬ。なにやら高碧の中でも最高傑作で膨大な量の情報から重複する未来を予測しているとか」

「ほお。それでは未来予測というより経験則と言った方が正しいかもしれぬな。しかしそんなものがあつたとは。確かにじじいの千里眼とそういう予測型宝貝があれば未来は読みやすいかもしれぬな」

「うむ。でじゃ、その未針が隕石が落ちてくると予測した」

「それが、仙人全員に関係するとはどういうことじゃ？」

「そこまで詳しくは分からぬのだが、その隕石。仙人に災いをもたらすらしい」

「確率は？」

「九十パーセントを越えた高確率じゃ」

「何時何処に落ちてくる？」

「今日の夜中。ここより五十キロ西に離れた場所らしい」

「そこまで聞いて公望は頭を掻いた。なにやら少し考えているようである。竜吉も花鈴も言葉を待つ。」

「仙人に災いをもたらすというのは、具体的には分からぬのか？」

「うむ。そこまではわからぬ。それで大老君と二人で今まで何が起こるのかを考え話し合っておったのじゃ」

「何かが起こってからでは遅い。そこまで分かってるなら対策が欲

しいが何が起こるか分からなければ対策も立てれぬ。かといって下手に情報を流せばあやふやな情報は仙人たちに無駄な不安を与え混乱をもたらす。結局結論のでないまま帰ってきたと言うところか」

「その通り」

「ふむ」

公望は眉をしかめた。大老君の取っている判断は正しい。不確定な情報の漏洩は人を混乱に陥れるだけだ。だから竜吉だけ呼び話をしたのであろう。しかし、その予測が確かならば何かが起こる前に対策はしておかなければならない。災いというならなにか被害があると言うこと。それなら被害を最小限に押さえる努力はする必要がある。災い・・・隕石その物による衝撃により物理的に仙人界が崩壊の危機に立たされる、あるいは落ちてからの別要素により何かが生じる。それとも両方か？

「竜吉。未針は隕石が災いをもたらすと予測したのじゃな？」

「うむ」

「隕石によってではないな？」

「お師様、同じ意味ではありませんか？」

不思議そうに公望の言葉を聞いていた花鈴が口を挟んだ。

「いや、同じように聞こえるが同じではない」

「未針は隕石がとしか言っておらぬ」

公望がまた考え出した。そう言う意味なら、先ほど考えていた前者の可能性は少ない。では、やはり落ちてきてから何かしら起こるということか。それなら、今すぐどうにか出来るものではない。落ちてきてから対処に回るしかないな。しかし落ちてから起こりえる問題とは？

「仙人界の気象が変わるという話でもないのだな」

「うむ」

「あくまで仙人に災いが訪れるという話なのだな」

「うむ」

「分かった。この話は、わしたち以外に誰か知っておるか？」

「いや、今のところ公たちと大老君以外は知らぬ」

「今はその方がよい。隕石が落ちてきて次第、動いてもさして遅くは無かろう。面倒くさいことは師匠に任せておけばよい」

「お師様は、何かなさらないのですか？」

「おそらく隕石落下と同時に十二仙の招集がかかる。そのとき師匠の判断を仰いでそこから情報を収集し動く・・・かもしれん」

「かもしれんって・・・」

「だって、面倒じゃからな」

ほっほっほと笑いながらたばこに火をつけた。

「ま、みんなが頑張ってくればわしは動かなくて済みそうじゃし。任せる」

「公は相変わらずじゃの」

「たまには物事に流されてみるのも良きかな」

公望はそう言いつつも頭の中で起こりえるあらゆる可能性と対策をはじき出そうと思考を巡らせていた。そして、一応葉智全に連絡を入れ、あることを頼んでおく。

その日の夜、公望は空を見上げていた。ほどなくして流れ星が見え西の方に落ちていったのを確認するとその日は眠りについた。そして、予想通り次の日の朝直ぐ公望のもとに招集が入ったのであった。

生きる故に摂取する。其の一

蓬莱山蓬莱島の一室、広く設けられたその部屋に十二仙達が集まっていた。

「皆に集まってもらったのは他でもない。昨夜ここより南西に六十キロほど離れた所に隕石が落ちた」

大老君が厳かに喋りかけている。事態は思った以上に深刻のようだ。

「わしは、その隕石のもとに偵察隊を組織し派遣したのじゃが全滅した」

「全滅？」

部屋が一気にざわめき、普賢が代表して発言をする。

「全滅ということは、その隕石。ただの隕石ではないということですか？」

「そうじゃ」

「全滅といったが、偵察隊はどのような状態になったのですか？」

公望が珍しく意見を言う。

「うむ。全滅といったが死んだわけではない。皆精氣を抜かれたように意識を失っておるのじゃ。かろうじて息はしているものの、昏睡状態から皆目を覚まさぬ」

「ふむ」

「唯一、意識を残したまま戻ってきた者の話によると、その隕石は白っぽく発光し近づいただけで皆倒れてしまったらしい」

「では、その発光がなにかしら意識を失わせる原因と見ていいのでしょうか？」

「うむ。今妖仁が言ったとおり、その光に当てられると力が抜けるようじゃ」

「光の照射距離は？」

「またも公望が発言する。」

「約百メートルほど。その隕石から百メートル以内の生物は皆精氣を抜かれるようじゃ。近くの植物も皆枯れていたらしい」

「その他に変わった点はありませんでしたでしょうか？単なる隕石ではないという事は、他に何かしらの作用がある可能性が」

「うむ、貴信。そのとおりじゃ。実はその隕石、どうやら生きておる」

「生きている？」

また部屋がざわついた。

「精氣を吸っているのは、その隕石が生きるための栄養としておるらしい。まあ生きているからといって動いているわけではない。単なる石ころにしか見えぬ。今分かっていてる事はこれくらいじゃな」

「今、何か隕石に対して調査、対策等といったことをなさっていますか？」

「しておるぞ、大乙。第二の偵察隊を派遣し、何か変わったことがあったら直ぐに連絡をよこすようにしている。それと同時に、周りの環境への影響、精氣を取られたものに対する人体の影響等も調べておるところじゃ」

「そうですか」

「その隕石。落下地点から移動したりしておるのですか？」

「公望。何を聞いていた。隕石は動いたりせん。よって移動しておらん」

「ふむ」

「まあ、差し迫って今すぐ何とかしなければならぬ問題ではないし、隕石も近づかなければどうということがないので緊迫するものではないのじゃが、知っておるものもいるように未針がその隕石は仙人に災いをもたらすと告げておる。故に、こうして集まってもらって何が起こっても対策が出来るようにと皆に警告を告げたのじゃよ」

「・・・」

「そういう事ゆえ、皆いつ何時でも動けるように気を配って普段の

仕事をしていたもらいたい」

「わかりました」

「では、解散」

大老君の言葉に呼応し皆ぞろぞろと部屋を出て行く。しかし、公望だけはしばらく腕を組みその場で眉をしかめていた。

「どうしたの？ 望ちゃん？」

「んー。ちとな、気になる事がある」

「何？」

「隕石は生きていって言ったな。そのために精氣を吸っている」と

「うん」

「本来生き物で、そういった糧を必要とするものは自分の食事のために何かしらの行動を起こすものじゃ。植物とて光をより当てるために葉っぱを移動させたり他の邪魔な草花を除外したりする。しかし、隕石となると、つまりは石じゃな。自ら動くことは出来んということじゃろ？」

「そうなるね」

「もしや、その隕石がゴロゴロと転がって餌を探すかとも思うたが、落ちてから一晩以上たった今でも動いた形跡が無い。そこが腑に落ちぬ」

「その隕石が動くって言いたいのか？」

「分らん。先遣隊の偵察連中をえじきにしたために、今は腹が満たされていて動かぬだけかも知れぬし。あんな大きなものが移動するとも思えん。しかし、おそらく間接的に獲物を狙って摂取行動に出る可能性はある」

「間接的に？」

「うむ。師匠の言うように本当に生きておるのだとしたらな。もしやすると、思った以上に厄介ごとになるやもしれんぞ」

「ふーん。まあ何かあっても僕たちは僕たちの仕事をするだけだよ」

「ふむ。相変わらず妖仁はマイペースじゃな。まあそこが良いところ

ろかも知れぬが」

「なんとかなるって。さ、行こう」

妖仁に肩を叩かれ公望もようやく腰を上げた。

「公望様。会議お疲れ様です」

外で控えていた風麒麟が公望を見るなり頭を下げる。

「なーに、大した用件ではなかった故にさして疲れたわけではない。
風麒麟のほうこそ外で待たせてしまったていつもすまんな」

「もったいないお言葉です」

「では、我が家に帰るとするかの」

「はい」

公望は風麒麟の背に乗り、さくさくと家に帰った。家では、花鈴と竜吉がなにやら揉めていた。

「帰ったぞ。これこれ、何を揉めておる？」

「あ、お師様お帰りなさい」

「公、お帰り」

「うむ。で、今度は何で揉めておったのじゃ？」

「お師様って甘いのが好きですよね!？」

「なんじゃ突然」

「公は、辛いものの方が好きじゃよの？」

「はん？」

「実は、お師様の好物の話をしてまして、どちらが好きなのかというので竜吉様と言いつ争っていたのです」

「どっちがより公のことを知っておるかということをお話しておったのじゃ」

「はあ？」

「で、公！辛いものの方が好きじゃろ？」

「だから、お師様は甘いものがお好きなんです！」

「あのお主たち。別にわしの好物がなんであろうとよいではないか？」

「よくありません！」

「よくない」

二人はまたも声を揃えて言い切った。

「・・・わしは、甘いものも辛いものも両方好きじゃ。そのどちらかに決めることはできぬ」

ため息混じりに公望は肩を落とした。

「じゃあ、寝るときはどちらを向いて寝られますか？」

「そんなこと考えたこともないわい」

「じゃあじゃあ」

そういつて、公望は二人から好みだとかなんだとかの質問攻めを受ける。しかしどれもはっきりとした答えを出せるような質問ではなく、頭を抱えた。

「もう良いではないか。すまぬが、いささか疲れておる故にわしはもう部屋に戻るぞ」

「あ、お師様」

「公」

公望は逃げるように部屋へと入っていった。扉を閉めふーっと息を吐く。それから、キセルを取り出すと火をつけ机に向かうと腰掛けた。

―どうも、隕石のことが気になる。当初、どうでもいいし、他の十二仙に任せればよいと思っておったが、生きているというのが気がかりじゃな。一度見に行った方がよいか？ いや、迂闊に近づいたり刺激を与えたら逆効果かもしれん。ならば―

公望は鉢巻を取ると、瞳を閉じ意識を額に集中した。額にある瞳が目を見開く。同時に公望の脳内にさまざまな風景が浮かび上がってきた。さらに意識を集中する。世界は飛ぶように動き回り、ある景色でピタリと止まった。

―ふむ。確かに白く発光しておるな。周りにいるのは偵察隊の連中か。もう少し良く見てみるか―

公望は視点をズームさせ隕石の表面を嘗め回すかのように見てみる。生きているとは言っても脈動しているわけではない。動いてい

る形跡は一切見られない。こうして見ても発光する以外ただの石のように思える。

そんなおり、隕石の表面から小さな小さな小石みたいなものが風か何かに煽られて地面に落ちた。公望は何気なしにその石に気が付き、落下していくその小石をじっと見つめる。

別に深い意味などなかった。ただ、小さな動きでも見落とさないようにしていたら自然と意識がそちらに向いたただけだったのだが、それが思わぬ収穫を与えた。

落下した小石。地面に落ちて転がった最初は単なる隕石の破片かと思ったが、なんと、地面に落ちて止まった途端、カタカタと動き出したのだ。

公望はその小石から目を離さない。

するとどうだろう。その破片は形をぐにゃぐにゃと変え、異形な虫のような生物になったではないか。そして、その虫はカサカサと地面を這いずり移動し始めた。

この光景を見た公望は一挙に血の気が引いた。他の部分もよくよく見てみると、他にも点でに破片が転げ落ち、いたるところで異形な生物が生まれていた。

この状態に偵察隊は気づいていない。

公望は、すぐさま瞳を開け千里眼を閉じると慌てて連絡用宝貝を手にした。

「もしもし！ 師匠！」

「なんじゃ公望。うるさい声を上げおって」

「すぐに偵察隊を引き上げさせてください！」

「何故じゃ？」

「何でもです！ 先遣隊の二の舞が起こります！」

「ちょっと待て、どういうことじゃ？」

「説明は後でしますからすぐに引き上げさせてください！」

「う、うむ」

大老君が公望の声に威圧されて返事を返したとき、大老君の偵察

隊と繋がっている連絡用宝貝が音を鳴らした。

「あいや、ちょっと待て」

すぐさま大老君は、その宝貝を手にした。そして、報告を聞くと同時にすぐさま引き返すように言い放つ。言い終えると再び公望の宝貝を手にとった。

「何故分かったのじゃ？」

「ということは、やっぱり犠牲者がでたんですね？」

「うむ。光も浴びておらんに急に倒れる者が現れだしたんじゃそうじゃ」

「遅かったかあ。あ！でしたら、偵察隊にもう一度連絡して、衣服等々を調べさせてください。そして、何も付いていない、何処にも何も入っていないことを確認してから戻ってくるようにと。もちろん、ある程度隕石から離れてから調べるようにですよ。すぐにその場を立ち去らせる必要があるのです」

「う、うむ。わかった」

大老君はまた偵察隊に連絡を取り、公望の言われたとおりに指示を出した。

「それで、公望よ。何故分かったのか。何が起こったのか。説明してくれぬか？」

「間接撮取が行われ始めたんですよ」

公望は、千里眼で見たことと自分の考えを大老君に述べた。

「つまり、隕石から生物が生まれて栄養を摂取するということか？」

「はい。今は小石程度の破片が変化した程度ですが、もし隕石の欠片すべてがそういう変化をするのなら、大きさによっては恐ろしい大きさの生物が誕生することになります」

「隕石そのものの大きさの生物が動き出すということか」

「いえ、それはないでしょう」

「どうということじゃ？」

「隕石そのものが生き物に変化したら効率が悪いということです。小さく分離して数で攻めた方がより効率的に広い範囲にいきわたる

でしょう？人海戦術ですよ」

「なるほど」

「今は、さしてエネルギーを必要としていないせいかな、それとも単に破片程度しか割れてないからかはわかりませんが、虫程度の大きさで済んでますが、私の予感が正しければそのうち人間並みまで大きい生物が大量に生み出される可能性があります」

「そうだったら・・・」

「まさに仙人の災いですよ」

「いかんの」

「とりあえず、十二仙踏まえ仙人、道士たちにレベル一戦闘配備に入ることを勧告するようにお勧めしますが？」

「うむ。そうしよう」

そうして、大老君はすぐさま十二仙に連絡を取り付け、仙人界にもふれを出したのだった。

生きる故に撰取する。其の一（後書き）

あとがきみゅーん。

凄くお久しぶりです！もしや、一年以上も放置することになろうとは。作者も設定等々忘れてましたよ（汗

いやいや、皆さん本当お久しぶりです。もう一つの作品を連載再開すると同時にまた書き始めましたわけですが、みなさんもうお忘れですよねえ。

そりゃあ、一年以上も放置されてたら忘れますよね。すみません。とりあえず、今後は最低でも一ヶ月に二話くらい書き上げるペースでやっていきたいと思えますので、またよろしくお願いいたします。不肖な作者ではありますが、なにとぞお付き合いのほどをよろしく申し上げます。

生きる故に摂取する。其の二

「ふ」

公望は連絡用宝貝を置くと深く息を吐いた。正直な話、こういう可能性も考えていなかったわけではない。新たなる生物の登場。宇宙から来た未知なる生物。そいつらに仙人たちが襲われる。

B級映画でよくありそうな、人類の滅亡を予見する事件。人間であつたとき好んで見ていたが、そういつたことが起こる可能性はない、所詮作り話だという考えは一切持っていなかった。宇宙は広い。地球という小さな世界しかしらぬ人間たちが、宇宙生物の存在を否定するなど井の中の蛙も良いところだと思っていたからだ。

事実、この世界ですら、自分からしたら作り話みたいな世界である。仙人だの道士だの宝貝だの、そんな存在がいるなんて人間だった当時にわかに信じがたかった。

だから、隕石から生物が誕生して間接摂取を始めたこととか、隕石そのものが生きているだとか聞いても別に、ああやっぱり程度にしか感じなかった。

それなのに慌てたのは実は別の理由がある。

隕石の欠片は虫のような姿に変貌した。それが公望を慌てさせたのだ。公望は周りから虫も殺せぬお人よし、平和主義者と言われているが、それは比喩的な意味ではないのだ。

公望は、本当に虫を殺すことが出来ない。人間だったときから蚊ですら殺すことが出来なかった。そのため、虫は大の苦手。存在を見るのも殺されるのを見るのも身の毛がよだつほど気持ち悪いと思っっている。

だから、もしあの虫みたいな生物が一斉に大群となって襲ってきたらと思うと血の気が引いたのだ。

「うう、あんな気持ち悪いものがたくさんやってきたら、わしショック死しそう」

軽く身震いすると、なんとか今回の事件で自分が関わらない様にならないものかと思案し始める。あんな気持ち悪いものの相手などしてられるかというのが本音だ。

「わしはもう十分やった。うん、警告も出したし今後起こりうる予測も伝えた。そうじゃ、わしにしては十分仕事をした。よし！後は他の者たちに任せて、ほとぼりが冷めるまでどこか避難していよう」
公望はそう決めると早速出かけることにした。そそくさとばれない様に部屋の外に出る。外には先ほどまでいた花鈴も竜吉もいない。

―チャーンス―

そのまま足音をたてないまま速やかに移動を開始した。風麒麟の元に行く。

「おや、公望様。いかがいたしましたか？」

「しー！！静かにしておくれ風麒麟」

「どうなさいました？」

「ん？いや、ちょっと出かけようと思ってな」

「分かりました。で、どちらに？」

「特に決めておらん。ちょっと旅がしたくなったのじゃ」

「旅でございますか？」

「左様。よって、すぐに出かけるぞ」

「はあ」

風麒麟は公望の命に従い部屋の外に出る。そして、公望がさっと風麒麟にまたがったとき後ろから声が聞こえてきた。

「あれ？お師様？」

「ひっ！」

「????どうなさったんですか？」

「な、なんでもないぞ」

「どちらかにおでかけですか？」

「うむ」

「どちらに行かれるんです？」

「む。それは・・・」

「それは？」

「まだ決めておらん」

「はい？ 決めておらんって散歩に行かれるって事ですか？」

「いや、その、散歩とは違う」

「？」

不思議そうにこちらを見ている花鈴に対ししどろもどろと返事を返す。花鈴は普段と違い何か隠しているような態度の公望を余計不思議そうに見上げていた。

「あー、そのなんじゃ。うん。花鈴。達者で暮らせ！」

「え？ お師様？」

そっくり残すと公望はさっさと風麒麟に声を掛け家を出て行った。
「え？ え？」

後に残された花鈴はわけが分からないと言った感じにキョトンとしていたが、公望の言葉がようやく頭に染み込んできて急に慌てた。

―達者で暮らせて……。まるでそんな一生お別れみたいなこと仰るなんて。どうしようどうしよう―

ワタワタと動き回るがどうして良いのかが分からない。

「どうしたのじゃ？」

なにやら騒がしいと竜吉が部屋から声を掛けてきた。

「た、大変です！ お師様が、お師様が！」

「む？ どうした！ 公に何かあったのか！？」

花鈴の慌てぶりを見て竜吉も何があったと花鈴の傍に駆け寄ってきた。

「お師様が行っちゃいました！」

「どこへ？」

「わかりません。今しがた出かけられたんですけど、なにやら様子がおかしくて……。私に達者で暮らせよってお言葉を残して。まるで、もう会わないようなそんな言葉を残して行かれてしまいました！！」

「どうということじゃ？」

「私にも分かりませんよお！」

花鈴は泣きそうな声を出している。

「達者で暮らせとは……。確かにまるで今生の別れみたいな物言
いじゃな」

「えう。私、お師様の気に触ることでもしたんでしょうか？」

「分からぬが……。公。もうこの家に戻ってくる気はないと言う意
味か？何故わらわには一言も言っていってくれぬのじゃ」

竜吉も悲しそうに呟いた。残された二人に重い空気がのしかかる。
「うえ……。うえーん」

とうとう花鈴は泣き出してしまふ。そんな折、花鈴の泣き声を聞
きつけジュニアがやってきた。

「ご主人様、どうしたのですかあ？」

「じゅ、ジュニアあ」

「なにかあったのですか？そういうえば、父上もなにやら公望様にい
きなり呼び出されてでかけられましたけど」

「ジュニアよ。そなた何か聞いておらぬか？公が何処に行ったかと
か？」

「はい。話ではなにやら公望様は旅に出たくなったとか仰っており
ましたが」

「旅？」

「はい」

「いつ戻るとか聞いてはおらぬか？」

「それは存じ上げませんが……」

「そうか」

それを聞いて竜吉は声のトーンを落とす。いつ戻るかも分からぬ
旅。達者で暮らせよと言ったのであったのだったら、やはりもう戻
らぬのかもしれん。そういう思いが竜吉の中で渦を巻いた。

―行くなら、何故わらわも連れて行ってくれなんだのじゃ、公。
あまりにも突然ではないか……。―

「わ、私、お師様の後追いかけます！ジュニア！」

「はい」

花鈴は直ぐにジュニアの背に乗った。それを竜吉が止める。

「ちょっと待て花鈴。追いかけるにしても何処におるのかがわからぬのじゃぞ？」

「それでも行きます！竜吉様はいかないんですね！？」

「阿呆言う出ない。行くに決まっておろう。ただ、行くなら行くで支度くらいせねばと言うておるのじゃ。隕石の件もあるゆえに。しばし、待て」

そう言つて懷から連絡用宝貝を取り出そうとしたとき、ちょうどそこから音が鳴った。

「む？誰じゃ？」

「わしじゃ」

「大老君か。ちょうど良いときにかけてきた。わらわ達、ちょっと旅に出るゆえしばし仕事から離れるぞ」

「何を冗談抜かしておる！そんなことより公望はおらぬのか？さっきから連絡しておるのに出ようとせぬのじゃ。何をしておる？」

「公は旅に出かけたぞ」

「はあ？この一大事にあの馬鹿弟子は何をしておるのじゃ！」

「だから、わらわ達もこれより後を追って旅に出るつもりじゃ」

「竜吉！そなた馬鹿弟子と長く付き合いだしたせいで馬鹿がうつつたのではないか？何を寝ぼけたことを言っておる。今は隕石の件でレベル一戦闘態勢に移行しておる状態じゃぞ？今後、態勢はさらに強化していく。各自持ち場を動くことは許さん。旅など以ての外じゃ！」

「戦闘態勢？そんなに隕石は危険なのか？」

「そうじゃ。そなたには先に話を持ちかけておるであろう。なのに何を勝手なことをしようとしておる」

「いや、しかし公が・・・」

「馬鹿弟子のことなぞ放っておけ！とにかく、今は持ち場を動くこ

とはまかならん！本来なら蓬莱島にそなたに戻ってきてもらいたいくらい切羽詰ってきておるのじゃぞ？」

「じゃが」

「じゃがもいもない！とにかくそこで待機じゃ！」

ブチっ！と連絡が途絶えた。

「・・・」

「私、行きますよ？」

「駄目じゃ！」

「なんでですか！？」

「大老君の話では、レベル一戦闘態勢に移行しているらしい。今動くことは出来ん」

「そんな！って、レベル一戦闘態勢ってなんですか？」

「うむ。仙人界に危難が迫っている際に発動される警戒状態じゃ。

レベルは三段階で分けれており、そのまえに臨時態勢、待機態勢とあつての。レベル一戦闘態勢は、臨戦態勢のままで危険と判断したら即座に状況に関わらず攻撃してかまわぬと言う状態をさす。本来臨時態勢か待機態勢があつてそれから戦闘態勢に移行するのじゃが・・・いきなり戦闘態勢とは。さすがに動けぬな」

「でも！だからって・・・」

「仕方ない。わらわだって直ぐにでも旅立ちたいが。今はさっさと事件が解決するのを待つしかない」

「そんなあ」

「まったく、こんなときに公は何処に行こうというのじゃ」

出かけたけれど出かけられないというもどかしさに駆られながら花鈴と竜吉はぐっと耐えていた。

その日の夜。あるひとりの仙人が仲間と酒を飲み意気揚々としていた。

「戦闘態勢がくあゝあゝ、なんぼのもんじゃくいーうい。タラリラーラー」

陽気に歌いながら霊獣に乗り夜空をのんびり渡る。夜風が気持ち

良い。気分が良くなってさらに歌を歌う。

「あゝよいよいっとお！」

そんな折、目の前に黒い物体が浮かんでいた。大きさは三メートル程か？なにやら横に長い翼のようなものがあるが暗くて全長までは分からない。ただ物凄く大きなものだった。

「ん？なんだありゃ」

仙人が目凝らしてみようとした瞬間、その物体は凄い勢いでこちらに向かってきた。

「おわっ！」

とっさに体をひねり避ける。しかし、肩に何か違和感を感じた。熱い感触だ。触りながら見てみると、ざっくり爪で引き裂かれたかのように傷が深く付いている。それと同時に急に痛みが体を駆け巡る。

「つてえ！やりやがったなあ」

幸い、傷は仙人にとって致命的ではない程度だった。そしてすぐさま持っていた宝貝を手を持ち、戦おうとしたが……。

「ん？な、なんだ・・・世界が・・・ゆが・・・」

最後まで言葉を発しないうちに仙人は力なく体を傾け、そのまま霊獣から真逆さまに地上に落ちていった。

その黒い物体は、しばしその場に浮かんでいたが、どこかに飛び去っていつてしまった。

それからさして時間が経たぬうちに蓬萊山に普賢がやってきていた。

「大老君様！大変です」

大老君の部屋に普賢が慌てて入っていく。

「おお。普賢。どうした？」

「最初の犠牲者が出ました！」

「なんと！」

大老君は見ていた書類を机に放り投げると、立ち上がった。

「して、どういう状況じゃ？」

「はい。負傷者は一名、千角という仙人です。千角の靈獣の話によりますと、なにやら黒い物体が襲い掛かってきて戦おうとしたらしいのですが、意識を失い地上に落下したとのことですよ」

「容態は？」

「左肩に鋭い刃物でえぐられたような傷がありましたが、大した傷ではありません。仙丹レベルで傷自体は回復をいたしました。しかし、意識は一向に戻る気配はなく、体中から精氣が感じられません。落下時、下の川に落ちたことにより一命は取り留めた模様ですよ」

「むう」

「詳しくは、靈獣からお聞きになると良いでしょう。おい、入って来い」

普賢に言われ、狐のような姿をした靈獣が入ってきた。

「は、はじめまして大老君様。私、狐魔と言います」

「うむ。どういうことか説明してくれ」

「はい。主人と邸宅に戻る途中、大きな黒い塊が目の前にいまして、突然襲い掛かってきたのです。主人はなんとか交戦を試みましたが、なにやら世界が歪むと言った直後私から落ちてしまったのです。その物体はその後その場から立ち去りました。私は直ぐに主人を川から引き上げ近くの普賢様宅に助けを求めた次第ですよ」

「うーむ」

「あ、あの、なんでしたら、話を聞くより直にそのときの映像をご覧になりますか？」

「うん？そのようなことができるのか？」

「はい。私の能力で、見たものを投影することができます」

「では、頼む」

「はい」

そう言って狐魔は、目を見開くと目から光を発した。光に照らされた壁に状況が映し出される。

大老君と普賢はしばし無言でその映像を眺めていた。

「以上ですよ」

言葉と共に、狐魔は目を閉じ光を消す。

「ふーむ。見た限りじゃと、かなりの大きさじゃな。全長は分からぬが身の丈だけで三メートルはあろうか？」

「ええ。そうですね。しかも大きさの割りに動きがかなり速い」

「傷はそんなに深くなかったのじゃったな？」

「はい。道士ならいざ知らず仙人にとってあの程度の傷は大したものではないかと」

「となると、どんな些細な傷であれひとたび攻撃を受ければ、たちまち精氣を喰われるということか。やっかいじゃの」

「千角もかなり修行年数を積んだベテランの仙人。こうもやすやすとやられたとなると、レベル一では、まかないきれないかもしれないかもしれませんね」

「うーむむ。あい分かった！普賢。レベル二に移行させるぞ。あと、普賢邸の近く半径十キロを特に重点的に警戒に当たらせよ。そこから波紋上に五キロ間隔で捜索を行ってくれ。直ちに見つけ出すのじゃ」

「かしこまりました」

普賢は頭を下げると部屋を出て行った。

一方その頃、公望は・・・。

「さてと、しばしここでゆるりと過ごすか。ここなら見つかるまい」
ある山の崖に開いた洞穴の入り口に風麒麟と共に座っていた。

「公望様、何故旅に出るなどと仰ったんですか？」

「うーん？そうじゃの。風麒麟には言っておいた方が良くかもしれない」

「はい」

「今、隕石が落ちてきておる。で、そこから生物が生まれて生き物の精氣を奪っておる」

「はい」

「わしは、それが怖くてな。係わり合いになりたくないのので逃げてきたのじゃよ」

「さ、左様ですか？」

「左様」

「公望様ともあろうお方がおびえてられるのですか？」

「そうじゃ。わしだって怖いものはある。いや、世の中怖い物だらけじゃ。なのでそういったものとはなるべく係わり合いを持たんようにしたいのじゃ。なので、ほとぼりが冷めるまで身を潜めておることにした」

「はあ」

「ほおっほおっほお」

キセルをふかしつつ、のんびりと笑う。そんな折、遠くでなにやら飛んでいるものが目に入った。

「ん？なんじゃあれは？」

よくよく目を凝らすと、頭に角を生やし口からは鋭い牙と舌をむき出し、上半身は蟬のような昆虫に似た体つき、下半身は獣っぽい姿をした不気味な生き物が大きな羽を広げて羽ばたいているのが分かった。

「うげっ！キモっ！」

公望は言うが早いか、風麒麟を引っ張って直ぐに洞穴の奥に姿を隠した。

その異形なる者はこちらに気づくことなく去っていく。

そっと外を見て、ほーっとため息を付いた。

―あれが、生まれ出でし者か・・・うわあ、キモい！―

ぶるっと身震いをする、ゆっくりと壁にもたれかかったのだった。

生きる故に摂取する。其の二（後書き）

あとがっきーん！です。

なんか、仙事の方はあまり更新ペースを上げないつもりだったんですが、書き始めたら止まらなくなってきた作者です。

今回は、ちょっと公望の駄目ッぷりを発揮せねばと書き上げたつもりなんです、読み返してみると、まだ甘いなあと思ったりします。一応駄目仙人設定の癖に、結構機転利かせたりなんたりとお役目を果たしてるのでそんな公望は公望じゃない！と思ってるわけでございますよ。できれば、もっと駄目にしてやりたいと思っております。

あと最近、ラブコメの割りに萌要素が足りないとか思ったりもしてるんですが、萌要素を入れるってむずかしいです。もっと花鈴と竜吉を動かさないと駄目かなあなんて。

今後どうなっていくか分かりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

生きる故に摂取する。其の三

千角が襲われてから丸一日。戦闘態勢はレベル二へと移行され、隕石から生まれた異形なる者の搜索が続けられていた。あれからまだ発見に至っていない。

偵察隊を引き上げさせたため隕石の詳しい状況が分からず、公望の千里眼より精度の劣る大老君の千里眼能力では完全な状況を見ることもできない。そこで大老君は、自ら隕石の元に赴いてみた。わずか一日二日の間だったが隕石にはめまぐるしい変化が見受けられている。いや、隕石そのものというよりも隕石の周りの状況が一変していた。隕石の周りには、けたたましい数の異形な虫程度の小型生物が蠢いており隕石を包み込むようにその群れが飛び交っていた。少しでも何か状況を掴もうと大老君は恐る恐る近寄ったが、一定距離内に入った途端、その虫たちは一斉に大老君に襲い掛かってきたため踵を返して逃げ出した。ある程度離れると虫たちも追ってはこない。どうやら縄張り範囲があるようだ。しかし、もはや近づくことすら困難な状態である。

「どうしたものか……。しかし腑に落ちん」

離れたところから隕石を眺めつつ大老君は考えをめぐらしたが、ひとつの疑問が浮かぶ。

「おかしい。公望の予想では間接摂取を行い始めたという話じゃったな。じゃから現に千角は襲われたはず。なら、何故あの虫の様な生き物たちはあの場合から離れぬ？あれでは摂取する相手など捕まはずもない。現に近づけば襲ってくるが離れば追うことなくまた元の場所に帰る。まるでこれは、守っているかのようじゃ」

大老君は「ふむ」と髭を撫でた。どういふことなのか。公望の話聞き、自分の考えていたことは、あの隕石から生まれた生物は皆この世界の生き物を襲いにやってくるのである。しかし、仙人の住まう地まで襲いに来たのは、確認されているだけでも一匹だけ。

こんなにも生物が生まれ出していたのならとつくに襲いに来てもおかしくはない。そう思ったのだが・・・。

「何か意味があるのじやろうか。やはり守っているということか？うーん、わからんの。そもそも間接摂取の話は公望が言い出したこと。あやつの話を聞きたいところじゃがあやつめどこに行きおったのやら。肝心なときに役に立たん奴め。ほんに馬鹿弟子が！」

大老君は公望を罵るとその場を後にし蓬萊山へと戻っていった。変わらず異形なる者の搜索が続けられている中、公望の家に来訪者がいた。普賢である。

「ちーっす！」

「あ、普賢様！いらっしやいませ！」

「おお！元気になってっか？花鈴。ちよっと様子を見に来たぜ。つか、いつまでも普賢様なんて硬い呼び方するなよ。一応おまえの兄なんだから、気軽に兄貴なりお兄ちゃんなり呼びゃあいいのに。敬語もやめてよお」

「いえいえ、いくら兄上様になられたからといって私のようなものがそんな気軽に呼び出来ませんよ」

「おまえ、変に硬いところあるよな。まあ、花憐の妹らしいつつえばらしいか」

「お姉様はお元気ですか？」

「おう、元気だぜ！最近お前来ないからたまには顔見せろってよ」

「そうですか。そういえば最近お姉様と会ってませんね。近々会いに行こうかな」

「行ってやれ行ってやれ。あいつも喜ぶぞ。っと、まあ、世間話はこの辺にして公望いるか？公望に用があつてきたんだが」
明るく出迎えていた花鈴の表情が一気に暗くなる。

「あの、お師様は」

「あ？いないのか？」

「・・・はい」

「どこにいやがんだあいつ？」

「その、旅に出られまして・・・」

「旅い？いつ？どこに行った？」

「先日突然旅に出ると言われて出て行かれまして、いつ戻ってくるかどこに行かれたかさっぱり見当もつかないんです。もしかしたら、戻ってこれないかも・・・」

「あー、それでか。妙にお前が暗くなったと思ったら。はーん。なるほどね」

「私も後を追いかけて旅に出たいんですけど、今、戦闘態勢になってるせいで動けなくて」

「はあ、やれやれだ。実はそのことであいつに話が合ってきたんだけどよ。レベル二に戦闘態勢が移行したつうのに、あいつ誰とも組んで動いてないだろ？。十二仙は二人一組になって行動、その他の仙人、道士は四、五人で行動するようにって決まりなのに。通りで十二仙で一人余りが出るわけだ」

「すみません」

「お前が謝ることじゃねえ。気にするな。ったく、人がせっかく一緒に組んでやろうと思って来たって言うのに相変わらずマイペースな奴だな。まあ、俺は別に一人でも良いんだけどよ」

「・・・」

「おいおい、そんな顔すんじゃないって。大丈夫。白桜童子に頼んで行方捜してもらってから公望の奴あ直ぐ見つかるさ。な！」

普賢は元氣のない花鈴の頭をぐりぐりと押すと励ました。それでも、花鈴はまだ寂しそうな表情を見せていた。

「・・・はい。お願いします」

「でもまた、なんであいつ旅になんか出たんだよ？あいつだって今の状況がどれだけやばいかくらい分かっているはずだろうに」

「わかりません。もしかしたら、お師様は私のことを嫌いになっ行ってしまったのかも知れません・・・」

ぼそぼそとか細い声で言う花鈴の言葉を聞いて、普賢は反対に大声で笑った。

「あっはははは！そりゃないない。絶対にない！」

「な、何で分かるんですか！？」

「お前、嫌われるようなことしたか？」

「い、いえ！確かにご迷惑は散々かけてるかもしれませんが、そんな嫌われるようなことなんか！」

「だろう？お前の気持ちは知ってるからな。お前がそういうことをしないっていうのも知ってる。だったら公望の奴がお前を嫌う理由なんてないだろう？俺の知る限りあいつは理由もなく嫌うような奴じゃない。それはお前だって分かってるだろう？」

「そ、そうですけど。で、でも！もしかしたら、知らず知らずのうちに教師様の嫌いなことをしてしまっていたのかもしれないですし・・・」

「仮にそうだとしても、そういう理由も告げずに去るような奴じゃないだろ？そんな突然理由なく消える奴ではないさ」

「そ、そうでしょうか？」

「ああ」

「でしたら、なんでお師様は旅に出られたんでしょう？」

「さあ、それは俺にもわからねえ。案外、隕石の件で逃げたのかもな」

「逃げた？」

「おう。奴らとやりあうのが怖くなったのか、それとも仕事が面倒くさいと思ったのか。それで逃げたんじゃねえの？」

「普賢様！普賢様でも言って良いことと悪いことはありますよ！！！お師様に限ってそんなことないじゃないですか！」

普賢の発言に気を悪くしたらしく、花鈴は凄い剣幕で普賢を怒った。普賢はさすがにびっくりして苦笑いをする。

「じよ、冗談だよ！冗談！そんなムキになるなって。俺が悪かった、でもよ、仕事が面倒くさいっていうのは間違っていないだろう？」

「ま、まあ、そうですけど・・・」

「今回の事件は、思った以上に厄介だ。それこそすげー面倒くさい。」

俺ですら面倒くさいと思うからな。だから、公望もきつとそう思ったのかもな」

「んんんん」

そう言われて花鈴は先ほどまでお師様に限ってと言っていたものの、断言できなくなってきた。仕事をするのが嫌でどこかに行く。普段の公望を見ているとその可能性も否定できない。

「まあ、なんにせよ早く見つけ出さ。正直今一人で動くのは危険だからな」

「そうなんですか？」

「ああ。相手の力量はまだ確定的に分からんが、問題なのは傷一つでもつけられたら精気を奪われちまうってことだ。もし一人でやりあつて、そんな状態になったら命取りだからな」

「そ、そうですか」

普賢にそう言われて、花鈴はだんだん不安になってきた。お師様なら大丈夫だろうと花鈴は信じているが、お師様でも傷一つくらいはつけられるかもしれない。そうになったらお師様は……。

花鈴の脳裏に意識を失って倒れている公望の姿が映った。

「わーわー！どうでしょう、普賢様！！」

「落ち着け。とにかく白桜童子にさっさと見つけてもらうから、それまでお前も竜吉様と離れないようにな」

「は、はい」

「そういえば、竜吉様の姿が見えないが。部屋にいらっしゃるのか？」

「はい。ちょっと体調が優れないそうなので」

「へー。大丈夫なのか？」

「わかりませんが、多分」

「そっか。早く良くなれると良いんだがな」

「はい」

「まあ、じゃあ、俺もう行くな。仕事の途中抜け出してきたからよ」

「はい。お気をつけて。お師様の件お願いします」

「おう。お前も元気出せよ。じゃ」

そう言って普賢は家を出て行った。花鈴は公望が早く見つかることを祈ることにした。

一方、体調が悪いと部屋にいた竜吉はベッドに横になり塞ぎ込んでいた。

「うう。公の馬鹿……。旅立つ前にわらわにだって一言くらい」
布団に包まり顔をうずめながらぶつぶつと文句を言っている。自分にだけ何も言わずに去ってしまった公望に対して拗ねていたのだ。

「……。やはり花鈴の方が大事じゃというのか……。」

ぎゅっと目をつぶり自分にそんなことはないと言い聞かせる。しかし、その不安は消せなかった。むしろどんどん膨らんでいく一方だ。

「……。公……。」

ぽつりとつぶやくと同時に、一滴の涙が枕を濡らした。

生きる故に撰取する。其の三（後書き）

あとがきですよ。がおー！

更新しだして第三話目になりました、「生きる故に撰取する」正直、一年以上放置してたので見にくる人なんていないだろうなあと思っていたのですが、奇跡的に興味本位でものぞいてくれる方がいらっしやっるようなので、ありがたいです。こんな駄作に付き合ってくださいる方がいて本当感謝いたします。

ちよつと、今回は短めかもしれません。実は本編とは別にショートストーリー的な閑話休題話を入れようかと思ってそっちに頭を使ってたら本編ストーリーがまとまらなくなってきたんですね（汗
ちまちまとした出し方になるかもしれませんが、お付き合いの程よろしく願います。

でわゝ

幕間く時に平和な仙人界く

「公望ちゃん！ひさしぶりにゃ〜！」

今日ものどかな仙人界。いつものように仕事をものぐさものと適当にやり、物凄く重要なキセルでの一服タイムに浸っていた公望の元に元気な声でやってきた来客がいた。

公望を見つけるなり猛ダッシュで走ってくるとガバツ！と公望に抱きつく。

「公望ちゃん、元気してたかにゃ〜？」

「こ、これ！いきなりひつつくでない」

「ちよつとあなた！何ひつついてるんですか！お師様が嫌がってるでしょ〜！」

いきなり抱きつかれて戸惑っている公望とムツとしてその者を注意する花鈴。

「悪いね、望ちゃん。突然押しかけちゃって」

「いや、良いよ。妖仁も相変わらず元気そうで何よりじゃ」

公望はなんとか抱きついてる者から離れようと身をよじりつつ、ニコニコとこちらの光景を見ている数少ない親友に挨拶をした。

「で、今日は何用で参った？」

「ん〜。実はね、猫姫がどうしても望ちゃんに会いたい会いたいって駄々こねるからさ。僕も久しぶりに話でもしにいかうかと思ってさ」

「左様か」

「迷惑だったかにゃ？」

抱きついたまま大きな瞳で公望の顔を見上げる猫姫の頭をポンポンと叩く。

「迷惑ではないぞ。遊びに来るなら大いに結構。おぬしも元気そうで何よりじゃ」

「うみゅ！私、元気元気！」

「妖仁の元、良い子にしておるか？」

「うみゆ！してるよ。えらいえらい？」

「うむ。えらいぞ」

「むふう」

猫姫は公望に褒められて嬉しそうに喉をゴロゴロ言わせている。

「ちよっと、いつまで引っ付いてる気！？お師様からはーなーれーなーさーいーい！！」

「にゃ！」

公望と抱きつき続けている猫姫のやりとりに、いい加減我慢の限界に來た花鈴は猫姫を無理やり公望から引っぺがした。

「ちよっと、何するにゃ！？」

「あなたこそ何勝手に抱きついてるんですか！お師様が嫌がってるのが分からないの！？」

「そんなことないにゃ！ね？公望ちゃん」

「え、あ、いやー。嫌というわけではないが、キセルをふかしておるときに抱きついたりなぞしたら危ななろう？種火が落ちて火傷したらどうする？ん？」

「うみゆ。ごめんなさい」

公望の言葉に猫姫は素直に謝った。しかし、直ぐにまた抱きつく。

「私を心配してくれるなんてやっぱり公望ちゃんは優しいにゃ！」

「じゃから、危ななろうと言っておる」

公望はキセルを横にサッとずらす。

「むふう」

「いやいや、すっかり猫姫は望ちゃんになついてるね」

「これじゃあ、おちおちキセルもふかせんがのお」

「ほら！お師様が困ってらっしゃるじゃないですか！」

「むふう」

花鈴の言葉に耳も傾けず、猫姫は公望の胸に顔を擦り寄せた。これがさらに花鈴の癪に障る。

「いーいーかぁーげーんーにいー！」

「なにやら騒がしいと思っておうたら、来客じゃったか公」

殺氣立たせ、寶貝を握り締めた花鈴の横に部屋から出てきた竜吉がやってきた。

「竜吉様、お久しぶりです」

「おお。妖仁久しい。息災で何よりじゃな。それとそっちの……ム！？……女子はどなたじゃ？」

竜吉は公望に抱きついている猫姫を見て若干声に棘を含ませて尋ねる。

「うむ？　そうか、竜吉はこやつとおうたことなかったんじゃったか？　こやつは……」

公望が猫姫を紹介しようとしたとき、猫姫の口調が急に変わった。「あら、お婆さん。長く生きすぎで耄碌でもしたのかしらん？　これだから年増は」

それを聞いて竜吉の態度も変わる。さも嫌そうに声を出した。

「誰かとおもうたら、なんじゃ下劣な淫乱娘か。その姿はなんじゃ？　ロリ趣味とやらに鞍替えしたか？　まあ、もともと子供な知能じゃったからの。はっ、今になって身の程を知ったというわけか」

「そんなわけないじゃなあい。年食ってる割にはそんな貧相な発想しか出てこないなんて、本当無駄に生きてるわよねん」

「長く生きていて色仕掛けしかできん能のないそちに比べればマシな生き方をしたような気がするのお」

「周りから綺麗綺麗とおだてで持ち上げられて、ずいぶん勘違いしてる割りに、色仕掛けの一つもできない奥手さんより数倍私はマシだと思っわん」

「仙人のくせに欲望におぼれるとは、所詮もとは獣よの」

「女性に生まれながら男性を相手に出来ず、手すら握れないなんて可愛そうな純情ちゅあん」

「黙れ、ケダモノ」

「うるさいババア」

二人の間で殺伐とした空気が流れ、辺りの気配がすこぶる痛い。

二人の気の摩擦だけで文字通り火花が散りそうだ。

これを見ていて、さっきまで自分も殺気立てていた花鈴はどうして良いかわからなくなり、顔引きつらせつつカラ笑いする。

妖仁はそんな二人を見ながらもニコニコとしながら平然と立っており、公望もまた気にもせずのんびりとキセルに口をつける。

「妖仁、そなたそんなところで立っておらずこちらに来て座ったらどうじゃ？」

「うん。ありがとう」

促されて妖仁は公望の隣に座る。

「それから、二人とも見知った仲なのは良いことじゃが、わしの家で喧嘩はするでないぞ？ 郷に入れば郷に従ってくれ」

「うみゅう！ わかっぱ！ 公望ちゃんが言うなら私言うこと聞かう。でもお、この行かず後家はなんていうかにゃ？」

「こ、公がそう言うならわはもとよりそんなつもりは」

竜吉は慌てて体裁を取り繕った。そしてゆっくりと公望の横に腰をかける。

「で、公。何故、この者がここにおるのじゃ？」

「遊びに来たらしい」

「遊びに？ 本当か？」

訝しげに眉をひそめた。

「にゃによ。私が遊びに来たら駄目にゃの？」

「いや、そち確か、大老君の話では、ついぞの騒ぎの罰で自由はある程度束縛されて軟禁状態にあるのではなかったか？」

「ん？ そうなのか？ 猫姫」

「・・・うん。実はそうなんだけど、公望ちゃんに会いたくて妖仁に無理を言ったのにゃ」

「それは、いかな。すまん、妖仁。そなたに押し付けてしまったせいで無理をさせてしまったの」

「ううん。望ちゃん気にしないで。確かに大老君様から軟禁しろと言われてるけど、猫姫はあれから本当良い子にしてるし、僕の言う

こともちゃんと聞くからさ。望ちゃんに会うくらいさせてあげても良いかなあって思って。本当会いたい会いたってずっと言ってたし。実質、僕に世話は任せられてるから僕の判断で大丈夫なら大丈夫だよ」

「そうかあ。それならよいのじゃが。まあ、もしあのクソじじいから文句の一つでも言われたら直ぐにわしに言えよ？わしがきちんと対処してやるゆえ。猫姫の件では、あのじじいに散々な目に合わされたからのお。少々痛い目にあってもらわんと」

「あはは、あの時は災難だったね」

「ごめんによ。公望ちゃん。私のせいで」

「それはよい。気にするな猫姫。仕事を押し付けたあやつが悪い。しかし、猫姫よ。もし気にする気持ちがあるならば、その気持ち少しでもそなたのわがままの犠牲になった文の国の者たちに向けてやるのだぞ？」

「うみゅ！大丈夫だにゃ。私あれから毎日毎日懺悔してるもん」

「懺悔したからといって犠牲になったものが帰ってくるわけではないがの」

少し意地悪いことを涼やかな顔をして竜吉が突っ込む。それを聞いて猫姫の表情が少し暗くなった。

「・・・わかってるみょん」

「これこれ、竜吉。あまりいじめるでない。確かに犠牲者が戻ってこんし罪も消えることはないが、その罪の意識を感じることが大切なのじゃ。誰にとっても罪悪感と言うものが一番重い罰みたいなものじゃからな。それを感じるか感じないかで行いは変わる」

「まあ、そうじゃが」

「それにあれはもともと防全布の副作用によるもの。猫姫だけの意識ではどうしようもなかったものじゃ。すべてがすべて猫姫に罪があるわけではない。むしろ、防全布のような危険な宝貝を作り管理を怠ったわれわれ仙人に罪があると言える。わしらとて同罪じゃ。じゃから猫姫一人罪の意識に苛まれる必要はないのだぞ？」

「うみゆ。公望ちゃん。ありがとう！大好きい！！！」

猫姫は抱きついて腕にさらに力をこめた。

「あ、ちよっと！だからいつまでひっついてるつもりですか！」

それを見て、竜吉の気に当てられていた花鈴が思ひ出したかのようにつま先がしに掛かる。竜吉もまた皆の手前平然としていたが、こめかみ辺りを引きつらせていた。

「そういえば、公。なにやら猫姫と仲が良いみたいじゃのお？」

若干怒気を含んだ声で公望に尋ねる。

「ん。仲が良いと言うほど良い訳ではないと思うが」

「その割りに、猫姫が抱きついていても嫌がる素振りは見せぬのじゃな？そなた女子が苦手ではなかったか？」

「苦手じゃぞ？苦手ゆえにこういうときどうして良いのかわからるので、実は非常に困っておる」

「じゃったら、このような者の手振りほどけばよからう？」

「それもそうなんじゃが、なんかつかれておるみたいでな。無下に扱っては好意を足蹴にしてしまう気がしての。それにこやつ猫じゃし」

公望は猫好きだ。正直な話、女の子として見ているより猫のメスとして見ているところが強い。

「公！甘いぞ！こういう輩にははっきりと言わぬと分からぬ」

「そうですよ！お師様！」

「な。に？竜吉ちゃん、珍しく熱くなってるじゃない？もしかして、妬いてるのお？」

「な！ちが！」

竜吉はみるみる顔を赤くした。そしてプイツとそっぽを向く。猫姫は意地悪そうにクスクスと笑った。

「凶星だったみたい？」

「これこれ、あまり茶化すものではないぞ」

公望は叱りつつも、つつい昔飼っていた猫のときの癖で頭を撫でてやったりしている。猫姫は気持ちよさそうにまた喉を鳴らした。

「お師様！」

「なんじゃ？」

「・・・なんでもありません！！」

何事もないかのように聞き返す公望に花鈴もまた悔しそうにそっぽを向いた。

「？」

「クスクスクス。やっぱり望ちゃんの周りはおもしろいね」

「そうかのお？ わし自身はそんなにおもしろいわけではないが」

「見てる僕らは楽しいよ」

「ふむ。ならまあいいのかなの？」

クスクスと笑っている妖仁に対しキョトンとした感じで公望はまたキセルをふかした。

「ねえ。公望ちゃん」

「ん？ なんじゃ？」

「公望ちゃんって彼女いないにゃん？」

「うむ。今更じゃな。それはそなたも知っておろう？」

「私、もっともっと良い子にしてるから。そしたら軟禁解いてもらえるよね？」

「うむ。むしろクソじじいに言ってもう解いてもらってもよいかもしれないな」

「あのねあのね。そしたらさ、私を・・・」

「ん？」

「公望ちゃんのお嫁さんにしてにゃん」

「は！？」

「な！？」

この猫姫の発言に花鈴と竜吉は声をあげた。

「駄目かにゃ？」

「んゝ」

「ダメダメダメっ！！ 駄目に決まっていますよ！！！！ なに寝ぼけたこと言ってるんですか、あなたは！」

「そうじゃ！そちのようなケダモノと公が釣り合う分けなからう！
！」

「むう何よ！私、公望ちゃんのこと好きなんだもん！好きな人と結ばれたいって思うのは当然じゃなくいい？」

「何をいけしゃあしゃあと！」

「そちは男なら誰でも良いのであらう！」

「あらあ？そんなことないわよん」

「大体、そちのような子供に公が振り向くわけあるまい！」

「そうかしらん？公望ちゃんはこの姿好きよね？」

「好きと言われても・・・」

「じゃあ、公望ちゃん。私の大人バージョンと今の姿とどっちがいいによ？」

「むー。わしはロリコンではないが、あの変に妖艶なクネクネした姿に比べれば今のほうがよっぽど良いと思う」

「お師様！」

「公！」

「ほら」

「で、では、公！わらわとこやつ。どっちが良い！？」

「え、あ、それは・・・」

「お師様！私とだったらどっちが良いんですか！？」

「だから、それは・・・」

「お師様！」

「公！」

「公望ちゃん」

三人に言い寄られて公望はたじたりなり冷や汗が出てきた。こういうのは良く分からない。恋愛経験どころか女性との付き合い自体ほとんどなかった公望にはどう答えて良いのか、なんと言えば穏便に収まるのか見当も付かない。おろおろとしてしまい、妖仁に救いを求めちらりと見たが、妖仁は反対側を向いている。なにやら肩が震えていた。

「・・・あ！妖仁！そういえば、見せたいものがあつたのじゃった！」

「えゝ？何？」

妖仁は、何事もないかのように聞き返す。

「こっちじゃこっち。ほれ、皆すまんがどいてくれ」

「あ！」

「ちよっと公！」

「あれ、公望ちゃん？」

公望はスクツと立つと妖仁の腕を引き、家の奥の方へ入っていった。扉を閉め、ふーっとため息を付く。妖仁は隣で必死に笑いをこらえていた。

「・・・そなた、こうなることが分かって連れてきおったな？」

「くつくつく・・・あっははゝ。はゝ、そんなことないって！」

「嘘をつけ！」

「いやいや、本当だよ。まさかこんなに荒れるなんて思ってもなかった。うん。本当。いやゝ、望ちゃんが困るところなんて久しぶりに見たよ」

「困るなんてものじゃない。正直、一番最初に猫姫に抱きつかれたときからすゝく困っておった。まさか、あの猫姫の態度。あれもそなたの悪知恵か？」

じとーっと妖仁を見る。妖仁は必死に手を振っていた。

「違う違う！猫姫を連れてきたのは本当に彼女が行きたがっていたからだよ。猫姫さ。ああ見えて結構繊細なんだ。ずっと罪悪感に囚われて自責の念に駆られてたし。家でも元氣なくてさ。でも、望ちゃんの話をするときには嬉しそうだったから。なんか、あんなにひどいことされても助けてくれて、本来なら封じられるはずだったのかばってくれたのがよっぽど嬉しかったらしいんだ」

「ふーむ」

「ほら、かつおぶしの事覚えてる？あの、みんなで迫って猫姫が泣いちゃったときにあやすために望ちゃんがあげたかつおぶし」

「おお、あれか。あれがどうした？」

「あれさ。猫姫、まだ大事に持ってるんだよ？宝物だ！とか言ってるのかな？そんな大したものじゃない、ただのかつおぶしなんじゃが」

「猫姫にとってはそれだけ望ちゃんが大きい存在だって事だよ」

「そうかあ？わしは小さいがなあ」

「クスクス。望ちゃんらしいよ。とにかく、だから今日連れてきて猫姫があんな態度取ってるのは単に嬉しかったからだと思うよ」

「なんか、照れるな」

公望は慣れないことにしばし頭を掻いた。

「あはははは、良かったじゃない。生まれて初めて女の子にモテたよ？」

「あれは、モテた、ではなく懐かれた、が正解じゃ」
肩を落とし軽く手を上げる。

「まあ、なんにせよ。相手してあげて。そのために連れてきたんだし」

「うむ。まあ、どんな理由があるにせよ、遊びに来たのなら大歓迎じゃ。最近仕事もたるくてな」

「それはいつもでしょ？」

「いつも以上にたるいのじゃ。ちょうど娯楽が欲しいと思っておったところよ。そういうわけで、今日は久しぶりに飲むぞ」

「いいよ」

「実は、見せたいものがあるというのは逃げる口実ではなく本当にあるんじゃないよ。しばし待っておれ」

そういつて、公望は台所に向かいあるものをとってきた。手にピンを持っている。

「何これ？」

「むふふ。この間、人間界に行った時に良い酒が手に入ったのじゃよ。こういうときのために取っておいた」

「へー。楽しみ」

「今日は仕事など忘れてゆるりと飲み明かそうぞ」

「うん」

「さて、そろそろ戻った方がよいかの」

公望と妖仁は再び三人の待つ庭先へ戻っていった。そこでは、先ほどと変わらず竜吉、花鈴、猫姫の三人がギャーギャーと言いつけ合っている。

それを見ながらやれやれとため息を付く公望を見て、妖仁はまたクスリと笑って肩を叩いたのだった。

今日も今日とて平和な仙人界である。

幕間く時に平和な仙人界く（後書き）

あとがきです。

どうも、作者です。

今回、本編とは別個のショートストーリーを書いてみました。前回のあとがきでも書いたと思いますが、これを書きたくて本編の方の話が全然まとまっておられません！本編楽しみにしていた方、申し訳ございません！

今回の話は、人間界騒動があつてからそこそこに時間の経った話。今の「生きるが故に摂取する」に入るちょっと前くらいの話だと思つてくれれば良いと思います。

猫姫をとにかく出したくてですね。竜吉と絡ませたらどうなるんだろうとちよつとやってみたかっただけですよ。竜吉と猫姫は一応犬猿の仲と言つた感じでしょうか。水と油みたいな位置づけをしたつもりですが、うまく言つたような気がしませんね（汗

本当はもっとこう、泥沼的にぶつけたかっただけですけど、作者の発想力が足りずにかないませんでした。

でも、ああいうキャラもいるとかしましさがよりまして良いかなあとおもいます。華があるし。

猫姫は今回ショートストーリーで出していますが、いずれまた本編でも登場させようと思つています。

そのときはもっとドロドロと昼ドラ並みに泥沼になれるようにしたいなあなんて思つてます。

今後もうこういった幕間の話は書いていこうと思ひますので本編とは違つた楽しみ方が出来れば良いと思ひます。

読んでいただきありがとうございます。それではまた。

生きる故に摂取する。其の四

夢を見た。どこか場所は分らない。何か大きく黒い見たこともない変な生き物がいる。その生き物と公望が対峙していた。

公望は刀を握り荒い息遣いをして服がボロボロに破けていて、生き物は鋭い爪をガチガチぶつけ音を鳴らしながら口からよだれを垂らしている。

公望がその生物に向かってなにやらしゃべっているが何をしゃべっているか聞き取れない。しゃべりながらその生物に斬りかかるが、公望の刀は相手の爪でなんなく防がれる。そして、その刀は払い落とされ、生物の鋭い爪が公望を切り裂いた。

切り裂かれた身体から鮮血が迸り、公望は力なく倒れこむ。

「は、花鈴・・・すまぬ・・・」

最後の言葉を言い残し公望の身体は光に包まれ消えていった。その言葉だけがはっきりと聞こえた。

「お師様ー！！！」

ガバっ！と花鈴はベッドから起き上がった。体中に汗をかいている。時刻は真夜中を過ぎたところ。

目からこぼれ落ち濡れていた頬を拭い、汗にまみれた服を着替えると部屋の外に出た。空には綺麗な月が輝いている。その月を見上げながら今見ていた夢を思い出す。やけにリアルな夢。

「・・・」

じっとしていられず、ジュニアの寢床に向かった。

「ジュニア起きてる？」

「はれ？ご主人様どうしたんですか、こんな夜更けに？」

「あのね、ちょっと出かけたいところがあるんだけどいい？」

「はい、いいですよ」

ジュニアは寢床から起き上がると無理やり起こされたのを気にも

せず明るく返事をした。花鈴はジュニアの背にまたがる。

「それでご主人様。何処に行くんですか？」

「わからないけど、お師様の行きそうなところを探してくれないかな？」

「公望様の行きそうなところですか？うーん。わかりました。とりあえず思い当たるところを飛んでみますね」

「お願い」

ジュニアは花鈴を乗せ家から出ると、空を颯爽と駆けていく。その間、花鈴は何処か暗かった。ジュニアは自分の主の雰囲気を感じ取り気を使って声を掛ける。

「ご主人様、なんか元気ないですね。お疲れですか？」

「ううん。そうじゃないんだけど」

「寝れないんですか？何か悪い夢でも見られましたか？」

「・・・うん」

ジュニアの鋭い指摘に花鈴は力なく答えた。

「やはり、公望様がいないとご主人様はどこか元気ないですね。僕、そんなご主人様は見えて辛いです」

「心配かけてごめんね、ジュニア。とにかく、今はお師様を何とか見つけたいの」

「わかりました。不肖ながら僕精一杯探します」

依然として元気のない花鈴を励ますかのようにジュニアはスピードを上げた。そして、公望が行きそうな場所を手当たりしだいに探して回る。しかし、公望の姿は一向に見つからない。

「・・・本当にお師様何処に言ったんだろう」

花鈴はポツリと呟きながら、また夢のことを思い出していた。もしかしたら、夢のように襲われてもうこの世にいないのでは？とそんな不安が心を支配する。

―そんなことない！お師様に限ってそんなこと！―

頭を振り、必死に夢のことを忘れようとする。しかし、不安はやはり消えなかった。

「ご主人様、他に僕は思い当たるところないですよ？何処に行きますか？」

「うーん。とりあえず、適当にその辺飛んでもらえる？」

「わかりました」

「ごめんね。無理につき合わせちゃって」

「そんなこと気にしないでください。僕はご主人様のお役に立てて嬉しいですから」

「ありがとうございます」

ジュニアは、いえいえと微笑むとまた空を駆け抜けていく。

しばらく空を飛び回っていると、少し先でなにやら浮遊している物体がいた。キョロキョロと公望を探していた花鈴の目にその物体が映る。

「あれ？もしかして、お師様！？――」

花鈴はそちらを向くと目を凝らした。期待に満ちた目でその物体を見る。しかし、暗闇の中月明かりに照らされて映し出されたのはまったく違うものだった。

見たこともない変てこな物体。いや、動いているから生物だろう。まさに夢で見たような生物。その生物は、まだこちらに気づいた様子もなく、悠々自適に空を飛んでいる。

「あれが、隕石から生み出されたとか言う生き物かな？」

花鈴は最初、あちらが気づいていないならそのまま移動して普賢に報告しようと考えた。今は一人。普賢の話では一人では決してやりあうなど言われていたからだ。自然と連絡宝貝に手を伸ばす。しかし、連絡宝貝を手にしたところで別の考えが浮かんだ。いや、考えと言うより感情かもしれない。

――あんな生き物のせいでお師様が……。夢のようなことになったら私は嫌！――

そう思った瞬間、体中に憎しみが駆け巡り、知らず知らずのうちに印を組んでいた。

「牙狼遊戯！」

高レベルの攻撃用仙術を唱えると、まだこちらに気づいていない生物に向かって放った。狼の姿をした氣が物凄い勢いでその生物に向かって駆け、喰らいつく。

「そのまま飲まれちゃえ！」

狼の姿をした氣は、生物を銜えたまま上下左右と飛び交っている。そして数十秒後、ぐちゃっ！という音と共に噛み砕かれたその生物は四散した。

―お師様に害を加えるやつはみんな私がやっつけるんだから！―
生物の残骸が宙を舞うのを、今までの花鈴には考えられないほどの憎しみのこもった目で見つめていた。

公望を傷つける存在を倒したということ少しは安堵を感じた花鈴だったが、そんな折、急に後ろから嫌な氣配を感じた。ねちっとまとわり付くような殺氣。

条件反射で横に飛ぶ。もちろん着地地点にはジュニアが直ぐに移動している。飛んだ花鈴の横をすれすれで何かがかすめていった。着地して殺氣を感じたほうを見る。そこには、今倒したはずの生物がいた。

「え？なんで？普賢様の話じゃ、一匹しかいないって話じゃ・・・」
花鈴の疑問をよそにその生物は再び花鈴に襲い掛かる。鋭い爪が花鈴の身体を切り裂こうとした。すぐさま、寶貝を持ちその爪をはじく。

「むむう！どれだけいるか知らないけど、お師様に危害を与える存在は私が許さないんだから！」

そう言って、爪をはじいた衝撃で距離をとるとそのまま先ほど組んだ牙狼遊戯の印を組む。

「あんたなんか、さっさといなくなっちゃえ！」

再び、生物に向かって氣によって作られた狼が襲い掛かった。先ほどと同じように狼は異形な生物に噛み付く。

しかし、先ほどとは違う展開が起こった。花鈴にしてみれば、さっきの生物がこの術で倒せたのだから大丈夫だろうと思って術を発

動させたのだが、なんと目の前にいる生物は牙狼遊戯を打ち消したのだ。

狼の牙から逃れ、異形なる者は再び花鈴に視線を向ける。

「うそー！」

「ぐるるるる」

低い唸り声を上げ、異形なる者はじりじりと距離を詰めてきている。

「なんでさっきの術が効いたのにこいつには効かないのよ！」

花鈴は宝貝を握り締めた。手には汗をかいている。正直今放った術、牙狼遊戯は攻撃用仙術の中でも最高レベルに属する術だ。それが同じ生物のはずなのに効かないとはさすがに花鈴も焦った。

「やばっ！ひとりで相手するには危険だわ」

直感的に花鈴は相手の力量を把握した。そして、それと同時に、恐怖を拭い去るかのように身体が自然と異形なる者へと攻撃を開始していた。しかし、振りかぶった氷の刀は異形なる者の爪でなんなく受け止められる。そして、その反動で宝貝は弾き飛ばされた。

「あっ！」

花鈴の声と同時に、鋭い爪が花鈴に振りかかる。

「やられる！ー」

花鈴はそう思うとギュッと目を瞑った。しかし、次に聞こえたのは身体を切り裂かれる音でも、迸る鮮血の音でもなく、太い悲鳴だった。

恐る恐る目を開ける。

すると、異形な生物の身体になにやら水の刃がいくつも突き刺さり、異形な生物は腕を振りかぶった状態で力なく地面へと落下していった。

「危なかったの、花鈴」

声のしたほうに振り向く。そこには竜吉がいた。

「あ！竜吉様！」

「大丈夫か？」

「は、はい」

「なにやら、夜更けにそなたが出て行くのがわかったのだな。心配になって後を追ってきたのじゃが、大事に至らなくてよかった」

「あ、ありがとうございます」

「ほんに、今戦闘態勢レベル二に移行しておることくらい承知であろう？なのに、一人で出歩くなぞ自殺行為じゃぞ？それとも、自分の実力なら大丈夫とも思ったか？」

若干厳しくかつ呆れた感じの態度で竜吉は話す。

「い、いえ、めっそうもない！実は・・・」

花鈴は夢で見たことを話した。公望が異形なる者と戦っていたこと、そして、やられ消えてしまったこと。それを思ったらいてもたってもいれらなくなってしまったこと。

「そうか。うむ。そちの気持ちは分かる。わらわもそういう気持ちになるじやろうし、実際そういう不安は常にある」

「そうですよね」

「しかし、だからと言って今一人で動くのはあまりに危険じゃ。いや、だからこそ一人であろう公望のことを心配するのじゃが。うゝむ。確かにもどかしい」

「はい。もう心配で心配で・・・」

「ふむ。では、とりあえず今回のことを報告した後、やはり無理を言っても二人で公を探しに行かせてもらえるよう掛け合って見るか」

「はい！」

「なにせよ。今日はこれ以上外を出回っているのは良くあるまい。いったん家に戻ろうぞ」

「はい。わかりました」

そういつて二人は家に引き返していったのであった。

生きる故に撰取する。其の四（後書き）

あとがきですによるーん。

はい、どうもこんばんわ。ただいま酒に溺れグデングデンになっている作者です。

お酒はあまり好きでないんですが、最近飲まなきゃやってられないという気持ちが強くなりまして、荒れ気味でございます。コップ一杯で酔いつぶれる寸前なので、本当弱いんですけどね。

まあ、それはさておき、今回も短めになってしまいました。幕間以降かなり時間が経っていたので練りこんだ長い話を書けるかとも思っていたのですが、何故か二月に入って、話がちつともまとまらない状態になってうまく書き上げられないんです。余計なことを考えすぎてるからかもしれないですね。

ちなみに最近考えていることは、「恋を意識する基準は何か？」です（笑）

いつもいつも中途半端な駄作になってしまって申し訳ございません。それでもお付き合いしてくださる皆様に本当感謝します。

今後不束者ですがよろしく願います。

それでは、また次回お会いしましょう。

生きる故に摂取する。其の五

その日は久しぶりに機嫌が良かった。あの日、自分とは比べ物にもならない若輩でちんけな道士に踊らされ不覚にも捕まってしまったときから、どうも気分はあまり良くなかった。自分のような強く気高く高貴な存在があのようなひよっこごときに惑わされたのが高すぎる自尊心を傷つけ、割り切れないもどかしさがずっと心に残っていたのだ。

気晴らしにと広い空を飛んでも中々その靄は晴れることが無い。昔のように我が物顔で飛ぶことはできない。

しかし、今日は違った。連なる山脈を抜け、雲を切り、風のように飛んでいた時、目の前に見知らぬ物体を目にした。生まれてこの方、この仙人界で知らぬものは無いと自負していた自分であったが、そんな自分でも今まで見たことのない物体。虫のような獣のような異形な形をしたそれ。その物体はあろう事か、自分の行き先を遮るかのように横をゆっくりと飛んでいる。

最初見たときは、珍しい生き物がいると興味が湧いた。しかし今は違う。自分のような高貴な存在の道を塞ぎ、なんの礼儀も払わず我が物顔で目の前を通り過ぎようとしている。その傍若無人さに怒りを覚えた。

「我の行く手を阻み、理を通さぬとはなんたることか！」

怒りに任せ太い声で怒鳴るが、その生き物は気にもせずそのまま目の前を通過していく。その無視した態度に余計腹が立ち、飛ぶスピードを上げるとその生き物に向かって突進していく。異形な生き物は、自分に向かって凄い勢いで飛んでくる存在に気づき無言でそちらを見ていたが、近寄ってくるにつれ爪を伸ばし返り討ちにしてやろうと言わんばかりに手を振りかざした。

その態度に余計に腹が立ち、さらにスピードを上げると異形なる生き物が爪を振り下ろすよりも早くその者に喰らいつく。銜えられ

た異形なる者は、抵抗を試み噛み付いている口元に爪を引っ立てる。その瞬間、喰らい付いた者は、なにやら体中から力が抜ける感じがして思わず獲物を離しそうになる。しかしそれ以上に、自分に無礼を働いただけではなく傷まで負わしたこの者に対する怒りが勝り、気力で獲物を丸呑みにしてしまった。

するとどうだろう。今まで気分が優れず、さらに傷をつけられたときに力も抜けた感じがしたものが、一変して気力体力共にみなぎってきた。まるで長年修行を積み仙力を蓄えた仙人を食したかのようなそんな感覚。

長い間味わったことの無いこの感覚に、気分は一転し今日は機嫌がすこぶる良い。そういうことがあり、気分上場で晴れやかな空を満喫しながら飛んでいると目前に見知った人影が写った。

その人影は今まで自分の気分を害していた根源であったので、普段なら顔も合わせたくないと思うところだったが、今日は食したせいか気分が良かったため素通りするところを自分にしてはありえないことであったが、自らその者のところに降下して行っただ。

「ほんに水辺で過ごすひとは気持ちが良いのお」

「左様ですね」

「こうものんびり出来るとすべてがどうでもよくなるわい」

公望は、手を上に上げ座りながら背伸びをするとその手を後ろに置き支えに使い、目の前に広がる湖を眺めた。横では風麒麟が同じように湖を見ている。湖はエメラルドグリーンに輝き綺麗な風景をかもし出していた。

「やはり仙人界はいいの。自然に溢れ、どこも景色が良い。こんなに澄んだ湖を見れるとは自分の国では思いもせぬかったわ」

「しかし、公望様。確か公望様の住んでらした日本にもこのように綺麗な景色はあったと聞き及んでいますか？」

「うむ。確かにあるにはあったが、ここまでエメラルドに輝くほどに澄んだ水がある場所など限られたおった。その上、戦争や地殻変動でほとんどは消えてしまったらしいの。見に行くにはそれなり

に条件が必要であつたし、中々お目にはかかれぬかつた」

「左様でしたか」

「うむ」

そう言いつつ、景色を楽しんでいた公望の手からなにやら感触が伝わった。

「ん？なんじゃ？」

違和感を感じ不思議そうに手を顔の前まで持ち上げて見てみるとそこに、小さな小さな蟻のような虫が公望の手の甲の上を歩いてる。それを見て公望は血の気が引き背筋に寒気が走った。

「う、うわっうわぁー！ー！ー！」

慌てて手を振りその虫を追いつまう。虫はどこぞへと飛ばされてしまった。

「どうしましたか！？公望様！？」

突然の主の叫びに風麒麟は戸惑い声を掛ける。当の公望はさっと立ち上がりその場から少し下がると手を振りながら身体や辺りの地面を探るように見ている。

「どうしたのですか？」

「いや、今虫がわしの手に・・・」

風麒麟に再び問われ慌てながらなんとか言葉を返しつつもなにやらビクついた感じで公望は虫の乗っていた手を拭いている。

「虫・・・でございますか？」

風麒麟はそんな公望を不思議そうに見ていた。

「くう。自然が多いのは良いが、やはり虫はおるのじゃな」

「当然でございます。この自然の中、虫はどこにでもおるものではないですか？」

「ううう。い、いや、なんでもないが・・・この場所に他にも虫はおるか？」

「・・・見たところありませんが」

「そ、そうか。ならよい」

辺りを再三見渡し、虫がいないことを確認すると、公望は安堵し

つつ再び座った。そんな折上から声が聞こえた。

「こんなところで何をしている？」

「ん？」

太く大気を揺るがすような声に反応し、公望は上を見上げた。そこには大きな大きな一匹の龍がいた。

「おお！ ひさしいな！」

公望は龍を見上げ嬉しそうに声をあげたが、肝心の龍は少し嫌そうにため息を付いた。その息が公望の髪を揺らす。

「こんなところで何をしていると聞いているのだ」

「ん？別に深い意味など無い。ちよいと旅をしておるものでな。その足がてら寄ったまでのこと」

「ふん。良いご身分だな」

「そうでもないぞ？そういうそなたこそ何をしておるのじゃ？」

「ここは、私のテリトリーぞ？我が何をしてようが、勝手なこと」

「ああ、そうじゃったな。そうか、ここは雷華のテリトリーじゃったか」

「今更何を。しらばくれおって」

「いや、本当に気づかなかったんじゃ。何の気なしに寄っただけじゃからな」

「まったく、せっかく気分が悪かったのが治ったというのにお前に会って再び不愉快な気分になる」

「そういうな。わしとて好きで嫌われるようなことをしたわけではない」

「おまえのようなちんけな道士に捕まったのは私の一生の恥。我とてあのときどうかしておったかと思えん」

「そうじゃとわしも思う。そなたを捕まえられたのはまったくの運じゃわい」

公望はカッカカと笑った。それを見て雷華は呆れたようにまたため息を付いた。正直、道士に捕まったことは自分の中でありえないほどプライドを傷付け、先ほどまでずっと気分の悪い日々をすご

していたのだが、どうも公望を見るとそこまで怒る気がしなかった。本来なら、ここであつたが百年目と復讐がてら喰らうてやりたい気持ちもあつたのだが、公望を見ているとそんな気もなぜか失せて馬鹿らしくなってくる。

「ん？　そういうえば、なにやらおまえ氣の量が増えているようだが、仙人になつたのか？」

「うむ。そなたのおかげでな。晴れて仙人になれた」

「そうか。ならば是非とも喰らうてやりたいところだが……。どうやらそう簡単に喰えそうにないな」

「怖いことをいわんでくれ。そなたに襲われたら今のわしでも一発で喰われてしまう」

「ふん。冗談だ」

肩をすくめ怯えた感じに返す公望に、雷華は鼻で笑って返した。実際問題、仙人クラスになるといかに龍とてそう簡単に喰らうことはできない。仙人なりたてならどうとでもなるが、今の公望にはとても一筋縄で行く気はしなかった。もとより公望に対しては道士の時点で捕まっているのでどこか勝てる気がしない。あの時は油断があつたと言いつつ、訳したとしてもやはり自分はこのちっちゃな生き物に負けたのだ。龍は氣高く自尊心が強いが一度負けた相手には素直に従い負けは認める。それが例えどんな形でも、自分の氣分を害し続ける要因になつたとしてもだ。

雷華は相変わらず何を考えているのか分からない男だと思ひながら公望を見る。

「それで、旅の目的はなんだ？」

「ん？」

「旅をするには目的があるものだろう？」

「んー、まあ、逃げるための旅というところかの」

「逃げる？　なにから？」

「自分に襲い掛かってくるものからじゃ」

「なんだと？」

この公望の発言に雷華は気を悪くした。自分ほどの存在をもひれ伏させた公望が、何かから逃げるということが雷華のプライドに再び傷をつけたのだ。

「なんだ。その相手はそんなに凄い相手なのか？」

「いや、凄いかどうかはわからないのじゃが」

「わからないのに逃げてるのか？」

「うむ。まーなあ」

公望はお茶を濁すかのように言葉を発する。雷華はそれが気に喰わない様子であるとともに、その相手のことに興味を抱いた。

「どんな相手だ」

「どんなと言われているのお」

「我より優れた存在ということか？」

「いや、それは無いと思うが・・・」

「・・・。はつきりせんな。何を隠している。きりきり白状しろ」

いまいち返答をごまかそうとする公望に雷華は強く言い放った。しばし公望は考えたが、口を開くと今の仙人界の状況と今自分が置かれている状況の説明をした。

生きる故に摂取する。其の五（後書き）

あとがきですよ。にゃおん！

どうもお久しぶりです。二月は全然更新できませんでした。まあなんとか書いてみました。

今回の話はもっと長く先まで書いてから更新するつもりだったんですけど、次ぎ書けるのがいつになるか分からない状況なので、途中の状態でさっさとあげちゃいます。まあ、今の話は生きる故に摂取する全体の話なので、部分部分でもいいかなあと。（よくないだろ）最近、感性のかの字も働かない上に時間が無くて書いてる余裕なんてさっぱりですよ。一度一日くらいゆっくりとした時間が欲しいと思います。

そういえば、全然関係ないですが、節煙って難しいですね。禁煙じゃない時点で駄目だとは思ってますけど、一日五本までって決めても、何故か一箱近くあけちゃうんですよ。意志が弱いのは筋金入りです。

いつか、タバコをやめれる日がくるでしょうかね。

では、そんなこんなでまた次回お会いしましょう。

それでは

生きる故に摂取する。其の六

「と、そういうわけじゃ」

公望は、今仙人界で起こっていることを掻い摘んで説明した。雷華は事の次第を理解したようで、聞き終わると長いひげをなびかせゆつくりと鼻から「ふーん」と息を出した。一見するとさして興味も無いような素振りではあったが、尻尾を振ってペチペチと地面を叩いているところを見ると、どうやら気にはなっているようだ。

「つまり、その隕石からわけの分からん生き物が生まれていると」

「そうじゃ」

「その生き物が仙人たちを襲いに来ていると」

「うーん、直に襲いに来ているかは知らんが、その可能性はあるということじゃ」

「しかし、仙人に災いをもたらすのだろうか？」

「災いが、襲われるという意味と言うわけでもなからう。そんな直接的ではなく間接的かもしれんし。あくまで予測じゃ」

「ほおーお」

公望は、現時点で既に生まれ出でし者が仙人を襲ったという事実を知らない。事が起こる前に逃げ出しているからだ。雷華は、またゆつくりと鼻から息を出した。本人は普通に呼吸しているつもりだが、その大きさ故に鼻息ひとつもかなりの突風だ。目の前にいる小さな公望を容赦なく吹き飛ばそうとする。公望はそれに対してかなり踏ん張って飛ばされないようにとじていたが、そのことを決して雷華には言おうとしなかった。公望なりの敬意の表れといえる。

雷華は、しばし考えるように目の前に広がるエメラルドの水面見つめていたが、ふと思ったように口を開く。

「その異形な者とやらは、強いかな？」

「ん？」

「だから、我よりも強いかと聞いているのだ」

「んー。どうかのお。さっきも言ったと思うが戦ったわけではないからなんともいえん」

「戦わずして逃げ出したということは、計算高いおまえのことだ。強く勝算が低いから逃げてきたのだろう？」

「い、いやそういうわけでは・・・」

公望は口籠った。さすがに虫が嫌いで怖いから逃げてきましたと言えない。あまり自分の弱点を誰かに知られたくなかったという想いもあるが、曲がりなりにも自分は目の前の龍を捕まえているのだ。先にも話したとおり龍は気高い。どんな理由であれ自分を抑え込んだ者がそんな理由で逃げているなど知ったら笑うどころか怒り狂うかもしれない。

「ふむ。戦ってみたいな」

壮大なる龍は、より大きく尻尾を振り地面を揺らした。元来、龍という生き物は生態系の頂点に立つ存在である。何よりも誇り高く、知能も優れ仙人界の最強なる捕食者だ。仙人ですら、龍たちからしたらちっぽけな存在で彼らにとって餌でしかない。故に、何者よりも己が一番であると考える龍は多く、自分より上の存在を許そうとしない。その性格から好戦的でもある。仙人試験の題材として選ばれているのはそのためでもある。雷華は特に好戦的であった。

「何処に行けばその者と会える？何処にいる？容姿はどんな姿だ？」

「何処と言われてものお。隕石落下場所はここより南西に数十キロと離れたところじゃが、今でもそこにあるとは限らんし・・・。とりあえず容姿は確か・・・」

公望は自分が見た異形な者の姿を伝えた。

「上半身が虫で、下半身が獣？それで空を飛ぶ？」

「うむ」

「なんだ。それだったらさっき出会った奴ではないか」

急に興味が失せたように尻尾を動かすのを止め、雷華は頭を下げた。

「ん？なんじゃ、そなた。その者と出会ったのか？」

「ああ」

それを聞いて公望の眉間にシワがよる。

「まさかこんなところまで来ているとは……」

「それで、そなたその者をどうしたのじゃ？」

「喰らうてやった」

つまらなそうに龍は淡々と答えた。

「そんな見ず知らずのものを、しかもあんなグロいものを食べるなぞ、そなたは……」

半ば呆れつつも、いくら龍が雑食とはいえあの気持ち悪いものを食するというのが信じられない面持ちだった公望だったが、あれが喰われるところを想像して軽く身震いする。

「それで、喰らってみて何か身体に変化はあったか？」

「あった。美味かったぞ。我は久しくぶりに気が晴れた。あやつに爪で引っかかれたときは力が抜ける感じがしたが、喰らうてみるとまるで熟練の仙人を喰らうたように気が晴れた。どこかの阿呆道士のせいですつと気分が悪かったのが嘘のようだ」

「あははははは……」

皮肉交じりの言葉に苦笑いを浮かべつつ、公望は雷華の言った事を考えていた。

「仙人を食べたときのように気が晴れた……？」

一方その頃、異形なる者の襲撃を受けた花鈴と竜吉は、あれから一旦公望邸宅に戻り再び眠りについて遅い朝食をとっているところだった。

「花鈴よ。大老君には昨晚のこと報告したか？」

「はい。今朝起きて直ぐに」

「そうか。大老君は何か言っておったか？」

「いえ、ただ一人で出歩くなとだけ」

「そうか」

庭の茶席。花鈴と向かい合って座っていた竜吉は優雅にお茶をす

する。そんな些細な動作にも気品さは溢れ出ており、とても普段公望のことで言い合っている相手とは思えない。事実、公望がいるときといたないときでは竜吉は態度が違う。今の竜吉はその気品さ故に、どこか近寄りがたく話もしづらい。今までのことがなければ、とても花鈴は話すことすら出来なかっただろう。

「あの、竜吉様」

花鈴に改まって声を掛けられ、竜吉をゆっくりと持っていた湯飲みを机に置く。

「どうした？」

「えっと、昨日の相手のことなんですけど」

「隕石から生まれた者のことじゃな」

「はい」

「それで？」

「その、私。襲われたのは二人・・・あー、二体なんです」

「ん？もう一体おったのか？」

「はい」

「しかし、あの場にはそちを襲った一体だけしかおらんのだが？」

「もう一体の方は私が倒したんです」

「ほお、そちがか」

「それで、疑問に感じたことがあるんですが」

「なんぞ？」

「私が倒した方の一体と、竜吉様が倒した一体。同じ生物だったんでしょいか？」

「？と言うと」

「私、両方に同じ術を使っただけです。あ、牙狼遊戯なんですけど・・・。最初に現れた奴はこの術で倒すことが出来たのに、もう一体の方はその術を弾いて効かなかったんです。それで、姿形は一緒でしたけど、違ったのかなあって思いました」

花鈴の話を聞き終わって竜吉はまた湯飲みに手を伸ばした。お茶を一口すすする。それから徐に口を開いた。

「同じ姿をしているからとて、その者がまるで同じとは限らん。能力も耐久力もそれぞれ個によって違おう」

「あ。で、ですよね」

花鈴は自分が馬鹿な質問をしたと思った。自分の発言をごまかすように花鈴は食事に手をつける。

「同じかどうかはわからぬが、しかし仮に何もかも同じ存在だったとして、それでもそちでは倒せたり倒せなかったりはあるやもしれん」

竜吉が意味深げな発言をする。花鈴はキョトンとした顔をした。

「どういう意味です？」

「その様子では公から聞いておらんようじゃから、良き機会じゃ。教えておいてやろう。そちは大老君並の力があると言われてはおるな」

「え。ええ。自分じゃわからないですけど」

「その意味するところは、氣を引き出したときの力の値がそれだけあるということを言っておるのじゃ」

「？」

「氣というものは、それぞれ個々人によって量は違う。多い者いれば少ない者もいる。その量は修行を積み、熟練していく者になればなるほど多くなる。それはわかるな？」

「はい」

「道士であれ仙人であれ、何か術を唱えるとき氣を消耗する。同じ術でも氣の量が多いものはより強い術となる」

「はい」

「しかし、ただ多ければ良いという訳でもない。氣の使い方、乗せ方を知らなければ術の発動、強弱は違ってくる。そうじゃな、そちの今言った牙狼遊戯を例に取ってみると、氣の総量10ある者が氣の扱い方を知らずに使えば、術の力として2か3くらいの力しか出ない。最悪発動すらしないかもしれない。逆を言えば、氣の総量6しかない者であっても氣の使い方が上手ければ、術に4ゝ5の力を

込められる。つまり、その二人が戦えば、氣の多いものが少ないものに負けるというわけじゃ」

「なるほど」

「ただ、氣というものはそれだけに及ばない」

「というと？」

「普段、氣をすべて一度に使い切るということはほとんどできないということじゃ」

「何故です？」

「生命として、生存本能が働くからという理由が最も大きい。氣とは生命の源、生きるエネルギーじゃ。いくら回復するとはいえ、仙人はその生命エネルギーを術として意図的に外部に発動する。すべて使い切れば命に関わる。だから、自然と氣の発動に歯止めが掛かるんじゃ。道士はもとより、仙人とて氣をいっぺんにすべて使うことは難しい。それこそ長い修行によって身につけるのじゃ」

「・・・」

「そして、氣の操る術を身につけると、その自然に行われている歯止めを今度は自ら行うようになる。術のたびに多くの氣を使っていたら直ぐに枯渴するからな。敵と遭遇して、術一回使っただけで枯渴して仕留められなかったら負けだからじゃ。その辺は状況に合わせ臨機応変にするということじゃな」

「仙人は氣の使いわけているということですか？」

「そうじゃ」

「それでしたら、私も使い分けてるつもりですけど？」

「そちの使い分けと、大老君やわらわの使い分け方は違う」

「？どう違うんですか？」

「確かに、そちはだいぶ氣の使い分けはできるようになったが、まだまだ未熟ということがひとつ。しかし、それよりなにより、そちは最初から普通の道士、仙人よりも自然の歯止めが弱いということじゃ」

「弱い？」

「感情に流されやすいといった方が分かりやすかろう。普通の仙人が自然と歯止めをかけてしまうところをそちは感情の高ぶりでありと超えてしまう。感情の起伏によって普通3しか使えぬはずの氣の量が7でも8でも乗せて使ってしまうのじゃ」

「そうなんですか？」

花鈴は自分のことにもかかわらず良く分からないといった風にキョトンとして聞き返した。竜吉が少し呆れる。

「・・・はあ。あんな花鈴。これは由々しきことぞ？いくら修行を積んだ仙人とはいえ、命に関わる自己防衛本能には勝てぬ。全力のつもりでも知らず知らずのうちに生きるうえでの必要な氣を残すための歯止めは自然と掛かってしまうものじゃ。しかし、そちはそれが弱い。生きれるギリギリまで感情の赴くままに術に氣を乗せてしまう。そちよりも断然氣の総量が多い大老君は、普段せいぜい実力の半分、よくて7割り位の力しか使わぬ。されど、そちは氣の総量が少なくとも平然と8割9割と力を使う。だから、大老君並、もしかするとそれ以上と言われるのじゃ。ただし、それも長続きはせぬが」

「・・・」

「もし、本気で大老君が氣を使えばどうやってもそちは勝てぬ。持久戦になれば尚のことじゃが。生存本能と氣の絶対量の勝負になるからじゃ。それは他の仙人にも言える。誰もが、足踏みして止まるところをそちは躊躇無く超える。それは非常に危険なのじゃ」

「なるほどお。それで大老君様よりも上と言われたりするわけですね。通りで術を使った後、やたら疲労すると思っていたんですよ。でも、それがなんであの生物を倒せなかったことと関係するんですか？」

「そちは、一発目に相当の氣の量に乗せた、ということじゃろう。自分じゃ気づいておらぬのじゃろうが、一体目には自分の10の力のうち9割近く乗せて二体目には残りの1・2割しか乗せれなかったんじゃないと思う。どちらも全力のつもりでも残っている氣の総量が

少なければ自然と術威力は弱くなるからな。あの程度の相手なら、二体を4対4の配分で術を発動しても倒せるのに、そちは感情のままだちらにも全力で当たったから6対2くらいになってしまったのじゃろう。そなたは一撃必殺型なんじゃ」

竜吉に説明されて、花鈴は昨晚のことを思い出していた。確かに感情が高ぶってきて一体目にはやたら力が籠っていた気がする。そういえば、あの時高ぶっていたから気づかなかったけど、攻撃を避けたとき体が疲れて思った以上に動けなかったことを思い出す。

「ただでさえ、普通の仙人ですら複数で動けと言われている相手に、そちのように氣の扱いが下手なものが一人で動いては自殺行為。さすがに昨晚、そちが一人で出歩いたのに気づいたときは焦ったぞ」

「すみません」

「まったく、公がいない間にそちに何かあったらわらわは公になんと言えはいいか」

「・・・」

花鈴は公望の名を出されさらにうなだれた。竜吉は深い意味で言ったつもりはなかったが、公望のいない今、弟子として、公望の身を心配している身として立つ瀬が無いと感じたのだった。

「・・・本当にお師様何処に言ったんでしょう？」

「まったく、公はもう少しわらわ達のことを考えてくれても良いと思うのじゃがな」

竜吉もため息を深々と付くと再び湯飲みに口をつけた。

生きる故に摂取する。其の六（後書き）

あとがきですにゃん。現在、二週間後に控えた資格試験の勉強から逃避したくて書いてみました。今年も駄目そうです（泣

しかし、すこぶるお久しぶりでございます。まさか半年以上空けて書くことになるとは思っていませんでした（汗

毎度毎度お付き合いしてくださる方には申し訳ないです。

今回の話は、花鈴の実力について詳しく説明したくて書いたんですがどわかりにくくなってしまいましたね（再汗

つまり、今はまだ一撃必殺の一発屋だと思ってくればいいです（そうなのか？

あまりにも長く空けていたのでこの「生きる故に摂取する」の終幕の話がどんなのだったか作者も忘れてしまいました（おいなので、当初書きたかったことよりも違う感じになるかもしれませんんが気にせず流してやってください。

毎回毎回拙い話ではありますが、お付き合いしてくださる方、本当に感謝です。今後も生ぬるい目で蔑んでやってください（え

では、また次回お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638b/>

仙人事録

2010年10月14日13時20分発行